

Family of Seven ～ハ
ズされ者の幸せ2～

鶉野千歳

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前任地より療養と称して現地にやってきた提督。

すでに妻帯者を持つ彼と家族が、さらに新しい家族を迎えることに。

それは、彼らに何を与えるのか。不幸か、幸せか・

これは艦隊これくしょんの二次創作物です。地名人名等は実在のものとは何ら関係ありません。また、この「Family of Seven」ハズされ者の幸せ②は、題名にもあるように、「ハズされ者の幸せ」の続編として書かれています。前作を読まなくても大丈夫です。

2019.2 章立てを変更しました。

目次

再会

ハズされた者達の再会

1

7人家族

15

制服の購入

28

新たな日常

入学式

44

初日の・

54

試験航海でピクニック？

64

二人の休息

77

林間学校 (1)

96

林間学校 (2)

114

潮干狩り

132

突然の来客

146

肩すかし

160

日日は好日

ケーキと・

172

カッコカリじゃなく・

184

足踏みミシンで・

198

鏡、お化粧と・

209

授業参観・

220

鳳翔の体調が・

233

母の日と父の日を・ (1)

260

母の日と父の日を・ (2)

291

お祭りと・

311

運用訓練開始！

324

相生、初めて最後の夏

委員長

姉妹

終わりのメド — 二つ名

買い物と睦と。

海水浴だ!

次への内示

七夕

さよなら! — と こんにちは!

467

ようやくの呉

呉着任!

呉でも七人

艦隊整備

檸檬

呉、その日々

木陰

花火大会の一日 (前編)

花火大会の一日 (後編)

救急搬送

524

535

551

563

578

592

451

437

415

393

378

360

337

510

489

再会

ハズされた者達の再会

4月の早朝。

桜の花が散り出した横須賀鎮守府から辞令を受けた3隻の駆逐艦が出港した。

行き先は・・・不明だった。

「司令官つたら、どこへ行くか教えてくれないだもん。」

「それも、『潮岬を過ぎたら開封しろ』と言われて、『行き先はそこに書いてあるから』ってさ。どうなってるのさあ？アタイら、どこへ行かされるのかねえ・・・」

横須賀港を出港し、浦賀水道を通過し相模湾に入ったところだった。

「おお、右舷に、富士山だびょん!!」

「やっぱり、美しいよねえ。」

標高3778メートルの霊峰・富士を右に見ながら3隻は一路南西を向いて走っていた。

南西に向かう3隻は・・・

睦月型駆逐艦の卯月、皐月と夕雲型駆逐艦の朝霜。

出港前に提督から「本日付で特別任務を与える」と言われ、「行き先は、この中の紙に書いてあるから。」と封筒を渡された。

しかも、武装はしているが、弾薬は・・・1発も積んでいない。

弾薬は全て降ろせ、と命令されていたのだった。

卯月と皐月の12サンチ主砲弾、61サンチ魚雷はおろか、対空機銃弾の、1発も、である。

朝霜も同様だった。主砲弾、魚雷、機銃弾の1発も積んでいない。

今の3隻は、それこそ、丸腰である。

「卯月ちゃん、もつと速度を上げて！ 黒5だよ！ なるべく早く行こ！ うー、弾が無いつてこんな不安なんだね。」

「誰が、特殊任務だよ？ 丸腰じゃ、怖いつたらありやしないわ!!」

ぶつくさ言いながらも、最短経路で走っていた。

3隻は速度をさらに上げて南西を目指した。

大島を左に、伊豆半島を右に見てまっすぐに進む3隻だった。

この季節は、海から陸を見ると、山が所々ピンク色になっているところがある。

ピンク色に見えているのは・・・桜だ。

山に生える木もあれば、人が公園なんか植えた木もあつたが、海から見る桜はまた

一味違った感じがした。

そして伊豆半島の下田沖を通過して、伊豆半島の先端、石廊崎沖にまで達した。そこで針路を南西から西へと変針した。

相模湾から駿河湾に入ったことになった。

まだ右舷に富士山が見えていた。

次の目標は御前崎だ。

ここ駿河湾は、プレート境界によって海底が深く、陸地に近い割に深海が目の前という特異な地形にある。

港を出て5分も走れば、水深は1000mを軽く超える。

「うー、海の色が濃いなあ……」

「なんか、不気味だねえ……」

朝霜と皐月が呟いていた。

濃い海の色に、白い航跡が一筋、彼女たちの後ろに続いていた。卯月ひとりが、鼻唄を唄っていた。

「卯月ちゃん、楽しい？」

「楽しい、こともないぴよん……何かしてないと、落ち着かないぴよん……」

(そうだよね……)

と思う臯月だった。

そうこうしているうちに、なんとか御前崎沖に達した。そこからまた南西へと変針だ。

次の目標は、潮岬だ。

ここからは遠州灘だが、徐々に陸地から離れていく。

遠州灘に入ってしばらくして・・・

「対空電探に感あり！」

電探妖精の報告で一瞬にして緊張感が高まる。

電探妖精からの報告が続く。

「反応からして・・・大型機と思われまます！」

「対空警戒！ つても、弾が無いんだったああああ!!」

頭を抱える朝霜。

「どうするびよん？ 逃げるびよん？」

「どこへ逃げるつちゆうねん！ この海の上で!!」

「ジグザグ運動びよん!!」

「各艦最大戦速！ 各個で回避運動に入って!!」

と臯月が叫んだ。

「見張妖精！ 見える？」

「目標、視認!! ……あれ？」

「どうしたの？」

「目標は…… 大型水上機、友軍と認む!!」

そのうち艦隊の上空を、低空にて通過していく。

どうやら、二式大艇のようだった。

“ ブジノコウカイ ヲ イノル ” と発行信号が発せられた。

返信する間もなく、視認外へと飛び去って行ってしまった。

「……なんだったんだよ……」

と呟く皐月だった。

みながホッと溜息をついた。

各艦が回避運動から単縦陣形に戻った。

「あれって、浜松の航空隊びよん？」

「てことは、対潜哨戒機ってこと？」

「はあああ、胆を冷やしたよ。 まったくう……」

3隻は、かなりの速度で走っているから、昼を過ぎて、潮岬が見えてきた。

潮岬の手前あたりから陸地にかなり近づいていた。

「那智の滝は見えるかな？」

「あ、アタイも見たい、それ！」

「でも、よくわかんないぴよん？」

「ええ、見えないかあ。」

としよぼくれているウチに、

「右舷前方に潮岬灯台を視認。」

と朝霜。

「さあ。指示書を開封しようよ？」

と言ったのは臯月だった。

「じゃあ、ちよつと早いけど、開けるね。 . . .」

指示書を見た朝霜が . . .

「 . . . 何これ . . . 」

「なんだぴよん？ 朝霜ちゃん？」

「えつと . . . あ . . . 」

「どうなのさ？」

と臯月が声を掛けるが、朝霜の反応が . . . 鈍い。

「あの、ね、 じゃあ、指示書、読むね . . . 」

朝霜が読み上げるが、なぜか、乗り気が今一みただった。

“ 潮岬通過後、北進し、紀伊水道を北上、明石海峡を通過し、家島群島沖で呉からの1隻と合流し、相生港に入港せよ。それ以降は現地での指示に従うこと。”

「・・・だつて。」

「「あいおいこう?」」

「「呉からの1隻??」」

・・・

「相生港に行けばいいんだね?」

「そうみたい。」

「紀伊水道を北上つて、大阪湾だよね。」

明石海峡? 家島??

「で、呉からの1隻つて・・・誰?」

「そこまで書いてないよ。」

「・・・」

「考えても仕方ない。じゃあ、行くか。」

「そうだね。 進路変更、紀伊水道へ。」

「了解(びよん)ー!」

3隻は潮岬を通過後、進路を紀伊水道に向けた。

右舷に紀伊半島の陸地が見えている。

三段壁や白良浜が見えてきたが、寄り道することもなく、3隻は単縦陣で進む。

正面に淡路島が見えてきた。

左には四国だ。

淡路島の左に進むと鳴門海峡だ。

渦潮と鯛が有名だ。

同じく右には紀淡海峡だ。

指示は“明石海峡を通れ”という事なので、3隻は紀淡海峡を目指すことにした。

友ヶ島の脇を抜けて、紀淡海峡を通過する。

通過したらそこは大阪湾だ。

「やあ、ここまで来たら、弾がなくてもだいじょうぶかな？」

皐月が皆を代表して口にした。

艦隊は、淡路島に添って、大阪湾のど真ん中を進む。

3隻の右に人工島が見えてきた。

関西空港島だ。

立派な人工島の24時間利用可能な海上空港だった。

そんな人工島を過ぎて行くと正面に六甲山を背後に持つ港町・神戸が見えてきた。

神戸にも空港島がある。

神戸空港だ。

ここ神戸港には、造船所がある。

昔からの造船所が。

太平洋戦争前には、民間でありながら、戦艦が建造されたこともあった。

3隻は神戸港の手前で左に舵を切った。

明石海峡を通過するためだ。

艦が西に向けた途端、電探に反応があった。

「！ 水上電探に反応！ 前方に障害物多数あり！ ……あれ？」

「どうしたの?？」

「小さい反応は、船のようですが・・！ 前方海域全面に渡って障害物の反応あり！」

「全面に障害物? そんなん、見えないよ?」

「あ！ あれびよん!! あのでっかい橋びよん?」

「うわあ、でかい橋だ〜」

そう。明石海峡大橋。全長4kmにもおよぶ、海上吊り橋だ。

電探上は、壁のように見えていた。

この海峡は狭いくせに通過する船が多いため、海上吊り橋が建設され、その橋の下を

通る航路が設定されていた。

朝霜らは東から西へと向かう航路に入った。

海面からの高さは、最大で60 m。

駆逐艦クラスの船では余裕の高さだ。

現在、艦隊速度は10ノット。

結構、潮の流れが速かった。

当然、西から東へと向かう船もある。

また、この海峡を横切る船もあるため、かなりの注意力を要するのだった。

「海峡横断のフェリーが右から艦隊の前を通過するよ！ 各艦、注意して!!」

明石海峡を無事通過すると、そこは播磨灘だ。

正面に小さな島々が見えてきた。

家島群島だ。

群島と言うから、男鹿島、家島、西島などからなる群島だ。

この群島を左に見るように、やや右舵に切る。

そうやって、家島の沖にまで達した。

ここまで達して、停船した。

指示書にあった、呉からの1隻が来ていなかったから。なので到着を待つことにした

のだ。

「目標海域に到着びよん！」

「やあ、やつと着いたね。」

「相手はまだ来てないみたいだね。」

「じゃあ、ここらで待ちますか？」

「そうだね。」

3隻は家島沖に停泊した。

既に陽は西の空に無く、夕暮れになっていた。

到着してから1時間が経過したころ、西から1隻の駆逐艦らしき艦が近づいてきた。

「電探に感！ 距離は・・近い！ 島影からいきなり、現れました!!」

と、すぐに連絡がはいった。

そして、対象艦から通信が入った。

「こちら呉鎮守府より命を受けて当地に到着。貴艦らは横須賀鎮守府の艦か？」

「おお！ そうだ。横須賀鎮守府所属艦、朝霜だ。」

「了解。こちら呉鎮守府所属艦、弥生だ。」

「え？ 弥生？」

「久しぶりだね！ 臯月と卯月だよ！」

「あ・・ 久しぶり。」

4隻は挨拶もそこそこに、北へ針路をとり、港へと向かった。既に日も暮れ、暗くなっていた。

探照灯であたりを照らしながら進む。

微速で進む4隻だったが、相生湾の入り口で1隻のタグボートが待っていた。

“ワレニツツケ”と発光信号を発しながら、4隻の前へと進み出た。

タグボートを先頭に4隻が続く。

湾の入り口は狭く、幅はおよそ400m。

ただ、右舷の陸側には筏が浮いているようだった。

しばらく進むと、正面に工場らしき明かりが見えてきた。

工場の手前に栈橋が見えた。

“セツガンセヨ”とタグボートが発光信号を送ってきた。

4隻はとりあえず、工場手前の栈橋に接岸することにした。

「各艦、接岸用意。接岸と同時に投錨。」

と朝霜が指示する。

そして、接岸、舳をして、上陸する。

上陸すると作業着の係員が待っていた。

港から少し離れた建物まで案内され、中に入っていく。

既にあたりは暗く、建物入口に看板は掛かっていたが、明かりがなかったため、文字を判別することはできなかつた。

「こちらです。」

と案内されたのは、“食堂”と札の上がつた部屋だつた。

室内は明るく、人の気配がしていた。

「お連れしました。」

4人が入ると、軍服姿が一人、着物姿が一人、シヨートヘアの少女が一人、の三人が座っていた。

4人の気配に気がついた軍服姿の男が立ち上がって、振り向いて4人を見た。

「遠路良く来たね。 3人は久しぶりだな。」

次に着物姿の女が声を掛けた。

「みんな、疲れたでしょ？ ご飯にしましょう。」

その二人を見た、横須賀組の三人は・・・

「「あ!!」」

「し、しれーかん!! な、なんで、ここに居るの?」

「鳳翔さんも! な、なんで?」

「ははは。そう驚くな。詳しくは後で話してやるから、まずは夕飯にしよう。こっちもお前さん達の到着を待っていたんだ。」

「あら？ 弥生ちゃん、久しぶり。元気だった？」

「うん。元気。鳳翔さん、久しぶり。」

横須賀組三人は、口を開けたまま、固まっていた。

その姿を確認した少女が、

「もう、三人つてば、固まっちゃつてえ。あたしもお腹空いたんだから、ご飯にしようよ。」

「む、睦ちゃん？」

「た、確かに、お腹は減ってるびよん・・・でも・・・」

「さあ、ご飯にしよう。俺と鳳翔の二人で作ったんだぞ。さあ、座った座った。」

「はあ・・・」

納得しきれない4人は、怪訝そうな顔をしながらも、空腹には勝てず、秦と鳳翔の料理に箸を伸ばしていた。

食事後、4人は部屋に案内され、疲労からすぐに寝入ってしまった。

そんなこんなで相生警備部での初夜が更けていった。

7 人家族

翌朝0600。

一日の始まりだ。

秦が起き出し、身支度を整えて、食堂へとやってきた。

食堂では既に朝食の準備が行われていた。

秦よりも早く起きていたのは鳳翔だ。

いつもの割烹着を着ている。

左手に指輪が光っている。

「おはよう、鳳翔。」

「おはようございます。あなた。」

まだ誰も起きてこない、静かな食堂で、朝の口づけを交わす二人。

抱き合う二人。

しばしそのままでしたが、

「今日からは人数が増えるな。また、迷惑を掛けるよ。」

「ふふっ、お料理が出来るなら、何人でも、いいですよ。」

そうか、と言いながら、二人はテーブルについた。ホカホカのご飯をよそい、二人の朝食が始まった。

「いただきます。」

朝は、ご飯とワカメ入り味噌汁、出汁巻き卵、アジの干物を焼いた焼き魚。それに、秦の実家から貰ってきた、塩がふいた梅干し。

今日から忙しくなることを話しながら朝食が進む。

食べ終わると0645だった。

他の連中は、まだ起きてこない。

鳳翔が後片付けをしている間に、睦を起こすことにした。

いつものように、睦の部屋に来て・・・

(こちよこちよこちよ・・・)

「ひいっ、くっ、くわはははははは、ひいひいひい!!」

睦の悲鳴が部屋に響く。

「起きろ〜!!」

「もう!! 毎日毎日! だから、起きるって!!」

ブンブンと怒る睦だったが、その顔は笑っていた。

(へへへ、また、起こしてもらっちゃった。)

「じゃあ、起きなさい。」

「はああい。」と身支度を始めた。

そして秦は、昨日到着した四人の部屋へと入って行った。

四人とも、睦以上に爆睡中だった。

卯月はベットから落ちている・・・

(どうやったらベットから落ちるんだ??) と思いながら、今日は落ちている卯月と決めた。

寝間着の上から、わき腹を・・・

(こちよこちよこちよ・・・つと。)

「! ひやひやひやひやひや! にや、にや、にやんにや??」

猫語だ・・・

「にや? しれーかん?? な!!」

寝ぼけ眼の卯月の目だ覚めたようだ。

一瞬で顔が赤くなった。

飛び起きてベットに飛び込んで、布団をかぶって秦を見た。

その叫び声で他の三人が起き出した。

「な、なんなんよ?」

「ふわああああ、なによ？」

「……」

「ほら！ 皆起きろ！ 朝だぞ！！」

「まだねむうい……」

そう言つて、また寝ようとする朝霜だ。

「つたく、総員起床！！ 朝飯だ！！」

「ふああああい……」

まったくもつて、だらけている。

「早く来いよ。 いいね？」

と言つて部屋をでた。

「あら、あなた。 みんなはどうでしたか？」

「ああ。 ありや、ダメだな。 睦より夕チが悪いかもしれん。」

「そうなんですか？ じゃ、明日は、私ですね。」

「ああ。 頼むよ。」

「おはよう。 父さん、お母さん。」

と睦が食堂にやつてきた。

「やつと来たわね。 はい、朝ごはんよ。」

「はあい。いただきます。」
と食べ始めた。

そのうち、眠い目を擦りながら身支度を終えた四人が食堂へとやってきた。
「おはよう、ごじやいますう。」

「こら！ シャツキつとしなさい！」

と秦に怒られていた。

「さあ、朝ご飯にしましよ。」

「いただきます。」

と言って四人が並んで食べ始めた。

食べながら氣づいた。

テーブルの向かいに秦と鳳翔が座って、なぜか微笑んで見られている事に。

「ほら、卯月ちゃん、ほっぺにご飯粒ついてるわよ？」

「朝霜、ご飯のおかわりは？」

「あ、お、お願いするさ・・・」

四人は、ちよつと恥ずかしい感じがしていた。

「お父さん、お母さんみたい・・・」

つと弥生がボソツと言った。

それを聞いていた朝霜が、

「父さん、母さん…… そうだよ、それ！ いいよ！ いい！！ しれーかんが父さんで、鳳翔さんが母さん。 そうしようよ、ね？」

他の三人はポカンとしていたが、

「それ、いい。」

と弥生がボソツと言った。

それを聞いた朝霜が残りの面々を見ると、大きく「うん！」と頷いていた。

言われた二人は、最初は驚いていたが、

「え？ それでいいのか？」

と秦がいうと鳳翔の顔を見た。

「どうする、鳳翔？」

「あら。 私は、いいですよ。 何人増えようとも。 なんせ、“こども達”はたくさん

いますから。」

秦は、なるほど、と思つてしまった。

鳳翔を“母”と呼ぶ奴らを知っていたし、一人や二人ではなかったから。

「俺たちは、四人も娘が増えるのか？ じゃあ、俺が父親で、鳳翔が母親っていう事だな。

ただし、父親としては厳しぞ！ いいな？」

「う、厭しいのは遠慮したいびよん……」

「あら、みんなで決めたのに、もう降りちゃうの？」

といたずらっぽく鳳翔が言つて、笑いあつた。

「じゃあ、四人があたしの姉妹なんだね。」

と睦がいい、

「そうなるわね。」

と鳳翔が頷いていた。

しばらくの間ではあるが、7人家族と相成つた瞬間だつた。

◇

朝食後、7人全員が執務室に来ていた。

「じゃあ、説明するね。」

と言つて秦が話はじめた。

「横須賀から黙つて出て行つたのは、療養のためなんだ。これは、秋吉提督の指示によるものなんだ。」

「えっ？　だ、だつて、ワシはしらんぞつて……」

「うん、何度聞いても、知らんつて……」

「秋吉提督が、そう正直に言うと思うか？」

「ま、そうだよね・・・」

「次だ。2週間ほどで体力は回復したんだが、復帰しようとしたときに、提督から別命を受けたんだよ。」

「別命？」

と朝霜が聞く。

「ああ。特別な命令だ。具体的には、空母・鳳翔を対潜水艦用の護衛空母として再整備し、護衛空母の随伴として駆逐艦を配備し、特別任務用に整備する、とね。」

そこまで言って四人を見渡した。

「それを聞いて、ここ、相生に秘密裏に警備部が置かれたのさ。その管理人として、おれと鳳翔が充てられた、っていうことなんだよ。いままではこの民間会社との調整や漁協との調整やらといういろいろあったんだ。なかなか帰れなくてな。結局、いままで掛かったって言う事なんだよ。」

へえくつと聞いている。

「今回の空母の整備目的は、対潜哨戒および対潜攻撃を行うための能力を向上させることなんだ。それに伴い、対空を担う駆逐艦、対潜対処を行う駆逐艦を整備するんだ。」

まず、朝霜を対空対処が出来るように兵装を増強・交換する。卯月、皐月、弥生を潜水艦への攻撃武装の強化を行う。爆雷だけではなくね。」

そう言つて皐月たちを見渡す。さらに、

「その為に、必要な艦体の改修も今回行うんだ。だから、2ヶ月はここに居る事になる。」

「い、2ヶ月も？ その間はお出撃も無し？」

「ああ。無しだ。」

その言葉に四人は驚いた。

「その間、やる事も無いだろうから、特別な配慮をしておいたからね。」

と言つた秦の目が笑つていた。

「で、その配慮って？」

と皐月が聞く。

「フフフ。実はな・・・君ら四人に学校へ行つてもらはう事にした。」

【は？】

【がっこう？】

「そうだよ。学年は、みんな睦と同じ中学1年生としてね。」

【はあああああ？】

「いや、いや、わけわかんないよ、しれーかん!!」

「なんでなのさ？」

「ん？　なんでって、ヒマだろ？　その間にでも、勉強しなさい。」

「鳳翔さん、なんとか言ってるよ？　学校なんて、いけないでしょ？」

「あら、いいと思うわよ？　みんな揃って学校なんて、いいわねえ。」

（聞いちやいねえ……）

「大丈夫。お弁当はちゃんと作るから、安心して。」

とニコリとした顔で止めを刺された。

（鳳翔さん、そういう問題じゃあ、無いんだけど……）

（確かに、鳳翔さんのお弁当は、嬉しいかも……）

「手続きはほぼ終わってるから。あ、後で制服の試着、採寸でお店に行くからね。　　覚

えておいてよ。」

（いやいや、しれーかんも、そういう問題じゃないんだよ……）

「！　じゃあ、髪の色とかどうすんだよ！　アタイは銀だし、皐月ちゃんは金だし。」

「大丈夫。みんな帰国子女になってるから。　　楠木家で預かってるってことにしてあ

るからね。　　だから、問題なし！」

【はああ?！】

四人とも固まっていたが、秦と鳳翔は笑っている。

睦は、楽しそうに見ている。

「へへへつ、みんな、一緒に行くんだよ？ いい？」

続けて秦が・・・

「いいよね？ 父さんのいう事は聞くんだよね？ ね？」

と凄んで皆を脅しに掛かるのだった。

(一)、(こわい・・・)

「う、うん・・・」

四人に逃げ場と逆らう余地はなかったので、渋々、従う事にした。

「と、いうことで、午前中には、四隻ともドックに入れて固定するからね。」

そこまで言つて、秦が弥生を見た。

「ところで、弥生？ お前さんは、呉に居たから、鳳翔の事情は知ってるんだよね？」

「・・・うん。」

「弥生ちゃん・・・」

「あの司令官のときは、みんなおかしかつたんだ・・・ 誰も司令官を信頼してなかつた

し・・・ 逃げ出して連れ戻された艦娘は一人や二人じゃなかつたし・・・」

「そうか・・・ 一応、調査報告は聞いているが・・・ ともかく、ここにいる鳳翔は、お

前さんの知っている鳳翔だ。今は、俺の妻でもある。今まで通り、仲よくな。」

「うん、分かつたよ。それに、今は、今はみんな大丈夫。最近、長門さんがいつも

言うんだ。 “新しい提督を迎えるんだ” って。 名前までは聞いたことないけど……」
秦が弥生を抱きしめた。

「弥生、辛かったな。 同じ提督として、謝罪させてくれ。 ごめんな。」
と。 そして、

「提督と艦娘の関係が悪いと、いいことは起こらないから。 これからは、そんなこと、ならないようにするからな。」

「うん。 皐月や卯月を見て、ちよつと安心してるんだ。 期待してる。」
そう言つて、秦の胸に頬を摺り寄せていた。

◇

7人は港に来た。

そこで秦からの指示が飛ぶ。

「まず、朝霜からだ。 次に卯月、皐月、弥生の順にドックに入れてくれ。」

【りようかああい】

何とも緩い返事だ。

四隻がゆつくりとドックに入ってきた。

所定位置に付くと、ゲートが閉じられ、排水が始まった。

「ドック内排水開始！」

水位が下がっていく。

船台に正しく乗っているか、確認しながら、少しずつ排水する。

「位置よし、続けて排水！」

船台に乗っているようだった。

ドック内の水が全て排水された。

これで四隻は陸に上がった魚であつた。

「では、後は、作業をよろしく。」

といつて秦たちは執務室に戻つて行つた。

「でも、鳳翔さん、お母さんの船は？」

「ほぼ船体の改修は終わつていて、武装関係が残っているだけなんだ。

ほら、向こうに

居るよ。」

と秦が指した先に、航空母艦・鳳翔がいた。

既に海上にいて、甲板上で作業が行われているようだった。

制服の購入

この日の午後になって、進学する学校の制服を購入するために、採寸に来た一行。駅前の指定洋服屋に入っていく。

「こんにちは。予約してた楠木ですが。」

「ああ、いらつしやいませ。こちらへどうぞ。」

「ここは洋服店だが、制服の販売指定業者になっており、多数の制服サンプルが置いてあった。」

普通の洋服店というより、差し詰め、制服のコスプレ屋さんかと間違うほどだ。

「えっと、お前さんたちが通うのは、第一中学校だから・・・」

秦が数ある制服の中から、第一中学校の札の付いた制服を探していた。

「あ、これですね？」

見つけたのは鳳翔だった。

「へえ、セーラー服なんだあ。」

皐月が呟く。

睦月型の三人は、元々セーラー服だから、イメージはあんまり変わらないだろうと

思ったが・・・

紺色の生地にも、三本の白のラインが入った、オーソドックスなデザインのセーラー服だった。

前被りタイプのの、ほんとのオーソドックスなセーラー服だ。

「それと、スカーフは、これですね。」

と店員が白のスカーフを持って来た。

今は冬服なので、紺色の生地だが、夏服も展示してあった。

とはいえ、冬服で試着だ。

まず、卯月から。

試着室で、今来ているセーラー服を脱いで、制服に着替えた。

大きさはほぼ見本と同じくらいだったので、そのまま試着した。

着替えてみんなの前に出てきた。

「どうだ、卯月？」

「うん、サイズぴったりぴょん！」

「袖は、長いとか、短いとか無い？」

卯月は袖までぴったりだった。

丈もちょうどだった。

スカートは・・・

「ちよつと小さいかな？」

「卯月は幼児体型だからねえ。」

とは臯月。

「これくらいなら、ファスナーで大丈夫だよ。」

と店員。

「サイズをあわせて、ずり落ちなければOKだから。」

と。

サイズを合せて、落ちない事を確認した。

「うん、これでいいびよん。」

と卯月は納得したようだった。

「でも、この制服って、胸当てはないんだね？」

「そうですね。昔からのデザインですからね。ま、いまじゃ、珍しいでしょうが。」

次は臯月だ。

「次はボクだね。」

「御嬢ちゃんは、さっきの子よりちよつと大きいから、こつちを着てみてくれるかな？」

試着室で、今のセーラー服を脱いでいく。

シュツ、シュツ、と布が擦れる音がする。

「ちよつと小さいかな?」

と言つて出てきた。

首回り、胴回りは大丈夫そうだったが、袖がちよつと短いみただった。

両手を広げると、両手首がまるまる出てしまつていた。

おまけに丈がちよつと短く、そのままではおへそが見えていた。

「ちよつと、恥ずかしいんだけど・・・」

「あゝ、ちよつと短いか。」

「それじゃ、こつちのワンランク大きめのに着替えてくれる?」

次のを渡されて着替えた。

「どう?」

と秦が聞く。

「うん、さつきよりは、ちよどいいみたい。」

といつて試着室から出てきた。

「ほら。」

と言つて、両手を広げて見せた。

「ほんとな。丈も袖もちよどいいみたいね。スカートもいいみたいだし。」

「でも、もうちよつと短い方が・・・」

「学校指定では、この長さですね。短くは出来ませうけど、どうしますか？」

「あんまり短いのもなあ。鳳翔、どうしようか？」

「そうですね、買ってから後で長さは変えましょう。」

と鳳翔の提案をのむことにした。

だから、スカート丈は既製品のままとした。

次は弥生。

弥生は皐月とほぼ同じ体格だから、皐月と同じサイズでぴったりだった。

「ほう。弥生は皐月と同じサイズか。」

「そうだね。弥生の方がちよつと細いかなって言うくらいだよ。」

次は睦だ。

体格は、睦も皐月とほぼ同じくらいだ。

だから、皐月と同じサイズで試着をした。

着替えて出てくると、

「ちよつと胸が苦しいよ。それに袖がちよつと短いかなあ。」と。

「胸ね。じゃあ、同じサイズの標準体型のを、着てくれるかな。」

皐月よりも睦の方が、胸が若干、若干だが、大きかったようだ。

「え？　ボクより睦ちゃんの方が胸があるの……」

と陰でシヨックを受けている皐月だった。

着替えて再び試着室から出てきた。

「胸はゆつたりなんだけど……　ちよつと服が大きいよお。　これじゃ、屈んだら中が見えちゃうよ？」

「ん??　どれどれ？」

と秦。

「！　あ、あなた!!」

はつとして鳳翔が秦を止めた。

「もう！　変なコトしないでください。　恥ずかしいですから！」

顔を赤めた鳳翔だったが、秦を睨んでいた。

「あ、いや、そんなつもりはないよ、ホント、マジ。」

と言いつくをする秦だったが、

睦は両手で胸を押さえて、顔を赤めていた。

「父さんのエッチ……」

鳳翔の目が、冷たく秦を見ていた。

「あ、ごめん。　悪気はないんだ。　ホントだよお。」

「やあああ、怒られたあ。」

ケケケと笑っているのは朝霜だった。

「ス、スカートはちよつとキツイよ。」

「じ、じゃあ、こつちのスカートを穿いてくれるかな？」

再び着替えてきた。

「うん、こつちだと、ぴったりだよ。」

丈もちょうど良かったみたいだ。

最後は朝霜だ。

「次はあたいだね。」

こいつはみんなより頭半分大きかったので、臍月よりひと回り大きなサイズで試着することになった。

試着室で着替えて、出てきた。

「じゃああん。どうでい！」

「ちよつと短いか。」

丈も袖も短かった。

「御嬢ちゃん、次はこれを着てくれるかな？」

「おっけー！」

また試着室で着替えて、出てきた。

「ほい！ どう？」

上衣はぴつたりだった。

「袖も丈もぴつたりですね。」

ただ・・・

「スカートは短いです・・・ね？ あれ？」

と店員が気付いた。

「おい、朝霜？ そのスカート、巻いてるだろ？」

「あ、バレた？」

「バレた？ じゃない！ 元に戻せ。」

「えっつ」

「朝霜ちゃん、試着なんだから、普通に着てちょうだい。」と鳳翔に怒られていた。

「・・・はあい・・・」

渋々従った。

巻いているのを元に戻して、「これでどう？」と。

立った状態で膝が見えるくらいのスカート丈だった。

「まあ、これくらいだろう。」

「そうですね。これでいいんじゃないですか。」

これで試着、採寸が終わった。

店員が「同じサイズで、白の長そでも用意しておきますね。」と言った。

4月は紺色生地の冬服だが、早ければ5月には、白色の長そでセーラー服に切り替わるのだ。スカーフも白から紺に変わる。

そして、6月には白色の半袖セーラー服、いわゆる夏服に切り替わる。

一応、2か月くらいここに居ると思つてはいるが、必ずしもそこで終わるとは言えなかったので、秦は結局、フルセットで買う事にした。

上衣にスカート、替えのスカート、スカーフ、紺の靴下……と。結構な物入りだ。

5人分となると結構な金額になる。

秦が将官クラスだったおかげで、費用的には問題なかったが、将官や佐官クラスじゃなかったらと思うと、ぞつとする秦だった。

(一式で、これだけの費用だと、リサイクルが流行るのも判るわ。すっげー大変だ。)

支払を終え、お店を出るとき、夏服はあとで送ってくれるとのことだった。

だから持つて帰るのは冬服一式だった。

あと、学生鞆など必要な物を購入した。

(うわあ、制服だけでも結構な金額なのに、その他諸々も入れると、相当な額になるなあ。)

何しろ、五人分である。

購入した物を持って警備部の建物に戻った。

この学校は、靴はスニーカーではなく、ローファーだったので、今のをそのまま使う事にした。

あ、朝霜はブーツだったから、新しく買った。

◇

居間で5人のファッションショーが始まった。

とは言え、みんな同じデザイン制服だから、見て面白い、と言う感じはしないが、五人が同じセーラー服に身を包んでいる。

「ねえねえ、母さん、このスカート丈、短くならない?」

と聞くのは朝霜だ。

「どれくらい短くするの?」

「30センチ!」

「へ?」「は?」

パカーン!

「イテ、イテエ!!!」

秦に頭をはたかれて、頭を抱えて痛がる朝霜だが・・・

「あ、あにすんだよ!! イテエじゃんか!」

「制服をそこまでミニにするやつがあるか!」

「もう、朝霜ちゃん、私が言ったこと、覚えてる?」

と鳳翔が呆れ顔で朝霜に聞く。

「あ!・・・」

「思い出した? まったくもう。少しは恥じらいを持ちなさい。いいわね?」

「うううう・・・分かったよお・・・」

「仕方がないわね。最初だから5センチだけ詰めてあげるから。ね。」

「は・い・・・」

朝霜も鳳翔に掛かれば、従わざるをえなかった。

「5センチくらいなら、ボクも!」と言うのは皐月。

「あ、私も!」

と後を追う睦。

「じゃあ、卯月ちゃんと弥生ちゃんは、どうする?」

「うーちゃんもお願ひ!」

「わたしも。」

「それじゃあ、みんな5センチ、詰めるわね。」

と相成った。

「あ、うーちゃんは、スカートにフリフリ欲しい！」

「それは、付けられないわよ、卯月ちゃん。」

「えー、そうなの・・・」

としよげる卯月であつた。

「そういや、鳳翔も中学校時代は、制服だつたんだろ？」

「え？ 私ですか？」

「うん。どんな制服だつたの？」

「そうですねえ。 中学は・・・セーラー服でしたよ。」

「セーラー服？」

「ええ。 デザインはこの子たちと似たような、白三本のラインの入つたヤツで、衿は冬

服は紺で、夏服は水色でしたね。」

「え？ 水色？ そんな色があるんだ。」

と臯月が割つて入つてきた。

「そうよ。 夏服の時だけね？ フフフ。 水色ですから、ちよつと可愛い感じですね。」

スカートは紺色でしたね。」

「ええ？ それだと、なんかコスプレみたいだね？」

と朝霜も割って入ってきた。

「そうね。今から思うと、そんな感じがするわね。でも、水色は可愛く見えるから、それはそれで良かったんだけど。」

そこまで聞いていた秦が唸っていた。

うーーん、と。

「どうしたんですか？」

「ん？ い、いや、水色セーラーの鳳翔を、想像してしまつて……いや、可愛いだらうなつて。」

「あー！ 父さん、赤くなつてる！」

「なんか、やらしい！」

「ち、違う！ ほら、鳳翔が、水色の……セーラー……服を……着てたつて……」

（見てみたかつたなあ……可愛いだらうなあ……）

と思つてしまった秦だった。

「父さん、やらしいよ？」

「違うから！ そんなんじゃないから！」

と否定して、

「そ、そういうや、スカートを詰めるんだろ？」

「そうだった！」

と言つて・・・

五人はそそくさとスカートを脱いだ。

秦が居るのに・・・

「こ、こらあ！　なんでいきなり脱ぐんだよ！」

「へ？　いいじゃん、別に。パンツ穿いてるしき。」

「そうじゃ・・・　まったく！」

まったく、目のやり場に困った秦は、顔を赤め、ひとり部屋を出て行こうとする。

「ほ、鳳翔、あ、あと頼むわ。」

「はい。お任せください。」

とにこやかに応えるが、内心は、五人に呆れていた。

五人とも上衣はセーラー服だが、下は・・・パンツ一丁なのだ。

「もう！　みんななんて格好してるの！　早く着替えなさい！」

と少々お怒りモードだ。

「はあああ。」

返事は良かったが、着替えの動作は遅かった。

鳳翔は五人分のスカートの裾上げに取り掛かった。

一旦、縫い糸を解き、5センチ分短めに折り印をつける。

曲がっていないか確認しながら次の工程へ。

アイロンをあてて、折り目を付けていく。

プリーツが着いているので、注意しながらアイロンをあてる。

折り目が付いたら、布を接着させるテープ糊を貼り付けて、当て布をして再びアイロンをあてる。

テープ糊のおかげで、いちいち縫わなくてもよくなったが、念のために鳳翔は縫って生地を留める。

ここまでで、一応、完成なのだが、五人分あるので、見分けが付かない。

そこで、ベルト位置に名前を刺繍することにした。

漢字で、朝霜、睦、卯月、皐月、弥生、と。

五人分のスカートの裾上げが出来上がった。

次は上衣だ。

これもどれが誰のなか、良くわからないので、裾の裏側に名前を刺繍した。スカートと同じく、漢字で名前を。

ようやく、五人分が終わった。

気が付くと、もう夕方だった。

「さあ。夕飯の支度をしましょうか。」

と腰を上げる鳳翔だった。

新たな日常

入学式

4月に入って1週間。

7人家族の生活もだんだんと板についてきた感じだった。

今日の天気は快晴だ。

快晴の割に警備部では朝から慌ただしかった。

今日から睦たち五人の学校が始まる。

新学期の開始だ。

0630、秦と鳳翔は朝食を済ませ、鳳翔は五人のお弁当作りに取り掛かった。 秦

は五人を叩き起こす役目だ。

秦が睦の部屋まで行くと、なんと！ 睦が起きていたのだ。

「おお、珍しい事もあるもんだ。 睦が起きているなんて。」

「へへ。 いつも父さんや母さんに起こされてばかりじゃやないもん！ ていうか、いつ

つもくすぐらてばっかりじゃ、割に合わないんだもん！」

「おお。 いい心構えだ。 けど、いつまで続くんだ？」

「へへへつ、大丈夫！」

と笑っていた。

次に秦は四人部屋にやってきた。

入ると、既に皐月と弥生は起きて着替えていた。

秦は、二人に目配せしながら、そうつと入った。

「おはよう。 もうすぐ朝飯が出来るぞ。」

と小声で二人に言つて・・・

（了解！）と敬礼で返してきた。

今日はベッドに居る卯月に、

（こちよこちよこちよ・・・）と今日もくすぐり出した。

「!! ひや、ひやひやひやひや！ なんだびよ??？」

と悲鳴を上げた。

釣られて朝霜も、

「!! な、なに、なに、なにない??」

と寝ぼけ顔で飛び起きてきた。

「二人とも起きろお!! 朝飯だぞ！」

「まだ、眠いさあああ。」

「何言つてんだ？ 今日から学校だろ？ ほら！ さつさと起きる!!」

「そうだった！ なんでもつと早く起こしてくんないんだよ！」

と秦に対して文句を言う朝霜だが、

パカーン！

「お前が、目覚まし掛けてても起きなかつたんだろ？ 人の所為にすな！」

「イテエ!!!」

と頭を抱えている朝霜。

「あ、あんだよ、もう！ 起きてるじゃんか！」

「さつさとする！ もう皐月と弥生は起きてるぞ。」

「え？ あ！ 二人とも、もう着替えてる？」

そそくさと着替えに掛かった朝霜と卯月だった。

五人そろつて食堂で朝ご飯。

五人が同じ制服に身を包んでいる。

元睦月は、皐月らとは違う服だったから、秦にすると妙な感覚に捉われていた。

朝霜も、同じ制服っていうのも、妙な感覚だ。

でも、それを見ている秦と鳳翔の表情は穏やかだった。

五人とは行かないまでも、子供がいたら、こんな感じになるんだろうなあ、と思つて

いた。

こんな賑やかな食事風景が、続けばいいのに、とも思っていた。

テーブルには、五人分のお弁当が作られていた。

鳳翔手作りのお弁当だ。

これから行く中学校は、給食ではなく、お弁当持参なのだ。

五人が朝食を済ませ、学生鞆とお弁当が入った手提げ鞆を持ち、靴を履いて、登校準備が整った。

警備部の玄関先で7人で記念写真だ。

警備部とは言うものの、秦たち7人の“家”なのだ。

だから、玄関先で写真撮影だ。

タイムマーで数枚の写真を撮った。

学校は、“家”から徒歩10分ちよつとの距離にある。

だから、徒歩通学である。

通学時には、反射素材の黄色の襷をするのが、この学校のルールだった。

【いってきまあす！】

「行つてらっしゃい。あとから行くからね。」

「はあい！」

と五人は駄弁りながら学校へと向かっていった。

「さあ。行つたな。」

「私たちも準備をしましょうか。」

今日は、入学式なのだ。

“親”として、秦と鳳翔は出席するつもりだ。

入学式は0930から。

秦は紺のスーツ。この地域で軍服は、さすがに目立つし、いい印象はしないだろう、との判断だ。

鳳翔は桜色の訪問着に羽織。それだけでも立派に母親に見えるだろう。ちよつと若く見えるだろうけど……。

二人は0900少し前に警備部を出た。

寄り添って、学校までの道を歩いて行く。

「こうやって二人で歩くのって久しぶりですね。」

「そうだな。しかも軍服以外で、となると、初めてか？」

「その意味では、初めてですね。」

と言って、ふふふつと笑っていた。

歩いて10分ほどの距離を、ゆつくりと歩いて行く。

手を取り合つて、ゆっくりと。

学校の校門が目の前だが、それでもゆっくりと。

それでも開始前まで十分に着いてしまった。

会場は、体育館兼講堂だ。

案内の教師に導かれ、保護者席についた。

既にほかの保護者は席についていた。

秦たちは、一番後ろの席だった。

「あら？ 警備部の楠木さんじゃない？」

不意に声を掛けられた。掛けてきたのは・・・

「ウラのおばあちゃん？」

警備部の建物のウラ側に建つ家のおばあちゃんだった。

「おばあちゃんは、お孫さんが？」

「そうよ。 やんちゃ坊主がやつと中学よ。 楠木さんとは、例の五人？」

「ええ。 そうです。」

「五人とは大変よねえ。 賑やかだとは思うけど。」

そう言っているうちに、入学式が始まった。

在校生は揃っていたが、司会の挨拶に続いて、新入生が入場してきた。

この学校は、小さく、1学年1クラスしかなく、新入生は30数名とのことだ。講堂の後ろから2列で入ってくる。

「あの娘たちは、どこかしら？」

と鳳翔が五人を探す。

が、すぐ見つかった。

何しろ、(青白い)銀髪に金髪に長いお下げだったり……。

まあ、“帰国子女”扱いだから、文句も出ないだろうけど……。

保護者席からは、変わった髪型ね、金髪じゃない？、という声がしていた。

偶然にも、鳳翔と秦の横を通っていく。

鳳翔が手を振ると、五人も笑って振り返ってきた。

やはり、朝霜は女子の中では背が高い方だった。

新入生全員が着席すると、校歌と国家の斉唱だ。

続いて校長先生の挨拶。

往々にして、話が長い。

訓示を述べてくれているのだが、こども達にとっては、年寄が長々と説教しているように感じるかもしれない。

後ろから見ても判るが……朝霜は落ち着いていなかった。頭が……きよ

きよろしていた。

「朝霜のヤツ・・・」

と呆れていると、

「まあまあ、そんなに目くじら立てなくても。」と

鳳翔になだめられていた。

式は進み、新入生の担任が紹介され、入学式は滞りなく終了した。

およそ30分で終了だ。

新入生たちは揃って教室に戻って行った。

在校生が退場する頃になって、教頭先生から保護者に向けて、学校の説明が行われた。

こども達の今日の予定、今後の予定とが簡単に説明された。

学校行事については、予定表が渡された。

4月に、早速泊りがけの林間学校が組まれていた。

明らかに、コミュニケーションをとるための行事だ。

説明が終わって、秦と鳳翔は二人して講堂を後にした。

「これで睦も中学生か・・・」

「どうしたんですか？」

「いや、大したことじゃないんだが・・・舞鶴から睦と二人で生活してきて2年だけど、

もう中学生とは、ね。 月日が経つのが早いよなあ。」

感慨深そうに話した。

「ふふふ、そんな年寄りみたいなこと言つて。 あの子たちは、まだまだ子供ですよ。

あ、でも、一人前としてみなければ、反抗期になっちゃいますよ?」

「え? 反抗期? いや、いや、”父さん、キライ” って言われないうなあ。 言われるとシヨックだなあ。」

鳳翔はふふふつと笑つていた。

「鳳翔? お前さん、なんか、楽しんでない?」

「そんなことありませんよ。 でも、私も反抗期があつたなあつて。 母親には何でも

話しましたが、父親には・・・父には無視をしたりしてましたね。」

「う・・・ やめてくれ。 あの娘たちに無視されるのは、キツイから。 マジでやめて

くれ。 そう思うと、今からでも心が折れそうだよ・・・」

「大丈夫ですよ、あなた。 その時は、私が居ますから。」

そう言つて、頬を赤めながら秦の腕に抱き着く鳳翔だった。

帰り道も、二人より添つて帰つていく。

帰りの道中、他の保護者らと一緒にいる場面もあつた。

まあ、仲のよろしい事で、と言われながら。

雑談をしながら帰って行った。

帰り着いた秦と鳳翔は、いつもの、軍服と着物・袴姿に着替えた。

秦と鳳翔は、書類仕事をこなしていく。

仕事の量は・・・もの凄く少ない。

何しろ、空母1、駆逐艦4しかいない警備部だから、処理する書類も少ない。

横須賀や呉の様に、出撃もないし、訓練も今は無い。

だいたい1時間もあれば十分すぎる量だった。

書類仕事を終わると、港へと向かった。

改造中の空母・鳳翔へと向かうのだった。

初日の・・・

「たっだいま！」

お昼すぎになって、五人が帰って来た。

そのまま五人が執務室に入ってきた。

「帰って来たよ！ 父さん、お母さん！」

と言って扉を開けて。

「お帰り。」「お帰りなさい。」

と秦と鳳翔が出迎えた。

「初日は、どうだった？ 友達は・・・出来そうか？」

「大丈夫さあね！ まっかせなさいってさ！」

と朝霜が胸を張りながら言う、言うが・・・

「良く言うよ・・・ まったく。」

と皐月。

「あら？ どうしたの？」

「聞いてよ、お母さん！ 朝霜ちゃんつたら、早速、上級生の男の子に告白されたんだよ。それなのに」誰？ あたいはあんたに興味ないから！」 ってその子の頭をひっぱたいたんだよ。」

と説明する皐月に、

「そしたら・・・その子、泣いちゃってさあ・・・ もう、初日から先生に注意されるわ、みんなに白い目で見られるわ、で、散々だったんだから。」

とその後を説明した睦だった。

皐月も睦も溜息をしていた。

（普通、男が女を泣かすもんだと思っていたが・・・ 朝霜に限っては、逆だったか・・・）
「あれくらいで、泣くんなら、告白なんてしなきゃいいんだよ。メンド臭いったらありやしない！ あたいにはしれーかん、父さんしかいないんだからさ。」

そう言つて秦にすり寄つて、ゴロゴロ言つてる朝霜だ。

その頭をポンポン叩きながら、

「まったく、初日から何やってんだよ？」

「もう、ホントに気をつけてよ、みんな。」

呆れる秦と鳳翔だった。

「で、卯月と弥生はどうだったんだ？」

「私は・・問題ない・・。」

「うーちゃんも、大丈夫ぴよん！」

それを聞いて、改めて秦は五人の頭を撫でていく。

五人は、満更でもなさそうだった。

「じゃあ、着替えてくるね。」

そういつて部屋に行った。

しばらくして、ゴトゴトと2階から音が聞こえてきた。

「何の音だ？」

「さあ・・ なんででしょう。」

2階は主に寝室なのに・・。

気になって二人で2階に上がってみた。

すると、睦が布団を持って、四人部屋に入ろうとしていた。

「睦、何やってんだ？」

「あ、父さん。 うん、あたし、今日からこっちで寝ようかと思って。」

「え？ そっちで？ と言う事は、五人部屋ってこと？」

「うん。 だって、その方がいいでしょ？ ね？」

「いや、構わないけど・・。」

四人部屋には、ベッドが四人分しかないんだけど・・・どうすんだらうか。

「あたしが、畳に布団を敷いて寝るんだけど？」

「まあ、部屋はそこそこ広いから、大丈夫だけど、いいの？　なんだったら、隣のもう一つの四人部屋を使ってもいいんだけど・・・」

「五人で寝るからいいんじゃない。それじゃあ、だめだよ、父さん。」

「そうか・・・　じゃあ、2段ベッドを3段ベッドにするかい？」

「いいのかい？」

と臯月。

「お前たちが良ければ、だけど・・・　都合、六人部屋になるんだけど・・・」

「!!」

「じゃあ、そうしようよ。」

「そうだね。　そうしよう。」

「じゃあ、父さん、お願い！」

「ああ、了解だ。　妖精さんにやってもらおうから。」

【やったあ!!】

ベッドだけではなく、クローゼットも、もう2つ要るよな・・・

そう思う秦だった。

「で、勉強はどこでするんだ？」

「うん、1階の居間でしようかって、思ってるんだけど。」

「居間？ 確かに、十分な広さはあるなあ。食堂の隣の部屋だけど、畳敷きだし・・・」

「あそこなら、広いし。 何しろ、食堂の隣で、すぐご飯が食べられるしね！」

「うん、うん」

「もう。 食べる事ばかり！ そこは逆でしょ？ 勉強、でしょ？」

と鳳翔に叱られる五人だった。

（食べる事は、わかる。 分かるぞ。 なにしろ、鳳翔のご飯は、美味しいからなあ。）

そうしているうちに、日が陰ってきていた。

ここ相生湾は東西に山があるので、日が陰るとあつという間に夜の雰囲気だ。

外の家々に灯りが灯りだした。

今日の業務を終えて、夕食までの時間、食堂でお茶を啜っていた秦が、今日、学校でもらってきた予定表を見ていた。

「何見てるの？」

「ん？ お前さんたちの4月の予定表だよ。 今日、学校でもらったんだよ。」

「ふうん、そう言えば、あたいたちももらったよ。 その予定表。」

「なにかあるびよん？」

「4月の中旬にある、林間学校だよ。」

「そう言えば、そんな予定、あったね。」

「泊りがけで、1泊2日の予定だね。」

それまでに、用意しなければならぬモノがいくつあつたので、(今度の休みにでも、調達するか・・・)と考えていた。

そして・・・

「さあ、夕ご飯よ！」

と鳳翔の声が掛かった。

「今日は、鶏すきよ。」

と言つて、テーブルに、2つのコンロと鉄なべを用意して、具材の大皿を持って来た。今回は、割り下を使うらしく、醤油ベースの出汁が用意されていた。

コンロに鉄なべをセットし、割り下を入れる。

火をつけ、ひと煮立ちした頃合いから、白菜、ネギ、白滝、焼き豆腐、エノキ茸を入れ、鶏肉を入れた。

もう一方も同じ要領で具材を投入する。

「今日は、朝引きの地鶏が手に入ったのよ。」

取り皿に卵を割り入れていく。

鍋がグツグツ言い始めると、いい匂いが、醤油ベースのいい匂いが漂ってきた。

「うー、空きつ腹に堪える匂いだ〜」

「まだかな、まだかな」

睦や朝霜は待ちきれないようだ。

具材が良く煮えた頃、「はい、どうぞ!」と鳳翔が合図すると、

【いただきまあす!!】

とみんなが一齐に箸を伸ばした。

鶏肉を、卵にくぐらせ、口に運んでいく。

ハフハフ言いながら。

「うん、美味しい!」

野菜も卵にくぐらせ、口へと運ぶ。

「いい感じで出汁がしみてるう!」

「このエノキ、歯ごたえがいい!」

5人の食べっぷりを、見ていた秦が

「ねえ、鳳翔、この割り下、市販のじゃないね?」

「分かりますか? フッフ。私特製ですよ。濃い口醤油に味醂、お砂糖を入れて、煮

立たせて……って。隠し味で赤ワインを少々入れてますよ。」

「え？　そうなの？　赤ワインまでは分からなかったぞ。」

「はい。　そう簡単に分からずには、料理をするものとしては、立つ瀬がありません。」
そう言つてニコリと微笑んでいた。

この5人に掛ければ、大皿に用意した具材はあつという間に消えていく。

「あ、あなたたち、ご飯もあるわよ？」

「ご飯ほしにやし！」

と睦がご飯をよそつてもらつて、そのまま食べるかと思いきや、鍋の、肉と野菜の出汁が入り込んだ割り下をご飯にかけて・・・いつきに掻き込んだ。

頬が膨れている。ご飯でいっぱいになっている。

「ウグング・・・　あー、味が滲みて美味しい。」

「まったく、女の子なんだから、お淑やかに食べれないか？」

「えー、この方が、美味しいんだもん。」

「美味しい点に関しては、否定しないけど、やっぱり、慎みは持つてほしいぞ？」

「ハイハイ、気を付けるよ、父さん。」

（軽くあしらわれた感じが・・・）

「あたいも！」

そう言つて、五人とも、出汁掛けご飯にして食べた。

秦と鳳翔は、その姿を、呆れながらに見て、箸を進めた。

【ごちそうさまでしたあ】

と7人の食事が終わった。

大皿の具材は既に無く、鍋の中も、だし汁の一滴も残っていないかった。

睦ら五人は、お腹を苦しそうに抑えている。

「う、うう、く、くるしい」

「あなたたち、食べ過ぎよ？」

「ほら、居間までいって、寝っころがれ！」

「う、ん」

五人がヨタヨタと居間までいって、ゴロリと倒れ込んだ。

「あー、お腹いっぱい、くるしいー！」

「お前ら、腹八分目ってこと、知らんのか？ 女の子としては、みっともない格好だぞ？」

そうこうしているうちに、後片付けを終えた鳳翔が居間に入ってきた。

その時には、胡坐をかいて座っている秦を膝枕にして、睦と朝霜が寝っころがっていた。

「へへへ。 父さん・・」「しれーかん・・ へへへっ」

と右ひぎに睦が、左ひぎに朝霜が頭を載せていた。

卯月は秦の背中合わせにしてもたれている。

「背中、おっきいぴよん。」

鳳翔が秦の隣に座ると、臯月と弥生がそうっと寄ってきて鳳翔に抱きついてきた。

「お母さん・・へへへへ・・」

秦も鳳翔も、みな頭を撫でている。

「ったく。」

女の子としては、確かに、みっともない食べっぷりではあったが、今、ココでは7人家族らしい、まったりとした時間が流れる光景だった。

試験航海でピクニック？

4月の中旬になって、空母・鳳翔の武装改造工事が完了したと、連絡が入った。

船体には、魚雷攻撃による被害を小さくするために、水密区画の増強が行われていた。船体への改造では、エレベーターの増設をしていた。

今までは船体中央に2基だったものを、1基に減らし、右舷外側にはみ出る格好で前後1基ずつ計2基を増設した。

武装改造は、既存の武装の置き換えを行った。

対空機銃だったものを、対魚雷攻撃も出来る機関砲などに交換、改造されていた。そこへ、秦と鳳翔、その他の五人がやってきた。

睦は、空母・鳳翔に乗るのは2度目だった。

他の四人は・・・初めてであった。

普段、他の艦娘の艦に乗ることは無いから、はしやいでいる・・・

「わお！ やっぱり飛行甲板は広いねえ!!」

「この飛行甲板だけで、ボクの2倍の長さかあ。幅は3倍？、4倍？」

「甲板だけで、うーちゃんのマストより高いかも。」

遠足の子供のような、はしやぎようであった。

「はしやぎ過ぎて、怪我をしないでくれよ？」

と秦が注意するも、五人は聞いていない……。

「わあああああ」と走り回っている……。

「はい！ あなたたち！ 艦橋に上がるわよ!!」

と鳳翔が言つて、やっと走り回るのをやめた。

「まったく……。俺の言う事は聞かないくせに、鳳翔の言う事は聞くのかよお。」

膨れる秦だった。

7人が羅針艦橋に上がってきた。

「案外、広いんだね。」

と皐月がいう。

「外に出れるよ。」

と睦。

飛行甲板を上から見下ろす格好で、デッキがある。

「お—— 高い高い!!」

「やっぱ、アタイらより、感覚が違うね。アタイ達は真ん中に配置されているけど、こ

こは艦の右側だし、高いし。」

通常の艦は、中心線上に砲や艦橋が配されるが、空母は違う。

航空機を扱う上で、中心線上では、邪魔だ。

だいたい、艦の右側に艦橋が配されている。

ちなみに、赤城と飛龍は左側に艦橋が配されている。

「さあ、試験航海に出発するぞ！ 鳳翔、始めてくれ。」

と司令官席の秦が鳳翔に命じた。

「はい。では、行きます。．．． 機関始動。」

「全艦異常認められず。提督、準備完了です。」

「よし！ タラップ上げ！ 舳解け！」

タラップが上げられ、格納される。

艦の前後の舳も解かれていく。

「錨、上げ！ 抜錨！」

「抜錨します！」

「左舷スラストー始動。 機関、前進微速」

「左舷スラストー始動。 前進微速！」

岸壁から徐々に離れていく。

湾の出口まで微速で進む。

「ねえ、前から聞きたかったんだけど、左にあるのは何？」

と臯月が聞いてきた。

「左？ ああ、あの筏か。」

どれどれとみんながデツキから見ていた。

「あれは、牡蛎の養殖筏だよ。」

「牡蛎？」

「そうだよ。ここ相生近辺は、瀬戸内では広島に次いで、牡蛎の養殖が盛んだからね。」

と秦が説明していた。

「じゃ、食べれるんだね？」

と食い意地を張るのは……朝霜だった。

「冬までここに居れば、な。」

「そっかあ、ちよつと残念かもお。」

そんな会話をしているうちに、湾の出口に差し掛かった。

「よし。湾を出たら、針路を東へ。家島から小豆島を廻って戻るコースだ。」

湾を出て、東に針路を摂りつつ、速度を上げる。

「第三戦速へ増速！」

鳳翔の艦首が海を裂いて進む。

「現在24ノット。」

家島群島と淡路島の中間あたりまで進んで、右急旋回をする。

遠心力で左に振られる。

旋回を終えると今後は

「減速、第一戦速へ。」

と指示する。

スクリューの回転が一旦止まった、かと思うと、後進いっぱい、が掛かって逆回転する。

艦は急減速する。

うわああああ、っと声上がる！

目的の速度に近づくと再び、回転が止まる。そして前進いっぱいが掛かって進みはじめる。

「現在速度14ノット。」

一気に10ノット分も減速したのだった。

「このままの速度で、目的地、小豆島の坂手港へ。」

と秦が指示した。

「了解。進路、坂手港へ。」

と鳳翔が復唱する。

しばしの間、艦橋には静かな時間が流れていた。

「ねえ、父さん？」

「なんだい。」

「坂手港で何するの？」

「チョイと休憩をしようと思ってね。」

「は？」

「休憩って？」

「だからあ、立寄りだよ。2時間くらいかな。その間に昼食を、とね。」

「ほおーん って、なによ、その立寄り！」

「父さん、それ、私物化してない？」

「してない、してない。ちゃんと目的はあるよ。坂手港の港湾設備の確認だよ。」

ね？」

「まあ、それなら……。」

「しれーかんがそう言うんなら、いいじゃん？」

「はいはい、あなたたち、そろそろ落ち着いて。もう少して着くわよ？」

右前方に見えていた小豆島が右手いっぱいに見えていた。

風ノ子島を過ぎ、大角ノ鼻灯台を廻りこみ、すぐ減速する。もうそこは、坂手港だ。

そこには、神戸―高松を結ぶフェリーの為の岸壁が整備してある。

今日はそこに接岸するのだ。

「機関停止、惰性で進む！」

接岸に向けて既に機関は止まっており、惰性で進んでいる。

右舷のスラストーを使って、無事、接岸した。

「投錨！」

「投錨、よし。接岸完了しました。」

「鳳翔、特に問題はあるかい？」

「いいえ。問題はありません。水深も十分なようですし。」

坂手港の岸壁は、さすがに大型フェリーが接岸するだけあって、十分な大きさだった。

一通りの確認を終え、

「じゃあ、休憩といこうか。」

「ええ。お弁当、広げましょうか。」

そう言つて飛行甲板の上で、皆でレジャーシートを広げ、おつきめのパラソルを立てた。

そして、お弁当ならぬ、重箱とバスケットを並べた。

「さあ、座つて。」

「お母さん、その量……」

「ん？ これ？ バスケットは、サンドウィッチで、こっちの重箱は、おかずよ。」

そう言つて蓋を開けて、みなで覗き込んだ。

「「おお〜」」

つと歓声上がる。

サンドウィッチは2種類。

1つは、トーストして、具材の、レタス、ハムなどを挟んだヤツと、

もう一つは、トーストしないで生パンのままに具材を挟んだヤツだった。

それと、パンだけが、バスケットにはあつた。

「ん？ 鳳翔？ この、パンだけのやつは、なに？」

「あ、それは、こっちの具材を、好きに挟んでもらおうかと、思つて……」

“こっち”とは、重箱の事だが、4段の、鳳翔手作りの4段重。

そのうちの1段には、鶏肉のフライが入つていた。

「このパンに、鶏肉を載せて、ソースを掛けて、野菜にドレッシング、と……最後に

パンで挟んで、つと。」

「はい！ 即席サンドウィッチの完成！」

とニコリと秦に手渡してきた。

「おう、そう言う事か！」

「はい。どうぞ、あなた。」

「ん、貰おう。」

サンドウィッチというより、バーガーに近いかも。

一口かぶりついた。

ん！ ん!!

「うん、うまい!! 鶏肉のジューシーさ、ソースのちよいとピリツとする辛さ、野菜のしゃつきり感、いいねえ!!」

「フフフ。そうですか? よかったあ。」

秦も鳳翔も満面の笑みだ。

それを見ていた睦らが「あたしも!」と即席サンドウィッチを作り、頬張っていく。

「うん、美味しい!」

「うん、いけるいける。これいけるよ!」

そう言つて、次々とサンドウィッチを平らげていく。

「そんなに、急いで食べなくてもいいわよ? ホラ、こつちにはフルーツ、こつちはたこ

さんウインナーと唐揚げよ。」

わあーい、と卯月がたこさんウインナーのサンドウィッチを作っては、頬張る。

そして、7人は、バスケットのサンドウィッチ、パン、お重の中の揚げ物やフルーツを見事なくらい綺麗に食べきっていた。

「美味しかったあ。」

「そうさね、美味しかったね。」

「お母さんの料理は、なんでもおいしいよねー。」

「やっぱり、鳳翔の料理に勝る食べ物はないよなあ。」

「あら？　そう言ってもらえると、嬉しいです。綺麗に食べてもらって、こちらも助かります。」

食後、紅茶を飲みながら、7人がマツタリとシートにゴロンとしている。

飛行甲板だから、風が吹けば、そのまま通り抜けていく。

それは涼しくていいんだが。

陽の光を遮るものはパラソルだけなので、日当たりは最高！なんだが、日光を浴びて、なんとも思っていないのは、秦と朝霜くらいだった。

あとの4人は鳳翔に引っ付いて日陰に居た。

時刻が1400になって、

「さてと、お楽しみはここまで、だな。」

「そろそろ、終わりですか？ 楽しい時間は経つのは早いですね。」

「ああそうだな。残念だけど時間だ。みんな、片付けを手伝って。出航用意だ！」

【はああーい！】

パラソル、レジャーシートを片付け終え、全員が羅針艦橋に入った。

「錨上げ、抜錨！」

「錨上げます！ 抜錨！」

ガラガラと錨が巻き上がる。

ガコン、つと巻き上げが終わると、

「左舷スラストー始動、機関、前進微速。」

「了解。左舷スラストー始動、機関出力、前進微速へ。」

艦体が徐々に岸壁から離れていく。

50 mほど離れただろうか。

「前進原速へ。」

徐々に速度が速まっていく。

「針路は、南西に向かい、土庄港沖を廻って北上、相生湾に帰る！」

「了解です！ 進路変更！」

太陽の陽が傾きつつある中を、相生港に向けて進む。

土庄沖まで来ると、船の数が増えてきた。

四国・高松と土庄を結ぶ航路が複数設定され、行き交う船もフェリーや高速船などと種類も増えてきた。

それらの船に注意しながら進む、空母・鳳翔。

軽空母と言う種別であっても、200mを超える船体は、ここ瀬戸内では、大型船の部類に入る。

鳳翔が起こす波は大きい。

小さな漁船などにとつては、凶器だろう、と思っていた。

この海域は、レジャー用のモーターボートもやってくる。

速度はゆっくりだ。

小豆島の北側に廻りこむと、船の数はぐっと減った。

小豆島を1周した格好になった。

空母・鳳翔は、日生港を左舷に見て、相生湾に戻って行った。

そして、空母・鳳翔は最初にいた岸壁に戻って、接岸した。

「とうちゃあああつく!!」

一番に上陸したのは朝霜だった。

これで無事、試験航海が終了した。

「さて、結果報告は明日でいいかな？」

「そうですね。それでいいと思いますが、書類は作成しておきますね。」

「よろしくね。では、これにて本日の試験は終了だな。んじやあ、帰るか。」

「うん、早く帰ろう！」

と秦の手を引く睦、皐月。

鳳翔は卯月と弥生に手を引かれながら、帰って行く。

7人は警備部の、自宅へと戻って行った。

二人の休息

4月中旬。

今日から2日間、睦たち新入生の林間学校が始まる。

こういう日は、睦たちは秦と鳳翔に起こされることなく、自ら起床してきた。

「父さん、お母さん、おはよう！」

「あら、おはよう。今日は早いのね。」

「だってえ、今日から林間学校だし、それに・・・」

「それに？」

「一緒に寝た卯月ちゃんに、蹴られて、寝てられないんだよ・・・」

とトホホな表情をしていた。

「はっ。」

一瞬、何かと思った二人だったが、次第に吹き出し笑いに変った。

「あはははは、それは災難だったなあ。」

「おはよう。」

と聞いて、大あくびをしながら朝霜らがやってきた。

「どうだ？ よく眠れたか？」

「アタイは、まだ・・・ねむ・・・」

「うーちゃんは、元気だびよん!!」

睦の目が、ジーツッと見つめていた・・・それは、刺すような冷たい視線だった。

「う、睦ちゃん、何かな？」

「卯月ちゃん、覚えてないの？」

「何のことかによ??」

眉間に、しわが、入る。ピキピキと音がしそうな・・・。

「あたしは、卯月ちゃんに蹴飛ばされて、一睡も出来なかつたんだよ!!」

と卯月に詰め寄る睦だ。

「びよん——!!」

その迫力に、押されている、いや、明らかに負けている卯月だった・・・。

「ほらほら、騒いで無いで、朝ご飯よ。」

「おはよー!」

と臯月と弥生も入ってきて、朝ご飯となった。

林間学校は、一旦、学校に集合することになっている。

そのため、朝食のあと、準備した荷物を再確認して、5人は学校へ向かった。

【いつてきまああつす！】

まあ、荷物と言つても、1泊なので、着替えのお泊りセット、学習なので、筆記用具、ノートくらいだ。

5人は、バックの中に、密かにお菓子を忍ばせていた。

まったく、気分は、遠足だった。

「遠足気分だなあ。大丈夫なのか？」

「まあ、いいんじゃないですか。向こうで、休む時間が無いくらい絞られるのも。」

と言っている秦と鳳翔の二人が留守番、だったのだが、子供らがいない事をいいことに、二人で温泉に行くことにしたのだ。

◇

午前中に執務を終わらせ、軽めの昼食を済ませた二人。

いそいそと出かける準備を始めた。

秦の私服は、スラックスにカラーシャツという姿だ。

鳳翔は、というと・・・着物ではなく、洋装だった。

白のブラウスに紺のカーディガンを羽織って、フレアスカートに、パンプス。

「おう。これは・・・」

「へ、変でしようか？」

と鳳翔が顔を赤めて秦に聞く。

「い、いや、そうじゃないよ。そ、その、よく似合ってる、似合ってるよ、鳳翔。また、惚れ直しそうだし……。」

「や、恥ずかしい……。」

お互い、顔を赤めたまま、しばらく動かなかった。

「じゃあ、行くか。」

「……はい。」

秦が運転する車で警備部を出た。

行く先は……赤穂御崎温泉だ。

相生湾からは、めっちゃ近い……。

遠出でも良かったのだが、ゆつくりすることを第一に考えて、近場にしたのだった。

昼過ぎに旅館に着いて、荷物を預けて、市内観光に繰り出した。

赤穂は古くから、良質の塩が取れた城下町だ。

そのため、江戸時期には、赤穂藩の財政は豊かだったとか。

また、近くを流れる千種川の水を引いた、上水の設備がされている。

ここ赤穂が一躍有名になったのは、忠臣蔵だろう。

刃傷事件も討ち入りも江戸での出来事だが、忠臣蔵の中心人物の大石内蔵助は赤穂藩

の国家老だった。

その為か、赤穂城跡には、大石神社がある。

境内には浪士四十七人の碑がある。

その境内を二人で歩いた。

赤穂城跡から大石神社、義士資料館、花岳寺、息継ぎ井戸へと、赤穂の街を二人並んで。

「一日中執務室に籠っているより、たまには、二人でそぞろ歩きをするのもいいだろう。

どう?」

「ええ。たまにはいいですね。こうやって歩くのも。」

そう言つて秦の腕に抱き着いている。

互いを見やつて、微笑む。

いつもは、睦たちが一緒にいるから、この二人で歩く時間は貴重だ。

陽が傾き掛けた頃、旅館に戻ってきた。

チエックインをして、仲居さんに部屋に通された。

お部屋はこちらです。と。

部屋は、瀬戸内に面した、オーシャンビューだ。

二人には十分な広さの部屋だったが、この部屋にしたのは、理由があつた。

仲居さんが、こちらにお風呂がついています、と。

部屋の様子をうかがっていた鳳翔が

「あ！ ホントだ。お部屋にお風呂があります！」

と声を上げた。

所謂、家族風呂と言う名の内風呂だ。

「こっちの方がゆつくりできると思ってたね。」

では、こゆつくり、と言って仲居さんが出て行った。

「うん、この大きさと二人で入るには十分だな。」

「そうですね。」

部屋付きのお風呂だが、露天風になっていて、海をそのまま望む事が出来る、源泉掛け流しのお風呂だった。

「夕食までは、まだ時間があるから、入れば？」

「はい。いただきます。」

そこまで言つて、秦を見た。

「あ、あなた・・・」

鳳翔の顔が赤いような・・・

「ん？ どうした？」

「せっかくですから、一緒に……。」

明らかに、顔を赤めて、秦を見つめていた。

い、いや、と言いかけたが、

「わ、わかった……。じゃ、一緒に……。」

と応じた。

服を脱ぎ、掛け湯をして、湯船に入った。

湯気が上がる、ちよつと熱めのお湯だった。

「お、お。ちよつと熱いかな？　でも、いいお湯だ。」

続いて、鳳翔も掛け湯をして、湯船に入ってきた。

「あ、確かに、ちよつと熱めですね。」

湯船からお湯が溢れていく。

ここ赤穂御崎温泉のお湯は、しよっぱい。

どちらかと言うと、海水がお湯になっている感じだ。

今、二人並んで湯に浸かっている。

このお風呂の正面は、瀬戸内だ。

湯船に浸かると、水平線が広がっているように見える。

風が吹くと湯気が揺れる。

秦にもたれる鳳翔。

そのうち、鳳翔の顔が秦を見つめた。

秦が顔を降ろす。

二人の行為は、必然的に見つめ合う格好になり、そして、熱い口づけとなった。唇が離れると、二人の間には水系が……。

「今日は、子供たちがいませんから……」

秦がフツと笑うと、

「大胆だな、今日は。」

「たまには、いいじゃないですか。」

「俺は、いつでもいいんだけど？」

「もう。いじわる。」

と顔を赤める鳳翔を、秦が抱き寄せた。

二人は、そのまま満足するハズもなく……

短い喘ぎ声が響いた……

◇

暫く経って、二人は縁側で、テーブルを挟んでお茶を啜っていた。

「ふう。やっぱりお茶は落ち着くなあ。」

「この緑茶は・・・見たことないブランドですね。」

「地元産かな？ 聞かない名前だね。」

「でも、美味しいですね。」

「それに、ここは景色もいいし、風が心地いい。」

お茶をテーブルに置いて、鳳翔は秦の膝の上に座った。

陽が沈み、辺りが暗く、闇に包まれていく。

沖には、行き交う船の明かりが見えていた。

西へ向かう灯り、東へ向かう灯り・・・

鳳翔は、秦の腕の中で、その光を追っていた。

「わたし・・・」

「ん？」

「今、幸せです。」

「そうか。」

そう言つて鳳翔をギュツと抱きしめた。

「俺もだよ。」

「はい・・・」

そして・・・今日、何度目かの口付けを交わす二人。

まわりから見れば、アツアツのカップルに見えるかもしれない。

夫婦として見るならば、新婚ほやほやの、イチヤイチャ度満載に見えるだろう。

お互い、互いを離さない、と心に誓っている。

言葉にはしないが、互いが、いつまでも傍に居る、いつまでも一緒に歩む、と、思っている。

今、静かに、夜の水平線を二人して見ていた。

「でも・・・」

「でも?」

「け、ケダモノですね。」

と顔を赤めて小声で。

ヴ!

秦の動きが固まる。

「そ、その言い方は、ないんじゃない?」

「充分です・・・私の・・・」

「あー、あー、あ? そういう鳳翔も・・・」

「わあー!!」

お互いの顔が、真っ赤になっていた。

「ま、まあ、お互い、そういう事で．．．ね？　だめ？」
「そ、そう言うことなら．．．」

と赤い顔で見つめあつて、落ち着いた二人。
まったく、恋人チツクな二人であつた。

◇

コンコン、と入口から音がして、

「お食事の用意を致しますね。」

といつて仲居さんが入つてきた。

「もう、そんな時間なんですね。」

時計を見ると1800過ぎだった。

「部屋食ですか？」

「ああ。大広間でも良かったんだけど、たまには二人だけで食事を、と思つてね。
いつもは食堂で、七人で摂る、賑やかな食事なのだ。」

部屋の真ん中のテーブルに、食事の用意がされていく。

今回は、会席料理だ。

二人が向い合せに座ると、料理が出される。

まず、先付が出された。

春らしく、菜の花のお浸しの様だ。

「はは、春らしい。」

「ホントですなぁ。」

次は椀物で、煮物だった。

向付は、お刺身。瀬戸内の真鯛、烏賊。

鉢肴は、鯖の幽庵焼き。

やはり、春にちなんだ、旬のモノが続く。

二人して、美味しくいただいていく。

目を合わせながら。

そのたびに微笑む。

強肴は、炊き合わせだった。

そして、次は意外にも、地鶏の蒸し物が出た。

ツケだれは、梅肉を使ったたれだ。

「うくん、すっぱくていいですね、これ。」

お腹が少々膨らんだ頃、食事だ。

白ごはんと、イカナゴの釘煮、お味噌汁。

お味噌汁は、アサリ入りだ。

「このアサリ、大きいですよ。」

「そういや、この辺りは、遠浅の海岸が残ってて、アサリが取れたんじゃ・・・」

「はい、そうです。このアサリも地元産ですよ。」
と。

「ご飯もやわらかく、釘煮もいい感じで、山椒が効いていた。」

料理の最後は、水菓子。

果物は、苺とブドウ、ピオーネだ。

やはり、季節ものだ。

「やあ、美味しかったね。鳳翔は、どうだった？」

「はい。美味しゅうございました。」

食器を片づけていく仲居さんが、「どういたしまして。」と笑顔で返してくる。

「やはり、春だねえ。食材も季節も。」

「そうですね。旬のものを、旬に食べる。これほど贅沢なことはありません。」

食器を片づけた仲居さんが下がって行った。

再び縁側の椅子に座ってマツタリしていると、今度は布団を敷きに仲居さんがやってきた。

「では、お布団ををご用意しますね。」と言って二人分の布団が敷かれ、仲居さんが出てい

た。

時刻は2100だった。

秦は、もう一度お風呂に入ることにした。

「食事の後のお風呂に入るか。」

と。

浴衣を脱いで、部屋風呂に入った。

「ふう。やはり、風呂はいいなあ。」

そうしているうちに・・・

「お邪魔します。」

とおちやらけた口調で鳳翔が入ってきた。

「なんだ、鳳翔も来たのか。」

「はい。二人だけで、一日に何度もお風呂に入る事なんて、ありませんから、この機会を有効に使いませんと。」

そう言つて、頬を赤めて、秦の隣に入ってきた。

再び、二人寄り添つて、湯船から海を見ていた。

「暗い海だな。」

「ええ。確かに、暗い海です。けど・・・」

「けど?」

「その暗い海で、私は、あなたという灯りを見つけました。そして、その灯りの元に辿りつけました。何度でも、何度でも言います。この場所を離れませんか。」

とにこやかに涙を浮かべながら、秦を見つめていた。

「ああ。離さないから。」

また、二人の唇が重なる。

この日、何度目なのだろう、何度でもいいや、と秦も鳳翔も思っていた。

◇

次の日の朝。

いつもは、0530に鳳翔が、0600に秦が起き出すのだが、今日は、二人とも寝坊中だ。

二人とも夢の中だった。

使った布団は1つだけ。

鳳翔と秦は、抱き合ったまま眠った。

二人ともいつもの時間に目が覚めたが、今日は朝からの家事は無かったこともあって、2度寝だ。

寝坊のくせに、二人とも、満足げな顔をしている。

普段から一つのベッドで寝ているにも、だ。

それでも0700には起き出した。

先に起きたのは鳳翔だった。

「おはようございます。あなた。」

ちゅ！つと。

「・・・ああ、おはよう。 鳳翔。」

ちゅ。 と2度目の口付け。

睦がいたら、まったく、この二人わ！ と呆れていただろう。

着替えて、遅めの朝食を摂った。 朝食は大広間だった。

いつも向い合せに座って食事をするが、何気に、大広間での食事は、気恥ずかしかった。

何しろ、すでにほかの客は、食事を終えていたのだから。

朝食後、チェックアウトまで、部屋でまったりと時間を過ごす。

今日は、帰るだけ。

「たまには、こんな無駄な時間の過ごし方もいいだろう。」

「フフフ。 無駄だなんて、有意義に使った事にしましょうよ。」

「そうだな。 そう言う事にしておこうか。」

ははは、フフフ、と二人して笑いあつた。
そしてチエツクアウト。

売店で睦たちにお土産を買つた。

旅館を後にして、警備部に帰るのだ。

帰り道は：急ぐこともないので、海沿いの道を、遠回りゆつくり帰ることにした。

右に瀬戸内海を見て、走る。

波に光が反射してキラキラ光るのを見ながら、帰つて行つた。

こうして二人の、短い休息は終わつていった。

◇

【たっだいまあ!!】

と5人が帰つて来た。

「お帰り。」「お帰りなさい。」

と秦と鳳翔が出迎えた。

5人が二人に抱き着いて、あのね、あのね、と林間学校での話をしようとする。

「(こらこら、一気に同時に喋らないの!」

と怒られる5人だ。

「どうだったの? 楽しかった? 怪我は・・してないようね?」

「大丈夫さ！ まだまだ元気さあね！」

朝霜の元気は・・・十分のようだ。

卯月は・・・なぜか俯き加減なんだが・・・

「どうした？ 卯月？」

「うん・・・。」

俯いたまま話をしない卯月に代わって皐月に聞いてみた。

「寝相がね・・・」

と言つて・・・

「うん、卯月ちゃんったら、寝相が悪くて、みんなに苦情を言われたんだよ。」

と睦。

「夜は、大部屋で寝たんだけど、卯月ちゃんの寝相が悪くて、隣の子を蹴ったんだよ。」

「それで、大目玉つてわけ。」

「はあ、そう言う事ね。」

みんな呆れていた、というか、卯月に対して何も言えなかつた。

「じゃあ、卯月ちゃんは、寝相の改善が必要ね。」

と鳳翔に、マジに言われていた。

余計に落ち込む卯月。

「わあああん！ お母さんにまで言われるぴよん！ 悲しいぴよん!!! わあああん!!」
気まぜくなくなった雰囲気に鳳翔が、

「さ、夕飯の準備をしますよ！ みんな、手伝って！ あなた、お洗濯をお願いしますよね？」

と、明らかに動揺していた。

「悪気は無かったのよ、ごめんなさい、卯月ちゃん。」

「じゃあ、お母さんと一緒に寝るぴよん!!」

【え??!】

驚くみんな。

そんなことはお構いなしに、ニシシと笑う卯月だった。

林間学校（1）

学校にやってきた楠木家のこどもたち。

既にクラス全員が教室に集まっていた。

セーラー服ではなく、体操着だ。

「今日、明日の2日間、皆さんのお互いを知るために林間学校へ行きます。心構えはいですか？」

昨日までに、散々説明されてきたので、“耳にタコ”状態であった。

今日は、学校を出て、兵庫県は北部にある高原までバスで行くのだ。

出発は0830。

大型バス1台に生徒全員と付き添いの先生2人が乗り込んだ。

「いやあ、こんなバスに乗ることないから、ちよつと嬉しいかも！」
とは朝霜だった。

「そうだよ、大体は海の上を走ってるからねって、あれ？ 朝霜ちゃんは、横須賀でもバスには乗ったことないの？」

「あるよ。でもこんな大きいバスじゃなかったよ。もつと小さい奴だったけど？」

「それって、従業員移動用のマイクロバスじゃないの？」
「うん。」

そう言われて、ガクツと肩を落とす臯月と睦だった。
そう言いながらバスは出発した。

相生の街を抜けたら、山の中の盆地を東に向けて走っていた。

兵庫岡山県境に近いこの辺りは、山が多く、谷も多い。

盆地に人が集まり、集落としていた。

相生からひと山超えると、その地は西国街道が東西に走っている。

かつては“駅”が置かれたこともあり、それなりの街を形成していた。

その街を走り、やがて北へと向かう街道に入った。

街道は北から南へと流れる川に沿っていた。

街道に入つて小一時間ほど走るともう山の中であつた。

川岸ギリギリまで山が迫ってくる場所もあつた。

見渡す限りの山々は、整然と木々が植わっている。

かつては林業が盛んだったこともあり、山は植林された木々だった。

少しでも平らな土地には、田畑が広がっていた。

4月なこともあり、稲作はまだ行われていなかった。

学校を出発してから2時間ほどたったころ、途中でトイレ休憩をすることになった。街道沿いの道の駅の駐車場へとバスが入っていく。

そこそこの広さの駐車場だった。

バスは、建物の前まで進んで止まった。

止まった途端、

「いっつちばぁん！」

と言つて降りてきたのは朝霜だ。

「もう、朝霜ちゃんてばあ。ここは終着地じゃないよ？」

と呆れながらも注意するのは睦だ。

「ここで30分、トイレ休憩します。」

と先生。

結局のところ、全員がバスを降りていた。

「おおお。山ん中だねえ。空気がちよつと冷たいね。」

ううううーんつと伸びをする生徒たちだ。

「あたりをウロウロするわけにもいかないね。睦ちゃん、どうするの？」

「ん？ 見るところも無いし、お土産を買うことも出来ないから、バスに戻るよ。ほら、皆戻ってきたっしょ。」

「そうだね、という顔をした皐月だった。

全員が降りたが、10分と経たないうちに、全員が戻っていた。

「なんだ、皆早かったんだね。」

と付き添いの先生が一番最後に戻ってきての一言だった。

「だってえ、お金もないし、まだお腹も空いてないし。それに、遊ぶところもないぴよん……」

その言葉に、生徒たちはウンウンと頷くのであった。

「じゃあ、と言うことで、時間はまだあったが全員が揃っていたこともあって、出発することにした。」

バスは再び街道を北へと向かっていく。

川沿いに北上していたが、徐々に山々が近づいてきた。

平地がほぼなくなり、川も細くなってきた。

それに伴うように、坂道になり、カーブが続くようになってきた。

「わお。山が近いねえ。」

「そだねー。」

休憩してからは、睦と皐月が隣り合って座っていた。

弥生と卯月も隣り合って座っていた。

朝霜は一人で2席を占領していた。

「カーブがきついぴよん。船よりきついよね？」

「そうだね、時速50キロで半径300？ 結構、振られるよね。」

カーブのたびに、「キヤー」と言つて隣にもたれていく。

逆の場合も、同じだ。

明らかに、運転手は、奇声上がるのを楽しんでいるようだ。

そんな街道も、下りに入った。

どうやら峠を登り切つて、下りていくようになった。

「あ！ 川の流れが違ふよ！」

そう気づいたのは臯月だった。

「ん、なにになに？」

「別に、気にしないけど？」

とは朝霜だが、

「ホントだ。流れが逆になつてる！」

とそこへ先生が入つてきた。

「よく、気が付いたね、楠木さん。さっきの峠越えで、中国山地の南側から北側へと

やつてきたからね。今までは、北から南へと流れて太平洋へむかつてたけど、今度は、

南から北へと流れて、日本海へと向かうからね。」

この峠越えで地域も変わった。

相生の街があるのは、播磨地方だが、峠を超えると但馬地方になっていた。

バスはさらに北へと向かい、徐々に山が開けてくるのだった。

途中で街道から逸れて、山深い谷へと進んできた。

学校を出発して4時間余りで、目的地の高原に到着したのだった。

◇

お昼前に今日の宿泊先となる民宿へとやってきた。

荷物を置き、まずは、と食堂へやってきた。

ここで民宿のおやじさんと女将さんのあいさつを受けた一行。

“怪我無く、楽しんでね”と言われ、

「はぁーい」と返す生徒たちであった。

挨拶が終わると、並べられたお弁当を食べるのだ。

【いったただきまあつす】

お弁当は、山の幸をいっぱい詰めたお弁当だった。

メインのおかずは・・山菜の天ぷら。

揚げたての天ぷらだ。

女将さんがアツアツを持ってきてくれていた。

女将さんからは「今の子には、ちよつと苦いかしらねえ」って言っていたが、案の定、「ニガツ」つという子がいた。

しかしながら、なのだが、楠木家の面々はそんな事はなかった。

「うん？ 苦くて、甘いよ。 ねえ、弥生ちゃん。」

揚げたての天ぷらにちよつとの塩を付けて、サクと食べる睦に弥生。

「うん、この山菜、おいしいよ。」

とニコリと。

なんで？ と言われたが、

「なんでって言われてもさあ・・・ どう言おうか？」

と臯月と睦に向けて、朝霜が聞いてきた。

「お母さんの料理に、山菜があつたしね。 ワラビとか、土筆とか。」

「あら、そうなの？」

と聞いてくるのは女将さんだった。

「うん。 ウチのお母さん、料理は上手だし、美味しいんだ。」

へええつと驚いたような声を出す女将さんと生徒たち。

女将さんというと、

「今どきの若いお母さんで、山菜を料理できるなんて、珍しいわね。」
だつてさ。

「ウチのお母さんの料理は、そこら辺のお店よりおいしいぴょん！」
そう言つて胸を張る卯月だつた。

皆の感想は、へええー、いいなあー、であつた。

料理上手の鳳翔からすると、山菜なぞ簡単な部類だ。

灰汁抜きが必要はあるが、春の、しかも自然の恵みを頂くのは贅沢だ、といつも聞かされていたのだ。

【ごちそうさまでしたあ】

お昼は腹八分目にもならない量であつたが、それでも皆満足な顔をしていた。

食事後、今日の予定の説明を受けた。

午後からは、オリエンテーリング。

夕食はバーベキューなんだそうだ。

◇

民宿の前に生徒全員が集まっていた。

これからオリエンテーリングを行うのだ。

だいたい5く6名で男女混合のチームを作つて、前部で6チーム。

コースは、10キロ、10か所のチェックポイントを廻って、標準時間2時間30分だ。

チェックポイントは、民宿の前の広場をスタート、ゴールとするコースだった。個々の指定された順番に廻ることになっていた。

皐月は卯月と弥生と一緒にになった。

睦は朝霜と一緒にになった。

地図とコンパス、サインペンを持って、時間を5分ずつずらして、それぞれのチェックポイントへと出発していく。

睦たちのチームは、A↓B↓C↓D↓E↓Z↓Y↓X↓W↓Vの順。

皐月たちのチームは、Z↓Y↓X↓W↓V↓A↓B↓C↓D↓Eの順だった。

一ポイントあたり平均1キロは歩く計算になる。

「ねえ、朝霜さん？ 入学式の時は驚いたけど、先輩からの申し込みは受けたの？」
そう聞いてきたのは朝霜と同じチームの男子だった。

しかも、ウラのおばあちゃんちのお孫さんだった。

「ん、なんで受けなきゃいけないんだよ。叩かれたくらいで泣いちやうなんて、みつともないったら、ありやしないわ。」

「結構先輩ってモテルらしいけど・・・」

「あたいはしれーかんだけだよ。その他の男は目じゃないから。だから殴ろう・・・」
ゴン！

「イツテエエ！」

頭を押さえて、蹲る朝霜。

「まったくもう。そう言う暴力な言葉はダメにやし！」

朝霜の頭を殴ったのは睦だった。

「あ、あんだよ、睦ちゃん。いったいじゃんか。」

涙目で、殴った睦を見た。

殴った睦は、呆れていた。

その姿を見たチームのメンバーは、（睦ちゃんって、可愛い顔に似合わず、暴力的い・・・）と感じていた。

見るからに頭一つ小さい睦が、体の大きい朝霜を叱りつけている構図は一興ではあつたが・・・。

言うところの、「どっちがお姉ちゃんで、どっちが妹？」てな感じだった。

地図を見ながら、あっちだ、コンパスを使ってこっちだ、とチエツクポイントをクリアしていく睦たち。

「さあ、次行くよ！」

元気に先頭を行くのは朝霜だった。

海図とコンパスで船を走らせる艦娘だけあって、地上での地図読みは問題なかった。むしろ簡単だったようだ。

睦も朝霜と同じくらいに地図とコンパスを使えるが、ここは朝霜に先頭を任せ、残りのメンバーのサポートに廻っていた。

朝霜も「次は、どこだい？」とメンバーに問うて、自身が完全に引つ張っていくことはしなかった。

半分のチェックポイントをクリアしたところで、近くの公園に入って休憩をした。

「ここで休憩しよっか。10分くらいならいいよね。」

「ああ、しんどいねえ。やっと半分かあ。」

座り込んで、スタート時に貰ったお茶を飲んでいた。

そこへ、別のチームがやってきた。

「なんだ、先客がいたんだ。」

「あ、皐月ちゃん！」

「あれ、睦ちゃん？」

「うん、今、半分だからって休憩してたの。皐月ちゃんも？」

「そうだよ。同じだね。」

お互い、へへへと笑っていた。

しばらく駄弁っていたが、睦のチームが10分の休憩時間が過ぎたので出発することになった。

「臯月ちゃんたち、先に行ね。ゴールで待ってるね!」

「えーっ、先に就くのはボクたちだよ! じゃあ、あとでね!」

残りチェックポイントのクリアを目指す睦たち。

途中で、ちよつとしたアクシデントが。

「次は? ここからどう行くのさ?」

「ここからだど、右手の道を進んで……」

「じゃあ、行こう!」

しばらく歩いてっていると、睦が先に見つけたようだ。

「あ! あった! あれだよ、朝霜ちゃん!」

「よし、あたいが行ってくるよ。」

そう言つてチェックポイントへ駆け出していく朝霜だったが・

その場所まで行つた、と思つたら、なにか、しよげて帰つてきた。

「だめじゃん。X (バツ) っつてなってるじゃん。ここじゃないよ。」

え? そうなの? とメンバーが顔を見合わせるが、睦がそこで気が付いた。

「朝霜ちゃん：． それ、X（バツ）じゃないよ。 X（エックス）だよ？ 違うかにや？」

「へ？ X（エックス）？」

「うん。」

「．．．あ！」

気が付いたようだ。

「もういつペン行つてくる！」

と言つて走つていった。

そしてチエックしてきた。

「これでどう？」

皆がウンウンと言つていた。

ホツとした朝霜だった。

「じゃあ、次だ！ 次はどこだ！」

スタートから2時間余りが経過したころ、ゴール地点に、朝霜のチームが帰つてきた。

「とうちやあああく！ どう？ あたいらが一番かい？」

「お帰り。 チエックシートを見せて。」

先生にチエックシートを見せた。

「うん、各ポイントをクリアだね。お疲れ様。順位は・・2番だよ。」

「「え〜」」

一番だと思っていた朝霜らはシヨックのあまり大声を出した。

「じゃあああん！ お疲れだね。一番はボクたちだよ！」

そう言つて建物の陰から出てきたのは皐月たちのチームだった。

「あ、皐月ちゃん！ そうなの？ しかも、隠れてたのかい？ ひどいよ、みんな！」

「へへへっ。皆を驚かそうと思つてさ。でも、3分と経つてないからね。」

「弥生ちゃんも卯月ちゃんも早かつたんだね。」

「うん。弥生ちゃんが案外早くて簡単にクリアしちゃつてさあ。へへへ。」

到着した2つのチームは、残りの4チームの帰りを待つことにした。

その間、休憩だ。

はああ、疲れたよーつと言いながら、座り込んでしまった。

まあ、ここの広場は芝生だから、寝っ転がっても気持ちよかつたんだけど。

朝霜たちがゴールしてから30分ほどたつたころ、残り4チームが団子状態でゴールしてきた。

皆、結構疲労していたから、芝生に倒れこんでいた。

◇

皆が帰ってきて休憩となった。

時間は1545だった。

今日の予定は、夕食とお風呂（？）が残っていた。

夕食は、民宿のテラスでバーベキューだったので、1800に席に着けば良かったから、朝霜と睦は、夕食までの時間、二人で民宿の裏山に上ることにした。

裏山と言っても、標高はさらに100mはある。

冬にはスキー場になるくらいに、傾斜がある山だ。

「ハアハア、結構きついよ。」

「朝霜ちゃん、ハアハア、なんで登ろうと思ったのさ？」

「だって、普段の生活じゃ、低くても山のとっぺんになんて登ることないしさ。それに

片道1時間で行けるっていうからさ。」

二人はほぼ駆け足状態で登っていく。

登り始めて45分ほど。

予定より早く頂上に到達した。

「着いたああああ!!」

ハアハアと、二人は肩で息をしていた。

振り返ると、民宿が下の方に見えていた。

「おう、高いねえ。」

「うん、それに結構、風が強いね。」

そう言つて、山の反対側を見た。

すると、遠くの眼下に海が見えていた。

「あ、海だ。海が見えるよ。」

「おお、ほんとだ。海だ。」

見えていたのは日本海だった。

「ん？ あれつて・・・艦隊だよね、ね、睦ちゃん？」

「そうだねえ・ちよつと遠いかにや？」

沖合に確かに、東へと向かう艦隊が認められた。

二人は目を凝らして沖を行く艦隊を見つめた。

「・・・あれつて、空母だよね？ あとは駆逐艦かな？」

「・・・そうだね、空母だね。甲板上に出つ張りが見えないから、軽空母だよね。ん？」

「・・・つてことは・・・」

「舞鶴の艦隊だ！」

顔を見合せて二人が声を揃えた。

「じゃあ、あれは祥鳳さんか瑞鳳さんだね。皆元気にやつてるかにやあ。」

「そういや、睦ちゃんは、舞鶴にいたんだっけ？」

「うん。父さんとはそこで出会ったんだよ。」

へえー。

「おおおーい!!」

と睦が艦隊に向けて両手を大きく振りだした。

「睦ちゃん、向こうまで届かないよ?」

「へへっ。いいの。私がやりたいんだから。」

じゃあ、と言って二人して

「おおおーい!!!」と。

その時だった。

太陽の反射の光なのか、はたまた発光信号なのか、判らないが、空母から光が見えた。それも数回の点滅で。

「嘘?？」

二人は驚いて顔を見合わせた。

正直、驚いた。

しばらく艦隊を見ていた二人だが、徐々に風が冷たくなってきたようだった。

ブルつと朝霜と睦が震えた。

「ちよつと寒くなつてきたね。」

「うん。」

「帰ろつか。」

「そうしよ。あたのお腹空いてきたしき。」

時計を見ると1700になろうとしていた。

二人は、沖の艦隊に向けてバイバイと手を振った。

そして、急ぎ、民宿へ向けて山を降りて行ったのだった。

林間学校（2）

民宿に帰り着くと時間は、夕食の10分前だった。

「あ、どこ行つてたの？ 心配したよ？」

「ごめんごめん。」

と手を合わせて謝る朝霜だった。

生徒全員が席に着くと、夕食の始まりだ。

肉、野菜が乗った大皿が、ドン！と各6人テーブルに置かれていた。

食材は、すべて地元産とのこと。

肉は、地元但馬牛だった。

野菜も、民宿の畑から採つてきたピーマンやキャベツなどが並ぶ。

ご飯も地元の田んぼで採れたお米だ。

コンロは、さすがにカセットボンベのコンロだった。

時間になつて、夕食が始まる。

と、同時に、ワアアッと肉に群がる生徒達であった。

焼き網に具材を載せていく子、まだかなまだかなつとワクワクしながら見てる子、い

ろいろであつた。

朝霜は・・後者で、睦や皐月は前者だつた。

「もう、朝霜ちゃんつてばあ・・そんなにながつつかなくても、具材はたつぷりあるよ?」
「こういうのは、早く食べないと!」

そこへ女将さんから「ご飯もあるからね。」と言われ、ご飯を貰う生徒もいた。

茶碗は、丼鉢だつた。

つけタレは、さらりとした、あつさりタイプのタレだつた。

風味としては、ゆずの香りがしていた。

焼き網にお肉が載ると、ジューっつと音を立てていく。

それも、網いっぱい具材が載っている。

網の面積の半分にお肉。またその半分にウインナー。残り野菜だ。玉ねぎ

の輪切り、茄子、春らしく筍もあつた。

【いっただきます!】

と声が聞こえたかと思えば、箸が一齐に伸びる。

まずは、お肉。但馬牛のお肉は、柔らかく、甘い。

「おしー。」

つけダレがさっぱりとして、また美味しい。

「このタレにつけると、さっぱりしておいしいね。」

焼き野菜も食べていく。

筍は、歯ごたえがいい感じに、ホクホクと焼けていた。

「筍も、こんなふうに食べると、結構美味しいじゃん。」

ホクホク筍に満足な朝霜だった。

「玉ねぎも甘くておいしいよ。」

火が通ると格段に甘くなる玉ねぎを頬張っているのは弥生だった。

丼鉢のご飯は、タレつけご飯として、皆のお腹の中に消えていった。

食事開始から一時間。1900になったころ、大皿の食材をほぼ食べ終えた生徒たち。

食事を終えて、割り当てられた部屋へと入っていった。

部屋へと入ってきた生徒たちだったが、結構、疲労していたので、早々にお風呂に入ることにした。

ここのお風呂は、男女別で、ちよつと大きめだった。

湯舟は5人、洗い場も5人が入れるほどだった。

「おおお、さつさと入っちゃおうよ。」

順番に入っていく。

かけ湯をして、湯船につかって、体を洗って……。
体を洗うついでに髪も洗った。

睦はショートヘアだから、髪を洗っても時間は掛からないが、朝霜、皐月、卯月、弥生は髪が長い。しかも、かなりの長さだ。

朝霜が髪を洗おうとしたとき、睦が手伝うよ、と言ってきた。

「え、いいのかい？」

「いいよ。」

「じゃあ、ちよつとお願ひするよ。」

とこんな感じで、皐月や弥生、卯月もお互い洗いあつた。

何しろ、この学校の女子の髪形は、肩にかからない程度、という規則があつたから、楠木以外の皆はそこそこ短いのだつた。

楠木家の面々はお風呂から上がってきたら、お互いに髪を鋤きあつていた。

「楠木さんつて、皆髪が長いから、手入れが大変だよね？」

つて言われていた。

「まあ、ね。でも、お互いに手伝うから、そうでもないんだけどね。」

とは皐月が答えていた。

ブラッシングはそれなりに時間を要するから、寝るまでにひと作業が入るのだった。

その姿をみて、へえー、楠木さんって仲いいんだね、だつて。

そう言われて、満更でもない睦たちだった。

ブラッシングを終えると速攻で寝入ってしまった。

中には、眠くならなかった子もいたようだが、それでも2200には、全員が就寝した。

◇

翌朝。

臯月と睦は、悲鳴によつて起こされた。

「いったあ!!」

早朝の部屋に響く叫び声。

「な、なになに?」

「なんよ?」

「いったいなあ! もう!!」

「どうしたのさ?」

「誰かが蹴ってるんだよ! 痛いったら、もう!」

その子を蹴ったと思しき奴を見てみると・・卯月だった。

睦は、あちやーと頭を抱えた。

卯月は、寝相が悪いのだった。

時刻は0600少し前だった。

「またあ、卯月ちゃん・・・」

睦が卯月を揺すって起こした。

「ん？ なん、なんだびよん・・・」

眠い目を擦りながら起きてきた。

「びよん、じゃないわよ！ あんた、あたしを蹴ったでしょ！」

いきなり大声で怒られてびっくりする卯月。

「びよんー！ ゴメンびよん・・・」

「ゴメン、じゃないわよ！ 痛かったんだからね。卯月ちゃんは、ちゃんと寝相を直し

てね。 いい？」

「わ、わかったびよん・・・ ごめんびよん・・・」

怒られて小さくしよげる卯月だった。

0700に全員起床し、0730から朝食だった。

卯月は朝からしよげていたので、臯月が聞いた。

「ねえ、睦ちゃん。卯月ちゃん、どうしたの？」

「ん、実はね、周りの子を、寝ながら蹴ったんだよ。それも“トン”てあたる感じじゃ

なくて、「ドカツ」って感じらしいよ。」

「ありやあー。 やっぱり、蹴っちゃったか・・・」

臯月も卯月の寝相の悪さを知っていた。

それも、身をもって知っていた。

「私たちは知ってるから、どうと言う事はないけど、初めての子たちはねえ・・・ やっぱり、驚くよね。 ま、卯月ちゃんには頑張ってる直してもらうしかないね。」

「そだね。」

◇

しよげている卯月をそのままに、林間学校の2日目が始まった。

朝食後に、民宿周りの清掃のチームと、女将さんの畑チームに分かれて作業を行った。

畑チームは、水やりや草引きを手伝っていた。

畑は、よく手入れがされていて、草引きはそんなに多くはなかった。

どちらかと言うと、水やりの方が大変だった。

なにしろ、広いのだ。

畑の脇にある水路から、バケツで水を汲んで、運び、水を撒いていく。

これを何度も繰り返し返すのだ。

どちらかと言えば、体力勝負な作業だった。

「ひいい、バケツの重たいこと！」

と嘆いたのは、朝霜と皐月だった。

水やり作業は、3時間をかけて一応、終わった。

終わると、休む間もなく、昼食の準備だ。

昼食は、飯盒でのカレーライスだった。

「はい、皆、各チーム毎で作ってもらうからね。その味比べを先生がします！」

「えー！」

生徒達からは非難の声が上がったが、先生はお構いなしに、準備を進めていく。

「飯盒はこれで、お米はこっちなね。カレーの材料はここにあるから。」と。

(先生、聞いちゃいねえ。)

飯盒でお米を炊く。

大鍋でカレーを作る。

どちらも、かまどが必要だ。それも2口。

かまどに、木を組み上げ、古新聞紙を入れておく。

最近では、バーナーや着火剤を使うが、今日は、マッチで火をつけるのだ。

マッチを擦って、新聞紙に火を移して、かまどの古新聞紙に火をつけていく。

紙はよく燃える。

しかし、組み上げた木はなかなか燃えてくれない。

そのため、木くずや細かな木材にまず、火を移して、徐々に火を起こしていくのだ。

これが、なかなかうまくいかなかったりする。

「こらあ！ 何やってるの！ その男子！ 早くしなよ!!」

と火起こしを急かす朝霜。

そういう朝霜は、飯盒で米を研いでいた。

先生の分を入れると7人分になるお米だが、ちよつと多めの8人分のお米が用意されていた。

だから、飯盒は2つ。

一つに4合入るが、これが2つなのだ。

5、6度水を替えてお米を洗った。

水を張って、火が起こった網の上に置く。

“始めちよろちよろ、中ばつば・・”だ。

始めは弱火、なのだが、かまどでは、なかなか火の調節はうまくいかない。

何せ、素人の中学生がやるんだから。

弱火だ、つて言いながらも、よく燃えている。

「ああ、もう！　火が強すぎじゃん！　ちよつとは加減しなよ？」

“ そうは言うけどさあ、むずいんだよ？” 的な顔をする男子たち。

朝霜の勢いに押されていく男子たち。　それを見ている睦は（かわいそうだねえ・・）とは思った。

なんとか弱火にする男子たち。

抜いた木材は、隣のカレー鍋用に使っていた。

カレーの方はと言うと・・

主に睦だ。

人参、じゃがいもを洗っていた。

人参は水洗いだけで、一口大に切っていく。

（皮目に栄養があるって言うてたし・・）

じゃがいもは、皮をむいて、こつちも一口大に切っていく。

（お母さんの料理姿を見てたし、手伝ってたから、これくらいならなんとかにやるしい・・。）

次は玉ねぎだ。

その側の皮を2枚ほど剥いて縦に6等分に切った。

そんなに切り刻むこともなかったので、“目が染みるう！”なんてことは、全然な

かった。

お肉は、牛のバラ肉だった。

こいつも一口大に切っておく。

材料はこんなもんか、と。

では！ と睦は木べらを持って、鍋を火にかけた。

少量のサラダ油を引いて、バラ肉を入れ、軽く炒めたら、玉ねぎ、人参、じゃがいもを投入。

火は中火くらい。

玉ねぎがちよつと色が薄くなったら、水を入れる。

8人分なので、それなりの量だ。

あとは、基本、煮えるのを待つ。

時々、灰汁が浮いてきたら掬い取る。

しばらくは、グツグツと煮る。

飯盒の方はと言うと・・

今、強火だ。

飯盒の状態は、あまり最初と変化がない。

しばらくこの状態が続いていた。

「睦ちゃん、どう?」

「うん、今のところ、問題ないよ。朝霜ちゃんの方は?」

「こつちも問題ないけど、変化なあし。ちよつと暇だよ?」

「暇でも、目を離さないでね。いい?」

「おつけーだよ。あたいは、そんなに心配かい?」

「うん。」

即答された朝霜がずっこける。

「な、なんで即答・・・酷いよ、睦ちゃん!」

「へへへ、ごめんごめん。」

そうやっているうちに、飯盒から泡が漏れてきた。

最初は少しだったけど、次第にブクブクと大きく泡がふいてきた。

そうしたら火を遠ざける。

ふくのが収まったら、火から外して、逆さにして蒸らす。

10分ほど蒸らせば出来上がりだ。

カレーの方は、と言うと・・・

じゃがいもが柔らかく煮えたころ、ルーを割り入れた。

割り入れるのだが、ほんとは、いったん火を止めてから入れるのだが、ここではそん

な細かな芸当は無理だ。

だから、火にかかったまま割り入れる。

ダメにならないように、丁寧に溶かす。

ルー1箱を投入し終え、ちゃんと溶かし切った睦だ。

小さく、“よし！”とガッツポーズだ。

「おー、うまくいったかい？」

「うん、ばつちり、だと思うよ。」

どれどれ、と朝霜が鍋をのぞき込む。

カレーのいい香りがする。

「いい香りだねえ。すきつ腹にこたえるねえ。」

「もうちょつと煮込んだら、出来上がりだよ？」

6つのグループで、ほぼ出来上がっていたのは、睦、朝霜のチームと皐月、弥生、卯月のチームだった。

「やっぱり、お母さんの料理を見てたから、自然と手が動くよ。」

とは皐月だった。

それから15分ほど経って、全チームが出来上がった。

各チームで、お皿にご飯をよそって、カレーをかけていく。

朝霜の飯盒も、なんと、お焦げが少々あるが、うまく炊けていた。
「おおおおお！」

「へへん！　どんなもんだい！」

睦のチームのカレーは、程よくとろみがあつた。

皐月のチームも、程よいとろみのカレーになっていた。

あるチームのは・・水の量が多すぎで、シヤバシヤバだつた。

別のチームのご飯は・・お焦げがいっぱいだったり。

【いったただきまああつす】

用意できたチーム毎に、昼食が始まつた。

「ん、いけるよ、いける！」

「このご飯、うまいなあ。」

「あ、睦ちゃんともおいしそうだね。　ちよつと頂戴。」

と言つてきたのは皐月だつた。

「うん。　いいよ。　じゃあ、皐月ちゃんのもちよつと頂戴？」

「うん。　どうぞ。」

お互い食べあう。

「ん、睦ちゃん、このカレーいいねえ。」

「臯月ちゃんのも、美味しいよ。」

臯月チームのカレーの具は、ちよつと小さめだった。

だから、そこそこ煮崩れていたんだけど、それが良かったらしい。

先生による味見もあった。

「まあ、みんなよくできました。一番は、朝霜さん、睦さんたちのチームと、臯月さんたちのチームの2つかな。」

だつてさ。

五人で顔を見合わせて笑っていた。

「ケケケ。 やっぱそうなるう?」

と朝霜がどや顔で笑っていた。

昼食を終え、後片付けが終わると、帰るまでの自由時間だ。

とは言え、民宿のテラスで、みんなまったりしていた。

昨日今日で、クラスメイトとよく話すようになった睦たち。

ただ、一人、暗い顔の奴がいた。

卯月だった。

「卯月ちゃん、まだしよげてるよ?」

「しよげないなあ。でも、もうバスに乗るから、帰ってからだね。」

そして、バスが迎えにきた。

民宿の女将さんに、さよならのあいさつをして、バスに乗り込んでいった。
出発の時、窓を開けて、

「女将さん、バイバイ！」

と手を振っていた。

「気を付けてお帰りー」

と振り返してくれる女将さんがいた。

バスは、民宿を離れていく。

お互い、しばらく手を振っていたが、とうとう見えなくなってしまった。

「楽しかったね。」

「おもしろかったー。」

なんて声がバスの中に響いていた。

帰りは、昨日とは逆に辿っていく。

北から南へと帰るのだ。

ただ・・

30分も走ると、全員が、眠ってしまった。

谷間を縫うようにバスは街道を南下する。

徐々に山が低くなり、開けた盆地を走って行く。

そして・・・

睡が気づくと、もうバスは、相生の街の中だった。

（もう、帰ってきたんだ。）

見慣れた街の風景が目に入っていた。

すでに夕暮れになっていた。

目の前に学校の校門が見えてきた。

門をくぐれば、一泊二日の林間学校が終わる。

校庭に入って、バスが止まった。

校庭で整列した生徒たち。

先生からの話があったのだが、生徒たちは、眠気と闘っていたため、十分に聞こえていない。

「しようがない子たちねえ。いい？ 明日から通常通り学校がありますからね！ 忘

れないでね？」

と念押しされて、解散となった。

「あああ、終わったねえ。」

ううーん、と伸びをしながら朝霜が言う。

「結構、楽しかったね。」

と皐月が応えた。

睦たち五人は、わいわい言いながら、連れ立って帰っていく。
秦と鳳翔の待つ“家”へと。

潮干狩り

4月下旬になって、気温も上がり始めた頃。

良い天気となった日曜日。

今日は七人で潮干狩りに来ていた。

場所は、相生湾のすぐ東側にある海岸、新舞子海岸だ。

ここは小高い山がそのまま海に落ち込んでいる地形をしているが、海は遠浅なのだ。

山は、梅林になっており、3月には、梅の花が見ごろになると、観梅ができる。

こここの潮干狩りは、この地域では有名で、この日はたくさんさんの家族連れで賑わっていた。

「わあ、結構、広いんだ。」

「もう、潮が引いてる。見て！ 向こうまで砂浜だよ！」

既に浜に入って、貝を採っている人たちがたくさんいた。

「うーちゃんも、いっぱい採るびよん！」

「そら！ みんな行け！ いっぱい、採ってこい！」

と秦が号令を發した。

【わああああい】

と熊手とバケツを持って浜に入っていく五人。

もちろん、裸足だ。

それを後ろで見ている、秦と鳳翔。

「あらまあ。あまりはしやぎすぎないでね？」

と言う鳳翔を尻目に五人は早速、しやがみこんで砂をほじくり始めていた。

「あの格好で、良かったろ？」

「そうですね。学校の体操着で十分です。」

みな、上衣は体操着を着て、下は、ハーフパンツだ。

今の時間は、潮が引いていて、まだまだ沖まで砂浜が見えている。

五人の内、一番沖に行ったのは、朝霜だった。

「掘れば掘るほど、出てくるじゃん！」

どうやらたくさん取れているようだ。

へへへつ、アタイが一番たくさんとつてやるんだあ、つと。

他の四人は、陸に近い場所で採っているが、こちらもたくさん採れているようだった。

鳳翔は袴をたくし上げて砂浜にいた。

バケツを持って、採った貝を集めていた。

「どう？ 臯月ちゃん、弥生ちゃん？」

バケツ半分ほどまでに、貝が入っていた。

「まあ、たくさん採れたわねえ。」

「へへへっ、どう？ 大きいでしょ。」

臯月の手には、手のひらサイズのアサリが握られていた。

「あら、大きいわねえ。」

それも一つや二つではなかった。

秦もやってきて、

「おお。デカいな。それも、いくつもあるじゃないか！ こころってこんなにおつき

いやツ、いたのか！」

と驚いていた。

近くで睦と卯月が一緒になって砂浜を見ていた。

「何やってんだ？ たくさん、採れたか？」

と秦が声を掛けた。

「あ、父さん。」

と睦が顔を上げて．．

「ねえ、この穴ポコは、なにぴよん？」

「穴ポコ？」

そう言つて秦も砂浜を見た。

そこには5ミリほどの穴がいくつも開いていた。

三人が顔を寄せて下を見ていたので、不思議がつた鳳翔らがやってきた。

「何をしているんですか？」

「なにになに？」

鳳翔らに向かつて、睦が返答をした。

「お母さん、この辺にたくさんの穴があるんだよ。」

「穴？ あなた、なんなんですか？」

「ああ。 たぶん、マテ貝だな。」

「マテガイ？」

「うん。 確か、塩が…… あった、あった。」

とポケットから塩の袋を取り出した。

その塩を一掴みして、穴に落としていく。

「何が起ころの？」

「まあ、見てなつて。」

何やら顔がニヤついているような……

すると！

穴から、ピュツと何かが飛び出してきた！

わあ！

と言って、睦と卯月が尻餅をついた。

きや！

と言って、鳳翔が秦に抱き着いた。

「はははつ、驚いたかい？ マテ貝は、塩を入れると、飛び出してくるんだ。」

高笑いしている秦に、鳳翔が怒る。

「もう！ そう言うのは、前もって言うてくさい!!」

「こういうのは、言わないから面白いんじゃない。 ははは。」

「父さん!! あたしと卯月ちゃん、お尻が濡れちゃったじゃない！ もう！ 一人で

笑ってるし！」

「父さん、酷いびよん！」

「わるいわるい。 でも、はははは。」

笑いが止まらない秦だ。

そこへ、「何笑ってんのさ？」と朝霜がやってきた。

遠くから見ていたが、何やら楽しそうに笑っていたからだ。

「楽しいことでもあったのかい？」

と言つてまっすぐ近づいてきた。

すると、秦たちの手前、目の前で朝霜が、消えた！

!!!

「もう！ なんじゃこれ！」

よく見ると後ろに手をついてしゃがんでいる朝霜がいた。

「どうしたんだ！」

「急に沈んだ！ 砂が急に沈んだ！」と。

気が付くと、踝辺りまで水位が上がってきていた。

砂が海水を含んで、滑つたのだろう。

「あーあ、ずぶ濡れだよ。」

と半泣き状態。

「あ!!」

と驚くような大声を上げた。

「！ どうした!!」

「バケツ．．．． ああああ．．．」

足を取られた際に、貝がいつぱい入ったバケツをひっくり返していた。

慌ててひろうが、半分以上がこぼれてしまった。

「せっかく採ったのに……」

慌てて拾おうとするが、潮が満ち始めてきて、貝が見つけにくくなってきた。

「かなり満ちてきたぞ。これで終わりだ。さあ、急いで陸に上がるぞ。」

【はい！】

みんな一斉に陸に向かって歩き始めた。

バケツには、それぞれ半分くらいまで貝が入っていた。

陸に上がって、茶屋で休憩することに。

そこで、朝霜、睦、卯月の着替えをすることになった。

「はい。着替え用の服よ。」

と鳳翔に着替えを渡された。

三人は着替え室で濡れた服を脱いで、乾いた服に着替えてきた。といってもTシャツ

と短パン姿だ。

「まあ、今日は天気もいいから、その恰好でも、大丈夫だろ。」

既にお昼時を過ぎていた。

茶屋と言つても、夏ならば、海の家に変身するらしいが……。

お昼を過ぎていたので、人もまばらだった。

茶屋は、メニューもすっかりある。　あるが・・・
秦たちは、鳳翔のお弁当である。

鳳翔の料理に勝るものは無い、と思っている。

「今日は、混ぜ込みおにぎりよ。」

と言つて重箱を開ける。

【おおおおお！】

色とりどりだ。

ピンク、赤、茶色、アイボリー・・・。

混ぜ込みの具材は、ピンクは鮭、赤は梅ぼし、黒は昆布とヒジキ、茶色は鶏そぼろ、アイボリーは筍だ。

おかずは、鶏のから揚げだが、いわゆる、チューリップと、レンコンのはさみ揚げだ。

【いったただつきまあつす!!】

みな一斉に手を伸ばす。

鮭は、全体にほぐし身が混ぜてあつて、しかも大ぶりの身が中に仕込んであつた。

梅干しは、叩いた梅肉が混ぜられてあつて、種のある梅干しが仕込んであつた。

昆布は佃煮で、醤油の風味がいい感じだ。

ヒジキは、ヒジキと大豆の炊いたやつが入っていた。

鶏そぼろは、ちょっと甘辛く煮てあったが、そぼろはふわりとじていた。

筍は、一口大の筍の、タケノコご飯のおにぎりだった。

「うん、梅干し、すっぱさがいい！」

「鶏そぼろも、美味しいよ！」

「うわあ、筍いっぱい、崩れそう。でも、美味しい！」

「ん？ この鮭、混ぜ込んでいるのは、そんなに塩気は感じないけど、中の身は、塩鮭だね？ 2つの鮭が味わえるのか。」

「昆布の佃煮もいいな。醤油の風味が効いてる！」

「このレンコンのはさみ揚げ、味が付いてるよ！」

「はい。ミンチ肉にケッチャップを混ぜてます。なので、ソース要らずですよ。」

そうして、料理は全て、七人のお腹の中へと消えて行つた。

今日も、器には残り物無し！ きれいさっぱり、食べたのだった。

そして……

「さあ、ゆつくりもしたし、帰るとするか。」

「はああい！」

「帰ったら、アサリの処理をしないとな。」

「処理？」

そう聞くのは弥生だった。

「ええ。まずは、貝を塩水につけて、砂抜きをしないと。」

落としてしまったとは言え、七人分で、バケツ3杯にいつぱいだ。持ち上げようとするが、

「うっ、結構、重いぞ、これ。」

「そうだよね、七人分だもんね。」

どうにか警備部まで持って帰って来た。さて、と。

鳳翔と秦が大きなタライを持ってきて、塩水を張った。

「これくらいのデカさがないとダメだろう。」

そこへ貝をぶちまけた。ザザザーっと。

「これでいいの？」
と睦が聞く。

「ああ。このまま明日まで放置だ。」

「ふう——ん」

「じゃあ、今日は食べられないんだね？」

「そうだね。明日以降だな。このまま料理は出来るけど、砂が入ってるから、ジャリ

「ジャリするぞ？ そんなの嫌だろ？」

「そりゃ・・・そうさね。」

「いくらなんでも、鳳翔でも、砂には苦勞するから、ここで砂抜きをさせるんだよ。」
暫く見てると、貝が開き、足が出てきた。

「あ、動いた！」

「あれ？ 少しずつだけど、砂が・・・」

へえ〜つと見ていたが、貝の動きは、早くないので、朝にまた覗くことにした。

次の日。

睦がタライを覗くと・・・

底一面に砂があった。

「すごい。こんなにあつたんだ。」

そこへ鳳翔がやってきた。

「あ、お母さん！ こんなに砂が！」

「あら、また、沢山出たわね。」

「また？」

「ええ。昨日の夜に一度、水を代えたのよ。」

「え？ そうなの？ それで、これ？」と驚いて見ていた。

「これだと、もう一回、水を代えましょうかね。睦ちゃん、手伝ってくれる?」
「うん!」

結局その後には2回も水を代えた。

それで、ようやく、砂がなくなったのだった。

◇

砂を吐かなくなつてから、ようやく料理の開始だ。

「さて、どうしましょうか・・・」

と大量のアサリを前に考えていた。

「この大きいのは、貝焼きにしましょうか。で、比較的大きめのは、酒蒸しかしら。

あとは、お味噌汁の具材と、しぐれ煮ね。」

貝焼き用と酒蒸し用を別の器に取り分けてつと。

お味噌汁用の貝を除けて、残りを、お酒で茹でる。

貝が開くまで煮ていく。

全体が開いたら火を止め、貝殻から身を外していく。

この時の茹で汁はとっておく。

身を外す、これが、結構手間なのだ。

簡単に外れてくれても、なにせ、数が!

剥き終わったらようやく、調理開始だ。

むき身を鍋に入れて、醤油、みりん、砂糖、生姜の千切りを入れて、茹で汁を少し足す。そして火にかけ、煮立たせていく。

「調味料は・・・こんなものかしら。」

なんせ、貝の量が多いだけに、調味料の量も多かった。

煮立ったら、火を弱め、沸騰しない程度に、グツグツと煮る。

途中、何度もかき混ぜる。

焦げ付かないように。

かき混ぜると、醤油の色が全体に絡んでいく。

2, 30分煮て、水分が無くなって来れば、完成だ。

貝は、濃い飴色になっていた。

好みで山椒を入れるのもアリだ。

このままご飯に載せても食べられるが、多いときは、冷蔵しておく日持ちもする。

お味噌汁も、残った茹で汁を使うと、味に深みが出て、美味しくなる。

貝焼きと酒蒸しは、食べる直前で調理することにして、大量のアサリの調理を終えた

鳳翔だった。

「どっつ?.. 終わったかい?」

「ええ。 バツチリです。 美味しくできあがりましたよ。」

「そりや、よかった。 ご飯が楽しみだよ。」

フフフと笑う鳳翔に、ハハハと笑う秦だった。

突然の来客

その連絡は突然やってきた。

横須賀の秋吉から、今日、そちらに行く、と……。

なんなのか、訝しながら連絡を受けた秦だったが……

「なんなんでしょうね？ 急に、来る、だなんて。」

鳳翔も怪訝に思っていた。

「さあ……俺にも分からん。ま、あるとすれば……。」

一応、思い当たることはあるのだが……

「改修の進み具合ぐらいなんだが。」

「……そうですね……。」

そんな事を考えているうちに、時刻は1100になった。

空からプロペラ機の音が、徐々に大きくなってくるのが聞こえた。

どうやら、秋吉が空からやってきたようだ。

だが、この湾、および近郊には、飛行場はない。

どうするんだろうか……

そんな事を思っていたら、湾の南側から低空飛行で1機の飛行艇がやってきた。その音を聞いて、秦と鳳翔は栈橋まで来ていた。

「どうやら着水するようだ。」

湾の中ほどから着水して、水上を滑走してきた。

栈橋近くで、エンジンを止め、惰性で栈橋まできた。

舳で固定されると、中から人が、降りてきた。

秋吉だった。

後ろからもう一人。

白の弓道着で、赤のスカートを着ている。

「どうやら、秘書艦の赤城の様だ。」

「よおー!」

と言つて右手を上げていた。

秦が敬礼で返す。

「これは、提督。ようこそ、相生警備部へ。お久しぶりです。」

「ああ、久しいな。元気だったか?」

「ええ。皆、元気ですよ。」

「そうか。それならいいことだ。」

挨拶もそこそこに、執務室までやってきた四人。

「粗茶ですが、どうぞ」

と、鳳翔がお茶を煎れてきた。

「鳳翔も久しいな。元気だったか。」

「はい。ありがとうございます。秋吉提督も、赤城ちゃんもお元気そうで、何よりです。」

ガハハハと秋吉が笑っていた。

「で、今日は、なんの用でしょうか？」

「そんなに、急がなくてもいいぞ？」

「急ぎますよ？」

「そうかあ？　ま、ホントの目的は、改修の進捗状況の確認、なんだが……実は、お前さんに次の仕事を持って来た。」

「次の仕事？」

「ああ。今の仕事が終われば、呉に行ってもらおう、予定だった。もちろん、今の艦隊を率いてな。」

「「だった？」」

秦と鳳翔が見合わせて首を傾げる。

「ああ。 だった、だ。」

「どういう事ですか？」

「お前さんの艦隊の改修工事が完了するまでに、日米で連合して、敵本拠地を直接、攻撃・殲滅することになったんだ。」

「！」

なんと！

「敵本拠地に対して、ですか！ 直接攻撃と？」

「そうだ。」

秦も、鳳翔も、驚いていた。

「いつの間に……」

「話せば長くなるが、細かくはこの作戦指令書を見てください。」

赤城が、1冊のかなり分厚い書類を出した。

「こちらです。」

と。

秦が手に取って、捲っていく。

「横須賀、呉、佐世保、大湊、舞鶴の各鎮守府の、これは……ほぼ全艦を投入し、また、米国も太平洋地区所属艦隊の全艦を投入する……」

なんと！ 日米の全艦を投入するという作戦だった。

「作戦参加艦艇数、200隻以上、航空機は、艦載機だけでも2000機以上とは……」
「そうだ。我が国から120隻余り、米国から100隻余りだからな。すでに足の遅い潜水艦は、作戦行動に入っている。」

「なお、大西洋でも同時に作戦が行われます。」
と赤城。

「我が軍としては、戦艦10隻。大和、武蔵、長門、陸奥、伊勢、日向、金剛、比叡、榛名、霧島だ。空母は、赤城、加賀、飛龍、蒼龍、翔鶴、瑞鶴、大鳳、葛城、雲竜、天城、信濃の大型空母11隻、飛鷹、隼鷹、千歳、千代田、龍驤、大鷹、瑞鳳、祥鳳、龍鳳、雲鷹、冲鷹の中型11隻。神鷹、海鷹は鳳翔と同じく、本土防衛組として参加し、巡洋艦は全艦、駆逐艦の8割以上が参加する。その他補助艦艇30隻以上が同道する。潜水艦も30隻以上だ。」

「ほぼ全力投入、ですね。そうすると、米国は……」

「貴様の考えるとおり、東西海岸で300隻以上の艦艇が参加する。もちろん、ヨーロッパからも、な。」

秦は続けてページを捲る。

「で、我々は……つと。」

そして見つけた。

「えつと．．．稼働可能艦をもって、呉鎮守府および南海海域の防衛．．．紀伊半島から九州東岸までの範囲で防衛・哨戒行動．．．」

「防衛、ですか？」

と鳳翔が聞く。

「そのようだ。ただ．．．哨戒するといっても、この範囲は広いぞ。こりゃあ．．．」

「残存艦艇が少ないにも関わらず、広範囲だからな。横須賀からも同じく防衛艦隊を
用意する。大湊、佐世保、舞鶴は全艦で攻撃に加わる。舞鶴は、既に出港した。」

「．．．．．」

秦も鳳翔も言葉を失っていた。

「楠木。残念だが、貴様の改修工事は途中で終了して、すぐにも作戦行動に入っても
らう。いいな？」

「それは、構いません。というより、やらざるを得ませんね。艦装の改修に一部手を
付けていましたので、即刻、切り上げます。空母・鳳翔は大丈夫ですが、航空隊との
連携がまだですが．．．。」

「そうか。とは言え、直ちに、頼む。現状で、泣き言も言えんし、言われても聞けん
からな。では、楠木、勝って、また会おう。」

「はい。 健闘を祈ります。」

「うむ。 貴様もな。」

そう言つて、互いに敬礼で返す。

その後、秋吉と赤城は慌ただしくも横須賀へと歸つて行つた。

◇

残された秦と鳳翔……。

作戦指令書を見ながら、秦が指示を出す。

「全員に召集を掛けてくれ。」

「はい。」

館内放送で全員を執務室に集めた。

「どうしたの、父さん？」

「何なに？」

「なんなのさあ？」

と訝しがるが……

「急で申し訳ない。 新たな作戦が開始された。」

「へ？」

直ちに出击準備に入ってもらおう。」

「だって、まだドックに……」

「中止だ。」

「「はあ？」」

「詳細はこいつに書いてあるんだが、・・・・・・・・・・」
と作戦の説明をした。

「そ、そんな！　急に言われても!!」

否定的な反応をする臯月だったが・・

「泣き言は言ってられない状況だ。　作戦開始まで48時間しかない。」

「48時間たったって・・・」

「報告では、船体の改修は完了している。　艀装の工事中だが、現状のままで行く。

自、艦の確認をしてくれ。」

秦が皆を見渡して、そして・・

「すまないな、みんな。」

秦が皆に頭を下げた。

「や、やめてよ、しれーかん！」

とは朝霜。

「そうだよ。　戦うのは、ボクらの役目なんだから。」

と臯月。

各

「お前たち……」あなたたち……」

「あくあ、明日は、調理実習だったのになあ。残念だよお。」

「そうだね、ケーキだったね。」

「ま、しゃーないさ。」

「帰ったら、ケーキ、食べたい！いいでしょ？ 父さん！」

諦めの態度をする朝霜や皐月たち。

家族として、生活してきて、ようやく慣れた頃合いだった。

艦娘ではなく、ホントの娘の様に思つて接してきた秦と鳳翔。

楽しく、愉快的日々だった……

秦は、申し訳なかった。命令一つで、生活が、一変するのだから。

眼頭が熱くなる感じがしていた。

「ああ。 そうだな。 帰ってきたら、みんなで、ケーキを作ろうな。」

「約束だよ！」

「そうびよん！」

「あなた……」

鳳翔が秦を見つめた。 目が潤んでいる様だった。

「約束だ。 それでは、解散！」

みな納得してはいなかったが、命令とあらば、やらねばならない。それからドックは急に慌ただしくなった。

確かに、船体の改修工事は完了していた。

だから・・・

真つ先に、ドックに注水が行われた。

「ドック内、作業員は、5分で退避！ 注水を開始する！」

5分も待たずに、注水が始まる。

「水位、間もなく吃水線を超えます！」

その最中でも、各艦の確認が進む。

「機関始動！ 艀装状況を確認！・・・稼働不能は・・・無い！ よし！」

「各部署、起動を確認！」

4 艦の確認が済むと同時くらいに、注水が完了し

「バラスト水、注水！」

各艦の水平が取られていく。

完了と同時に、接岸した。

ドックの扉が開いていく。

ドックの中が海と繋がった。

次は弾薬類の搬入だ。

ここまで作業開始からおよそ5時間。

そして、鳳翔では、既に弾薬類の積み込みが完了し、搭載機への連絡が終わったところだった。

「提督、搭載機は直ちに着艦させます。着艦はぶっつけ本番でやります!」

「すまない、鳳翔……」

「あの子たちは、優秀ですから、きつと、やってくれますよ。」

艦隊のうち、まず、空母・鳳翔が湾の中ほどまで進み、艦載機の着艦作業に入った。姫路の航空基地から艦上攻撃機と艦上戦闘機が編隊を組んでやってきた。

飛行妖精の練度は……と気になった秦だったが、そんなことは杞憂に過ぎなかったようだ。

次々と、軽々と着艦してくる。

秦が心配することは無く、みな、高練度だった。

(いったい、どれだけ、訓練で飛んでたんだよ……)

搭載予定だった対潜哨戒機は、一度も鳳翔に着艦したことが無い。

だから空母・鳳翔には載せず、陸上基地への配備とするつもりだった。

「鳳翔、偵察機と対潜哨戒機は、高知の飛行場に派遣してくれ。高知の飛行場を、攻撃

と偵察の拠点基地とするから。」

「了解しました。」

各飛行隊と空母との連携訓練をしていないので、都度、秦が指示を出すことにした。空母・鳳翔の改造工事、ちよつと変わった工事をしていた。

それは……

「父さん、各飛行隊、着艦完了したよ！」

と声がする。

「ありがとう、睦。」

そう。睦が提督補佐として、旗艦に乗ることができるよう改造したのだ。

作戦が始まると、睦が一人で留守番をすることになるのだが、秦の本心はちよつと違っていた。

（死ぬときは、三人一緒だから。）と。

秦と鳳翔が帰らぬ人となったとき、残されるのは睦だけになってしまう。

それを避ける意味もあつたのだが。

睦の主たる受け持ちは、通信関係だ。

それならば、艦橋にいて、秦や鳳翔の傍に居られるからだ。

◇

更に4時間余りが経過し、各駆逐艦への弾薬補給が完了した。

「臯月、補給、完了したよ！」

「弥生、完了。」

「うーちゃんも完了！」

「あたしも終わったよ！」

最後に鳳翔が纏めて秦に報告する。

「提督、全艦、補給完了しました。」

「そうか。なんとか間に合ったな。」

「ええ。みんな、よくやってくれました。」

うん、と秦が頷いていた。

「では、艦隊、出撃する。．．．出港!!」

「全艦、出港！」

「湾の外で、単縦陣を組む。」

【了解！】

相生湾を出て、東へと向かう。

穏やかな播磨灘を軽快に走り抜け、明石海峡を通り、神戸沖で南下する。

紀淡海峡を目指して進み、友が島の脇を抜けて、紀伊水道を超える。

目の前は太平洋だ。

楠木艦隊の守備範囲は広い。

紀伊半島から大隅半島までの範囲だ。

この範囲で艦隊を展開させながら、航空機による監視体制に入った。

各艦の聴音機能も最大にした。

今、各艦の距離は5 km以上、開いている。

空母・鳳翔の傍には朝霜がついていた。

そして、作戦開始時刻になった……。

肩すかし

作戦開始から、72時間が経過した。

現在、秦の艦隊は、何事もなく、静かに海を切り裂いて航行していた。

それは、またもや突然にやってきた。

大本営から全軍に向けて、作戦終了が伝達されてきたのだ。

これを受けて、秦は各艦に集結命令を出した。

「各艦に告ぐ、全艦集結せよ。集結地点は、牟岐町沖大島の東20km。」

声を荒げることもなく、であった。

さらに、

「鳳翔、各飛行隊に姫路の飛行場への帰投命令を出して。」

と命令を発していた。

そして・・・

「何か、変だよな？」

なに、とはつきり分からないまでも、何かおかしい、と思う秦。

「そうですねえ。勝ったとも、負けたとも、言わないなんて・・・」

それは鳳翔も同じだったようだ。

「いつもの大本営、ではないなあ。」

「今は、それ以上の通信は、入ってないよ、父さん？」

そのうちに各艦から通信が入ってきた。

「ねえねえ、司令官？ どっちが勝つたの？ ボクたちが勝つたの？」

と臯月が聞いてくるが・・・

「みんな、聞いてくれ。包み隠さず言うのだな・・・俺も、まったくわからん!!」

【はああ??】

「なによそれ？」

「どういうことぴょん？」

疑問に思うのは、当然だ。

秦も、ホントに、何も聞いていない。

だから・・・

「いや、俺も、さっぱり分からんのだよ・・・一応、問い合わせはしているんだけど、

返事は、まだないんだ・・・」

秦の顔は、困った、の1色だ。

傍に居る鳳翔も同じく、困った、の顔だ。

睦が通信機器に張り付いているが、これと言った通信は入ってきていない。

集結地点に艦隊が集結し、帰投することに。

艦隊が大阪湾を帰投中に、暗号通信が入った。

「暗号通信を受信中！」

と通信機器のコンソールに向かっていた睦が報告してきた。

睦には、通信員らしく、暗号解読の方法も教えてあった。

そして解読が終わって、秦に報告するのだが・・・

「父さん、これ・・・」

「暗号電か？　ん？　どうした、睦？」

「うん・・・　内容が・・・」

とにかく、解読文を読むことにした秦。

「なにになに・・・」

そこには、今作戦の結果の概要だけが書いてあった。

（日米共同による、敵ハワイ方面根拠地への攻撃は、成功するも、敵破壊艦船数、甚だ少なく、引き続き、通常体制を継続されたし。）と。

「これは・・・　攻撃成功だけど、完全勝利ってわけじゃあ、なさそうだな。」

鳳翔にも電文を見せた。

「そうですね。壊滅に至らなかつた時点で、今作戦は失敗じゃあないでしょうか？」
「確かにな。失敗と言わずして、なんと言う、ところか。」

艦隊は大阪湾から明石海峡を通過していった。

この海峡を行きかう船は、戦闘とは無関係の様に、行き来している。

(ま、戦争が無く、平和に過ごせれば、問題ないんだが、なあ。)

「あ、そうだ。港に帰り次第、みんなを食堂に集まるように、伝えておくれ。この電文の内容を伝えるからね。」

戦争は、まだ続くんだ、と思う秦であつた。

◇

相生港に、警備部に帰り着き、皆が食堂に集まつた。

「みんな、お疲れ様。結局、我々の戦闘は、一度も起こらなかつた。全員無事なのは、何よりもいいことだ。」

と皆の顔を見渡して、

「大本営からの、通信が来ていたので、みなに報告するよ。電文は……」
と、報告した。

「はい？」

「どういうことだい、しれーかん。」

「いまいち、要領を得ない通信文だけど、さあ。」

「ま、はつきり言うと、攻撃は成功したけど、敵の壊滅には失敗した、という事らしい。

なので、警戒態勢は、今まで通り、という事だ。」

「なんで、失敗になったのか、わかるの?」

「ここは詳しくないが、根拠地と思われた場所は、根拠地ではなかったらしい。で、新たな根拠地を探したようだが、見つからなかった、ようだ。」

ふーん、という雰囲気だ。

「24時間、探したようだが、見つけられず、作戦を終了した、という事らしいが。」

ほうほう、と、納得したのか、しないのか……

「という事なので、明日から、みんな学校ね。で! 出撃前に約束してた、ケーキだ

が……」

「今度の休日に、みんなで作りましょ。いいわね?」

【やったああ!!】

げんきんな奴らであった。

「しれーかん、忘れてなかったんだね!」

「ああ。忘れるもんか。ちゃんと覚えてるぞ!」

と胸を張って見せる。

「うーちゃん、苺のシヨートケーキ!」

「ああ、もう! 何を作るかは、みんなで決めるんだよ? いい? 卯月?」

「ええええ・・・ 分かったびよん・・・」

と臯月に怒られ、しよげる卯月だ。

ふふふつと笑う鳳翔が

「じゃあ、苺のケーキと・・・、そうねえ、フォンダンシヨコラにしましょうか。」

と2つを作ろう、と提案してきた。

「やったああ!」

と喜ぶ卯月。

「フォンダンシヨコラ?」

「ええ。チョコレートケーキよ。 温めれば、中のチョコがとろおーりつて。」

「アタイはそつちがいいかも!」

「ボクは両方!」

「あ! 贅沢!!」

「はいはい。フォンダンシヨコラは、カップで作るから、みんな食べられるわよ?」

「やたっ!」

次の休日は、ケーキを作ることとなった。

◇

翌日になって、横須賀の秋吉から連絡が来た。

「はい、楠木です。」

「おお。ワシじゃ。」

「秋吉中将ですか？ お元気そうですね。」

「はははつ。元氣いっぱいじゃぞ。ま、挨拶はそれぐらいにして……今作戦の

結果は聞いているか？」

「はい。ある程度、ですが。」

「まあ、そうだろうな。最前線にいた、ワシですらすつきりせんのだからな。」

「結果として、ハワイ方面は、敵の本拠地ではなかった、と……」

「そう言う事だ。ハワイ方面の各島は、米軍が解放して、駐留している。我が軍の各

艦は、損失艦は無かったが、半数が被弾した程度で、全艦が帰投した。」

「損失がなかったのは、幸いですね。」

「ああ。確かにな。」

「貴様には、以前と同じ任務に就いてもらうから、そのつもりでな。」

「分かりました。微力を尽くさせていただきます。」

「ああ。よろしく頼む。で、各艦の改造は、その後はどうなんだ？」

「これから工事の再開を指示するところです。船体の工事は完了していますので、後は、短期日で終わるかと。」

「そうか。それが終わって、訓練をして・・・だな？」

「はい。新編成での艦隊運用を検証の後、次の命令を待つことになります。」

「そうすると、あとは・・・長くて2、3ヶ月と言ったところか、な？」

「そうですね。それくらいでしょうか。詳細な見積りが出れば、ご連絡いたします。」

「わかった。それではな。」

「はい。では。」

と通信を終えた。

ふう、と溜息をついて、椅子にもたれた秦。

「どうしましたか？ 秋吉提督はなんと？」

鳳翔が二人分のお茶を煎れた湯呑みを机まで持ってきていた。

「うん？ 今まで通りにしてくれだとき。」

と言ってお茶を啜る。

「じゃあ・・・」

「ああ。各艦の改造を再開だ。ま、船体の工事は終了しているのが、救いだかね。」
そう言つて、はははつつと、笑つて見せた。

ドックの作業員達に、各艦の改造の再開を指示した。

その返答として、1ヶ月もあれば完了するだろう、との報告を受けた。

秦は、その上で艦隊運用を鳳翔と研究することにした。

今までは、偵察機で敵を発見し、攻撃隊を編成して攻撃、という流れだったが、今後は、対潜哨戒機での哨戒行動が加わる。

水中では、レーダー、電探は効かないから、聴音に頼るしかない。

艦の聴音では、聞き取れる範囲が限られるから、哨戒機による、遠距離海域の聴音が必要となる。

その方法と、敵潜を見つけた場合の対処の方法を策定しておくのだ。

ただ対潜哨戒機を飛ばせば万事うまくいく、というものではないのだ。

もつとも、哨戒行動だけではなく、対潜水艦攻撃もやらなければならない。

だから、対潜哨戒機には、投下用の魚雷と対潜爆弾を積むことになる。

その訓練も必要だ。

搭載する対潜哨戒機は、哨戒と攻撃の2つが課せられる機体なのだ。

「先日は、訓練も運用確認も無しに飛ばしましたが、あの機体は、ちよつと重そうですし、

運用は難しそうですね。」

鳳翔の言うとおり、彗星や流星改より若干大きめの機体をしている。

各種聴音機器の他、投下用魚雷を2本、対潜爆弾を4発を搭載することができる。

投下用魚雷は、艦船に積んでいる航空魚雷ほど大きくない。

自走用の燃料と機構が小さく済むので、その分、小さいのだった。

おおよそ半分強の大きさだった。

それでも80番を抱える彗星や、航空魚雷を抱える流星改よりも、エンジンの馬力は上だし、機体も大きい。

この機体は、翼にプロペラを備える、双発機だ。

搭乗員は3名だった。

その機体を12機以上、搭載するのだから、生半可な考えでは、いい働きをさせる事は出来ない。

折角の新型機を有効に使わなければ、と思う秦と鳳翔だった。

◇

「ところで・・・よろしかったのですか？」

「ん？なにがだい？」

話題を変えて、鳳翔が秦に問うてきた。

「皆とケーキを作ろう、なんて言ってる。」

「ああ。 いいよ。 もっとも、戦果のなかった作戦のおかげで、“調理実習”と言う、こども達の楽しみを奪ってしまったからね。 その埋め合わせだと思えば、安いもんだよ。」

「あなたがそう思っているのなら、私としては、特に異論はありません。 楽しくケーキを作るだけですから。」

「悪いね。 俺も手伝うから、何でも言ってる。」

「はい。 それはもう、頼りにしています。 なにしろ、あなたは料理上手ですから。」

そう言つて微笑む鳳翔。

その笑顔を見てこっちも微笑む秦。

「そうだ。 ケーキの材料を買っておかないといけないな。 ね？ 鳳翔？」

秦のその言葉を聞いて「ふふふ。」と笑う鳳翔。

「なにかな？ 何かおかしなこと言つた？」

不意に笑われたことに首をかしげた秦だったが・

「実は・・・ 既に材料は手配済みなんです。」

「え？ そうなの？」

「はい。」

「お前さん、いつたい、いつの間に・・・」

「あなたが秋吉提督に連絡している間に、お店に連絡して取り置きしてもらっています。ですので、いつでも取りに行けばいい状態ですよ。」

まったく、と呆れた秦だが、さすが、我が妻だ、と感心する秦。

そして、やはり、俺の判断は間違っていないな、と心の中で思う秦だった。

日日是好日

ケーキと・・・

次の休日、警備部では朝からケーキ作りをすることになっていた。

作るのは、イチゴのケーキと、フォンダンシヨコラ。

材料は、鳳翔がお店に連絡して取り置きをしてもらっていたのを、前日に取りに行っていた。

ついでに、足りない食器も購入していた。

食堂に、ボウルなどの道具が用意され、材料も小麦粉、卵、グラニュー糖、ミルク&ビターの板チョコなどが揃えられていた。

まずは、イチゴケーキのスポンジづくりからだ。

卵を割り、卵黄と卵白に分ける。

そのうち、卵白に塩、グラニュー糖を入れて、混ぜる。

卵白を泡立てるのだ。

いわゆる、メレンゲだ。

「へえー」

つて興味を持って見ている朝霜と睦にやってもらおう事にした。「よおおし、見てて！」

と朝霜が意気込んでかき混ぜはじめる。

ボウルを睦が押さえている。

よつ、やつ、はつ、と声を発しながら。

残りの卵黄に同じくグラニュー糖を入れて混ぜる。

こちらは、皐月と弥生だ。

「行くよ、弥生ちゃん！」

「いいよ、皐月ちゃん。」

と言つて混ぜはじめる。

「さあ、頑張つて、4人とも！」

と、4人を見つめる鳳翔だ。

「ねえ、うーちゃんは？ うーちゃんは？」

「大丈夫よ。まだまだやることはあるから。」

朝霜・睦組のメレンゲは、角が立つくらいに。

皐月・弥生組の卵黄は、しつとりと。

卵黄にサラダ油、牛乳、ベーキングパウダーを入れ、混ぜる。

「じゃあ、卯月ちゃん、こつちを混ぜてくれる？」

「了解びよん!!」

返事はいいが、混ぜてると、段々と重くなる。

「う、うう・・・、だんだん重いぴよん・・・」

そこへ、メレンゲを少しずつ加えていく。

メレンゲの泡を潰さないように。

ここまで来て、生地が完了だ。

生地を型に流し入れる。

底や枠をたたいて、中の空気を抜く。

さあ、ここからは生地の焼きだ。

180度ほどに温めたオーブンを使い、30から40分、焼く。

しっかりと焼く。

生焼けは厳禁だ。

焼き上がったたら冷ます。冷えたら一旦、ラップに包んで置く。こうするとスポンジ

を乾燥から防ぐことができる。

次に、生クリームだ。

市販の生クリームにグラニュー糖をボウルに入れ、泡立てる。

「じゃあ、これはあなたね。　お願いしますね。」

「よшきた!!」

よつ、ほつ、と声を漏らしながら泡立てていく。

「あ、それくらいで。　ちよつと緩めでいいですから。」

「はいはい。　緩めつと、・・・こんな感じでもいいかな?」

「あ、はい。　上出来です。　さすが、料理上手なあなたですねえ。　ほればれしちやい

ますう。　ウフフフ。」

「そうかい?　はははっ。」

こども達「はいはい」

(まったく、この二人わ!!)

(どこまでも、いちやいちやするかね?)

と、呆れる5人だ。

次は、スポンジにジャムを塗る。

スポンジを上下2つに切り分ける。

下、土台となるスポンジの上に、アプリコットジャムを2，3ミリの厚さで塗る。

その上に、5ミリほどにスライスしたイチゴを、隙間開く並べていく。

さらに、生クリームを2，3ミリほどの厚さで塗り、片方のスポンジを載せる。

その上から生クリームを塗るのだ。
今度は側面も。

厚さは3ミリ程を目安に。

ま、生クリームが好きなら、もっと分厚く塗ってもいい。
全体に塗れたら、イチゴを、花びらのように並べていく。

並べ終わったら、真ん中にクリームを絞って完成だ。

トッピングは、好みで、絞ったチョコレートを冷やして載せてもいい。

今回は、イチゴの上に粉砂糖を白く振りかけた。

これで出来上がり。

「さあ、イチゴのケーキの出来上がりよ。」

と鳳翔がニコリと皆に、ケーキを見せた。

【おおおおお!!】

「美味しそう!」

「綺麗にできたびよん!!」

「今すぐ、食べたい!!」

「ふふふつ。もうちよつと待つててね。次はフォンダンシヨコラよ。」

ボウルにビターの板チョコを砕いていく。

粗方砕いたら、ミルクチョコレートの板チョコも砕いて混ぜていく。

ボウルごとお湯で、チョコが溶けるまで温めていく。

ここに、砂糖、卵を加え、混ぜる。

さらに小麦粉を少しずつ加えながら混ぜる。

混ぜりきれば、カップ容器にカップシートをセットし、流し込む。

空気を抜いたら、予熱したオーブンを使って、180度で5から7分ほど焼く。

外がふんわりと焼ければ、ほぼ完成。

「なんと、簡単な！」

と朝霜。

「なんか、すつこい手抜きに見えるんだけど・・・これでいいの？」

「ええ。上から粉砂糖を、さつと振り掛けて、完成よ。」

◇

道具を片付けて、食堂に集まった。

食堂のテーブルに、イチゴのケーキとフォンダンシヨコラが並ぶ。

「へえ。白と黒の饗宴ってやつだね！」

そして、秦が紅茶をいれた。

ダージリンのいい香りが、ケーキに負けずに漂う。

「それじゃ、いただきますよ。」

【はぁーい】

イチゴのケーキを切り分けていく。

まさに、イチゴのショートケーキ。

我慢しきれない朝霜が真っ先に、口に運ぶ。

あゝん。

「うん！ 美味しい。」

それを見て、

「じゃ、あたしも、いっただきませす！」

と皐月、睦が続いた。

「美味しいね。」

と顔が喜んでいる。

鳳翔と秦が5人を微笑んで見ていた。

「良かった。美味しく出来たみたいで。」

「そうですね。みんなにも手伝ってもらいましたし、楽しかったですね。」

そう言つて二人は紅茶から始めた。

「いい香り。」

一口啜つて、

「ふう。いい紅茶だね。」

と。

「はい。たまには、紅茶もいいですね。」

秦も一口食べて、

「これは、美味しいね。あれだけ砂糖が入ったはずなのに、そんなに甘くないね。」

二口目、と行くところだが、フォークに白い粉砂糖のかかったイチゴを刺して・・・

「鳳翔、はい。」

秦の頬がちよつと朱い・・・。

「えっ?」

と鳳翔が、一瞬、固まったが・・・

イチゴを鳳翔の目の前に差し出していた。

「はい、あーん。」

と。

(もう! 恥ずかしいったら! でも、たまには・・・)

ん、と鳳翔が真っ赤の顔になって口を開ける。

そして、イチゴが口に収まる。

「うん、このイチゴ、甘酸っぱくて、美味しいですね。」

右手で右頬を押さえて、顔を赤めている。

そして、今度は鳳翔が、イチゴケーキの一部をフォークに刺して、

「はい、あなた。」

と秦の目の前に差し出した。

鳳翔の頬は、ほんのり赤かった。

「お返しです。」

「えっ?」

今度は秦が一瞬、固まった。

次の瞬間に頬を赤めて口を開いていた。

あーん、と。

フォークのケーキが秦の口に収まる。

「ん、おいし。」

そう言つて微笑みながらケーキを食べていた。

秦と鳳翔の視線が重なったまま、お互いを見つめていた。

その姿は、当然五人に見られていた。

「あちやあああ。」

「あー！ もう！ 何やってんだよ！」

「やん！ 父さん、お母さん、恥ずかし!!」

「つたく、甘いケーキよりも、甘々だわ。砂糖吐きそう。」

そこまで言われて、鳳翔と秦はお互いを見あつて、顔を赤めていた。

「ほ、ほら、まだチョコケーキもあるわよ。(汗)」

と話題を変えようとする。

「ま、食べるけどさ。」

と言つて朝霜が、フォンダンシヨコラにフォークを差し込み、ケーキを二つに割つて

みると・・

なからから、トロリとしたチョコが出てきた。

「わおお！」

生地にチョコを纏わせ、口へと運ぶ。

「うーん、チョコいっぱい、つて感じ。ほろ苦くて美味し。」

「イチゴのケーキとは違つて、まじで、チョコだね。」

「この2つを同時に味わえるのは、面白いねえ。」

フォンダンシヨコラのおかげで、秦と鳳翔の“あーん”は、どうやら一瞬で消えたようだった。

「ははっ。みんなで作ったケーキはどうだ？ 2種類も食べると、どんな感じだい？」

「白も黒も、両方美味しい！」

「うん、両方美味しいよ。」

そうか、とほほ笑む秦と鳳翔。

だが、

「だからって、しれーかんとお母さんの、“あーん”は忘れてないからね？」

と朝霜が話を振りかえす。

「「そうそう。」」

皆、大きく頷いて同意していた。

「まあ、昼間から、アツアツなのは、十分わかったから。ね？」

というのは臯月で、

「うん。父さんもお母さんも、仲が良くて、羨ましい。」

とは弥生だ。

「お前たち、そこまで言わなくてもいいだろうに。」

「そ、そうよ。」

と抗議するものの、そんな抗議などどこ吹く風、のごとくこども達はケーキを美味しく、顔を、頬を赤めながらケーキを食べていた。

ほっこりあつたかな、おやつタイムとなった。

そして・・・

ケーキを美味しく7人で食べている時、秦が徐に切り出した。

「ねえ、鳳翔？ 一つ、提案なんだけど・・・ カッコカ리를外さないか？」

「えっ??」

カッコカリじゃなく・・・

「ねえ、鳳翔？　一つ、提案なんだけど・・・　カッコカリを外さないか？」

「えっ??」

鳳翔が驚いて秦を見た。

睦や皐月たちも驚いていた。

みんなで作ったケーキを食べながら、徐に秦が話したのだが・・・。

カチャーーン！

「い、いま、なんて・・・」

手に持っていたフォークを落としてしまった鳳翔。

「ん？　カッコカリをやめないか？　って言ったんだけど。」

段々と鳳翔の顔から笑みが消えて、影が・・・。

徐々に、目に涙が溢れてきた・・・。

「ほ、本気で、言ってますか？」

「ああ。　本気だ。」

「父さん！　どういう事?？」

秦の話聞いていた睦が応える。

「なに、言ってるんだよ!! しれーかん?」

「やめるって、どういうこと?」

「そうだよ! 何言ってるのさ! 別れる気なのかい!」

皐月も、朝霜も声を上げた。

「ん?」

鳳翔が、両手で口を覆って、涙を流していた。

しかも嗚咽しながら・・・

う、つえぐ・・・ そ、そんな・・・ うっ・・・

言葉にならない声を出していた。

「わ、わだし、わだしは、いやあで・・・ ひっ・・・」

い、いやあああと叫びながら部屋を飛び出して行った。

「え?」

言った秦の方が驚いていた。

「ほ、鳳翔?」

立ち上がって鳳翔が立ち去った方を見た。

「どういう事、父さん! 別れる気なの?」

「あたいらはどうすんだよ!!」

こども達はいきなりの事であったが、大いに秦を攻めた。

「ち、ちよ、ちよつと待て! 待ってくれ!!」

慌てた様子で手を出して話を止めようとする。

「ちよつと待て! 何か、勘違いしてないか?」

止めようとするが、勢いが違った。

「何が勘違いだよ! 鳳翔さんと、お母さんと別れるつて、今、言ったでしょ?」

「そうだよ! 何言つてんだよ!」

「いきなり何よ? 別れるつて。本気なの?? ホントに? ねえ、父さん!!」

と怒り顔の睦、朝霜、皐月。

声を出さないが、秦を睨みつける卯月と弥生・・

秦は、なんだ、と思つたが、そこで、ハツと気が付いた。

「待て待て!! 待ってくれ、説明するから、ちよつと待てつて!!」

睦らの視線が秦に集ま・・ いや、刺さつていた。

「誰が別れるんだよ? 別れるなんて言つてないし、俺は、〃カッコカリ〃を外して

ケツコン〃だけににならないか、つて言つたつもりなんだよ!」

【はあ?!!】

「どういう事だよ、父さん?」

何のことが、分からなくなつた睦が聞く。

「だからだなあ、ちゃんとと言うと、今は“ケツコンカツコカリ”だろ? これを“ケツコンガチ”に、正式な婚姻にしないかつてことだよ。」

「はあ?」

「正式な婚姻つて・・・」

「だからあ! 鳳翔を、お母さんを“艦娘”としてじゃなくて、“一人の女性”として迎えたんだよ!」

「へ??」

怪訝そうな表情のこども達だが・・・

「な、なんだ。そういうことかよ。まったく。」

「心配するじゃん! 説明、下手すぎでしょ!」

「ご、ごめん。ホントにごめん!」

こども達に言われるだけ言われた秦が、バツの悪そうな顔をして頭を下げていた。

「そうだ! 鳳翔、鳳翔はどこ行つた?」

ハッと鳳翔が居ないことに気が付いた秦が慌てて立ち上がった。

「確か、執務室に入つていったような・・・」

そう言ったのは皐月だった。

「よし、執務室か。」

急いで執務室へと向かう秦。

そのあとを追うことも達。

執務室の扉の前に来ると、中からすすり泣く声がある。

鳳翔の声だ。

悲しい声だった。

「・・・鳳翔、入るよ。」

扉を開けて中に入る秦。

うつ、やああああ・・・っとソファアに俯せに倒れこんで、肩を震わせて泣いている

鳳翔が、そこにはいた。

ひつ、あやあ・・・と。

秦がソファアの傍まで進んで、鳳翔の顔辺りに跪いた。

「鳳翔、ごめん。説明が悪くて・・・」

そういうと、手で顔を覆っていたが首だけを回して、秦を見た。

「わ、わだじは、い、いやああ です・・・ わがれ・る、なんで・・・」

目が赤く、涙で顔がぐちゃぐちゃだった。

「ああ。俺はお前とは、別れない。ずっとそばに居るから。」

「ヒツ、だ、だつたら・・・」

「ごめん。ちゃんと話すのだな、今〃カツコカリ〃だろ？ この〃カツコカリ〃を外して〃ガチ〃にならないか、つてことなんだけど。」

「ウツツ、そ、それつて・・・」

「ああ。戸籍上ちゃんとした婚姻関係にならないか？ つてことなんだ。」

「こ、婚姻・・・」

「ああ。戸籍上の本物のな。俺は本気だぞ。・・・ともかく、説明が悪くてゴメン。」

悲しみの顔が、戸惑いの顔になって・・・

鳳翔の目に涙が、ぼろぼろと再びあふれてきた。

「俺は、鳳翔を、君を必要としている。仕事上の付き合いじゃなく、俺の心と気持ちさが鳳翔を欲している。ずっとそばに居てほしいと。一言で言えば、〃愛している〃。」

それに・・・」

「それに？」

「俺の胃袋は・・・鳳翔に捕まれてしまったから他へは行けないんだ。だから・・・

説明が悪くてゴメンよ。」

ふ、ふ、ふええええーん！

と、今度はうれし涙に代わって、涙で顔がぐしゃぐしゃのまま、ソファアールから上半身を起こし秦に抱き着いてきた。

うわあああああん、と鳳翔の涙が滝の様に流れていた。

秦は、完全にバツが悪そうに、頭を掻きながら、鳳翔を抱き留めていた。

鳳翔の涙は・・止まらなかつた。

秦から別れ話を切り出された、と思っていた涙から、正式な婚姻と聞いて、今度はうれし涙になつて流れていた。

「ちや、ちやんと、いつでくださいい！」

ろ、呂律が・・滑舌が・・

「ちやんと、言つてくださいあい！ わがれるつて、思つだじやない、ですがあ！」

秦の胸をたたきながら、抱き着き、泣いていた。大泣きだ。

「いてて。ゴメンよ。それで・・嫌かい？」

「なんで、いやつで、いやつでいうんですが！ そんなごと、いいませんがあああ！」

あああああああああ！」

そこだけは、大きな返事だったが、まだ泣いていた。顔は涙でぐつちやくちやのま
ま。

秦は、涙を流す鳳翔の唇を塞いだ。いきなりだつた。

ウ!

ウン・

ウ・

鳳翔は、最初こそ目を開いていたが、そのうちにゆつくりと目を閉じていた。

二人の唇が、しつかりと絡んでいた。

いつもより長い口づけ。

二人が離れると、二人の唇は濡れていた。

鳳翔の涙は、まだ止まっていなかったが、二人は微笑んでいた。

そこへやってきた朝霜が溜息を付きながら、

「はあ、しれーかん、ごめんよ。早とちりだったね。」

「もう、父さんったら……。最初からちゃんと説明してよお。心配したよお、まった

く、もう。」

と愚痴を言った睦だったが、みな目に涙を溜めていた。

皆一様に安どの表情だ。

改めて皆に向いて、

「ごめんね。でも、そう言う事なんだ。」

と言う秦だったが、泣いたままの鳳翔を抱きしめていた。

その鳳翔は濡れた頬のまま秦に抱き着いてた。

鳳翔の背中をポンポンと叩きながら、顔を寄せる秦。

ホツとした表情のこども達。

しばらくそのまま、七人はいた。

「さ、残りのケーキ、皆で食べよ。」

そう臯月が言つて、秦、鳳翔とこども達は食堂へと戻つていった。

秦が鳳翔の肩を抱き、涙を拭きながら。

今度こそ、笑いあいながらケーキを頬張つていた。

鳳翔の涙の跡はそのままに。

◇

「はい、鳳翔。」

と言つて秦が一口大のケーキが刺さつたフォークを差し出した。

頬に涙の跡が残つたままの、鳳翔の小さな口に収まつていく。

「お、おいしいです・・・」

今度は鳳翔が切り分けたフォンダンシヨコラを秦の前に差し出した。

「あ、あなたも、はい・・・」

あー、んぐ、

と秦の口に収まる。

「ん、おいしーよ。」

お互いの気持ちを確かめるように、お互いに食べさせあう二人。

その二人を諦め、呆れから納得せざるをえない五人が見ていた。

(はあ・・・もう、何も言っても聞かないわね、この二人は・・)

と思うのだった。

◇

その日のうちに、秦は秋吉に連絡していた。

「・・・・・という事なんですが・・」

「そりゃあ、お前さんたちの事だから、反対はせんが。そうか。正式とはな。」

声を聞く限りでも、秋吉も驚いているようだった。

「ええ。やつぱり、“カツコカリ”は、“仮”ですから。」

「分かった。役所への鳳翔の戸籍復帰手続きはしておく。何せ、本籍は横須賀所属

だからな。こちらでやっておく。終わったら連絡するからな。」

「はい。ありがとうございます。それでは。」

と連絡を終えた秋吉だが、傍には赤城と加賀が居た。

加賀は、今日の当番秘書艦だが、どちらかと言うと、赤城の補佐、という面が強かつ

た。

秋吉が2人に向かって言う。

「楠木が鳳翔と正式に戸籍上も結婚する、と決めたそうだ。」

赤城、加賀の二人が驚く

「「え？」」

一拍の間を置いて、

「そうですね。お母様もそれを？」

「ああ。受けたそうだ。」

「お母様の気持ち次第ですので、私たちがとやかく言う事は無いと思います。」

と加賀が言うが、その気持ちは複雑だった。

鳳翔が、カッコカリではなく、正式に誰か個人のモノになる、と言うのは理解しがた
い事だった。

“母”は、“みんなの母”と、思っていたから。

その鳳翔が受け入れた、となれば、加賀にとつては何も言う事は出来ないとして理解して
いるつもりだ。

「私としては、お母様の幸せを願うのみです。ね、加賀さん？」

「ええ。そうね。」

「お前たちとしても、それしか言えまいて。まあ、そうは言っても赤城よ？ 届のための手続きをしてくれるかい？」

「はい。 承知しました。」

翌日、赤城が秋吉の承認を得て、鳳翔の手続きを行つた。

役所にて書類が受理された。

受理されれば手続きは完了である。

そして、その報告を秦にした。

「楠木提督ですか？ 先ほど、お母様の手続きが完了しましたので、お知らせいたしますね。」

「ありがとうございます。 早かったですね。」

「そりゃあ、早めにしますとも。 お母様のためですから。」

「わざわざ、ありがとうございます。 あ、ちよつとお待ちを。」

後ろでもう一人いるようだった。

「もしもし？ 赤城ちゃん？」

替わつたのは鳳翔だった。

「あ、お母様。 改めておめでとうございます、と言わせて頂きます。 それと、加賀さんからも、おめでとうと。」

「うふふつ。ありがとうございます。加賀ちゃんにもよろしくと伝えてくれるかしら。」

「はい。ちゃんと伝えます。お母様、お幸せに。」

「ええ。ありがとう。それで赤城ちゃんは、どうすのかしら？」

「え？ 私ですか？」

「そう、赤城ちゃん、あなたよ。秋吉提督のこと、どう思ってるのかしら？」

「わ、私は・・・尊敬しています。それ以上でも以下でもありません。」

「そう・・・。ならいいわ。それじゃあね。」

「はい。それでは。」

と、そこまで言って連絡を終えた。

その足で秦は鳳翔と共に相生の役所に赴き、最終的な手続きを行つた。婚姻届を提出したのだった。

提出し終わって、

「これでよし、つと。」

と言つて鳳翔を見た。

「これで、何の文句も言われない、夫婦だよ。とはいうものの、生活スタイルは変わらないけど・・・。」

「いえ。気持ちはずいぶんと違いますよ。」

鳳翔は秦を見ていた。

「そうかい？」

「ええ。 私は、 正真正銘、 楠木 秦の妻、 ですから。 嬉しいですよ。」
とニコリと微笑んで見せた。

「そうだな。 そして、 俺たちは、 5人の親、 となるわけだな。」

「そうですね。 おつきな子供達ですけど。」

と笑いあつた。

警備部に帰り着いて、 皆に報告をした。

婚姻届けを出したと、 これで正に七人が家族になることを。

「へへへへ。」 「ふふふ。」

七人の顔はにこやかだった。

足踏みミシンで・・・

5月も中旬になって、そろそろ各艦体の改造工事が終了に近づいた。

「今月中には、各艦の改造工事が終わりそうだな。」

「そうですね。今月末には終わると思います。」

「そうなるよ、検討してきた対潜哨戒と対潜攻撃の実地運用を試す事になるね。」

空母・鳳翔に、新たに新型の対潜哨戒・対潜攻撃機を搭載する事になっていたが、長らくその運用について検討をしてきた、秦と鳳翔。

先の作戦で、細かな指示は全て秦からしていたのだった。

その反省を含めて、新たに運用方法を検討していたのだった。

その検討結果を実際の訓練で試す機会が訪れようとしていた。

各航空隊は、空母・鳳翔への発着艦訓練や攻撃訓練をやってきたが、艦隊運動を含めた訓練はまだ行っていなかった。

空母・鳳翔の各航空隊の練度は、全国の航空隊の中でもとびきりの猛者で、高練度だ。

もちろん、鳳翔が生半可な訓練を良しとはしなかった事もあって、鳳翔には「微笑む鬼」という、聞くだけで未恐ろしい渾名が付いていた。

最初のころは「鳳翔お艦」とも呼ばれてはいたのだが。

それが、今度は各駆逐艦たちにも、厳しい目が向けられることに……なるかも、だった。

執務室のソファアーに並んで座る秦と鳳翔の二人。

「訓練が始まる、という事は、朝霜たちの学校生活も終わってしまうのかな。」

「仕方がありませんね。でも、最初から全力で訓練しませんから、しばらくは学校へ通いながらすることになりますね。」

「そうか。でも、五人の、父親、母親の役目も、終わりになるんだな……残るは睦だけか……」

「寂しいですか?」

「うん。ちよつと、というか、ね。娘が五人も居て、大変なこともあったけど、賑やかで楽しかったし。それに……」

「それに?」

「鳳翔との、その、こどもも、欲しいかなって、思ったし……」

鳳翔の顔が朱くなる。

言った秦も、頬を指で掻きながら、顔を赤めていた。

「も、もう! 恥ずかしい事を!」

そう言つて秦の肩をパシツと叩いた。

でも……

「……わ、わたし、私も、いいですよ…… そ、その、あなた、との、こども……。」
と真ツ赤の顔で俯く。

しばし、無言の時間が……流れた。

「そ、それはそうと、朝霜たちの小袖を作つてたんだよな？」

「え？ そ、そうです、そうです。 四人分、出来たんですよ。」

と話題を変えた。

◇

以前、睦と鳳翔がお揃いの小袖を着ていたとき、皐月や朝霜が

「それ何？」

「お母さんとお揃い？ いいなあ…… ボクも欲しいなあ……」

と言つた事に始まるが、

「あら、じゃあ、みんなの分も作りましょうか。 ね？」

【やったあ！】

と相成つたのだ。

作業に掛かったのは、林間学校を終えた頃だった。

生地を取り寄せ、型を取っていくのだ。

そしてそれぞれのパーツを縫って行くのだが、最初は手縫いを考えていたのだが、裏のおばあちゃんから、ひよんな事から足踏みミシンを貰っていた。

このミシンを使って仕立てる事にしたのだ。

◇

年代物の足踏みミシンだったが、おばあちゃんが使っていたらしく、状態は良かった。動きも問題無く、十分に動いた。

子供達は見たことがなかった。この足踏みミシン。

「お母さん、何これ?！」

「見た事ない? これは、ミシンよ。」

「ミシン?！」

「そう。ミシン。昔の足踏みミシンよ。」

「足踏みい?！」

大きさは机ほどある。

足下にペダルがある。

足のペダルを踏み込むと、ベルトを通じて台の上のミシン針に上下運動が伝わる仕組みだ。

その運動によって、ミシン針が布を突き刺して糸を通していくのだ。

ただ、今風のプログラム付き電動ミシンみたいに、縫い目や布を縫う速度を自動で変える事ができない。

この古い足踏みミシンは、基本、すべてにおいて手動だ。

縫う速度は、足のペダルで速度を変え、縫い目の形は、人が布をずらせていく、という。

鳳翔は四人分の小袖をこの足踏みミシンで仕立てていくことにした。

ペダルを上下に踏み込む前に、本体にある、ベルトを手である程度動かす。

するとペダルを踏み込みやすくなる。

踏み込む動作がベルトを伝って、針が上下に動くのだ。

その音は、カタカタカタ・・と。

生地は手で送っていくのだ。

着物の生地は、そこそこ丈夫にできているから、針もやや太い。

まっすぐに縫う時は、足の動きもリズムカルに、カタカタカタカタと連続音がする。

曲線を縫う時は速度を落として縫っていくのだが、着物の仕立てでは、縫い目は直線しかない。

作業は、反物から、右袖、左袖、左身頃、右身頃、衿、おくみとなる範囲を切り分け

ていく。

切り分けた布にそれぞれの部位となる型を合わせ、切り出していく。型には縫い代となる部分が取つてあるから、実際に小袖となる部分のサイズより若干だが大きい。

左右の身頃の柄を合わせて、縫い合わせていく（背縫い）。

この縫い合わせで、足踏ミシンを使う。

今仕立てているのは、小袖で、無地の生地なので、身頃を合わせるのも簡単だった。

簡単だけれども、長さが・・長い！後ろ衿から足もとまでだから、結構長い。

そして、裏地となる胴裏を縫いつける。

次に、左右の袖を縫いつける。既に袖下を縫い、筒状になっている。袖口は、通

常の“着物”より小さい。小袖の由来の一つが、この袖口が小さい事による。

これらの縫い付けも、足踏みミシンで行うのだ。

カタカタカタカタ・・と。

身八口も開けておく。

衿を縫いつけていくが、衿も“着物”より幅は太い。結果的に布地を二重くらい重

ねる。

次に、おくみを縫い付けていく。

小袖は、おはしよりが無い分、普通の着物より着丈が短い。

もつとも、時代によって長さは違うが、今仕立てているのは、足首が見える程度の長さになっている。

所謂、和裁では布の表面に縫い糸は出ない、というか見えない。縫い目は裏側になるのだ。

簡単とは言え、4人分は骨が折れた。

鳳翔が専業主婦なら時間はあつたのだろうが、秘書艦であり、妻であり、母であり、艦の訓練と・・何役もこなす鳳翔に、たつぷりの時間はなかった。

その上、帯もないといけないし、町娘らしく湯巻もないと。これらも4人分を作つたのだった。

それゆえ、余計に時間が掛かってしまった。

◇

「これです。 4人分の小袖です。 それと草履です。 草履は買ってきましたけど。」

と4人分の小袖を秦に見せた。

「大変だったろ？」

「まあ、それなりに、ですけど。 でも、いいものが出来たと思います。」

と、微笑みながら4人分の小袖を撫でている鳳翔が言った。

「あのミシンのおかげかな？」

「そうですね、あのミシンのおかげで、だいぶ助かりました。」

裏のおばあちゃんから貰った足踏みミシンが大いに役立ったのだった。

「ははは。じゃあ、おばあちゃんに感謝しておかないといけないね。」

「そうですね。おばあちゃんに感謝ですね。ふふふ。」

二人して笑いあっていた。

「それじゃあ、睦や臯月たちが帰ってきたら、早速、着てもらおうか？」

「ええ。そうしましょう。」

そう言つてまた二人で笑つた。

夕刻前になつて五人が帰つて来た。

【「たっだいまあ！」

元氣ありまくりの五人だ。

その勢いのまま執務室にやつてきた。

「父さん、お母さん、たっだいま！」

とは臯月と睦。

「今帰つたぞ！」

とおつさん風に言うのは朝霜だ。

「違うでしょ？」　「たっだいま」　「でしょ？」　朝霜ちゃん、何回言わせるの？」

「また怒られてるう。 ただいまびよん！」

「ただいま。 今、帰ったよ。」

「みんな、お帰り。 今日も元気だな。」

「あつたぼうじゃん!!」

「じゃあ、その元気なついでに、これを着てくれるかい？」

「なにになに？」

「あ！ これ、出来たの？」

「ええ。 やつと出来たわよ。 四人とも着てくれるかしら。」

「うん、 やつたあ！」

「じゃあ、居間で着替えましょ。」

そう言つて鳳翔と四人が執務室を出て行つた。

廊下の向こうで、きやつきやと声がする。

一人残つた睦に秦が声を掛けた。

「睦はいいのか？」

「うん、私は持つてるし。 ま、いいんじゃない？」

「そうか。」

と言つて二人でソファアに座つて待つことにした。

暫くして、賑やかな声が廊下から聞こえてきた。

ドカツつと扉を開けて、

「しれーかん、どうだい?？」

と朝霜が1番に入ってきた。

「父さん、どうかかな?」

と臯月、続いて卯月、弥生が入ってきた。

「おお! 可愛いじゃないか、みんな! まさしく町娘だなあ。

湯巻まで付けて似

合ってるぞ。」

へへへへつと、四人の顔が、にこやかだ。

「だいたい、ぴつたりでしたね。ただ・・」

と鳳翔が言うが・・

「? ただ?」

四人をよく見ると、ひとりだけ、お稚児さんの様に丈がちよつと短い奴がいた。

朝霜だ。

「あ? 朝霜だけ、ちよつと短いか?」

「はい、ちよつと短かったです。反物が微妙に足りなくて・・ごめんね。」

と鳳翔が朝霜に謝っていた。

鏡、お化粧と・・

秦と鳳翔の寝室に、鏡台がある。

もともとは無かったのだが、秦が新たに買ってきたのだ。

「いつもは小さな鏡を使つて、使いにくそうだったから、ちゃんとした鏡台を、つと思つてね。」

「まあ。私はそんなに化粧道具を持っていませんのに。宝の持ち腐れになつてしま

いますよ?。」

と謙遜する鳳翔。

「道具が少なくても、お化粧はするんだし、必要でしょ?。」

と秦が言うと、

「まあ、あればあつたで、有り難いですけど・・・こんな大きな鏡台でなくてもよろしかったのに・・・。」

と鳳翔が申し訳なさげに言う。

秦が買ってきたのは、椅子に座つて使用する鏡台で、小物入れの引き出しが左右に2つずつ付いていた。

鏡は三枚あって、真ん中が正面用、それと左右に1枚ずつの三面鏡だ。

鳳翔は、濃い化粧では無く、どちらかと言えばすつぴんに近い、ナチュラルメイクだ。普段は、潮風と日焼け対策と保湿、口紅くらい。

秦としては、元々美人の部類に入る鳳翔が、化粧をする必要もないのだろう、とは思ってはいた。

ただ、大人な女性として考えた時、化粧をしても綺麗と言える事は、秦としてもうれしい事なので、化粧をしやすい環境を整えてやりたかったのだ。

化粧道具も、それなりのものを手配した。

化粧筆は、広島は熊野の筆を買ってきた。

熊野の筆は、1本1本、全てが手作業で作られる、高級品だった。

試しで、手に取ったときの毛の感触は、羽毛に撫でられているかのような、毛ざわりだ。

思わず、おおおおっと声を上げるくらい、柔らかく、気持ちのいい感触だった。

秦はその化粧筆をセットで買ってきたのだった。

その化粧筆を見て、

「あー、この筆、いい化粧筆ですねえ。すごく化粧のりが良さそうな筆ですね。」

化粧筆を手に取り、感触を確かめていた。

化粧水、保湿クリームなどは、東京は銀座の化粧品店のモノを買ってきた。

「まあ、これも。高かったでしょうに。いいんですか？」

「ああ。いいよ。鳳翔が今より、ずっと綺麗になるならお金は惜しまないから。」

と言った秦も、

「もう。」

と言った鳳翔も、顔を赤めていた。

◇

鏡台と同時に、姿見としての全身鏡も買った。

姿見は執務室に一つだけだったのだが、寝室とこども達用に、2つ追加で購入した。

鏡台を買った時に、

「あたしも欲しい！」

「ボクも！」

と言われたが、

「もう少し、大きくなってからね？」

と我慢してもらった。

「「え〜〜!!」」

という大合唱にはなったが・・・。

その代り、と言ってはなんだが、姿見を買ったのだ。
やはり、女の子だ。

化粧やおしゃれには興味津々のようだった。

姿見の前で、ポーズをとったり、髪を鋤いて見たり、と。

「まあ、あの子たちは、まだまだ若いから化粧品は必要ないだろうけど、リップくらいは使うかな？」

「今どきの女の子なら、リップ以外にも結構、お化粧はしているみたいですよ。」

「え？ そうなの？」

腕を組んだまま、驚く秦。

「若いのに、ケバケバしい化粧は要らないでしょ？ 基礎化粧品くらいで良かない？」

そう思う秦だが、

「ふふふつ。 あなたも結構、考え方が古いですよ。 確かにケバケバしいのは要りま

せんけど、かわいく見えるお化粧はやってもいいと思いますよ。」

と鳳翔に言われて、

「そうなのかい・・・ま、反対は・・・しない、方がいいかな？」

と答えるのが精一杯だった。

「はい。 その方がいいかと思えますよ。」

そう言われると、また秦は考え込んでしまった。

「そうになると、鏡台がもつと要るなあ。部屋には人数分、入らないし・・・やっぱり、我慢してもらおうか・・・。」

「はい。今は無くてもいいと思います。そのうち・・・ですね？」

「鏡台つて、みんなで作るものなのかい？」

秦本人が鏡台を使わないから、鳳翔に聞いてみた。すると、鳳翔の答えは・・・
「使えますけど、でも・・・使う時間帯は、重なりますから、やっぱり人数分は・・・。」

暗に、1台では無理よ、と言われていているようなものだ。

やはり、鏡台は諦めてもらおう、と思った秦だった。

その代り、と言つてはなんだが、こども達様に一人ずつ20cm四方の折り畳みの化粧用の鏡を買う事にした。

そして、それなりの化粧品のセットと化粧ポーチも買ったのだった。

それなら、部屋の机でもお化粧が出来るよ、考えたのだ。

持ち運びができれば、居間でも、お化粧は出来るだろうと思つたからだつた。

後日、それらを買つてやると、喜んでくれたようだ。それなりに・・・。

「悪いね。お前さんたちのお化粧は、このセットで我慢しておくれ。」

「まあ、そんなに化粧することは無いから、これで我慢するよ。」

と臯月と睦。

そして朝霜が

「ホントは、全自動なんかができ……」

パカーン！

「要らんこと、言わない！」

と秦が、朝霜の頭を、はたいた。

「イツ、イテエ！　なんだよ！　言ってみただけじゃん!!」

「お前の言わんとする事は分かるわ。　ったく。」

まあまあ、と鳳翔になだめられる二人だった。

◇

秦も良く知らなかったが、毎朝、鳳翔は長い髪をブラッシングしている。

その時間は……秦は眠っているから。

ブラシの後は、薄く髪に椿油を付けて、長い髪を括る。

化粧水、保湿クリームを念入りに付けて、薄く口紅を塗る。

そこまでするなら、鏡台は必要だ。

それとは違い、こども達は髪をセットするくらいだから、鏡台は要らなかったが。

また、夜のお風呂上がりにも鳳翔は髪をブラッシングをしていた。

そして、スキンケアも。

これは、秦も起きているからよく目にする光景だった。

いつだったか、居間で朝霜が一人で、折り畳みの鏡を前に、風呂上りで化粧水を使っていたのを秦が見つけた。

「おう。 どうした？」

「あ、しれーかん。 見てのとおり、湯上りのスキンケアだよ。」

「お前がねえ・・・」

と感心なのか、呆れなのか・・・。

「なに？ あたいがしておかしいかい？」

「いや、やつぱり、女の子なんだなあ、って思ってたな。」

「あつたりまえじゃん！」

そのうち、スキンケアを終えて、髪をブラッシングし始めた。

朝霜の髪は長い。

「手伝ってやろうか？」

「え？ いいのかい？」

「たまには、手伝わせろよ。」

「変なコト、しない？」

「しないわい!!」

「じゃあ、よろしく。」

と、朝霜からブラシを受け取って、髪を鋤いた。

根元から毛先まで。

「なかなか、綺麗な髪じゃないか、朝霜?」

「へへへ、当然ジャン!」

鏡に映る朝霜の顔は、やや赤かった。

時々、鏡を通して視線が合う。

そのたびに、ニコリとする秦。ニツと笑う朝霜。

「長いなあ。毎日大変だろう?」

「そんなことあ、ないさ。大抵は、みんなで交互にやりあいつこするからさ。」

「そうか。それならいいな。」

そんなこと言いながら髪を鋤いていると、鳳翔がやってきた。

「こちら風呂上りだ。」

「あら、朝霜ちゃん、提督に髪を鋤ってもらってるの? 良かったわね。」

「へへへっ。いいでしょ?」

「よし! こんなもんでどうだ?」

「おう。ありがと、しれーかん!! またやってよね! じゃあ!」
と言って自室へと戻って行った。

残された秦と鳳翔。

「フフフ。 どうでしたか? ”娘”の髪を鋤くのは。」

「案外、いいものだな。 これでコミュニケーションが図れるなら、お安い御用さ。 それはそうと、鳳翔もしようか?」

「あ、じゃあ、お願いします。 ここでは道具もないので部屋でお願いしますね。」

「ああ。 いいよ。」

そう言って二人より添って自室へと入って行った。

鏡台に向って鳳翔が座り、秦が後ろに立って、髪を鋤いていく。

スーッと、スーッと。

「鳳翔も髪は綺麗だね。 毎日、手入れは大変だろう。」

「それでもありませんよ。 もう、慣れていきますから。」

「俺からすると、大変だ、としか思わないけどさ。 それにしても・ 朝霜もそうだったけど、うちの”娘”達は髪は長い方だね。」

「フフ。 そうですね。 短いのは睦ちゃんだけですか。」

「そうなんだよね・ まあ、みんな綺麗な髪をしてると思うよ。 最近は手入れをして

いるみたいだけど、これって鳳翔譲りかな？」

「そうです、分かります？ みんな、私に聞いてきますよ？ どうしたらいいのって。」

「そうなんだ。 ははは。 震源地はやっぱり、鳳翔だったか。」

と秦が言ったが、鳳翔はすぐには分からなかった。

?? と。

「いや、みんな同じような時期から、肌や髪を気にしだしたから、おかしいなあ・・・とは思ってたんだ。」

「そうなんですね。」

そう言つて、「はははは」「ふふふ」と、二人して笑っていた。

髪を鋤き終えた秦は・・・

鳳翔の後ろからそつと手を廻して、抱きしめた。

「え？ あ・・・」

顔を頭に近づけ、匂いを嗅いだ。

お風呂上りの髪からいい匂いがする。

「いい匂い・・・」

「や・・・もう・・・」

そして、鳳翔が首を後ろに回そうとする。

秦もそれに合わせて、顔を前に倒そうとすると・・二人の唇が・・ゆっくりと合さる。

最初は、軽く優しく、

次第に、強く、激しく。

唇が離れると頬を赤めて、

「もう、あなただったらあ・・・」と。

そう言うと、秦に身体を預けるのだった。

そして・・・

秦は鳳翔を抱きかかえ、ベッドへと・・・。

・・・

翌朝、目覚めた二人は抱き合ったまま、とにかく満足そうな笑みを浮かべているのだった。

授業参観・

五月の連休も過ぎ、後半ごろの土曜日、睦の学校では、授業参観が行われることになっていた。

秦と鳳翔は、最初はどちらかが参加すればいいか、なんて考えていたが、元々、1クラスあたりの人数が少ない事もあって、父母の両方が参加することが少なくない、との事だったので、二人で参加する事にした。

「今度の土曜日だったな？ 参観日は？」

「そうだよ。 父さんとお母さんの二人で来てくれるの？」

そう聞くのは睦だった。

「ええ。 そのつもりよ。」

とこども達にニコリと微笑んで答える鳳翔。

「みんなの勉強する姿を見るのは、楽しみだな。」

普段は、居間で宿題をしている姿しか見たことのない秦と鳳翔だが、学校での姿を見ることのできるのには、楽しみであった。

「アタイは、いいところ、見せちゃうんだから！」

と拳を握って、勢いよく答える朝霜であつたが・

「よく言うよ、まつたく・・・」

嘆息してうなだれる皐月。

ここから朝霜に対して皆の批判合戦が始まつた。

「な、なんだよ？ 皐月ちゃん。あたいが何かしたかい？」

「朝霜ちゃんはいつとも余計な発言して、授業を混乱の渦に巻き込んでる張本人じゃないか！」

「いか！」

「え？ そんなことないじゃん？ ね？ 睦ちゃん。してないよね？」

「残念でした！ 私は皐月ちゃんに一票にや。」

「うーちゃんは皐月ちゃん・・・じゃなくて朝霜ちゃんに一票ぴよん！」

「卯月はだめ！ 一緒になつて遊んでるじゃないか！」

「えくく、いいじゃん、いいじゃん。」

「だめ。弥生は皐月ちゃんに一票。」

結果、三対二で皐月に軍配が上がつた。

「でも、なんなんだよ、その、混乱の渦に巻き込むつてのは？ 授業中だろ？」

と秦が聞く。

「え？ 説明するのは難しいよ。」

「だいたい、ブラックジョークなんだけどね。時々、少しばかり内容が過ぎるんだよ。」

「それで、先生が発狂しちゃってさあ……」楠木さん！ 何言ってるの!! そんなことを言ってるじゃないのよ!!」ってキレちゃうんだよね……」

「はあ…… なんか、行くのが億劫になって来たぞ……。」

気がおもしろくなってきた秦だった。

「ま、まあ、元気な事は分かったから、勉強する姿をちゃんと見せてくれよ? 期待してるからな?」

【了解!】

と返事は良い。返事だけは。

その会話を聞きながら、呆れるように微笑んでいたのは鳳翔だけだった。

◇

そして、授業参観日当日の土曜日。

今日の授業参観は、午前中だけで、睦たちの授業も午前中で終わって、帰る事になっていた。

朝、朝食後、

「じゃあ、父さん、お母さん、ちよつと早いけど、先に行くね。」

「ああ。行つてらっしゃい。後から行くからね。」

「行つてきます！」

そう言つて五人は学校へと向かつた。

見送つた秦は、スーツに着替える。

身支度をして、執務室にいた。

暫くして鳳翔が、身支度してやつてきた。

桜色の訪問着姿。

髪型は変わらないが、薄く化粧をして、淡い赤の口紅をしていた。

「お待たせしました。」

鳳翔の姿を見て、秦は、

「やあ。綺麗にお化粧したね。着物も似合つてて、すごく綺麗だよ。」

と。

「や、やだ。恥ずかしい……。」

顔を赤める鳳翔だ。

それを見た秦も顔を赤めていた。

「じゃ、じゃあ、行こうか。」

授業参観は2時限目と3時限目の2コマ分なのだそうだ。

「今日の授業参観の科目は、2時限目が日本史で、3時限目が数学、だそうだ。」

「そうなのですか。 計算は：あの子たちは得意でしょうけど、その他の科目はどうでしょうか。」

と鳳翔が心配な顔をする。

警備部を出て、学校までの短い間、寄り添って、いや、秦の腕に抱き付いていた。

少々、歩きづらかったが、

「歴史なんて、新たな発見があるたびに内容が書き換わるから、個人的にはあまり重要視はしてないけど、起こった“事実”だけは知っておいて欲しいかなあ。」

「そうですね。」

そんな事を言いながら歩を進めた。

学校に着くと、睦たちの教室に向かった。

1時限目の休憩時間であったため、教室の後ろの入り口から入った。

既に何人かの父兄がいた。

会釈で挨拶しながら、二人して教室の後ろに立った。

すると、休憩中の五人と目が合った。

五人は、鳳翔を見て少々驚いていたようだ。

【お母さん、きれい・・・】

って声が聞こえたような……。

鳳翔がにこやかに小さく手を振ると、皐月たちも振り返ってきた。

そうしているうちに授業が始まった。

後ろから見ると、楠木家の五人はよくわかる。

髪が一目瞭然だったから。

睦の栗色、皐月の金？色、弥生、朝霜の銀色、卯月の赤茶色。

睦は、比較的短いショートヘアだが、後の四人は髪の毛が超長いからよく目立つのだった。

歴史は、ほとんどが暗記物だからそんなに考える事は少ないものの、どれだけ覚えられるか、が問われる科目だ。

基本的に、先生からの一方通行になり易い授業だ。

今日の内容は平安期だ。

絵巻にある貴族の生活などがテーマの様だった。

建物様式、貴族衣装、しきたりなどなど。

建物の話では、あまり興味を示さなかった五人だったが、貴族衣装の話になると、ちよつと食付いたようだった。

歴史の教科では、副教材が大抵付いている。

平安絵巻のカラー刷り資料も含まれている。

何百年経とうと、衣装と言うものの色使いや柄は、現在に通じるものはある。

それを知れるだけでも歴史は、楽しいと思うのだが。

それを見ながら授業が進む。

ま、だいたい、へえーや、ほおーって言う声が聞こえてくる。

この授業では、五人は大人しくしていた、ように思ったのは、秦と鳳翔だけだったかもしれない。

(面白くない！)

と思っていたのは朝霜だけではなかったようだが、ともあれ、無難に日本史の授業が終わっていった。

休憩時間になると、秦と鳳翔の元に五人がやってきた。

「来てくれたんだね。」と。

「そりゃ、そうさ。お前たちが普段、どんなふうに授業を受けているかを見るために来たんだから。」

「なにそれ？ 酷くない？」

「そういうのは臯月だったが、

「そうだよ、ちゃんとやってやんよ！」

とは、朝霜だった。

どうやら、意欲満々のようだった。

「じゃあ、次の時間は、期待してるよ？」

と秦が言う。

そのやり取りの中で、鳳翔にしがみついているヤツが一人いた。

弥生だ。

鳳翔に取り付いて、へへへへと笑っている。

それを見つけた卯月が、

「あー！ 弥生ちゃん、ズル!! うーちゃんも!!」

と言つて鳳翔に抱き着いた。

その二人を見た皐月が

「もう、次の授業が始まるよ？ ホラ、席に戻らないと。 ころー！卯月ちゃん!!」

「あーん、もうちよつとお・・」

と卯月を実力で剥がしていた。

弥生は・・・素直に席に戻ろうとしていた。

そそくさと自席に戻る五人。

後ろの二人を振り返りながら席についた。

すると、他のお母さん方から、

「あら？ あなたが、あの楠木さん？」

と聞かれることがあった。

大抵は、「五人姉妹つて大変でしょ？」という話したが、

「そんなことは、ありませんよ？ 人数が多い方が楽しいですよ？」

と鳳翔が答えてくれた。

「それに・・・みんな聞き分け良くて、親としては助かってますから。」

と言うと、

「あら、そうなの？ ウチはもう、反抗期で・・・。」とか、

「ウチの子とも遊んでやって！」とか、

いろいろな言われたのだった。

それを聞いて、秦も鳳翔も苦笑いを浮かべるしかなかった。

そして、3時限目の授業が始まった。

科目は数学だ。

朝霜なんかは、不得意科目ばかりだろう、と思っただけだがそんなことは無かった。

積極的に手を上げていく。

ま、合ってるのか、合ってるのかは、分からないが・・・。

艦を操り、砲雷撃を加えるためにも、計算は行う。

それも、三角関数は必須だ。　だけど、今日は・・・三角関数ではなかったが、二次元、三次元の方程式だった。

これくらいは五人にとつて簡単だったらしく、問題を出されてもすぐに応えれたようだった。

(先生)「じゃあ、この問題を解いてくれるかな?」

「ハイハイ、ハアアイ!!」　つてな感じで、他の子より、手を上げる回数は多かった。

(先生)「はい、楠木皐月さん、よろしく。」

「はあい。」

と黒板まで進んできて、回答を書き込む。

(先生)「はい、正解です。　良く出来ました!」

皐月は秦と鳳翔に向かって、

「へへへっ」

と笑つて見せた。

いくつか進んで、

(先生)「ちよつと難しくなるけど、理屈は同じだから。　これ、分かる人!」

問題が難しくなつて、手が上がらなくなった、と思つたら、

「ほーい！ アタイがやる！」

と朝霜の手が上がった。

(先生) 「お？ それじゃ、楠木朝霜さん。」

「まかさっしやい！」

と言つて黒板に回答を書いていく。

書き終えて、

「どうだい？」

(先生) 「正解！ よくわかったね！」

フンス！ と、朝霜が胸を張り、得意げになつて秦と鳳翔を見た。

秦と鳳翔がサムズアップして返していた。

「やっぱり、うちの子達は、計算は得意のようだね。」

と小声で鳳翔に言うと、

「ええ。 そうでない、困ります。 砲雷撃の角度の計算や距離の測定などで、数学は

使いますからね。」

と微笑む鳳翔だった。

そして3時限目の授業が終わった。

終わったと思えば、父兄はみな、そろそろと教室を出ていく。

下校は、こども達と一緒に帰るのだそうだ。

だから、校舎の玄関で、他の父兄と一緒に睦たちを待つことにした。

生徒達は終わるとホームルームの時間だ。

今日の伝達事項と来週の予定の確認をして、解散となった。

1, 2, 3年生全員が出てきた。

部活に行く生徒はそのまま部活に行くが、楠木家のこども達は、部活に入っていないから、帰宅組だ。

寮までの10分少々の道のりを、七人で帰って行く。

「そーいや、七人で学校から帰るのって、一緒に歩くのって初めてだよね?」

と皐月が言えば、

「そーだな、そーいやあ、今までなかったか?」

とは秦だった。

「ボク達はいっつもの事だけど、父さんとお母さんとは、初めてだね。」

そう言いつつ、秦の右手には睦の手が、左手には朝霜の手が繋がっている。

鳳翔の右手には卯月の手が、左手には皐月の手が繋がっている。

弥生は、秦と鳳翔の荷物を持ってくれている。

「弥生、悪いな。荷物持ちになっちゃって。」

「ううん、大丈夫。怒ってないから。」

こう言うときの弥生は・・・寂しかったりする。

そこで秦が弥生に声を掛けた。

「弥生、ちよつとおいで。」

立ち止まって、弥生を呼んだ。

「なに？」

「いつもありがとう。今日も・・・」

そう言つて頭にキスをした。

「あ・・・」

と頬が赤くなる弥生。

「へへへへっ」

とほほ笑む。

「あく、弥生、いいなあ。」

と羨望の声がかかるが、

「お前たちは手を繋いでるだろ。その代りだよ。ハハハ、我慢しな。」

そんな他愛もない話をしながら、警備部までの短い道のりを七人は歩いていった。

今日の授業参観の感想もそこそこに。

鳳翔の体調が・・

今日は、何となく、早く目が覚めた秦だった。

時刻は0530。

隣で寝ている鳳翔が起き出す頃合いだ。

だが、隣の鳳翔が起きる気配が無い。

それどころか、ううううん、と唸っている。

何かおかしい、と思つて声を掛けてみた。

「どうした？」

と声を掛けるが、返事は帰つてこない。

訝しながら、鳳翔の顔を覗き込んだ。

すると、額には汗が！

よく見ると、額だけではなく、全身、汗をかいているようだった。

「な！ 鳳翔！ 鳳翔、大丈夫か？」

と声を掛けるが、すぐには返事は無く、まだ唸っている。

「うううん、はあ、あ、あなた・・え？ もう、朝ですか・・。」

「朝には、朝だが、どうしたんだ、体調は？ 悪いのか？」

「いえ、そんな事はありません。今、起きますから・・・

あれ？ あらら・・・」

ベッドから起きようとするが、不安定に倒れ込む鳳翔。

「おい！ 大丈夫じゃ、ないだろ！」

と秦が手を鳳翔の額にあてると・・・

「!! あっっ！」

額は熱かった。ものすごく。

「熱があるじゃないか！ ちょっと待ってて！」

そう言っただけでベッドを出て、体温計を探した。

「えーっと、確か、この辺に・・・ あった、あった。」

体温計は赤外線です額の熱を測るタイプだが・・・

測ってみると、39度8分！

秦は鳳翔を寝かせて、聞く。

「熱がある。頭はぼーっとする？」

「ええ、少し・・・」

「身体は、だるい？」

「ええ、少し・・・」

寝間着が汗を吸って湿っていた。

「風邪っぽいが、とにかく、休むことだ。　とはいうもののまずは着替えだな。　その湿った寝間着じゃ余計に身体に悪い。」

そう言つてタンスの中を探した。　鳳翔の寝間着と下着の替えを。

タオルを持つてきて、湿った寝間着を交換するが・・・

「あ、あの、一人でできませんから・・・」

といつて顔を赤めていたが、

「恥ずかしさより、まずは着替えだ！」

そう言つて、秦は、脇目も振らずに湿った寝間着を脱がせ、タオルで全身の汗を拭いていった。

さすがに下着の交換は鳳翔自身にしてもらつた。

その間、秦は窓の外を見ていた。

さすがに恥ずかしかつたのだ。

寝間着の交換を終えると、

「とりあえず、今日は休むんだ。　いいね？」

「で、でも、食事や洗濯が・・・」

鳳翔はいつものように働こうとする。

「それは、俺がやるから。 ね？」

と、秦が代わりにやるからと。

「は・・い・・ じゃあ、お任せします・・ね、あなた。」

秦が布団を鳳翔に掛け、

「じゃ、後でまた来るから。」

と微笑んで見せて、汗を吸った寝間着を持って部屋を出て行った。

◇

鳳翔の代わりに、朝の食事の用意と、こども達のお弁当作りだ。

お米を研いで、炊飯器に早炊きでセットし、おかずとお味噌汁だ。

お味噌汁の具には、玉葱の薄切りと豆腐を用意した。

おかずは、ベーコンを焼いてその上に卵を落とした、ベーコンエッグ。

アジの一夜干しを焼いた、焼き魚。

まあ、料理がある程度出来る秦だったから、この程度は問題なかった。

他に、梅干し、らっきょうの甘酢漬けとしぐれ煮を用意した。

ご飯はもう少しで炊き上がりそうだった。

秦は、その間にこども達を起こしにかかった、のだが・・

「父さん、おはよう。」

と臯月が一番乗りでやってきた。

「お、おはようさん。今日は早いなあ。」

続いて睦、弥生がやってきた。

「父さん、おっは〜。」

すでに着替えも終わっている。

「相変わらず、お前さんたち三人は早いな。」

だが、卯月と朝霜はまだだった。

「臯月、卯月と朝霜は？」

と秦が聞くと、

「ん？ まだ寝てるよ。」

と答える臯月だった。

ハア、しょーがねーなあ、とため息をつく秦だったが、

「じゃ、起こしてくるか。」

そう言つて、こども達の寝室に入つていった。

朝霜の、寝相は・・・酷かった。

卯月も、似たようなモンで・・・

掛け布団を蹴飛ばして、身体の上がない。

卯月に至っては、掛け布団を抱き枕の様に抱え込んでいる・・・。

秦は・・・声を掛けることなく、朝霜の足の裏を・・・こちよこちよこちよこちよこちよ・・・と。

「!! くっ、ひやはははははっ!」

「起きろ!」

「起きる・・・」

そう言つて身体を起こした瞬間、ゴン! と音がした。

「イッテエエ!!!」

3段ベッドの天井に、頭をぶつけたのだ。

「あ、あんだよ! イッテエ!」

「自分で起きないからだよ? ほらさっさと起きる! 朝飯、出来てるぞ。」

そう言つて部屋から出た。

0645。

食堂で、秦、皐月、睦、弥生の四人が朝食を摂っていた。

遅れて、卯月と朝霜がやってきた。

二人のお味噌汁をよそい、ご飯をよそった。

「そーいや、お母さんは?」

いつも鳳翔が居るのに、今日はいないから気になっていた睦が聞いた。

「ああ。鳳翔は体調不良だな。風邪っぽいんだが、きょう一日、休ませることにしたからね。」

「え?? 体が悪いの?」

「な、なんで?」

と驚くこども達。

「大丈夫だよ。たぶん、季節の変わり目も重なって、疲れが溜まってると思うよ。」

「なら、いいけどさあ・・・」

と訝しがる朝霜だった。

「とにかく、炊事洗濯は、きょう一日は俺がやるからね。いいね?」

「了解だよ。父さん。」

と納得してくれたようだった。

「それで、あたしたちに出来る事はないの? 何か手伝うよ?」
と睦。

「じゃあ、学校から帰ってきてから、買い出しに行ってもらおうかな?」
うーんと、

今日の晩ご飯は、豆腐ハンバーグにしようかと思うんだけど、どう?」

「いいよ。あたいは。」

「臯月たちみんなは？」

【異議な——し！】

「へへっ。 父さんの手料理だびよん！ ひっさしぶりい！」

という事で、今日の晩御飯メニユーは、豆腐ハンバーグに決まった。

朝食後、急いで五人分のお弁当を用意する秦。

メニユーは、出汁巻き卵、たこさんウィンナーに、鳳翔が作っておいた煮物、豚ミンチの肉団子、豚ミンチ肉をそぼろにした、そぼろご飯だ。

肉団子には、ケチャップを添える。

それぞれ、2段のお弁当箱。

下段にはそぼろご飯。上段におかずとサラダ。

五個のお弁当が、出発ギリギリになってようやく出来上がった。

「遅くなったね、ゴメンね。 はい、お弁当。」

「わーい、父さんのお弁当だ！ へへへ、楽しみい。」

【じゃ、いつてきまあす!!】

秦手作りのお弁当を持って、元気よく学校へと出ていくことも達。

「行つてらっしゃい！ 気を付けてな！ ちゃんと勉強するんだよ？」

と見送る秦だった。

そして五人は駄弁りながら学校へと向かうのだった。

◇

朝食の後片付け、洗濯を終え、再び厨房に入った秦。

作るのは、病人の鳳翔のご飯だ。

食欲があまりないだろう、と考え、たまごおじやを作ることにした。

一人用土鍋に出汁を張って、炊いたご飯を入れて煮込む。ここには・・・なぜか一人用土鍋がある。それも7つも。

暫く煮て、ご飯がつぶれるくらいになったら、とき卵を流し入れ、芽ねぎを散らして完成だ。

おじやと小皿に梅干しを用意した。

そしてもう一つ、林檎をすりおろしたのを用意した。

なぜか、こういう時は林檎だ。ミカンやバナナではなく、だ。

秦も小さいころ、風邪を引いたときは、母親にすりおろしの林檎を食べさせてもらった記憶がある。

すりおろし林檎とおじや、薬を持って寝室に向かった。

コンコンとドアを叩き「入るよ。」と。

「鳳翔？ 体調は・・・どんな感じかい？」

と声を掛けると、寝ている鳳翔が、首だけをこちらに向けてきた。

その顔は熱で赤いし、目は潤んでいるようだ。

「あ、あなた。子供たちは？」

まったく、他人よりも自分を心配しなさい、と心の中で思った秦だったが、口には出さなかった。

「ああ。さつき学校へ行つたよ。はい、遅くなつたけど、朝ご飯。どう？ 食べれる？」

ベッドサイドまでお盆を持って来た。

「はい。私・・お腹、空きました・・。」

起き上がろうとするが、秦がそれを止める。

「無理をしないでいいから寝てな。」

ベッドのそばまで来て、

「おじやを作つたんだ。ちよつとくらいは食べようか？」

そう言つて、レンジにおじやをすくつて、フーフーフと息を掛けて冷まして、

「はい。」

と鳳翔の口元まで、レンジを差し出した。

秦の顔がほんのり、赤い。

え?? つと思つた鳳翔だった。

(え? 一人で食べれるけど... これって...)

そう思うと顔が赤くなつていく...

「どうした? 食べれないか?」

「え、いえ、いただきます...」

(こ、こは... 病人になりきりますか...)と覚悟を決めた。

そして口を開けた。

あーんつと。

その口にレンゲを入れ、おじやを口に流し込む。

(あ... これ、カツオ出汁ですね、いい塩梅ですね、美味し。)

飲み込むと二口目を。 あーんつと。

また、おじやをレンゲにすくつて、息を吹きかけて、冷まして...

鳳翔の口に入れる。

(ん、温かくて、美味しい。)

続けて、鳳翔は口を開けて、催促する。

あーん。

それをみて、秦は微笑んで、またおじやをすくう。

そうして時間を掛けたが、お茶碗一杯分は食べただろうか。

「ありがとうございます。美味しかったです。」

とニツコリと微笑む鳳翔。

「それは良かった。味はどうだった？」

「はい。いい塩梅でしたよ、あなた。」

とベッドで横になったまま秦を見つめていた。

「口直しに、すりおろし林檎は食べる？」

「あ、はい。いただきます。」

「はい、あーん。」

スプーンに林檎をすくって、鳳翔の口元まで持つて行った。

んっと、口を開けて、催促する。

すりおろし林檎を口の中に入れて、

「どっつっ。」

と聞いてみる秦。

口の中で、すりおろしの林檎の触感がいい。

シヤリシヤリして、果汁があつて。

飲みこんで、更に口を開けた。

あーん、と。

更にすりおろし林檎を口に入れた。

鳳翔は、すりおろし林檎を3口ほど食べて、満足そうな顔をして秦を見ていた。

「ん？ どうした？」

「あ、いえ。 あ、あなたに食べさせてもらって……優しくしてもらって、私、幸せだなあつて。」

と顔を赤めてそう話した。

それを聞いた秦も顔を赤めた。

「だって…… 惚れた女が寝込んでいるんだ。 これくらいはさせてもらうさ。」

そして、

「俺が倒れたら、看病をしてもらおうからね。」

ニコリと笑って言った。

「さあ、薬を飲んで寝てくれ。」

薬を飲んで、更に寝ようとしたが、

「あなた……」

そう言うと、手を、布団から出してきた。

それに気づいた秦は、その手を取って握った。

「ああ。傍に居てやるから、ゆっくり休みな。」

黙って頷くと、目を閉じて、すぐに眠りに落ちた。

暫く、秦は鳳翔の手を握っていた。

寝ている鳳翔の顔は、満足そうだった。小気味よい寝息がしてきたのだった。

◇

秦は、その日の書類仕事を寝室に持ち込んで、鳳翔の傍でこなしていた。

鳳翔は、朝の食事の後から寝たままだった。

ただ、その顔は、苦しんでいる表情ではなく、微笑んでいるような、安らかな表情だった。

時刻が1500になったころ、玄関から声が聞こえてきた。

【ただいま!!】

と。

睦や皐月らが帰って来たようだった。

(ああ、もうそんな時間か)

秦は、そーつと部屋を出て、居間へと向かった。

居間では、睦らが鞆を置いて寛いでいた。

朝霜と卯月は、冷蔵庫からお茶を持ちだして飲んでいった。

「あー、冷た！」

「あ、しれーかん！ お母さんの具合は、どうなの？」

全員の視線が秦に向かう。

「ああ。 だいぶ熱は下がったから、大丈夫だと思うよ。」

「良かったあ。 やっぱり、心配だったんだあ。」

「心配してくれてありがとうね。 そうとはいえ、晩ご飯の用意をしないといけないから、みんな、手伝ってくれる？」

「おっけー!!」

「じゃあ、挽肉と豆腐の買い出しを、睦と卯月をお願いするね。 皐月と弥生は洗濯ものの取り込みをお願い。 朝霜は俺の手伝いだ。」

それいけ!! つと指示を出して、みんなそれぞれに散って行った。

「ねえ、アタイは何をするんだい？」

「朝霜は、まず、米を砥いでくれ。 研いだら炊飯器に入れてね。」
と指示を出す。

「了解っさー！」

腕まくりをして、お米を流水で砥いでいく朝霜。

よっ、このっ、と声を出しながら。

何度か水を入れ替えて、砥ぎ終えたら、炊飯器に入れる。

さすがに7人分のお米の量は多かった。しかも、5人は食べ盛りだし。

炊飯器をセットして、付け合せの調理に掛かった。

◇

買い出し組は、警備部から5分ほどのところにある、小さいながらも食品スーパーに買いにきた。

「おや？ 楠木さんとおこのお嬢ちゃんじゃない？ 今日は鳳翔さん、お母さんは、どうしたの？」

「こんにちは。お母さん、風邪ひいて寝込んでんの。だから今日はあだし達がお手伝いなの。」

「そうなの？ えらいねえ。で、今日は何を買いに来たの？」

「えつとね、合挽の挽肉に、お豆腐！」

「あいよ。合挽きはこつちね。豆腐は・・・これだね。」

お目当てのモノはちゃんと買えた二人だったが、

「今日は、あんた達にだけ、おまけしといてあげたからね。」

と挽肉をやや多めに入れてくれた。

「え？ いいの？ ありがとう!!」

(でも、この量って、おまけの域を超えてるんだけど……ま、いつか。)
 「で、今日はお父さんが料理をするのかい?」

「ううん、みんなでするんだ。ね?」

「そうぴよん。みんなで、分担なんだぴよん。」

「そうかい。そりゃ、偉いねえ。また、いらつしやい!」

◇

臯月と弥生の洗濯組は、物干し竿から取り込んでいた。

洗濯物を並べて居間で畳んでいる。

各人ごとに仕分けをしながら。

仕分けたのちは、各人用のタンスに入れていった。

「結構な量だね。」

「まあ、七人分だからねえ。でも、お母さん、これを毎日やってたんだ。大変だあ。」

そう、何事にもにこやかな鳳翔からは、その大変さが伝わってこないが、実際に代わりをやってみると、結構、大変なのだった。

◇

「ただいま! 買って来たよ!」

と買い出し組が帰って来た。

「おかえり。ちゃんと買えた？」

「うん。はい、これ。」

首尾よく買えたようだ。

材料を秦と朝霜に渡した。

「あれ？」

と秦が気がついた。

「この挽肉、ちよつと多くないか？」

「うん。お母さんの代わりって言ったたら、お店の人がおまけしてくれたよ？」

「そうなんだ。よかったな。」

と微笑む秦だった。

そこへ洗濯組も終えたらしく、一緒に居間に入って来た。

「ふう。洗濯物の取り込み終わったよ。結構、疲れたあ。」

と嘆く阜月だった。

それを見て微笑む秦だった。

秦は次に、

「じゃあ、朝霜。これからだぞ。」

そう言つて朝霜と二人でメインディッシュの調理開始だ。

とはいっても、簡単な豆腐ハンバーグなので、そんなに難しくは無い。

挽肉に香辛料、つなぎのパン粉を入れて、ある程度かき混ぜ、そこに水を切った豆腐を入れる。

全体を万遍なく混ぜるが、「豆腐はあまり潰さないようにした。

今回は、タネはまん丸に作った。

「しれーかん、なかなか丸くならないよ〜」

なかなか苦戦をしている朝霜だったが、

「どれどれ？ お、そんなことないぞ。 なかなかいいじゃないか。 そんなにまん丸

にならなくてもOKだよ。」

「ええ、そ、そうかい。」

と言いあいながら調理が続く。

それを居間から見ている4人の眼。

「今日は、朝霜ちゃん、大人しいね。」

「うん。 いつもは突っかかるくせにね。」

「まあ、父さんのこと好きなんだから、今くらい、いいんじゃない？」

四人の顔は・・・ニシシと笑っていた。

その声が聞こえていた朝霜が、

「みんな、うっさいよ！　だまってなよ!!」

と反論するが、その顔も笑っていた。

そうこうしているうちに、タネが7人分出来た。

次は、タレだ。

今回は、豆腐ハンバーグなので、大根おろしにポン酢をチョイスした。和風で締めるつもりだ。

7人分の大根おろしとなると、結構な量だ。

「じゃあ、朝霜、頑張ってくれ。」

「おっけー。　まかさっしやい!!」

返事はいいが、おろしはじめると、結構疲れる。

しかも、今回は、目が細かいおろし器を使ってるから余計だ。

大根の半分ほどをおろした時、

「それくらいでいいだろう。　ありがと、朝霜。」

「はああああ、疲れるわく、これえ。」

水分を絞って、ポン酢を加えて、混ぜておく。　これでタレは完成だ。

タネは、食べる直前に焼けば、焼きたてを食べれる。

そして・・・夕食時。

タネをフライパンで焼いていく。
焼くのは秦だ。

焦げ目が付けば、蒸し焼きにする。

お皿に盛りつける。

おろしたレは、たつぷりと。

付け合せは、ニンジンのグラッセ、茹でブロッコリーだ。

七人分が用意でき、食堂のテーブルに並ぶ。

「わーい、お腹空いたよー。」

「さあ、もうちよつとだから。皆も手伝って。」

炊き上がりのご飯をよそって、準備完了だ。

◇

そして、秦は鳳翔を呼びに来た。

ドアをノックして

「入るよ。 どう？ 体調は？」

と。

ベッドの上で上半身を起こしていた鳳翔が振り向いて

「あ。 大丈夫です。 もう、すっかり良くなりましたよ。」

と元気そうな声で答えていた。

「どれどれ。」

と秦が額を、鳳翔の額にくつつけて熱を測った。

二人の頬が朱くなる。

「ん。大丈夫だね。」

とにこやかに、ホツとする秦だった。

「夕ご飯が出来たんだ。食べれる？」

「はい。いただきます。私、もうお腹ペコペコなんです。」

と朱い頬に手をあてて言う。

「はは。お腹がすぐぐらいなら大丈夫だね。じゃあ、行こうか？　・・・よつと。」

と鳳翔をベッドから抱き上げた。

「キャツ。えっ、あの・・・。」

いわゆる、「お姫様だっこ」だ。

「あ、あの・・・私、重いですから・・・。」

「何言ってるんだ。こういう時くらい、やらせてよ。鳳翔は軽いなあ。」

と言っただっこのまま、食堂へと戻って行った。

鳳翔は赤めた顔のまま無言で秦に身体を預けた。

食堂へ入ると・・・

「父さん、おそーい！　つて、お母さん？」

「遅くなったね。　ご飯にしよう。」

「父さん、それ、反則！　ボクもしてよ？」

「あ、アタイも！」

「はははっ。　また今度な。」

お姫様だっこのまま、鳳翔のいつもの席まで抱いて行つて、座らせた。

「みんな、今日はゴメンなさいね。　寝込んでちゃつて。」

「ううん、大丈夫だよ。　今日はみんなで協力してやったんだよ。」

と睦や皐月が話した。

「そう？　みんな、ありがとう。」

「さあ。　食べよう。」

手を合わせて、

【いただきまーす。】

と。

豆腐ハンバーグを一口食べて、

「ん、美味しい。　良くできていますよ、あなた。」

「はははつ。それはよかった。でも、作ったのは俺だけじゃないからね。」
「そうなんですか?」

「へへへつ。あたかも手伝ったんだよ。どう? 上手くできてるでしょ。」

「そうなの。ありがとう。美味しいわよ。」

「そう言われて、へへへとニヤツク朝霜だった。」

「良かったな朝霜。今日は、全員に手伝ってもらったんだよ。 買い出しに睦と卯月、洗濯取り込みに皐月と弥生がね。」

「そうだったんですね。みんなありがとう。」

「そうニツコリと微笑んでこども達を見た。」

「これくらいならどうってことはないびよん!」

「ふふふ。じゃ、今度も手伝ってもらおうかしら。」

「任せてびよん! ね、皆。」

「うん。もつと手伝うから、任せて?」

「ふふふ。ありがとう。みんな、優しくして、涙が出ちゃうわ。」

「嬉しさいっぱいで、目に涙を浮かべる鳳翔だった。」

「ここら。 あんまり鳳翔を泣かさないでくれ。 さあ、ご飯を食べよう。 つけダレも朝霜と一緒に作ったんだぞ。 ちよつとアクセントをつけてみたけど。」

今度はたつぷりとつけダレをつけて頬張る。

「ん。これって、醤油わさびですね。確かに、ツンとしますけど、また味が変わって美味しいですね。」

「ははは。そうだろう。朝霜と俺との自信作だぞ。」

元気になった鳳翔を交え、賑やかな夕食となった。

（やっぱり、みんな元気なのがいいよなあ。）

と思い、微笑む秦だった。

◇

夕食の後、入浴を済ませた七人が居間で就寝までの時間を過ごしていた。

こども達は、宿題をしていた。

「ねえ、ここはどうするの?」

「それはねえ……」

「あ——！ 意味わかんねえよ！」

と嘆く朝霜。

「何をやってんだ?」

と秦が聞いた。

「国語だよ。古文なんだ。」

と皐月が説明してくれた。

「難しく考えるからだよ?」

「だつてえ、暗号みたいじゃん!」

「暗号つて・・・その表現もすごいけど・・・」

と呆れる秦。

「暗号のマニユアルだと思えば、いいんだよ。」

と弥生。

(古文を、暗号のマニユアルと表現するのも、すごい発想だ・・・)

こども達が悪戦苦闘する姿を、秦と鳳翔が見ていた。

宿題をする五人を横目に、二人の世界だった。

「寒くない?」

「はい。大丈夫です。」

羽織り物を羽織っているが、それでも、

「こつちへおいで。」

と秦が誘う。

「ええ。それじゃあ、遠慮なく・・・」

と、鳳翔が秦にもたれかかった。

頭を秦の肩に預けた。

腕に抱き着いて、勉強することも達を見ていた。

「こうしていれば．．．暖かいです。それに．．．あなたを感じられて、安心します。」

と、潤んだ目で秦を見ながら鳳翔が言う。

聞いていれば、こつちまで熱くなる会話だったのだが．．

それを聞いていた睦が、

「つたくもう！　父さん、お母さん、イチヤイチヤしすぎにやし。これ以上、乙女の前

でやらにやいで。こつちまで恥ずかしいにやしい　やるなら部屋へ行くにやし！」

と少々、おかんむりだ。

「そうだよ。勉強がはかどらないよ。」

と皆から苦情たつぷりだった。

「ああ、ごめん。　気を付けるよ。」

と平謝りの秦と鳳翔だったが、お互いを見やって顔を赤めていた。

それでも二人は寄り添い、引つついたままだった。

母の日と父の日を・・・(1)

五月の上旬のころ、睦が部屋で他の四人に話していたことがあった。

「ねえねえ、来週の日曜日、母の日なんだけど、どうしようつか？」

と睦が部屋に居たほかの四人に向かって言った。

「あー、母の日か。もうそんな時期なんだね。」

「そうだねえ・・・ 何しよつか？」

そう皆の返事だったが・・・

お花？

お花なら、カーネーションかあ・・・

家事手伝い？

炊事洗濯だね・・・

肩もみ？

うろうろうん・・・

・・・

いくつかの案が出た。出たが、どれもありません。これっ！” というものは想

い至らなかつた。

「ねえ、お母さんは何がいいのかなあ。」

と睦が言うと、

「だいたい、お母さんは働くの大好きだし、“ゆつくりする” っていう単語を知らない人だし・・・」

と皐月が言う。

その言葉に、朝霜、卯月、弥生が、無言のまま首を縦に振るのだった。

“働きの者” と言うのが皆の共通認識であつたが、それは間違いではなかつた。

五人は、頭を寄せ合つて、うろうろうらん・・・と唸り声を上げて考え込んでしまつた。

「でも、来月には、父の日もあるだけだなあ・・・」

と、睦がボソツと呟いた。

「母の日と父の日かあ・・・！ そうだ！」

天井を見上げて考えていた皐月が、声を上げた。何か思いついたようだった。

「な、なんだよ？ 皐月ちゃん？」

「ね、お母さんがゆつくりする時つて、父さんと一緒に居る時だよね？」

「そういえば、そうだね。あの二人がイチヤイチヤしてるときかな。それがどうか

した?」

ふっふっふっ。 と不敵に笑う皐月。

「いいこと思いついちやったあ。」

キヤハって言う言葉を聞いたような気がするほど、笑っていた。

「あのね……」

「ははーん、そういう事ね。」

「いいんじゃない? それだと、一石二鳥だね。」

「一応、お母さんにジャブを打ってみるから。」

と相成った。

◇

ある日の午後、食堂ではなく、居間で鳳翔が絹さやの筋摺りをしていた。

絹さやを一つ手に取り、枝側の端を折り、筋を取っていく。

反対側の筋もとっていく。

絹さや一つに筋が二つある格好になる。

筋を取らなくても食べられるが、食べたときに硬かったり気になったりするから、筋

は取るのだった。

筋取りを始めてしばらくたったころ、皐月がやってきた。

「お母さん、何やってるの?」

「絹さやの筋取りよ。」

「筋取り?」

「ええそうよ。筋取り。これを取らないと食べたときに筋が残って食感が悪いわ。」

「そうなんだ。・・・ボクも手伝うよ。」

「あら、ありがとう。じゃあ、残りを手伝ってくれるかしら。」

「うん、いいよ。」

そう言つて、鳳翔、皐月の二人で絹さやの筋取りを始めた。

皐月が手伝い始めて10分程たったとき、

「ねえ、お母さん。もうすぐ母の日なんだけど、お母さんは何か欲しいものとかある

?」

とどストレートに聞いてみた。

「え? 母の曰?」

「うん。皆で何か贈ろうつてことになつてき。何がいいかなつて。」

「ありがとう。ふふふ。私は特に要らないわ。皆のその気持ちだけで充分よ。」

そうニコリと微笑んで皐月を見ていた。

「え、そうは言つてもさ・・・」

「大丈夫よ。 ありがとうね。 さあ。 終わったわね。 今日の夕ご飯に、絹さや卵を一品に加えますからね。 楽しみにしててね。」

そう言つて片付け始めた鳳翔。

その鳳翔に、

「もう。 お母さんつてば、遠慮しすぎだよ？ 少しはボクみたいに、ボクたちに甘えてもいいんじゃない？」

と言つて、鳳翔の膝に抱き着いていた。

「あらあら。 甘えたさんね。 でも、あなたたちの方こそ、もっと甘えてもいいのよ？」

そう言いながら、皐月の頭をゆっくりと撫でる鳳翔だった。

そこへたまたま通りかかった弥生が入ってきた。

「あ・・・」

と呟いた。

「弥生ちゃんもおいで。」

と鳳翔が手招きして誘った。

「うん・・・」

弥生も皐月のように、鳳翔の膝に抱き着いた。

右ひぎに弥生、左ひぎに皐月だ。

「へへへへへ。」

と二人が笑えば、

「ふふふ。まったく、甘えん坊さんね。」

と鳳翔が二人の頭を優しく撫でていた。

◇

その日の夜、こども達の部屋では、就寝までの時間で話し込んでいた。

「やっぱりお母さんは、あれこれ欲しいとか、してもらいたい、とかは無かったわ。」

「「やっぱりかあ・・・」」

「予想通りって言えば予想通りだね。」

「ま、働くの大好きな人だからねえ。」

皆が溜息をつくほど、欲のない「お母さん」なのであった。

話は変わって、皐月が皆に進捗状況を聞いた。

「で、お店の方はどうだったの?」

答えるのは、まずは睦。

「うん。その日は大丈夫って。9時くらいから17時くらいまでならOKって確認

もとれたよ。」

「やったね。で、送迎とかしてくれるの?」

「うん。お願いしておいたし、送迎してくれるって。9時に迎えに来てもらえれば

いいよね?」

「部屋はどんな感じなの?」

「この質問には卯月が答えた。

「えつとね、和室の離れで・・・専用の部屋風呂があつて、静かなところだつて。」

「昼食は?」

「この質問には弥生だ。

「手配済みだよ。和洋食になるんだけど。おまけに、おやつまで付いてるんだつ

て。」

「うん、手配はぼっちりだね。」

「あとは当日だね。」

「朝霜ちゃんと卯月ちゃんは、ちゃんと朝から起きてよ? いい?」

「な、なに、その言い方わ! あたいらが起きれないみたいじゃん!」

「え、なについて、その通りだから言ったんだけど?」

ガン!

テーブルに額をぶつけた朝霜。

「な、なんでそうなるかなあ．．．ちゃんと起きるよお。」

「まあまあ、皐月ちゃん。当日はあたしも一緒に起こすから、ね？」

「うん、まあ、期待してるよ、睦ちゃん。」

◇

そして．．．

母の日当日の朝、0500。

もそもそと起きだしてきたのは．．．睦と皐月だった。

「ふわあああ．．．ねむうい．．．」

寝ぼけ眼で起きだしてきた。

二人は朝の身支度をして、厨房に入った。

まだ、厨房の“ヌシ”は起きてはいなかった。

「さてと。まずはお米を研いでつと。じゃあ、睦ちゃん、お味噌汁をお願い。」

「うん。了解。」

しばらくして弥生が起きてきた。

「おはよ。」

「あ、おはよう。」

「私は何する?」

「残りの二人をお願いしてもいい?」

「うん。いいよ。起こしてくる。」

そう言つて弥生が後の二人を起こすことになった。

お米は臯月だった。

「よし。お米を研ぎ終えたから、炊飯器に入れてつと。」

お水は・・・これくらいだね。

これでセット完了つと。」

一方の睦は、昆布だしをとり終えていた。

「睦ちゃん、どう?」

「うん。大丈夫。今日は利尻昆布のお出汁だよ。」

お出汁の鍋から立ち上がる昆布だしの匂いを嗅いでいた。

「クンクンつと。おお、いい匂いだね。」

「へへへ。そうでしょ。今日の具は、お芋さんだよ。」

「お芋さん?」

「うん。これ。」

睦が見せたのは・・・

サツマイモなんだが、やや小ぶりだ。

「ひよつとして、鳴門金時?」

「せいかりーい！ このお芋さんは甘くて柔らかいからね。」

鍋に張った出汁に厚めに切ったサツマイモを入れて煮ていた。

「じゃあ、ボクはだし巻き卵だね。」

皐月がだし巻き卵を作る。

卵に出汁を入れて、数回かき混ぜる。

玉子焼き機に油をひいて、溶き卵を流し入れる。

ジューつと音がするが、音よりも浮いてくる気泡の方を気にするのだ。

気泡を箸で潰していく。

少し固まったかな、と言うぐらいで鍋の端に寄せていく。

空いた鍋にさらに溶き卵を流し入れていく。

同じように浮いてくる気泡をつぶしていくが、そのころには、寄せた卵を中心になる

ように巻いていく。

「よっ。くのつ。えい！」

なかなか、巻くのは難しい。

鳳翔のように、毎日だし巻き卵を焼いているわけではないから、かなり難しい。

「どう、皐月ちゃん？ 上手くいった？」

「ちよつと、崩れちゃったよー。これで勘弁してね？」

「いいんじゃない？ なかなか上出来だよ。」

だし巻き卵を切って、お皿に移して完成だ。

睡は出汁にお味噌を溶いていく。

これでようやくお味噌汁らしくなった。

味見をしてみても・・・

「うん、いい感じじゃない！」

「上手くいった？」

「OK、OK！」

と、皐月と睡が料理をしているところ、2階のこども部屋では弥生が残りの二人を起こしにかかっていた。

◇

ウニヤウニヤ・・・

カアーーーー・・・

卯月と朝霜は・・・爆睡中であつた。

まずは、卯月から、と思つた弥生。

最初は、身体を揺すつた。

「卯月ちゃん、起きて。卯月ちゃん。」

と。

それでは当然、起きない。

で、段々と揺すりが大きくなる・・・

「うづきちゃん！ 起きて!! 今日は何の日？」

そのまま言うのと、

「うううーん、眠い ぴよん・・・今日は・・・」

ハツと目を開けて、

「そうびよん！ 今日、あの日びよん！」

ガバツつと起きてきた。

「朝霜ちゃん、朝霜ちゃん、起きるびよん！」

「あんだよ・・・ 眠いじゃんかあ・・・」

「今日は、あの日びよん！ 起きるびよん！」

「ふえ、あの日い・・・ そ、そうだった！ あの日だ！」

「こちらも、がばつつと起きるが・・・」

「ゴン！」

ベッドの天板に頭をぶつける朝霜。

「ツイッテエ！」

「ほら、早く起きて！」

「イツたいなあ、もう！」

最後まで弥生の世話を焼かず朝霜だった。

◇

今朝は、鳳翔や秦の手を煩わせることなく、起きることを課していたこども達だった。臯月と睦による朝食の準備が出来上がるころ、弥生、卯月、朝霜の三人が食堂へとやってきた。

「これでみんな揃ったね。じゃあ、父さんとお母さんを起こそう！」

そう臯月が言った途端、食堂に鳳翔が入ってきた。

「あら。どうしたのみんな？ こんな朝早くからって、え？」

テーブルの上を見て、動きが止まっていた。

既に朝食の準備が出来ていたのだった。

「え？ これって・・・もしかして、あなたたちが用意したの？」

「うん。そうだよ。」

「ど、どうして・・・」

そう言っているうちに秦も起きてやってきた。

「お、おはよう。ん？ どうしたんだ？」

「あ、あなた。 これをこの子たちが・・」

テーブルを見ると既に朝食の用意が出来上がっていた。

「え？ これを皆が？」

「そうだよ。 皆と言つても、ボクと睦ちゃんだけだね。」

「な、なんで？」

秦も鳳翔も、なんで？ の表情をするしかなかった。

「まあまあ、細かいことはあとで話すから、まずは朝ごはんだよ。 皆で食べようよ。」

「まあ・・」

と納得していない秦と鳳翔だったが、とりあえず、朝食をとることにした。

【いっただきまあす！】

納得いかないまでも、お腹は空くのだ。

炊きたてのご飯は、やっぱり美味しい。

上手く炊けていた。 程よい柔らかさだった。

サツマイモのお味噌汁。

やや甘いお芋さんは、角が取れるくらいに煮てあった。

「ん。 よく炊けているわ。 柔らかくて、甘くて。」

だし巻き卵も、

「塩加減はちょうどいいわね。あとは回数を重ねれば、形も良くなるわよ。」

それとは別に、焼き魚が一品あった。

塩鮭だった。

秦が箸で身をほぐして一口。

「うん。程よい塩加減だな。塩辛いくない。」

「そうですね。これくらいならちようどいいですね。」

秦と鳳翔は、睦と皐月たちが作った朝食に舌鼓を打った。

「美味しくできているわね。合格よ。」

へへへへつ、と笑う睦と皐月だ。

どや顔であった。

「「ご馳走様でしたー!」」

「美味しかったわよ。」

と微笑む鳳翔だった。

食事を終え、

「で、今日はなんでそんなに早起きなんだ?」

と秦が聞いた。

「そうよ、そうよ。」

と鳳翔。

睦たちが顔を寄せてから、秦と鳳翔をみた。

「今日は何の日か知ってる？」

ん？

そこで秦が気づいた。

「そうか。今日は、母の日だったか。」

「そうだよ。母の日だよ。」

「え？ 私は、そういうのは遠慮するわよ？」

遠慮気味に鳳翔が答えたが、

「ホラあ。お母さんはそう言うと思ったよ。」

皐月が睦たちを見ながら言った。

「でも、ちよつと違うんだなあ。今日は母の日だけど、来月には父の日もあるんだよね。」

そう言われて、

「そうだけど、それが？」

と答える秦だった。

フフフつと不敵に笑いながら、皐月が、

「私たちとしては、母の日、父の日を一緒にすることになりました！」

と胸を張って言った。

「は？」

秦と鳳翔は、なんのこつちやと思った。

「えー、今日一日、お母さんと父さんの二人でイチャイチャし放題の時間を私たちからプレゼントします！」

「はあ?？」

秦と鳳翔は、さつきよりも大きな声だった。

「寝る時間以外だと、朝の短い時間と、執務の合間と、夕食後の時間と・・・でイチャイチャしてるけど、今日は朝から晩まで二人だけの世界に浸ってもらいます！」

「もう、手配は済んでるから、反対してもダメだからね。」

「しれーかんとお母さんの二人だけで、誰も邪魔しない時間を過ごしてもらおうと。」

ちよつと驚きながら、

「ちよ、ちよつと待って。手配済んでどういふことだよ?」

「0900にお迎えが来るから。夜は1800までだけど、昼食は手配済だし、夕食は私たちが用意するから。」

「え? お迎えって、どういう・・・」

「あ、潮干狩りに行った海岸の近くにある料亭屋さんなんだけど、お昼の一日ならOKだったんで、お願いしたの。だから0900に迎えが来て、1800に送ってきてもらえるように手配済だよ。」

「そ。だから何にも心配しないで。いい？ 今日、仕事もなし！ 家事炊事もなし！ いい、父さん、お母さん。分かった？」

「え、あ、そうなのか・・・」
「ど、どうしましょう・・・」

鳳翔は秦の顔を覗き込む。

秦もまた鳳翔の顔を見ていた。

お互いが、

「どうしよう・・・」

と声が揃うくらい、驚いていたし、困惑していた。

その時、睦から一言。

「まったく、この二人は・・・。素直にあたし達からのプレゼントを有難く受け取りにや

さいー」

「「そうだ、そうだ！」」

弥生が二人の前に来て、

「ゆつくりする時間をたっぷり作ったから、二人でまったりして来て。」
と。

「まったりって・・・」

弥生の言葉を聞いて、耳まで赤くなる秦と鳳翔だった。

そして、

「そういう事なら・・・分かったよ。」

と、しづしづではあったが、こども達の言う事を聞くことにした秦だった。

「いいのですか？」

「ああ。睦や皐月たちがここまで言ってくれているから、ここは甘えよう。」

「あ、あなたがそう言うなら、私は構いませんが・・・」

「じゃ、決まりだね。0900にはお店からお迎えが来るから、そのつもりでね。」

「あ、そうそう。特に準備は要らないからね。向こうで、お願いしている以外の飲み

食いは、自腹だから。一応、言っておくね。」

こども達の顔は、いちおうににこつりと笑っていた。

秦と鳳翔は、互いの顔を見やって、気まずそうに思っていたのだが、こうなつては仕

方がなかったの、言う通りに聞くことにした。

「じゃあ、父さんとお母さんは執務室にでも入って待ってて。後はあたしたちがやる

から。」

そう言われて、秦と鳳翔は、しぶしぶ執務室に入っていった。出ていった食堂では、睦らが後片付けを始めていた。

◇

秦と鳳翔の二人が出ていった食堂では、

「さあ、始めるよ！」

と臯月が号令をかけたのだった。

朝食の後片付け、洗濯だ。

後片付けは卯月と睦だ。

「卯月ちゃん、使い終わりの食器を持って行って！」

「了解びよん！」

洗濯は臯月だ。

「さあ、やるぞー！」

掃除は朝霜と弥生だった。

「まずは食堂からだね！」

五人の分担で始まった。

0800。

朝食の後片付けを終え、食器類の水滴をふき取って食器棚にしまっていく。

「はあ。まずは朝の分が終了だね。」

「ふー。結構な量になったびよん。」

二人とは言え、七人分の食器は大変だった。

時間が0830になったころ、玄関前に一台の車が止まった。

「こんにちはー。お迎えに上がりました！」

とやってきたのは、皐月たちが予約しておいた料亭の送迎車だった。

「はーい！ ちよつと待ってくださあい！」

と皐月が返事をして、秦と鳳翔を呼びに行つた。

弥生が二人を連れてきていた。

「じゃあ、父さん、お母さん、行ってらっしゃいね？」

そう言われて秦と鳳翔は、

「ホントにいいの？」

と声を揃えていたが・・・

「いいの、いいの。だから、さっさと行く！」

足の運びが遅い鳳翔を、車に押し込んで、

「父さん、お母さんをちゃんと面倒見てね？」

「お母さんも、父さんをよろしくね。」

そうこども達に言われて、二人は車に乗ったのだった。

二人が載ると、車は料亭に向けて動き出した。

「じゃあ、行つてくるね。」

「こつちは大丈夫だから。行つてらっしゃい！」

五人に見送られながら車が走つていった。

見送つた臯月たち五人。

「さあ。やるよー！」

との掛け声で、こども達だけの一日が始まったのだった。

◇

「ねえ、睦ちゃん。お昼はどうするの？」

「うん？ お昼？ お昼ご飯のこと？」

「うん。どうするのかなって。」

「お昼は、チャーハンにするつもりだよ。だから、ご飯を炊かないと。」

そう言つて、昼食用にご飯を炊くことにした睦だ。

「じゃあ、うーちゃんがお米を研ぐね。」

「うん。よろしくー。」

何度か水を入れ替えてお米を洗った。

その後に炊飯器にセットするのだった。

「これでおつけーびよん！」

「卯月ちゃん、よくできました！」

へへへつと笑う二人であった。

◇

臯月は、というと洗濯だったのだが・

「うー、七人分は多いなあ・・」

七人分の下着、肌着だけでもそれなりの数だ。

また、自分たちのセーラー服も洗うのだ。

今の時期のセーラー服は長袖夏服で、洗い替え用もあるが、基本着たきり雀なのだ。が、さすがに暑くなってくると汗をかく。するとやはり、臭うのだ。

女の子ともなれば清潔にしたいものなのだ。だからたまに洗うことになっていた。

洗濯の前に準備だ。

下着用の洗濯ネットを使う臯月。

肌着も大きめの洗濯ネットを鳳翔は使っていたので、その方法に従うことに。

これで洗濯機を一回廻す。

次に、制服だ。

セーラー襟などの芯を外して、一着づつ畳んで洗濯ネットに入れていく。

洗濯ネットは大きめだが、それでも二着入ればそれなりに分厚くなる。

また、プリーツのスカートもあるのだ。

フアスナーを閉め、ホックも留めて、だいたい二つ折りにしてこちら洗濯ネットに入れる。

ここまでやってても皐月一人では量が多かった。なんせ五人分である。

「ひゃあ、つ、疲れるう・・・」

途中で、卯月と睦が手伝いにやってきた。

「皐月ちゃん、手伝うびょん！」

「あ。ありがとう。」

制服だけで洗濯ネットは五個だった。

ただ、鳳翔の着物と秦の軍服は、週末の洗濯物には入っていないかった。

こども達の制服が週末に来るから、鳳翔の着物と袴、秦の軍服は、鳳翔が平日に定期的に洗濯していたのだった。

「よし、これで準備オツケーだね？」

そうやって、大きめのたらいに、ぬるま湯を入れ、洗剤を入れて、制服のネットを入

れた。

「ねえ、このたらいって、もしかして・・・」

「お。覚えてたの？ そう。貝の砂抜きに使ったたらいだよ。」

「そうなんだ。ん？ でも、使う回数からして、逆じゃない？ 洗濯用のたらいを砂抜きに使ったんだね、お母さん。」

「ま、そうなるわな。へへへ。気にしない、気にしない。」
と笑っていた。

三人でネットを押しては沈め、を繰り返して、押し洗いした。
グーっと、沈めてっと・・・

五十回くらい押し洗いをして、たらいのぬるま湯を入れ替え、洗剤を洗い流した。

「つ、疲れるびよんー！ー！」

「これは、めっちゃ大変だわあ!!」
制服の押し洗いが終わるころには洗濯機も終わっていた。
これから干すのだ。

七人分の下着、肌着を干して、次に五人分の制服だが・
制服は、シワにならないようにしなければならぬ。

上衣は袖を通して。スカートはベルトの部分で吊るして。

風通しの良い日陰に干した。

干し終えるころには、三人ともヘトヘトになっていた。

「ハアハア．．．急がないけど、ヘトヘトになるじゃん．．．」

「うーちゃん、もう動けにやいー」

「ホントだねー」

そう言つて玄関先で座り込んでいた。

◇

朝霜と弥生は掃除だった。

二人は、鳳翔のような割烹着ではなかったが、掃除用のエプロンをしていた。

掃除機とはたきを持っていた。

掃除道具は他にモップもあった。

まずは、各部屋の窓を開け放ち、風を入れ、はたきで埃を落としていった。

埃は、そんなになかった。

日々鳳翔が窓枠までキレイに掃除していたから。

「そんなにないね、埃。」

「そうだね、やっぱお母さんの掃除が行き届いてるんだね。」

次は掃除機だ。

各部屋と廊下に掃除機をかけていく。

ここの掃除機は強吸引式だった。

畳みも、畳の目に沿ってかける。

脱衣所のマットや玄関マットまでも。

掃除機をかけ終わると、モップ掛けだ。

警備部の建物は、基本、土足OKなので、箒で掃き掃除をした後、モップで拭き掃除だ。

モップ掛けの最初は、わあああつと楽しくできた。

廊下の端から二人で競争だった。

が、部屋数が多いのと広いので、段々と口数が減ってきた。

「・・・・・・」

次第に、

「し、しんどー！」

「はあはあ・・・こんなに疲れるなんて・・・」

「これだけを、一人で・・・」

「どれだけ早くやるんだよー！」

「と、とにかく、もうちよつとで・・・」

お昼になったところになって、ようやく濡れモップで拭き終わった二人だった。
だが・・

カラ拭きだけが残ったとき、とうとう息を切らせて座り込んでしまった。
「はあはあはあ・・もう、だめだあ。もたないよー。」

「だ、だめ・・休む・・」

そこへ睦がやってきた。

「あー！ここにいた。ど、どうしたの！」

朝霜と弥生が寄り添って座り込んでいたから、驚いていた。

「あ・・睦ちゃん・・疲れた・・」

「あたい、もう動けないよー。」

そのぼろ雑巾のような雰囲気を見て、一瞬、引いた睦だったが、

「い、今のところで休憩しない？ もうお昼だけど。」

「お、お昼？ そうする・・」

そう言つて食堂によるめきながら向かつていった。

◇

「みんな揃つた？」

食堂に入ってきた睦をみて卯月が声をかけてきた。

「うん、この二人で最後だよ。」

睦の後ろから朝霜と弥生が疲れてぐったりして入ってきた。

「あちやー、めっちゃ疲れてるじゃん！ 大丈夫？」

「だ、ダイジョーブじゃないよー」と、とにかく、水、水をおくれ。」

「はい、お水だよ。」

と言ってお水を持ってきたのは皐月だ。

コップを受け取って、ゴクゴクと喉を鳴らしながら水を飲む朝霜と弥生。

その姿をみて、

「だいぶお疲れのようだね。」

と。

飲み干して、ぶはああーと息を吐いて、

「ハあー・・・生き返ったよー！」

「お疲れ様ぴよん。早速でわるいけどお昼ぴよん。」

調理は睦が担当だった。

コンロに中華鍋を用意していた。

中華鍋を熱して、お玉半分ほどの油を入れた。

次に三個分の溶き卵を投入する。

熱した油のために、卵がすぐに固まっていく。油ののつて、ブクブクと膨らみながら。

そこへご飯を投入した。

さすがに一回で五人分はきついで、一回で三人分だ。

ご飯と卵をかき混ぜていく。

ある程度いたまったら、具材を入れていく。

5ミリ角に切った人参、焼き豚やらネギやらを入れ、香味ペーストを追加で入れて、さらにかき混ぜて炒める。

味付けに、塩、胡椒をして、醤油を回し入れた。

最後にきざみネギを入れて、軽やかに混ぜて完成だ。

これをもう一回繰り返して五人分のチャーハンが出来上がった。

「よし！ いい具合に出来たにやし！」

睦は満足する出来栄えだったようだ。

スープは卯月が担当した。

スープと言っても、中華スープに卵を流しただけなんだけど、味見をして、

「ちよつと薄い？ どうかかな睦ちゃん？」

「どれどれ．．ん、ちよつと薄いかなあ。」

塩胡椒を追加して完成だ。

「さあ、お昼ご飯だよ！ 食べるにやし！」

「「おお！ 美味しそう！」」

テーブルにチャーハンとスープが並べられると、

【「いったきまあつす！」】

と掛け声の後、腹ペコの胃袋に収まっていく。

今日の味付けは、塩胡椒が強かったが、動いて汗をかいた体には、ちょうどよかったらしい。

「いい塩加減だよ、睦ちゃん！」

との声が多かった。

母の日と父の日を・・(2)

そのころの秦と鳳翔は、と言うと・・

送迎車で料亭に着いた二人。

「本日はこちらのお部屋をお使いください。」

と案内されたのは、海に面した離れの和室だった。

「ほほう。いい眺めだね。」

「海がキラキラして綺麗ですねえ。」

「はい、この宿一番の眺めでございます。昼食はお部屋でご用意させていただきます

ので。御用がありましたらフロントまでご連絡ください。では、ごゆるりと。」

そう言つて仲居が出た。

入口の扉が閉まると、聞こえるのは波の音、と二人の呼吸する音だけだった。

この部屋は海に面してはいるが、全面開放！と言うわけではなく、縁側の先に小さいながらも木々が植えてある庭があった。

その庭の先に海が見えるのだった。

その木々のお陰で縁側には日影が出来ていた。

障子を開け放ち、ガラス戸も空けると風が入り込んできた。

「あら。心地いい風ですね。」

縁側に足を崩して鳳翔が座った。

そして、秦を手招きしていた。

「あなた。ここに来ててください。」

「ああ。」

鳳翔の隣に、秦が縁側に足を投げ出して座ると、早速、鳳翔が身体を預けてきた。

「ふふふ。何もしなくて、こうやって居られるなんて。」

微笑んで秦を見ていた。

「ははは。こども達に感謝しなきゃな。」

と応えて鳳翔を見た。

「ええ。」

そう言つて互いを見やって、口づけを交わす二人だった。

こども達もいない、誰もいない、今この時に、二人の口づけは、それは濃厚なものだった。

んっ、ちゅっ、むっ、ぴちゃ・・・

長い長い口づけが終わると、二人とも息が切れきれだった。

ただ、二人とも頬は赤く、目は潤んでいた。

「鳳翔・・・」

「あなた・・・」

ゆつくりと手を取り、寄り添う二人だった。

時間を気にすることなく、いつまでも寄り添っていた。

そして時間が経って、いつの間にかくうううつと音がする時間になった。

「あつ、やだ・・・」

と鳳翔が言って、顔を赤めた。

「もうそんな時間か?」

いつしか時間は1200になろうとしていた。

音は、鳳翔のカワイイお腹の虫の声だった。

「お食事をお持ちしました。」

と仲居さんが入ってきた。

部屋のテーブルに昼食を並べていく。

「今日は牛カツです。」

そう言ってお皿を並べた。

メニユーは、牛カツだ。

「ご飯のお代わりはこちらのお櫃で、と言つて部屋を出ていった。

「やあ、牛カツとはね。」

「まあ。美味しそうなカツですね。あら？ 衣が薄いのかしら。」

「ん？ いや、衣はしっかりしてどうぞ。」

二人して、

「では、頂こう。」

と言つて、まずは牛カツに箸を伸ばした。

カツにはデミグラスソースが掛けられていた。

口に入れると、衣はカリッ。中はしつとり柔らかい。

咀嚼して、

「これはとんかつと違って美味しいですね。」

とは鳳翔だ。

「うん、美味しいね。このソースもいい感じだね。」

付け合わせのマカロニサラダも、マヨネーズもそこに効いていて、これまた美味しい一品だった。

小鉢も地物野菜を使ったものらしく、

「うん、このほうれん草の胡麻和え、美味しいです！ お醤油がちよつと違うのかしら？」

「ゴマも金胡麻ですね？ 風味がいいですね。」
と鳳翔はご満悦のようだった。

「確かに。この小鉢は美味しいなあ。」

二人してご飯のお代わりをしたが、きれいさっぱり食べてしまった。

「さすが、料亭のことはあるね。一品一品がすごく美味しいね。」

「はい。シンプルでも味はしっかりしていますね。」

二人は満足だった。

「こりやあ、睦や皐月たちに感謝しないといけないなあ。」

「うふふ。そうですね。」

食器が下げられたあとも、二人は縁側に座っていた。

鳳翔は秦に寄りかかり、腕をしつかりと絡めていた。

「出かけることも出来るけど？」

「いえ。このままで。あなたを感じていたいんです。ずっと……このままで……」

しばらくそのままであった。

風が心地よく吹き、日差しがそこそこに暖かい昼下がりがだった。

「ふわああ……」

鳳翔が気が付くと、秦の膝の上に自分の頭が載っていた。

「え？ あ、ご、ごめんなさい。いつの間にか寝てしまったみたいで。」

「起きたのかい？ ははは。いいよ。ずっとこのまま寝ていてもいいんだよ。」

そう言つて秦は鳳翔の頭を撫でていた。

鳳翔もこの状況も、満更ではない、と思つていた。

鳳翔が身体を起こそうとしたときだった。

「キャツ」

秦が鳳翔を畳の上に寝かせ、覆いかぶさつたのだ。

「あ、あの・・・」

「鳳翔・・・」

二人の顔は赤かった。

目も穏やかな目をしていた。

「鳳翔。愛している・・・どこの誰よりも・・・愛している。」

「あ・・・あなた・・・」

鳳翔の目に光るものが浮かんできていた。

「はい。私も、あなたを愛しています。」

そう言い終わると同時に二人の唇が合わさつた。

ちよつと強引ではあつたが、秦が鳳翔の唇を塞いだのだつた。

「あなた・・・いい、ですよ・・・」

秦は改めて鳳翔の額にキスをした。

次に鼻の頭に軽くキス。

もう一度唇にキス。

鳳翔の右頬にキス。

あ・・・

秦の唇が徐々に下がっていく。

鳳翔の首筋を、上から下へと軽いキスの波・・・

や・・・

秦の手が鳳翔の袴の帯を解き始めた・・・

そして・・・二人は愛し合うのだった。

そのあと、帰る時間になるまで、寄り添い、抱き合い、二人だけの時間を堪能したのだった。

◇

昼食を終えた睦たちは、モップ掛けをみんなで手伝い、夕飯の買い出しまでには何とか終わらせていた。

「ふうふうう。結構キツイねえ。」

「これをお母さん一人でやってんの？ 信じらんない！」

「お母さん、やっぱ神だわ。」

そんなことを言いながらも一通りの家事を終えた睦たちだったが、ゆっくりもしていられない。

時間は1500になろうとしていた。

「あ！ もうこんな時間。 皆次だよ！」

じゃあつていうことで、

「洗濯取り込みは皐月ちゃんと朝霜ちゃんをお願いね。 弥生ちゃんと卯月ちゃんは買出しお願いね。」

「ん、睦ちゃんは？」

「私のご飯を炊くね。」

「了解だよ！」

「で、夕ご飯は何にするんだい？」

「今日はね、回鍋肉にするの。」

「ホイコーロー？！」

「今日は中華デーだね。」

「うん。 作ってみたかったんだあ。」

「え？ 作ったことないの？」

「うん、ないよ。だってお母さん居るし、父さんも作っちゃうし、あたしが作ることなんてないからさあ。」

ふうーんと納得する臯月たちだった。

「じゃあ、買い出し、行ってくるぴよん。」

「うん、よろしく！」

「それじゃあ、ボク達は取り込みだね！」

「うん、よろしく！」

弥生と卯月は買い出しに出ていった。

先日も来たことのある、近所の食品スーパー。

「こんにちは。」

と言って店に入る卯月達。

「あら、いらつしやい。またお手伝いかい？」

声をかけてくれたのは女将さんだった。

「うん。今日はお母さんの代わりぴよん。」

「そうかい。偉いねえ。で、今日は何を買いに来たのかな？」

「えつとね、薄切りの豚のバラ肉と、キャベツ。」

「そうかい。 えっと、豚バラ肉はこっちだね。 それと、キャベツ、キャベツとキャベツはこっちの棚だね。」

「ありがとう。 え〜つと・・・ バラ肉はいくら買うの、弥生ちゃん？」

「1キロ。」

「へ？ そんなに買うの？」

「でも、これくらい買わないと。 みんな食べるでしょ？」

豚バラ肉を1キロ用意してもらって、買い物かごに入れていく。

次はキャベツ。

棚に並んでいるキャベツを手を取って、

「うーん、どれがいいかなあ・・・」

見ると、どれもかなりの大きさをしている。

真ん丸ではなく、ちよつと扁平な形をしていた。

「たしか、重い方がいいんだよね？」

「うん。 そうだよ。」

「じゃあ、これかな。」

と卵月は一つのキャベツを手を取った。

大きめのキャベツだった。

「あら、良いキャベツを選んだわね。」

「へへ。見る目あるでしょ。」

豚バラ肉とキャベツを買って、卯月と弥生は足早に警備部へと戻っていった。

◇

皐月と朝霜は洗濯物の取り込みだった。

七人分の下着と肌着を取り込み、個人ごとに仕分けて箆筒に入れていく。

「ひゃあ、多いねえ。」

「大丈夫、朝霜ちゃん？」

「うん、何とか持つてるよ。それにしてもこんなに洗濯物が多いと整理するのも大変だあ。」

洗濯するときは、洗濯物かごに入っているのを、洗濯機に入れればいいのだが、取り込みは、各人の分を整理していかなきゃならないから、ある意味、洗濯するより取り込みの方が大変だった。

下着と肌着が終わると、セーラー服だ。

今日は天気も良く、風があつたために、よく乾いていた。

「おー、すっかり乾いてるじゃん！」

物干し竿から上衣を外して取り込む。

スカートもハンガークリップから外して取り込んだ。

下着はそうでもないが、制服はアイロンがけをしておくのだった。

アイロンと言つても、スチームをしてシワを伸ばすんだけど。

上衣とスカートに直接アイロンをあてると、生地が傷んで、テカテカするので、手ぬぐいかハンカチをアイロンの下に敷いて、スチームを掛けた。

特にプリーツのあるスカートは、プリーツを崩さないようにしないといけない。

「朝霜ちゃん、プリーツに気をつけてね。」

「お、おう。 んー、ちよつと緊張するう。」

一枚、また一枚とアイロンを掛けていった。

アイロンを掛けている最中に、卯月と弥生が帰ってきた。

「睦ちゃん、買ってきたぴよん。」

「首尾は？」

「うん、ばつちり！」

豚バラ肉とキャベツを睦に渡した。

渡した後は、アイロンがけをしている臯月、朝霜の手伝いに廻った。

「どとう？」

「うん、半分くらい終わったけど、まだ残ってたんだ。」

「じゃあ、終わったヤツは仕舞ってくればいい？」

「うん、お願い。」

卯月と弥生はアイロンがけが終わった分から、各人用のハンガーに掛けていった。

「おー、きれいになったぴよん。」

「シワもないし、いい感じ。」

五人分のセーラー服とスカート、スカートのアイロンがけが終わって、居間へとやってきた四人。

「ふう、ようやく終わったねえ。」

「後はっと、睦ちゃんの下ごしらえだね。」

そう言って冷蔵庫からお茶を出してきて、ゴクゴクと飲んでいた。

飲み終わった朝霜が、

「じゃあ、睦ちゃんを手伝ってくるか！」

「ボクも行こうか？」

「んー、睦ちゃんに聞いてみるよ。」

四人は食堂に移って、睦に声を掛けた。

「睦ちゃん、どんな具合？ 手伝いはいるかい？」

「ありがとう。でも下ごしらえだけだから、大丈夫だよ。」

既に豚バラ肉は、一口大に切られており、ボウルに漬け込まれていた。

「ん？ お肉は漬け込んでるの？」

「うん。この方がいいかなって。醤油ダレなんだけどね。」

買ってきた1キロ全部は使ってはいなかった。

それでも800グラムは使ったのだった。

キャベツは4、5センチ角くらいに切り分けられていた。

こちらもボウルに入れられて、炒めるのを待っていた。

そのうちご飯が炊きあがった。

炊きあがったご飯は、蒸らしに入っていた。

◇

山に陽が沈みかけた1800過ぎになって玄関前に一台の車が止まった。

「ご利用、ありがとうございます。」

運転手がそう言つて後部座席から二人が降りてきた。

秦と鳳翔だった。

「ありがとうございます。」

とお礼を言つて玄関の方を見ると、ニコリと笑っていることも達が居た。

「お帰りなさい！」

「どう？ まったりできた？」

そう言つて二人に駆け寄つてきた。

「ただいま。」

「ええ。〃 まったり〃 できたわ。 みんなありがとう。」

秦と鳳翔の顔はにこやかだった。

それだけを見ても、こども達は〃 良かった〃 と思つたのだった。

鳳翔の手を弥生と卯月が引き、皐月が背中を押して中へと入つていった。

秦は睦と朝霜に手を引かれていた。

もうすぐ夕ご飯の時間だったため、居間ではなく、食堂へとやつてきた。

そこで、二人は質問責めにあう、のかと思えば、そんなことはなく、みんなニコニコするばかりだった。

「どうしたの？」

と不思議がつて鳳翔がたまらず聞いてみた。

「だつてえ、〃 何したの〃 っ て聞いてみてもいいけど、結局のところ〃 まったり〃 してたんだよね？ 〃 そういう事は聞かなくても分かるし。 ね、みんな？」

「うん。 父さんとお母さんのことだから、いちやいちゃばっかりで、あたしたちにしてみたら、なんにも面白いことはないからね。」

「まあ、二人がいちやいちゃしてるってことは、平和な証拠だし、ボクたちが付けこむ隙は無いってことだからね。」

こども達にそう言われて、バツが悪いのか、恥ずかしいのか、分からないような感じがする秦と鳳翔だった。

そこへ・・・

パンパン！

と手を叩く音が響いた。

「はい、そこまでにやし！ 夕ご飯にするよ！ 卯月ちゃん手伝って。」

「了解びよん！」

「なんだ、睦と卯月が当番かい？」

「そうだよ。」

厨房で睦が鍋を振っていた。

どうやら具材の投入係は卯月のようだった。

鍋に油を引いて、ニンニクを炒める。

香りが立ってきたら豚バラ肉を投入する。

火が通るくらいになったら、キャベツを投入するのだが、まずは芯に部分からだ。

しばらく炒めて、葉の部分を入れていく。

キャベツがしんなりしたら合わせ調味料を投入して、全体に絡めながら炒める。

合わせ調味料には、味噌、醤油、砂糖、豆板醤、酒などが入っていたが、味噌と豆板醤はやや多めだった。

「あら？ 豆板醤の匂いね？ ひよつとして中華？」

「うん、中華だよ。」

「この調味料の香りは・・・ 回鍋肉ね？」

「う、さすが、お母さんだ。 正解だよ。」

「睦ちゃん、当てられちゃったよー！」

「えー、もう？」

「ふふふ。 私が判らないとでも？」

ああーあ、と残念がることも達であった。

料理の方は、全体が絡めば出来上がりだ。

大皿に盛りつけて完成だ。

大皿二つを睦と卯月が持つてきた。

テーブルにはご飯がよそつてあり、大皿がテーブルの真ん中にでん！と置かれた。

「うーん、豆板醤のいい香りだね。」

「わー、美味しそう。」

「さあ、だべよう！」

【いただきます！】

味付けはちよつと濃いめだった。

体を動かして汗を掻きまくったことも達からすると、ちよつと濃いめがちよつどよい濃さだった。

みな大皿に箸が伸びる。

かなりお腹が空いていたらしく、朝霜なんかはがつついて食べている。

「うん、辛い！ でも美味しい。辛くて美味しいよ、睦ちゃん！」

「これは、ちよつと濃いめのご飯が進む味だな。」

そう言う秦もよく食べていた。

「ん、いいお味ですよ、睦ちゃん、卯月ちゃん。良くできたわね。上手よ。」

そう言つて褒める鳳翔。

へへへつと笑う睦と卯月。

さあ、早く食べないと無くなるよ、と弥生に言われ、大皿に伸びる箸の回数が増えていった。

「もうこんなに少なくなつちやつたの？」

分かつてはいたものの、自分が作った料理が無くなつていくことに驚く睦だった。

「でも、もう少しなら、”あるよ”。」

昔のテレビドラマまでの、セリフを真似てみたのだった。

「それじゃあ、お願い！」

とは朝霜と皐月だった。

朝霜はいつもの事だったが、今日は皐月も仲間入りだった。

睦が追加で残りの豚肉とキャベツで回鍋肉を作つてやつてきた。

「はい。追加ね。でも、これで最後だよ？ 大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。」

そう言つて、箸を伸ばす二人だった。

結局のところ、みんな箸を伸ばしていた。

そして・・・

「ああ、ご馳走様でした！ ちよつと苦しい。」

「まったく、食べすぎだよ、朝霜ちゃん。」

食事を終えて、居間に膨らんだお腹を抱えた朝霜が転がり込んでいた。

後片付けを卯月と睦がし終えて皆居間にやつてきていた。

「ありがとうな、みんな。今日は家事を全部やつてくれたんだってな。」

「ホントよ。ありがとう。」

「どうっていう事はないよ。でも、お母さんが、働き者だった言うことは、嫌って言うほどわかったから。」

「そうだね。それは確かだね。あたいたちもやってみて大変だったもん。」

秦と鳳翔の二人を取り囲むように五人が廓座になって座っていた。

皆の顔はにこやかだった。

こうして、母の日と父の日を一緒にした一日が過ぎていくのだった。

お祭りと・・

5月の最終日曜日の前日。

明日日曜日は、ここ相生はお祭り騒ぎになる。

かなり昔から、ペーロン祭りが開かれているのだった。

明日の前夜祭的なイベントが、ここ相生湾で行われる。

時期としては、少々早い気もするが、夜に花火大会が行われ、夜店が出るのだ。

打ち上げ場所は、空母・鳳翔や駆逐艦たちが係留している棧橋よりも、上流側だった。

それでも、ボートや遊覧船に乗って、海から花火を見よう、という人もいた。

秦と鳳翔は、係留されている空母・鳳翔の艦橋のデッキから見るとしていた。

打ち上げ会場からは少し離れるものの、二人きりになれる場所だったから。

「ここからだ、ちよつと遠いけど、この高さからなら、遮るものが無いから、絶好の位置だな。」

「ホントですね。ちよつとみんなには悪いけど、二人きりでゆっくり見れますね。」

と頬を赤めていた。

睦や皐月たちは、クラスメイト達と一緒に花火を見るね！　と言って夕方には出て

行っていた。

まあ、夜店を覗きながら、食べ歩くんだろうな、と秦は思っていた。

秦と鳳翔は、デツキに椅子と小さなテーブルを持ち出し、持ってきたお酒とおつまみを広げていた。

「何もないと寂しいと思ったので、おつまみを作ってきました。」
とニコリ。

お酒は涼やかなガラス製のちろりに入れられていた。

見るからに涼しそうな、青いグラデーシヨンの柄が施されていた。

容量は・・二合くらいだろうか。

それにぐい飲みもガラス製だった。

ちろりと同じ柄のものだった。

おつまみは山菜のお浸し。

椅子を二つ並べて秦と鳳翔が隣り合って座って、

「おお。いいねえ。じゃあ、二人で呑みながら、花火見物といきますか。」

「はい。」

ぐい飲みにお酒を注いで・・・

「乾杯。」

とぐい飲みを合わせた。

一口飲んで、

「ふう。美味しいお酒だね。このお酒は、鳳翔が選んだの?」

「はい。地元のお酒だそうです。酒米は山田錦とか。」

「そうか。でも、普段、睦たちがいて堂々とお酒を飲めないからね。飲むのは久しぶりだね。」

「あなたと二人で飲むのも、久しぶりです。」

鳳翔もぐい飲みを持って、お酒を飲んでいた。

「うん、美味しい。」

秦はその飲みっぷりをじつと見ていた。

「あ、あの、なにか、付いてますか?」

「あ、いや、そうじゃないんだ。いい飲みっぷりだな、と思つてさ。」

「あら? 私も結構いける口ですよ? 知りませんでしたか?」

「いや、知つています。ある意味、俺よりも酒飲みなんじゃないかな?」

「あ。そんなこと言いますか?」

「鳳翔だから言うんだよ。他の誰かには言えないだろう?」

頬を赤めて、「もう!」と言つて秦の肩を叩いた。

そうしているうちに、花火大会の開始時刻になったようだった。

打ち上げ会場の方から、ドン！っと打ち上げる音がしたかと思うと・・・

上空で大輪の花が咲いた。

「おお、上がったぞ。」

リズムカルに間を於かずに次々と上がる花火。

「わあ・・綺麗ですねえ。」

「ああ、いつ見ても綺麗だねえ。」

青や赤の光を発しながら開く花火、稲穂の様にオレンジ色でたくさん流れ落ちる星たち。

中には、星形やニコマークに形づくった花火もあった。

「やっぱり、いいですね。花火って綺麗ですねえ。」

と鳳翔が言う。

が、秦の声をしばらく聞いていないことに気が付いた。

不思議に思って隣の秦を見ると・・・

秦の目は・・鳳翔を見つめていた。

え？

「あ、あの・・花火は・・見ないのですか？」

「いや。 見てるよ。 それより．．． 鮮やかな花火を見てる鳳翔の方が、綺麗だなんて。」

真剣な眼差しだった。

!!

その言葉で、顔から火が出るように思った鳳翔だった。

「な、何を、言うんです?」

一気に胸の鼓動が高鳴っていた。

「何をつて．．． 花火が上がるたびに、その明かりに浮かび上がる鳳翔の顔が．．．色っぽく見えて、綺麗だなんて。 ちよつと、キザっぽかったかな?」

「もうー!」

花火の光に、一瞬照らされる秦の顔も、鳳翔の顔も、真つ赤だった。

お互いを、無言のまま見つめていた。

高鳴る気持ちに、従う二人．．．

徐々に顔が近づいていく．．．

そして、二人の唇が重なる．．．

花火の明かりに照らされ、二人の影が合わさって一つになっていた。

秦の腕が、鳳翔を包み込む。

いつまでも、いつまでも、こうしていたい、と二人は思っていた。

だが、その終りは突然にやってきた。

唇が離れ、互いをニコリとして見つめていたが・・・

「あ——!! こんなどころにいた!!」

ビクツ!!

声の主は卯月だった。

「父さん、お母さん。ラブラブ。もう、熱くて見てらんないよ。」

「しれーかん、ずるいよ! こんなどこで花火を見てさ?」

臯月と朝霜もやってきていた。

「な、なんだあ。お前たち、友達と花火を見に行つたんじやないのか?」

「そ、そうよ? どうしたの? こんなどこまで来て?」

と焦る二人。

「確かに、友達と行つただけだよ。あまりに人が多くて、屋台見てたら、みんなと

はぐれちゃつてさ。」

「携帯に連絡したら、集まるのは無理だから、自由行動にしようつてなつてさ。」

「それで、確か、父さんとお母さんが艦から見るつて言つてたよね、つて思いだして、走つてきたんだよ。」

「わあ、綺麗に見えるよ！」

「どれどれ？ わあ、ホントだ！ よく見えるね。」

「うん、いい眺めぴょん!!」

一気に賑やかになったデツキ。

秦と鳳翔は、見やつて、二人してクスクスと笑いだした。

まったく、もう。と呆れる二人。

(ここ)までで、お預けだな。)と耳打ちすると、(はい。また今度ですね。)と小声で返してきた。

椅子に座る秦と鳳翔を中心に、こども達5人が囲みながら花火を見ていた。

いつまでも、この時間が続けばいいのに・・・と思いつつながら。

◇

翌日。

朝から忙しかった。

ペーロン祭りの本番だ。

元は、長崎からやってきた造船関係の従業員たちが始めたというペーロン競漕だったが、いつの間にかイベントとしてここ相生の街に根付いていた。

相生湾に特設のコースが設けられていた。

スタートから沖にあるブイを廻って帰ってくるコースなのだ。

そのコースも、昨日の花火大会のように、空母・鳳翔や駆逐艦たちの係留場所までは離れていた。

だが・・

沖のブイから離れること300mほど沖合のところに、駆逐艦を盾の様に配置するのだ。

目的は、これ以上、沖に出ないように。

それと、海からペーロン競漕が見れるようにと、観客を載せるため。

これは、実施委員会から、協力の要請が警備部にあつたからなのだが、秦は、一も二もなく了承したのだった。

なので、秦は、駆逐艦・朝霜と同・皐月に観客を載せるよう、手配をしたのだった。

2隻におよそ200名が載ることに。

遊覧船のりばに、駆逐艦・朝霜と皐月が横付けされ、観客を載せていく。

「へえ、今年は軍艦に乗れるなんて、ラッキー！」

「毎年、船を出せばいいのに・・」

なんて声が聞こえてきた。

載せ終わると、遊覧船乗り場を離れ、微速で所定の位置へと向かっていった。

その途中は、まるで湾内を巡る遊覧船のようだった。

コースに対して盾の様に配置を終えた2隻。

当然、指揮官として、駆逐艦・朝霜に秦が乗り込んでいた。もちろん鳳翔も。

秘書艦たる鳳翔は駆逐艦・皐月でも良かったのだが、以前に秦と約束した、“離れない”という約束をここでも実施していたのだ。

時間になり、ペーロン競漕が始まった。

競漕は、1グループあたり4艇（4チームね。）で行われ、一番早かったチームが勝ち進む、トーナメント方式だ。

今年は、全部で2つの部門に16チームがエントリーしてるらしく、それぞれの部門で、予選、決勝が行われる。

1艇あたり16から25、6名ほどの乗り組みだった。

木造船で、船頭が一人、舵とりが一人、銅鑼が一人、漕ぎ手が片舷8から10人ほどだった。

人力で漕いで船が進むから、当然、乗組員全員の呼吸が合わないと、なかなか前に進まない。

それに合わせるように、各チームの応援にも熱が入る。

スタートして、直線部分では、両舷の漕ぎ手全員が力いっぱい漕ぐ。

ブイを廻るところでは、片舷の漕ぎ手が小刻みに漕いで、反対舷ではオールを水につけて抵抗を増やして、船を廻す。

廻りきると、ゴールまでは直線となる。

漕ぎ手全員が、再び力いっぱい漕ぐ。

銅鑼を叩く間隔が早くなり、音も大きくなる。

そしてゴール！ 歓声が一際大きくなる瞬間だ。

こんなレースが、今年は10回戦分行われたのだった。

艦橋から状況を見ている秦や鳳翔、こども達も、どこのチームを、というのは無かったが、観客と同じように応援していた。

そして・・・

今年のペーロン競漕が、無事に何事もなく終了した。

駆逐艦・朝霜と皐月は観客を遊覧船乗り場まで送り届け、いつもの停泊している棧橋に帰って来た。

七人が棧橋から警備部の建物への帰り道。

「私、初めて見ました。　こんなお祭りもあるんですね。」

「昔からあることは知ってたんだけど、実際に見るのは初めてだよ。」

「あたいもやってみたいなあ。　面白そうだし。」

「朝霜ちゃんもやりたいの？」

「あれって、団体競技だよ？ 人数どうすんのさ？」

「うーん、それが問題だよねえ。」

「まあ、ボート競技に範囲を広げれば、一人乗りのシングルや二人乗りのペアなんてあるから、朝霜がそれでもやりたいなら、いいんじゃないか。」

「あ！ ペアなら、あたいはしれーかんとね！ 一人乗りは寂しそうだし。」

というものの、

「あら？ 提督は、わたしとですよ？ 朝霜ちゃんには悪いけど、“ここは譲れません”

よ？」

と鳳翔が割って入ってきた。

（お母さん、最後のフリーズは、誰かさんを真似たね・・・）と思ったのは睦と皐月だけではなかったようだった。

「え〜。 そんなあ〜。」

残念な声を出す朝霜。

「仕方がないね。 俺は鳳翔と乗って、みんなを見てるよ。」

「ま、そうなるだろうね。」

とは皐月だ。

睦も一緒になつて、

「そうだよね。父さんとお母さんつていつまでたつても、ラブラブだし。昨日だつて、ねえ・・。」

ぱん！

と鳳翔が手を叩いていた。

「はい！ そのままで！」

と言つて話を強制終了させた。

やや頬を赤めながら・・

「それ以上言うと、みんな夕ご飯抜くわよ？」

と皆を脅し始めた鳳翔だった。

鳳翔にしか出来ない、鳳翔だからこそ効果のある脅しだ。

睦に皐月、朝霜らが悲鳴を上げた。

「へ？ 夕飯抜き？ い、いや・・。」

「いやあああ！ ご飯抜くのは無しだよ！ わ、わかつたから。これ以上言わないか

ら。ね？ お願い！」

それを聞いて、不敵にフフフと微笑んだ鳳翔が、

「じゃあ、ご飯にしましょ。」

と。

すると今度は元気な返事の合唱だった。

【はああい！】

やれやれ、の表情の秦と鳳翔。

七人は食堂に入っていく。

また賑やかな夕ご飯の時間になるのだった。

運用訓練開始!

六月に入つて、相生湾から播磨灘にかけて艦隊の訓練が行われていた。当初の予定ならば、既に改造・改修を終え、呉に向かつていいころのはずなのだが：遅れている。

突破的な出撃もあつたことも、遅れる要因の一つではあつた。

しかし、遅れている理由は：それだけではなかつた。

一つには、時間だ。

皐月らが、学校から帰つてきてから運用訓練を行つていたため、1600から1900頃までのよくて3時間程度しか、1日の訓練時間が取れなかつたのだ。

1600と言つても、警備部の前の栈橋から出港して訓練海域までの移動時間を含んで、だ。

◇ もう一つの理由は・・・故障なのだが、ちよつと困つた故障の発生の仕方だつた。

◇ 1500。

いつものように皐月らが学校から帰つて来た。

「「ただいま！」」

宿題もそこそこに、制服はそのままで棧橋へと向かう。

「ほら！ みんな！ 行くよ!!」

「皐月ちゃん、待ってぴよ〜ん〜」

「さっさと行くよ!!」

「行つてらっしゃい!! 気をつけてね!!」

睦は自身が担当する“艦”を持たないため、一人で留守番だ。

だから、勢いよく出ていく四人を見送っていた。

皐月たちが各自の艦に乗り込んで、出港していく。

「精神同調・・・よし！ 駆逐艦・皐月、機関始動!! 抜錨する。 錨あげーッ！ 機関

前進微速！」

「皐月ちゃんに続くぴよん！ うーちゃん、機関微速前進！」

「駆逐艦・弥生、機関始動、抜錨。 卯月に続く！」

「殿はあたいだね！ 抜錨！ 微速前進！ 皆に続いて出港するよ！」

四隻は順に港を出ていく。

「やあ、みんな、出港できたかい？」

湾をでると、既に秦と鳳翔が空母・鳳翔に乗り込んで、沖合で待っていた。

というより、鳳翔航空隊の訓練を既に行っていたのだ。

今日の午前中は第一飛行隊で、午後からは第二飛行隊だった。

「みんな、来たのね。それじゃあ、始めましょうか。」

と鳳翔の声で、航空隊と艦隊との連携訓練が始まる。

対潜哨戒の基本は、まず、対潜哨戒機の発艦、対象海域へのソノブイ投下、ソノブイによる音波探針もしくは聴音による潜水艦の発見・追尾、その後に航空機・駆逐艦による攻撃へと移る。

これら一連の流れの確認を行うのだ。

哨戒機は既に空中待機していた。家島上空を旋回しながら、艦隊の到着を待っていた。

“ 始め! ”

の秦の合図で始まるのだ。

待機中の飛行小隊各機から訓練海域にソノブイが投下される。

ソノブイ・・・空中から海上に投下する、無線式の音響探知機だ。 現有のモノを艦

娘搭載機用に改良したものだ。

ちなみに・・・秦の艦隊は、電子化と近代化の工事が施されている。

装備品の電子化や近代化は、艦娘の精神同調に影響はなかった。

恐らく、全艦娘艦隊の中でも最先端を行ってるだろう。

ただ、武装の近代化はされていない・・・

巡航ミサイルの類は、艦娘の艦艇に拒絶されていた。

精神同調が出来ず、搭載が出来なかったのだった。

◇

訓練の一部はこんな感じだ・・・

「只今より、訓練を開始する！」

と秦の号令によって始まる。

「各哨戒機へ。ソノブイ投下始め！」

と秦の指示が飛ぶ。

訓練海域に数個のソノブイが投下される。

そして・・・

「こちら哨戒1番機！ ソノブイ3番に反応あり！」

「反応位置、特定せよ！」

ソノブイ3つ以上による三角測量によって位置が特定される。

「こちら哨戒1番機。位置特定。1番艦皐月へ、2時方向、距離5500、深度20

から40、艦数1。」

「臯月、了解！ 両舷いっぱい！ 方位2時方向へ！ 爆雷投下よーい！」

白波を上げて臯月が回頭を始める。

「臯月ちゃん！ 加速、遅いわよ！」

とは、鳳翔だった。

「は、はい！」

と返事をする臯月。

続いて艦内に向けて指示を出す。

「訓練用爆雷信管調整、深度30にセット！ 雷数4！・・・投下よーい、よし！」

爆雷投下の準備が整うと、次は攻撃だ。

「間もなく、敵潜を通過・・・ 投下よーい・・・ てーっ!!」

駆逐艦・臯月の艦尾から模擬爆雷が海中に投下されていく。

・・・模擬爆雷なので、実際に爆発はしないが、破裂はする。

破裂すると、小さいながらも気泡が出る。

「哨戒2番機より、2番艦卯月へ。 敵潜が取り舵、深度30から40へ、追跡された

しー！」

「！ 了解びょん！ うーちゃん、取り舵！ 爆雷投下よーい！」

「こちら臯月、攻撃終了。 定位置へ戻る！」

皇月が爆雷攻撃を終え、いったん、定位置となる艦隊先頭へ戻る。
その間にも卯月が敵潜を追う。

「哨戒2番機より卯月へ。そのまま前方3000、敵潜水艦、浮上する模様！」
それを聞いた秦が新たな指示をだした。

「楠木より卯月へ。さらに取り舵10度、浮上する敵潜水艦に対し、砲撃を開始せよ
!!」

「! 了解びよん! さらに取り舵、1番砲、砲撃よーい・・・」

「卯月ちゃん、取り舵、遅いわよ!! もっと素早く!!」

またまた鳳翔だ。

「りよ、了解びよん!」

途中でも随所で鳳翔からの指示が飛ぶ!! 秦よりも早く。

「哨戒2番機より卯月へ。敵潜水艦、潜望鏡深度で停止の模様。」

この報告を受けて、卯月が攻撃を開始する。

「よーし、うーちゃんの攻撃びよん!! 1番砲2斉射! 潜望鏡付近海面に向けて、砲撃
開始! てーっ!!」

1番砲から砲弾が2斉射分、発射される。

海面に着弾の水柱が立つ。

「敵潜水艦、被弾と認む！」

と哨戒機より報告が来るのだ。

「楠木より卯月へ。定位置に。」

「うーちゃん、了解ぴょん！ 定位置に戻るぴょん！」

・・・とこんな感じの訓練が、日々繰り返されていた。

◇

改造工事で遅れている理由のもう一つが、この訓練の激しさに要因があった。

所々で入る、鳳翔からの指示、指摘。

これにより、各艦の動きに、影響いい影響がでる。

各自の意識と注意力に。

しかし、悪い影響も出るのだ・・・

指示が細かい事もあり、操舵関係、特に機関関係を酷使しすぎて、故障が出るのだつた。

先日の訓練では、朝霜の機関で不具合が発生していた。

・・・

「！ 艦隊11時の方角より雷跡ふたーっ！ 目標は・・・ 駆逐艦・朝霜の模様！」

と哨戒機より連絡が来る。

その報に秦が、

「朝霜！ 加速して敵魚雷を回避だ！」

と指示を出す。

そして朝霜が舵を切るが・・

「了解！ 最大戦速！ 取り舵いっぱい！ ・・・ あれ？ あれれ？」

「朝霜ちゃん、遅いわよ！」

動きが遅い朝霜に櫂が飛ぶ。

「朝霜より、しれーかんへ！ 機関不調！ これ以上の加速ができないよ!!」

朝霜の速度が徐々に落ちていく。

艦首が作り出す波が小さくなっていく。

止まりはしなかったが、ほぼ微速程度まで減速してしまった。

「機関室内で発煙、戦列を離脱するよ！」

秦は朝霜に代わって、弥生に攻撃続行を指示するのだった。

「楠木より弥生へ。朝霜に代わって敵潜水艦を追尾せよ！ 爆雷投下よーい！」

訓練としては、弥生が代わって継続する。

「朝霜へ。こちら楠木。どうした？ 原因は、わかるか？」

「しれーかん、機関室内で異常発煙を確認。現在ダメージコントロール中。ただし、

微速以上の出力は無理みたい!」

煙突からは通常ではない、灰色の煙がもうもうと上がっていた。

「了解だ。無理をしなくていいから、艦隊を離脱し港に向かっていいぞ?」

「了解! 先にもどるね。・・面舵いっぱい! 艦隊を離脱して港へ戻るよ!」

・・・てな感じだ。

代わりの弥生は継続していた。

「まもなく敵潜を捉えるよ。・・爆雷投下、てー!」

駆逐艦・弥生の艦尾の爆雷投射機から2発の爆雷が投射され、破裂して気泡が上がった。

◇

そんなこんなで今日も訓練が終わろうとしていた。

していたが・・・

「ハアハア・・お母さん、指示細かすぎ!」

「ハアアア・・休まる時間が無いよおー!」

と、各人が、嘆く嘆く・・・

「もう! まだまだです! まだ足りません!!」

と鳳翔が艦橋で不満そうにしていた。

まさに、仁王立ち。

両手を腰にあてて、頬が膨れている……

「……鳳翔…… 今日はこの辺にしないかい？」

「何いつてるんですか！ 生きて帰るための訓練に“この辺”はありません！」
秦も圧倒されるほどの勢いだ。

「……とは言うものの、時間も遅いので、今日はこれで切り上げましょう。」
と、いつもののにこやかな表情で言う。

これで、飛行隊も終了となる。

（ハア…… 今日のみつちり、やられたなあ……）

（ああ。 今日もお艦は、厳しかったなあ……）

（やつと、基地に帰れるぞ！）

「これより、飛行隊は帰投します！」

「お疲れ様。 また明日も、よろしくお願いしますね。」

ニッコリと。

（ひええええ、さつさと帰って休息だ!!）

飛行隊は速度を上げて帰って行った。

（おおおお、まさに、微笑む鬼だ……）

と思った秦だった。

帰り着いても、反省会だ。

そこでも鳳翔からは激が飛ぶ。

「臯月ちゃん、もつと加速を早くしないと……」

「卯月ちゃん、回頭はもつと早く、半径を小さく……」

「その時の朝霜ちゃんは……」

と、秦が言おうとすることを、全部、鳳翔が言ってくれるのだ。

最期に、

「みんな、明日も、みっちりやるわよ？ だから、ゆつくり休んでね？」

とニツコリと言われる為、みな、「は、はい……」としか言えなかった。

(ううううう、こ、こわいよー)

(噂通り、微笑む鬼だ……)

(しれーかん、た、助けて……)

「あなたもよ？ 指示は素早く、的確にね？」

とニツコリと言われて、

「は、はい。」

としか言えなかった。

(父さん、弱い……)

(しれーかん、だめじゃん……尻に敷かれてるじゃん……)

「と、ところで、朝霜の機関の具合はどうだい?」

「そうそう。応急じゃ、ダメみたいだよ? 明日、バラしてみるつて。」

「そうか。じゃあ、修理が間に合わなければ、しばらく朝霜抜きだな。」

「それは仕方ありませんね。」

「じゃあ、朝霜。念入りに機関のチェックもしておいてくれ。」

「了解!」

そこん所は、司令官らしく締めた秦だった。

「それじゃあ、晩ご飯にしますね。」

と割烹着を着て夕食の準備に取り掛かる鳳翔。

鼻唄を唄いながら調理を進める。

その姿は、いつもの“母”たる姿であった。

ご飯だけは、留守番の睦が炊いていた。

訓練が始まってからは、睦がご飯当番となっていたのだった。

「今日も上手く炊けたよ?」

だから、晩ご飯は、睦と鳳翔の共同作業によるものとなっていた。

「さあ、出来ましたよー！」

「わぁーい、いっただきまぁーす!!」

テーブルに運ばれてきた鳳翔のご飯に飛びつく腹ペコのこども達であった。

相生、最初で最後の夏

委員長

「おっはよー！」

臯月が五人のうち、一番最初にクラスに入ってきた。

その後ろに四人が続く。

「おはよー！」

クラスに居た女子から返事が。

男子からも返事が、聞こえる事もある。

六月になって、制服は夏服に替わっていた。

セーラー服は、長袖から白の半袖に替わっていた。

セーラー衿は、紺に白三本ラインのままであった。

スカートも白から水色に替わっていた。

今年からスカートは水色なのだそうだ・・・

当然、夏仕様なので、生地は比較的薄い。

また、スカートも冬用から夏用に替わった。よく見ると、透けて見えるかな？と

いう程度に透けている。

上衣もスカートも、各個人の名前入りだ。

名前の刺繍を入れるのは大変だ、と鳳翔が嘆いていたが……

そうそう。スカートの丈は、既製品より10cm、短くなっていた。

朝霜と皐月が、5cmでは足りない！と抗議したことに始まる。

「ねえねえ、やつぱり、短い方がいいよお……お母さん、なんとかならないかな?」

「そんなに短くして、どうすんだよ? 他の子たちは、短くしてないだろ?」

「そうよ、そこまで短くしなくてもいいんじゃないの?」

「それはそうだけどさ……やつぱ、ファッションだし。ねえねえ……」

とおねだりが収まらなかったため、相談した結果、+5cmの10cmと相成ったのだが。

スクール用のプリーツスカートは、動きやすい事が第一だから、足の動きに制約を与えない。

それこそ、スカートを穿いたまま、開脚だつて出来てしまう。

それでも、スカートを穿いて、クルリと一回転するとふわりとスカートがひろがる。

夏用は冬用よりも軽いから、余計だ。

「わおつ。ちよつと、見えちゃう?」

と平然と言う。

「これ！ 慎みを持ちなさいって常々言ってるでしょ！」

まったく、もう！ と呆れる鳳翔であった。

「いい？ スカートの注意する事！ 分かった？」

と皆に何度も念押しするのだった。

◇

クラス全員が夏服になると、一気に雰囲気は夏！になる。

季節的には、まだまだ梅雨なのだが……。

それでも、それだけでも気分はだいぶ違う。

ただ……

「この上衣って、下着が透けるよねえ……」って。

だいたい、夏の制服って、生地が薄いから、下着のラインがうつすらと透けて見える。

この学校では白セーラー服のため、背中が若干、透けるのだった。

中学1年であれば、ブラジャーをしている子もいれば、タンクトップの子も、キャミ

ソールだけの子も。

女子の意見は……

「透けるのは、ちよつとやだねえー」だ。

だいたい白だが、白以外だと、そこそこ目立ってしまう。

だが、透ける事を喜ぶ奴らも要る・

男子たちだ。

これくらい年齢になると、やっぱり、異性を気にし始めてしまうのだろう。

女子たちは特に、

「男子の視線、なんか、やらしー」

と言うのが定番だった。

もちろん、男子全員がやらしい、と言うわけではなかったが。

◇

クラスで席に着く五人だが、五人とも“楠木”姓を名乗っているため、五人の席は近い。

朝霜、卯月、皐月、睦、弥生の順だ。

学校では、鳳翔の監視の眼が無いため、スカートに気にしない朝霜。

今日もいつものように、椅子の上で胡坐を掻いていた。

「朝霜ちゃん、またあ…… 引っもお母さんに言われてるでしょ？ スカート注意つて。」

と注意するのは皐月だ。

「え？ いいじゃん、いいじゃん。見えるわけでもないしさ。」
とケケケと笑ってる。

「朝霜ちゃんも背が高いのに、スカート短いから、うーちゃん達よりもミニに見えるんだよねえ。」

「そうだよ。先生たちからは、“短いだろう？” って散々言われるし。なんなら、見せようか？」

と言つてスカートを自ら捲つた。

!!

パカーン!!

「もう！ 朝霜ちゃん!!」

と睦が朝霜の頭をはたいた。

「イテェ!!」

頭を押さえる・・・

「あ、あにすんだよ！ 睦ちゃん？」

「ここでスカートを捲らないで！ ほらあ・見てみなよ？ 廻りの男子達のいやらしい

視線・・・まったく、もう。お母さんに言いつけるよ？」

呆れる睦。

「あ。それ勘弁して。お願い!! お母さんに言わないで。」

バツの悪そうな朝霜が、睦にお願いポーズだ。

「で、でも、ちゃんとハーフパンツ穿いてるからさ。捲つても……」

ゴン!!

「イツテエ!」

今度は、睦が握りこぶしで、朝霜の頭を殴っていた。

再び、頭を押さえている朝霜……

「もう、そう言う問題じゃないでしょ! 帰ったら、お母さんに言つてやる。絶対、

言つてやるんだからね!!」

「あ、冗談、冗談だよ。マジでそれだけは止めて! マジマジ! ねえ、お願いだよ?」

うっ。

睦が、睦の目が、冷たかった……

目を細めている睦……

視線が……冷たい……

「そ、その目は……い、痛いよ? 冷たいよ? む、睦ちゃん……」

おろおろとする朝霜。

はあああつと盛大に溜息を付く睦。

「まったたく。何回言ってもダメなんだね。今度しでかしたら、お母さんのご飯、抜きね?」

「え? そ、それ無し! それ絶対なしだよ! お母さんのご飯、抜かされたら、あたい餓え死んじやうよ。」

ゴメン、ゴメン、と睦に謝り続ける。

朝のホームルームまでの時間が、朝霜の謝罪の時間となっていた。

「じゃあ、ちゃんとお母さんとの約束、守れる?」

「うん、守る、守るよ!」

「約束だよ!」

と、睦が左手を腰にあて、右手人差し指で、朝霜の顔を指して言った。

「最近の睦ちゃん、まるでお母さんみたいだね?」

そう言うのは臯月だ。

「うん。小さいお母さんが居るみたい・・・」

とは弥生だ。

「しよוגないにやし。父さんとお母さんから、みんなの学校での生活ぶりを聞かれています。『ちゃんとやってる?』って。」

「朝霜ちゃんは、正直だからすぐに態度に出るびよん。ある意味、かわいそうびよん。」

「卯月ちゃん……分かってくれるかい。しくしく……」

泣き真似をして見せる朝霜だが……睦はもちろんのこと、皐月、弥生の視線が……乾いた視線だった。

「な、なんだよお、三人してその視線わ！ あたいは悲しい！」

ついには、

「ホントにご飯、抜こうか……」

とマジで言われる始末だ。

そうしているうちに、ホームルームの時間となつていった。

◇

授業の合間の休み時間、一人の女子が睦に近寄つてきた。

このクラスの学級委員長をしている圭子だ。

「ねえ、楠木さん。あなたの“家”って、海軍の相生警備部だよね？」

「およ？ そうだよ。あたしたちの“家”だけど？」

「お父さんは提督さん？」

「うん。 そうだよ。」

「じゃあ、みんな、艦娘なの？」

「およ？ みんな？」

「あなたたち、楠木さん、五人とも。」

そう聞いてきた。

その会話を聞いていた朝霜が口を挟んだ。

「ん？ 艦娘かい？ そうだよ。 あ、睦ちゃんは違うよ。 あとの四人はそうだけど

？」

「え？ 睦ちゃんは違うんだ……」

「ウチのお母さんも艦娘だよ。」

「え?? お母さんも??」

そこんところは、マジで驚いていた。

「そ、そうなんだ。」

「で、委員長、どうしたの？」

と皐月。

「うん…… 実はね、私にはお姉ちゃんがいたの。」

「お姉ちゃんが、いた？」

皐月が聞き返す。

「そう。 いたの。 3年くらい前まで。 艦娘になるって言って、家を出ていった

の。」

「それで？」

「お姉ちゃん、『青葉』って言うんだけど、知らないかな？　うちの父さんや母さんには、連絡が来たことがあるらしいんだけど、私には教えてくれないんだ……。だから、同じ艦娘だったら、知ってるかなって……。」

「あ、そういうことね。」

「確か……去年までは、確か大湊にいたはずだよ。ボクらは今年になってから、相生警備部への配属だから、最新の情報は分かんないんだ。」

「そう……去年まで、大湊に……」

視線を落として、呟くように答えていた。

「委員長？　どうしたの？」

「あ、ごめんね。そっか……。」

ちよつと気になった睦が聞いてみた。

「ねえ、委員長？　会いたいの？」

と。

圭子は、静かに頷いた。

「私は、お姉ちゃんに、会いたい！　でも……でも、父さんや母さんは、何も教えてくれないの……。」

俯いたままの圭子だったが、顔を上げて・・

「だから、知っていたら、教えて欲しくて・・」

「・・・わかった。じゃあ、父さんに聞いてみるよ。」

と答えたのは睦だった。

「え? いい、の?」

「うん。なんなら、今度の休みの日、ウチに来る? 父さんに直接聞いてみるのもアリ

かもよ?」

と睦が応えた。

「お、そりゃあ、いいかも。」

「うん。ありがと。」

と、今度の休日に、圭子が警備部に来ることになったのだった。

◇

艦娘・・・とは言え、普通の人である。

であるが、ちよつと変わった能力があるだけなのだ。

人々の中には、“妖精”が見えて会話が出来、“艦”と精神同調が出来る艦娘を、人ならざる者として見ている輩も、少なからずいるのも確かだった。

それを、気持ち悪い、表する輩も。

圭子の両親も、そういう輩たちの部類かもしれない。なかった。

秦は、そんな事を聞くと真つ先に飛んで行つて、以前は鉄拳によつて沈黙をさせたこともあつた。

今は、説得に切り替えたようだが。

もちろん、睦や朝霜、皐月らも、そう思われている事は知っている。

知つた上で、深海棲艦と戦っている。

彼女たちの境遇からすれば、理不尽極まりない状況だ。

だが、そんな事はお構いなし！ として普段から生活している皐月たち。

はつきり言つて、気にしていたらなんにもできないから。

だから、普段通りに日々を過ごしているのだつた。

皐月らの“父親”たる秦は、彼女たち艦娘を無碍に扱う事はしないし、することは無かつた。

秦は、彼女らを一人の人間、女性として見ていた。

何にせよ、秦の妻は“艦娘”の鳳翔なのだから。

相思相愛の二人なのだ。

秦と鳳翔、この二人を見ている限り、まったく普通の夫婦としか思えないのだつた。

いや・・ 少々、いや、多々、イチャイチャが過ぎるのだが・・



そんな秦に、圭子が聞きに来るといふ、休日になった。

「えつとお、睦に臯月？ その学級委員長は何時ころに来るんだい？」

「特に決めてないんだけど、お昼前には行くねって。ね？ 睦ちゃん。」

「うん。」

「そうなの？ じゃあ、お昼はウチで食べてもらいましょ。」

と鳳翔が言った。

時刻が1100頃になって、一人の女の子が玄関にやってきた。

「ごめんください。」

「はあーい。」

と言つて鳳翔が出迎えた。

「あら、いらつしやい。」

「あの、睦ちゃん、臯月ちゃんは居ますか？」

「ええ。 いるわよ。 ちよつと待つてね。 睦ちゃん、臯月ちゃん!! お客様

よー!。」

「はあああーい!!」

どたどたと足音が奥から聞こえてきた。

「あー！ いらつしやい、委員長！ ようこそ警備部へ。」

と睦と臯月が出迎えた。

「さ、入って。」

と、二人は手を引いて執務室まで案内していった。

「お、おじやまします。」

と言つておずおずと睦に案内されて入ってきた。

「いらつしやい。どうぞ、座って。」

ソファーに案内されて、圭子らが座った。

提督席から秦がソファーまでやってきて、圭子と向い合せになる格好で座った。

そこへ「どうぞ。」と鳳翔がお茶を持って来た。

「じゃあ、みんな、座ろうか。」

と秦が促す。

8人が座るには、ソファーは少なかつたので、椅子を持ちこんで全員が座った。

「父さん、この子が前に話した学級委員長の圭子ちゃん。」

「始めまして・・・」

「圭子ちゃん、ここの司令官で提督の私たちの父さん。で、こちらの和服の女性が私た

ちのお母さん。」

「こんにちは。父親の楠木 秦です。よろしくね。」

「こんにちは。鳳翔と言います。よろしくね。あ、お茶、冷たいうちにどうぞ。」

「あ、はい。いただきます。」

ゴクツつとお茶を飲んだ。

「で、今日の赴きは・・・お姉さんの居所を聞きたいという事だけでも、それでいいのかな？」

「は、はい。父さんにも母さんにも聞いたんですけど・・・教えてくれなくて。」

「そうか。話す前に、君は・・・艦娘をどう思ってるのかな？」

「え？ 艦娘、ですか？」

「うん。」

「私は・・・艦娘は人です。私と同じです。そりゃ、ちよつと変わったところもあるけど、人に違いはありません。そう、思います。」

「ありがとう。そうだね。艦娘とは言え普通の人だね。・・・だから・・・互いを信頼し合えるのだと。」

そう言つて鳳翔を見つめた。

「この鳳翔は、まだ艦娘だ・・・だけでも、私の妻でもある。私の最愛のね。」

それを聞いて、頬を赤める鳳翔・・・。

「もう。お客さんの前でもラブラブ度満載なんだからあ・・。」

「まったく、恥ずかしいったら、ありやしないんだから。」

と、こども達からのクレームが入るのだった。

「ま、まあ、お前たちの事も愛しているよ。」

とウインクして見せた。

された方も、頬が赤くなるのだった。

秦は、改めて圭子を見て、

「ホントは軍機なんだけど、そう思ってくれる君になら、包み隠さず話そうか。」

「あ、ありがとうございます！」

「君のお姉さん、青葉と言ったかな？ 青葉は、去年まで大湊に配属されていたんだが、本年度初めの配置換えで、大きく変更があったんだ・・で、今はつと・・」

秦は、全国の配置表を捲っていた。

「あつたあつた。ここかあ。今は呉に居るね。重巡洋艦だったか。」

「呉、ですか？」

「ああ。呉の鎮守府所属になっているよ。」

そう言つて配置表を見せた。

ホツと溜息をついて、小さく「良かったあ。」と。

その姿をみて、

「会いたい？」

と秦が聞いてみた。

「え？ 会えるんですか？」

「ああ。もちろん、すぐっていう訳にはいかないけど、ね。」

「どうするの、父さん？」

と聞くのは臆月だった。

「実は……みんなの訓練に、実際の潜水艦を使ってみたくてね。前から検討していらんだ。その際の派遣に、1隻、随伴を付けようと思ってたんだよ。」

そこまで言うと、鳳翔は気付いたらしく、

「！ その随伴に、青葉ちゃんを指名するんですね？」

「ああ。潜水艦は、呉に居る子を指名するつもりだったし、これなら一石二鳥だろう？」

と言って、ニヒヒと笑いが見える顔をしていた。

「あ、ありがとうございます！ やたつ、やっとお姉ちゃんに会える！」

と言って、うつすらと涙が見て取れた。

「君は……お姉ちゃんのこと、好きかい？」

「はい。大好きです！ 小さいころ、お姉ちゃんに遊んでもらいましたから。私、お

「姉ちゃん子だったんで……。」

「そう。決まったら、睦たちを通じて連絡するよ。それでいいかな。」

「はい！」

【よかったね。】

と言つて笑いあう、こども達だった。

◇

「あら。もうお昼の時間ですね。お昼ご飯にしましょうか。」

時刻は1230。

お昼にはちょうどいい時間になっていた。

「圭子ちゃんも食べていくよね？」

と皐月が圭子に聞いた。

「あ、じゃあ、遠慮なく……。」

「じゃあ、みんな食堂に行きましょう。」

と鳳翔。

今日のお昼は、オムライスだった。

鶏肉と玉ねぎ、グリーンピースが入ったケツチャップライスを、金色の卵に包んだ、オムライス。

ソースは、ケッチャップにウスターソースを混ぜ込んだ、ケッチャップソース。ちよつと色の濃い、ケッチャップソースに仕上がっていた。

付け合せに、ブロッコリーなどの温野菜。

白いお皿に、黄色と赤と緑が映えていた。

「はい、召し上がれ。」

【わああ。美味しそう！】

六人がほほ同時にオムライスを食べ始めた。

「んん、ケッチャップライス、美味しー。」

「ホント、美味しいね。」

「ケッチャップソースも、ちよつと味が濃くていい感じ！」

「金色の薄い卵を割ると現れる赤いご飯！ うま!!」

さすが、鳳翔のご飯である。

六人は、美味しそうに、たいらげていく。

そして・・・

「お母さん、おかわり!!」

そう言ったのは、朝霜だ。

「はいはい。ちよつと待っててね。」

「おい。あんまり食べすぎるなよ？　またこの間みたいにな、お腹を押さえて苦しまないだろうな？」

「大丈夫だよ。控えめに食べてるから。でも、もうちよつと欲しいんだよねえ。」

「はい。おかわりよ。さつきより、小さくしたからね。これでいい？」

「ありがとうお母さん。あ、これカワイイ大ききさ！」

「ねえ．．．睦ちゃん？　あなたたちって、いつもこうなの？」

と圭子が不意に睦に聞いてきた。

「およ？」

「学校でも、朝霜ちゃん、賑やかだけど。それに、ご飯、美味し．．．」

「あ、朝霜ちゃんは、いつもの通りだよ。学校でも家でもね。」

そう答えるのは阜月だ。

「ご飯が美味しいのは、お母さんの手料理だからびよん！　その辺のお店より美味しいびよん！」

「へえー、そうなんだ。でも．．．みんな、仲がいいんだね。」

「当然じゃん。同じ釜の飯食って、同じ部屋で寝て、裸の付き合ひもして．．．」

「ゴン！」

「イツテエ！」

睦の握りこぶしが、朝霜の頭を殴っていた。

頭を押さえる朝霜……

「もう！ 乙女の話す言葉じゃないでしょ!!」

「な、何がだよお。 いちいち殴らなくてもいいんでない？」

「こうしないと、言う事聞かないでしょ、朝霜ちゃんは？」

「わあーったよ。」

そのやり取りを見ていた圭子が、フフツツと笑った。

「ホント、みんな仲良いのね。」

「そうだよ。 ねー？」

「はははっ。 圭子ちゃん、これからもウチの子たちと仲良くしてくれるかい？」

笑いながらではあったが、秦がお願いをした。

「はい！」

元気な返事だった。

六人で顔を寄せて、笑っていた。

圭子は、連絡をもらう事を約束して、帰って行った。

帰って行く姿を見ながら、秦が言った。

「お前たち。 友達はたくさん作れよ。」

艦娘だ、人だ、関係ないからな。

ともかく。

笑いあえる友達をたくさん、な？」

「あつたぼうジャン！ そうでなかったら、あたいが殴って……」

ゴン！

またもや、睦の握りこぶしが、朝霜の頭を殴っていた。

「イツテエ！」

頭を押さえる朝霜……

「もう！ すぐ人を殴ろうとする。」

「殴って無いじゃん！ 殴ってやろうって……。 っ、それより！ 睦ちゃんの手、

段々早くなつてない？」

「朝霜ちゃんだからいいんだよ。」

「なんで、あたいならいいいんだよ？」

「なんでって、いつつもくっだらな事いうからでしょ。 ね、みんな？」

臆月、弥生、卯月の三人が、言葉は発しないものの、大きくウンウンと頷いていた。

「あー！！ みんな、ひどっ！！ あたいは悲しいよおー！ しれーかん、慰めてえ！」

とかいいながら、秦に抱き着いて、頬をスリスリしていた。

その顔は、悲しむどころか、にへへと笑っていた。

「さあ、入りますよ。 今日にはゆっくり休むんでしょ？」

鳳翔の一言で、はあーいっと、みな建物に入って行くのだった。

姉妹

委員長の圭子が警備部に来てから一週間余りが過ぎた頃だった。

横須賀の秋吉から連絡が来た。

「よお。元気にしているか？」

「はい。お陰様で。まだ訓練が残ってしまって、申し訳ありません。」

と頭を下げた。

「そう言うな。我々にとって初めての対潜専門の艦隊なのだから、時間が掛かるのは分かっていたんだからな。とは言え、可及的速やかな完了を期待するぞ。」

最近になって、各鎮守府、各警備部と大本営との間が、通信ネットワークで結ばれるようになった。

それに伴い、“紙”から“電子データ”へと置き換わりつつあった。

その中でも、いわゆるネットワーク回線を使ったネット会議が出来るようになっていた。

リアルタイムの双方向通信なのだ。

今、そのネット会議を使って、秦は秋吉と会話をしていた。

「で、貴様から要望のあつた潜水艦の件だが・・ 呉から一隻、借りる事が出来だぞ。」
「あ、ありがとうございます。で、誰になりますか？」

「伊号の伊58だ。」

「呉も良く了解してくれましたね？」

「まあ、ちよつとは苦労したんだぞ？」

「それはそれは。お手数をお掛けします。」

「で、随伴に青葉が就くことになった。これも貴様の希望とおりで。」

「なおの事、ありがとうございます。」

「今日の早朝に呉を出ているハズじゃ。ただし。1週間だけだ。それが過ぎる

と、青葉共々、呉に返す事になっている。」

「やはり、そうですね・・。」

「ま、仕方がないな。転属ではないからな。万事、後は頼むぞ。お父さん」。

「!! な、なんで、知ってるんです？」

「おや？ そんなことも知らんで、貴様の上官は勤まらんわい。」

そう言つて、がはははははと大声で笑つた。

大声はスピーカーを通して、部屋中に響くほどであつた。

画面の向こうで声が出た。

「もう、提督ったら。声が大きいですよ?」

声の主は、赤城だった。

「そうかね? ま、精々、頑張ってくれたまえよ。 “お父さん”。“こども達”にも

よろしくな。」

そこまで言つて、会議を終了しようとしたが、何かを思い出したようで・・・

「そうじゃ。楠木? 貴様ら夫婦はどうなのだ?」

「は? どう、と言われましても・・・仲のいい、普通の夫婦と思いますが・・・」

そう言つて傍に立つ鳳翔を見た。二人の視線が重なり合う。

「そうか。仲がいい、か。画面から見ても判るほどに惚気よつて。まあ、艦娘と

ケツコンカツコカリする輩はいるが、ガチまでしたヤツは、貴様一人なのでな。大本

営でも話題になつておつてな。」

大本営でも話になるほどの事なのか、と思つた秦だった。

「で、艦娘の健康管理や健康診断は、各地の海軍病院が担当じゃが、そこ相生には海軍病

院が無いからな。一応、呉の海軍病院には連絡してあるから、何かあつた場合は、呉

に行つてくれ。」

と。

「何か? あつたらつて、それはどういう・・・?」

「何か」とは何かじや。その時が来ればわかるじやろ。」

何やら意味深な事を言う秋吉だったが・

「それではな。お父さん。」

そう言つて通信が終了した。

・
・
・

「誰だよ、お父さん」て言われてるの漏らしたの・・・」

傍に居た鳳翔が、クスクスと笑つていた。

「ああ、ひよつとして、お前さんだな、鳳翔？」

「いえ。私は知りませんよ。」

と言つても、クスクスと笑つていた。

実は・

秦が席を外した時などに、鳳翔が赤城と連絡を取つていたのだった。

もつとも、話題は、お互いのパートナーの愚痴だったりする。

この時点で、秦は、鳳翔だな、と確信したのだった。

◇

夕方前、今日の訓練を終えた後、棧橋に秦、鳳翔らが全員揃つて、到着を待つていた。秋吉から連絡を受けた秦は、睦に連絡し、今日の夕方に青葉たちが到着する、と伝え

ていた。

圭子が迎えに出れるように。

栈橋で、圭子が合流する。

すると、湾の入り口に1隻の軍艦が現れた。

双眼鏡で確認すると・・・青葉だった。

「青葉を視認。予定通りだな。」

「ねえ、潜水艦は？」

と臯月。

「うーん、恐らく、青葉の後ろにいると思うんだけど： 青葉が邪魔で見えないなあ：

あ、待って！ いた！」

双眼鏡を覗いていた朝霜が言った。

呉から青葉を先頭に、伊58が続いていたのだった。

◇

「ふう。 やつと相生湾に着いたね。 どう、ゴージャ？ 大丈夫？」

「大丈夫でち。 浮上航行ならみんなと同じ速度で走れるでち。」

「瀬戸内の内海航路を、しかも日中に通るなんて、滅多にないのにねえ。」

呉から相生まで、瀬戸内を通って来た青葉と伊58。

巡洋艦サイズが内海航路を走るとなると、大型艦扱いとなる。その為、自由な航行は望めない。

速度は巡行14ノットでも早いくらいだった。

しかも、岸に近い航路もある。

海岸には見物人が少なからずいた。

ゆつくりした速度だったから、浜辺にいた人たちから手を振られ、往きかう船からも汽笛を鳴らされやってくる。

普通は、瀬戸内海は通らないから、珍しかったのだろう。

「あー！ 見えてきた。あれが到着地だね。機関中立から後進いっばーい！ 接岸

よーい！ ゴーヤも合せて！」

「よーい、よし、でちー！」

2隻は、臨時に作られた仮説棧橋に接岸した。

「ふう。到着う！」

と棧橋に降り立った。

そして、視線の先に軍服姿を確認した。

その前まで進んで敬礼する・・・

「お出迎え、恐縮です！ 楠木提督でいらっしやいますか？ 呉鎮守府所属、巡洋艦、青

葉です。ただいま到着致しましたあ!!」

「おなじく、伊58でちー!」

「ご苦労様。ここ相生警備部の楠木だ。よろしく。堅苦しい挨拶は無しにしよ

う。この後は二人の歓迎会を予定してるからね。それと・・・」

秦が棧橋にいるみんなを紹介した。

「秘書艦兼妻の鳳翔、娘の睦、朝霜、卯月、皐月、弥生だ。」

「よろしく!」

「? 妻、ですか? え? 鳳翔さん・・・ですよね? それに・・・娘ですか? え??」

青葉は、いまいち理解しがたい感じだった。

「ああ。鳳翔とはケツコンしているからな。なので俺の妻なんだ。後の五人も俺

たちの娘だ。」

「はあ・・・」

と青葉が呆れにた溜息をついていた。

「それと、青葉にはもう一人いるんだが・・・」

と秦の後ろに隠れていた少女を青葉の前に連れ出した。

「え?」

青葉が驚いた顔をする・・・

「お姉ちゃん・・・」

圭子も信じられないような顔をしていた・

「け、圭子ちゃん？」

青葉が名前を呼んだ。

「お、お姉ちゃん!!」

と言って圭子が青葉に飛びついた。

その目からは涙が流れていた。

「やっと、やっと会えた!! お姉ちゃん、お姉ちゃん!! 合いたかった!」

青葉が、しがみついて泣いている圭子をそつと抱きしめる。

「圭子ちゃん・・・ 大きくなったわね・・・ 元気してた？」

ぐすつ。

「うん。 お父さんもお母さんも、何も教えてくれないし： 私は合いたかったのに：」

「そう・・・ お父さん、お母さん、まだ怒ってるのね・・・」

そう言つてさらに強く抱きしめる青葉だった。

栈橋で抱き合う二人を見ていた鳳翔が、秦にそつと寄り添い、手を握つてきた。

秦はその手を・・・強く握り返していた。

（良かった・・・）と。

そして、

(はい。良かったと思います。)

と小声で話していた。

すると、秦の反対の手を握って来たヤツがいた。 弥生だ。

ん？

「どうした、弥生？」

「ん．．． ちよつと．．．」

その悲しそうな表情をみて、秦は思った。

「弥生．．． 寂しいかい？」

「ちよつと．．．」

というと、

「でも．．． なんか．．． 誰かに、甘えたいなって．．．」

そう言った。

「なら、俺に甘えろ。 遠慮はいらんぞ。 何しろ、今は、俺が父親だ。 そうだろ？」

「．．．うん！」

そう言うのと秦の腕にしがみついて来た。

結構な力だった。

「へへへへっ」

と笑って。

「さあ！ 感動の再会はそれくらいにして、中に入ろう。 歓迎会の用意がしてあるから。」

棧橋から食堂へと移動する面々。

圭子は青葉の腕に取り付いたまま離れようとはしなかった。

今回の歓迎会、お酒は・・・ない。

お酒を飲めるのは、秦と鳳翔くらいだったから。

保護者たる秦と鳳翔が進んで酒に酔う訳にはいかないのだ。

鳳翔の手料理による歓迎会だった。

歓迎会が終わって、圭子は自宅に帰って行った。

青葉と伊58は警備部の空いている部屋を使う事になった。

そうして、その日は過ぎて行った。

◇

次の日からは、青葉と伊58を使った訓練が始まった。

午前中は、空母・鳳翔、および鳳翔航空隊による、潜水艦探知訓練が行われた。

午後一番からは、青葉を仮想目標とした、航空隊による対艦攻撃訓練が行われること

になった。

皐月らが学校から帰ってきてからは、本格的な対潜探索・攻撃訓練と、対空迎撃訓練が行われることに。

青葉と伊58は一週間しかいないから、フル活動してもらっていた。

一日を通して、出ずっぱりなのは、空母・鳳翔に乗る、秦と鳳翔の二人だった。

そして・・

一週間の間、重巡洋艦・青葉には、学校から帰って来た圭子が便乗していた。

圭子は、妖精さんは見えなかったが、それでも、姉・青葉の傍に居たいと希望したからだった。

青葉の艦橋の司令官席に、一時的にとは言え圭子が座っていた。

「お姉ちゃん、すごい！」「みんなも、すごい！」

と言って、青葉や皐月らを見ているのだった。

秦は、休憩時間を利用して、圭子の両親に連絡を取っていた。

「もうすぐ、青葉が帰ります。帰る前に、お会いになりませんか？」と。

父親からは

「ウチを、艦娘になる、と勝手に出て行った娘の事など、知らん！」

と何度も言われた。

しかし、そのことで、妹の圭子が、寂しがっていること、普段の生活でも心のどこかに、穴が開いたようになっていいることを切々と訴えた。

「会わなくても、遠目でいいので、見に来ませんか？」と。

それでも父親は、首を縦に振ってくれることは無かった。

◇

そして、一週間が経ち、青葉と伊58が呉に帰る日になった。

「青葉、ゴージャ。一週間、ありがとう。こちらの訓練に付き合ってくれて、ものすごく助かったよ。」

「ありがとうございます。そう言われると、恐縮しちゃいます！ 帰ったら、青葉通信に載せますね。」

「ああ。期待させてもらうよ。二人とも、道中、気を付けてな。」

「はい。」

「はいこれ。二人の道中のお弁当よ。」

「わあ！ ありがとうございます。鳳翔さんのご飯、美味しいですから、期待しちゃいますう!!」

「ふふふつ。 ありがとう。 最高の褒め言葉ね。」

睦や臯月からも見送りに棧橋に来ていた。

「ゴージャ、気を付けてね。」

「青葉さんも、お元気で。」

「ええ。 みんなもね。」

後ろから圭子が進み出てきて、

「お姉ちゃん、元気でね。」

「うん。 圭子ちゃんも元気で。 お父さんとお母さんを、よろしく頼むわね。」

「うん。」

そう返事をする圭子の目には涙が溢れんばかりだった。

それは、青葉も同じだった。

3年ぶりに会った姉妹が、たった一週間で、また別れ別れになるのは、見ている秦たちも、心苦しかった。

圭子と青葉が抱きしめあって、別れの挨拶をしていた時、鳳翔が、岸壁に二人の人影があるのを見つけた。

「！ あ、あなた。 あれ・・・」

鳳翔が指を指し、秦が見ると・・・それは、圭子の両親だった。

(あれほど、頑なだったのに．．．やはり、ひとの親だな。)
と秦は思った。

「お父さん、お母さん．．．」

と青葉が声を出した。

「．．．わしは．．．まだお前を認めたわけじゃない。だが．．．」

「お父さん、まだそんなこと言つて！」

と圭子が声を上げる。

「だが、圭子が．．．ここまで姉の事を思っているとは、思わなかった。青葉、圭子。

お前たちは姉妹なのだ、改めて思わされたよ。それに．．．お前が私を」お父さん

“と言つてくれている事も、考えつかなかった。もう他人と思われていると思つてい

た．．．少なくとも．．．圭子。お前は姉の事を思つてやってくれ。青葉。お

前も妹の事を思つてやってくれ。今のわしに．．．言えるのは．．．ここまでだ．．．。

青葉よ。元気でな。」

「お父さん．．．うん。あたしはいつでも元気だよ。ほら。」

と言つて笑つてみせるが、その目からは涙がこぼれていた。

父親の隣で、母親が涙を流しながら、何度も頷いていた。

そして、

「元気だね。 青葉や・・・」

「うん。 あり が とう、 お母・・・さん。」

そう答える青葉の声は、涙声だった。

そして・・・

二人が自身の艦に乗り込んでいく。

暫くして、伊58の機関音がして、舳が解かれ、岸壁を離れていく。

続いて、重巡・青葉の機関音がして、同じく舳が解かれ、錨が巻き上げられ、岸壁を離れようとする。

すると、艦橋の窓から青葉がこちらを見て、敬礼をしていた。

秦、鳳翔らは、直立不動の姿勢をとって、返礼をした。

青葉が艦橋から叫ぶ・・・

「圭子ー！ お父さんとお母さんをよろしくねー！ お父さん、お母さん。 青葉、

行つてきまーす！」

と叫んでいた。

「お姉ちゃーん！！ お姉ちゃーん！！」

と大きく手を振る圭子だったが、涙が、止めどなく流れ落ちていた。

2隻が岸壁を離れ、湾の外に向かって進んでいく。

「前進、微速！」

と指示を出す青葉は、こぼれる涙を拭き、岸壁にいる両親に向けて、いつまでも敬礼をしていた。

艦の姿が徐々に小さくなる。

湾の外に出ると、2隻は速度を上げて、呉へと針路をとって行った。

2隻が見えなくなるまで、みな岸壁にいた。

「お父さん、お母さん・・・」

「圭子・・・ さあ。 帰ろう。」

「うん・・・」

「楠木さん。 頑固者だと思いでしょうが、わしは・・・まだ、納得しとらん。 しとらんが・・・」

「いきなり、納得しろなんて言いません。 理解さえ、して頂ければ。 それに・・・」

圭子ちゃんも青葉も、心優しい、いい娘さんじゃないですか。 大事になさってください。」「

「・・・そうかね・・・」

そう答えた父親の顔は、僅かに微笑んだように見えた。

「ええ。 そう思いますよ。」

「そう．．． ありがとう。では、お邪魔しました。」

そう言つて父親は頭を下げて、母親、圭子と共に帰つて行つた。

◇

岸壁に残つた秦たち。

「さあ。 私たちも帰りましょ。あなたたちには、まだやることがあるのよ？ 分かつてる？」

と皐月たちに向いてニツコリと鳳翔が言つた。

それを聞いて．．．

「ひえーっ 今日ばかりは、勘弁してえー！」

と皐月たちは、悲鳴に似た叫び声を上げて、逃げ散つて行つてしまった。

「あー！ もうー！」

鳳翔が呆れていた。

「はははっ。 鳳翔、逃げられちゃつたね。」

「しようがない子達ねえ。 じゃあ、その代り！ あなたとやるべきことがありますか

らね？」

「え？ 俺？」

「はい。」

とにっこり笑う鳳翔だったが・

「えくつと、それは・　今からなのかい、それとも夜の・・」

ポツと一瞬で顔が赤くなる鳳翔。

「い、今からじゃないですか！　もう！　エッチなんですから！」

と秦の肩を叩いた。

「じよ、冗談だよ！」

そう言う秦だったが、鳳翔に腕をとられて並んで帰る事自体には文句はなかった。

終わりのメド 一 二つ名一

6月も下旬になって、運用訓練も、ほぼメドがつきはじめていた。

「うん、訓練もほぼ終わり、かな。」

「そうですね。みんな、頑張ってくれましたから、思った以上に早く終わりそうですね。」

「となると、だな．．．ここにいられるのも、あと少し、という事になるなあ。」

「そうなりますね。どうしたんですか？」

「ん？ いや．．．」

「やっぱり、寂しいですか？」

「うん．．． 七人家族になってから、3カ月．．． 短かったけど、楽しい事、いろいろあったなって。 そう思うと寂しいなあ。」

「そうですね。 いろいろありましたし。 私もお母さんを体験出来て楽しかったですよ。」

二人して、ハハハと笑いあう。

「ここを出れば、次は．．．呉だな。」

「はい。当初の予定通りでは、そうなります。」

「いつくらいになるかな?」

「そうですね・・・ やっぱり、睦ちゃんたちの学校の1学期が終わる来月20日過ぎ、が一番、妥当ではないでしょうか?」

「やはり、そうなるか・・・」

「はい。」

ここ相生での、艦隊の、楠木艦隊の編成・訓練のメドがたち、いよいよ秦の本来の役目に戻ることになりそうだった。

本来の役目： 当初の予定では、春に呉鎮守府に提督として赴く筈であったが、諸々の事情により、ワンクッション、ここ相生におくことになってしまっていた。

まあ、そのおかげで、対潜駆逐艦隊としての整備が出来たのだが・・・

◇

秦は、横須賀の秋吉に連絡することにした。

画面に赤城が現れた。

「楠木です。秋吉提督は、いらつしやいますか?」

「あら? 楠木提督。こんにちは。秋吉提督ですか? うゝん、今、席を外してい

らつしやいますね。」

「そうなのですか。 どうしまししょう?」

「そうですねえ。 でも、すぐに戻られると思いますから、お待ちいただけますか?」

「まあ、そうしますか?」

「あ、そうそう。 今、そちらにお母様はいますか?」

「え? 鳳翔?」

「はい。」

「いるよ。 あ、ちよつと待ってね。 鳳翔? 赤城が替わってくれて。」

画面に映る人物が、秦から鳳翔に代わる。

「何かしら、赤城ちゃん。 あなたも元気そうね。」

「はい。 私はいつでも、元気モリモリ、ご飯モリモリですよ。」

とにこやかに答えていた。

「ふふふ。 ならいいわ。 それで、私に何用かしら?」

「はい。 お母様の健康保険証の事です。」

「保険証?」

「ええ。 今までは横須賀在勤でしたのでこちらに保管してあったのですが、今はそちらの在籍ですので、書換えをしておきました。」

「あら、ありがとうございます。」

「いえ、大したことはありませんから。で、これをそちらに郵送致しますので、受け取りをお願いいたします。」

「わかったわ。じゃあ、よろしくね。」

そこまでの会話が終わったところ、秋吉が戻って来た。

「ん？ 赤城、どうしたのだ？」

「あ、提督？ 実は、楠木提督から連絡が来ています。今、替わりますね？」

画面に秋吉がでた。

「お久しぶりです。提督。」

「おお。貴様もな。息災で何よりだ。で、何用かな？」

「はい。艦隊の整備および訓練が来月中旬を持って完了しそうとの、見積りが出ましたのでお知らせを、と思ひまして。」

「そうか！ ようやく纏まったか！ いや、よくやってくれたな。」

「はつ。ありがとうございます。」

「そう、畏まらなくてもいいぞ。"お父さん"。」

またもや弄ろうとする秋吉であった。

「中将……今ここで、その言い方は……勘弁してください……」

「ハハハハッ。事実なのに、何を言うか。貴様も満更ではないのだから？」

「それは・・・ ようですが・・・」

「ま、それはそうと、我が軍もついに、対潜専門の艦隊を持つに至る、か。」

「はい。 艦娘で編成するのは、結構骨が折れましたよ?」

「本当に、ご苦労だった。」

「ありがとうございます。」

「おお、そうだった。 忘れるところだった。」

「なにを・・・」

「貴様の艦隊に、正式名称を割り振ることになったのでな。」

「!? 正式名称ですか?」

そうやって秦は鳳翔を見やった。

「そうじゃ。 旗艦に空母・鳳翔を据え、駆逐艦・卯月、皐月、弥生、朝霜の四隻を合わ

せて、第一対潜駆逐艦隊とする。」

「“第一対潜駆逐艦隊”ですか・・・ 了解しました。 謹んで拝命致します。」

「よろしく頼むぞ。」

そうやって通信を終えた。

椅子にもたれて、ふう、と溜息を付く秦。

「第一対潜駆逐艦隊、ですか・・・」

「ああ。堅物な名前だな。確かに、対潜駆逐艦隊なんてなかったから、分からんでもないんだけど。」

「なにか、責任重大ですね。」

「やっぱり、そう思うよね。」

そこまで言つて、改めて盛大な溜息を付く秦だった。

それを傍で見ている鳳翔が、ふふふつと笑つていた。

◇

夕食後、居間に全員を集めた秦。

そこへ鳳翔がお茶を煎れて持つて来た。

一口啜つて、おもむろに話し出す。

「えー、皆の協力も有り、ついに、艦隊の訓練も終盤になってきた。そこで、本警備部

での訓練の終了を、横須賀から告げられたので、皆に報告するね。」

「え？ 終り??」

と朝霜が言う。

「ああ。終りだ。と言つても、発令は7月の中旬ころの予定だ。

を受ける事になったことも併せて報告するよ。」

「艦隊名?」

その際に、艦隊名

と返すのは皐月だ。

「艦隊名は．．」第一対潜駆逐艦隊だ。空母・鳳翔を航空戦隊とし、艦隊旗艦として、お前たち四人の対潜駆逐隊を加えた、我が軍初の「対潜専門艦隊」だよ。」

『へえ〜』

と五人の声だが、今一、反応が鈍いような．．．

「なんだ、反応が薄いなあ。」

呆れるように秦が言っていたが．．

「まあ、呼び名だからね。嬉しくもないかな。」

と皐月が言った。

これに秦は、ガクツと肩を落とした。

それを見た鳳翔が、

「あらあら。せつかく呼び名がついたのに、その言い方は無いんじゃないの？」

と言うものの、クスクスと笑っていた。

「もつとカツコいいのがいいぴょん！」

「そうだよね？ ねえねえ、しれーかん、かつこいいのとか、可愛いのか、ないの？」

「そ、そうは言ってもなあ．． 二つ名とか名乗ってるヤツ等はいたかな．． 例え

ば、どんな方がいいんだ？」

「例えばさあ、〃水雷乙女〃とか。」

「それだと、ダメじゃん？　だって、お母さんがいるんだよ？　航空母艦に魚雷や爆雷は無いよ？」

「そつかあ・・・」

うろううーん、と二つ名を考えるのにはいっばいっばいの五人だったが・・・

「空駆ける〃つてのは？」

「空〃？」

「うん。〃空駆ける水雷乙女〃。」

「それだと、空を飛んでるみたいだけど・・・」

皆が更に、うろくんと唸っていた。

そこに不意に弥生が

「別に、〃楠木艦隊〃でいいけど・・・」

と言った。

「まあ、それでいっつか。」

とは皐月。

結局、悩んだ挙句に、二つ名、というより通称としての〃楠木艦隊〃だったとは。

頭を搔く秦だった。

その時、睦がボソツと、

「母に導かれる水雷乙女だよね？」

と言った。

皆が「なに？」と首を傾げている・・

「ロゴとか、マークとか、なんだけど・・・女神が指さし、4本の矢がその方向に向かうような絵はどう？」

睦が机上で、紙に粗々のイラストを描いて見せた。

図の右寄りに、左を向いた女神を描き、腕を伸ばして指さし、その腕の下あたりに、4本の矢が指さした方向に向かう、というような感じの絵だ。

また、4本の矢は、一本がやや大きく、残り三本が同じ大きさだった。

その矢は、まっすぐなのだが、矢の後ろ方は、波を打っている。

指さした先に、蝶が二匹描いてあった。

イラストなので、全ては、水色背景に、黒色で描かれる。

「こんな感じなんだけど、どうかかな？」

「じゃあ、女神がお母さんで、四本の矢は、ボクたちだね？」

と臯月。

「この矢は・・ちよつと大きいのは、あたいかい？」

と朝霜。

「うん、そうだよ。 駆逐艦・朝霜がひと回り大きいから、と思つて。」

と説明する睦。

「この蝶々は、艦載機？」

とは卯月。

「うん。」

「でも、海だから、蝶々より、鷗がいいかな・・・」

「鷗、ねえ。 それもいいかも。」

その時、一緒に絵を見ていた弥生がボソツと、

「これ、いい。」

と。

「それじゃ、イラストはこれで決まりだね！」

と臯月がまとめた。

「いいの？」

と聞くのは鳳翔だった。

「うん。 お母さんも、描いてね。 みんな艦橋横に描くんだよ。 いいよね、父さん

？」

「ああ、構わないが・・・」

秦が皆の顔を見て、

「分かった。妖精さんをお願いして、描いてもらおう。

〃母に導かれし水雷乙女〃

として、ね。」

と。

「よろしくだぜ、しれーかん！」

「え？ その名前だと、私、ちよつと恥ずかしいですよ・・・」

と恥ずかしがる鳳翔が言った。

「そう？」

と返すのは朝霜。

「だってえ・・・いきなり〃母〃なんて、ちよつと・・・」

モジモジする鳳翔だった。

「じゃあ・・・〃女神〃にするのはどう？」

と対案を出すのは皐月だった。

「女神？」

「あ、それいいかも。」

それを聞いて鳳翔が、

「それなら・・・」

と了解したようだ。

「じゃ、決まりね！」

「判った。 ”女神に導かれし水雷乙女たち” だな。」

◇

「ところで！ さっきの話だけだよ。 七月にここを離れるのかい？」

そう聞くのは臯月だった。

「ああ。 そうなるな。」

「えええ??」

「それじゃあ、みんな転校？」

と聞くのは睦だ。

「そうだな。 転校だな。 皆も転校の手続きをとるけどね。 四人は、呉で学校に通

えたら、だけど。」

「お！ あたいはやつと勉強から離れられるう!!」

「あ！ ブルいびよん！ 勉強から離れるならみんなびよん？ 抜け駆けはダメびよん

!!」

そこへパンパンと手を叩いて、

「はい、そこまで！」

と鳳翔が声をだした。

「学校の件は置いておいて。一学期が終わると同時にここを離れるから、皆たくさん学んで遊べ。いいね？」

と言うのは、秦だった。

「やつぱり、皆とは……」

改めて聞くのは皐月。

「ああ。お前たちには悪いが、別れることになる。それは覚悟しておいてくれ。」
やはりか、みな俯いて黙ってしまった。

沈黙の時間が流れる。

「……わかったよ、父さん。みんなと楽しく、残りを過ごすよ。」

と皐月が言ってくれた。

「ああ。悪いな、お前たち。」

そう秦は言うど、こども達を抱きしめた。

「「わっ」」

こども達が声を上げるが、そんなことはお構いなしに、腕を広げて皆を抱きしめる。

「お前たち、みんな、俺の娘だ。誰がなんと言おうとな。」

その姿を見つめる鳳翔の目に、うつすらと涙が浮かんでいた。

「あつたばうじやん！ それ以外に何かがあるのさ！ ね、皆？」

そう言うのは朝霜だった。

「そうだよ。みんな家族なんだからね！」

そう言うのは睦だ。

みんな、大きく頷いている。

そうだよ、と。

その輪に鳳翔も加わってきた。

「私も家族ですよ。忘れないでください。」

と。

「ああ。 そうだ。 みんな大事な家族だ。」

秦がそう言って、さらにきつく抱きしめるのだった。

七人家族、皆がにこやかな笑顔だった。

「「父さん、大好き！」」

「「お母さん、大好き!!」」

「お前たち、みんな、大好きだぞ！」

「そうですよ。 みんな、大好きですよ。」

笑顔のまま、七人はしばらくそのまま、居間にいたのだった。

買い物と睦と。

7月に入ってから、いい天気が続いていた。

この日は学校が終わってから、訓練を休み、七人で買い物に姫路の街へ来ていた。

「おおー！ あれが世界遺産の姫路城か！」

「真っ白に見えるね。」

大修理を終えて、壁が白さを増していたため、真っ白に見えていた。

駅を出て、大手前通りから望む姫路城。通称、白鷺城とも言われる、世界遺産に登

録されたお城だ。

今日、ここ姫路に来たのは、睦たちの水着を買うためだ。

今度の休日に海水浴に行くために。

スクール水着は、学校指定のものがあ、既に購入済だが、普通に海水浴に行くには、スクール水着では、ちよつと・・・と相成ったのだが。

最近のスクール水着は、昔と違ってデザインが競泳用に近くなり、生地も競泳用に近く、薄くなっていた。

お店は、駅からお城に向かう通りの中にあつた。

この通りには、大小のお店がひしめき合っていた。

その中の大きめのビルに入っていた。

さすがに、夏ともなると水着売り場は拡張されている。

カラフルな柄やデザインの商品が所狭しと並ぶ。

こども達はその中へ突入していく。

「わああああい!!」

「ねえねえ、どれにする?」

「あ、これ、可愛いかも?」

「ええ、やっぱこれだよ!!」

「何言ってるんだよ! もっと大胆なのが!」

と、商品を絶賛物色中であつた。

「鳳翔も見てきなよ?」

と秦が促すが・・・

「え? 私はいいいです・・・」

「そうは、いけないさ。七人で行くんだからさ、鳳翔も。」

「は、はい・・・」

頬を赤めながら、おずおずと店内に入っていく。

各人が選んで、試着までしているようだった。

店内に入ってから、かれこれ1時間近く経過したころ、

「私はこれ！ 決めた！」

とは睦だ。

「うーちゃんも、きーめた！」

「私はこれにする。」

「ボクは・・・これだね！」

「ん？ 朝霜は？」

「あたいは、決まってるよん！」

「あとは、鳳翔かな？」

「はい・・・一応、決めました・・・」

どんなのを選んだのだろうか、顔が赤いんだが・・・

ワンピースかな、ビキニかな・・・と思いつつも、

「それじゃ、支払いつと。」

六人分を購入した秦だが、

「あれ？ 父さんののは？」

「俺のは、ちゃんと買ってあるよ。」

ホレ。」

「い、いつの間に・・・」

「お前さんたちが、あーでもない、こーでもないって言っている間にね。」

ははは、と笑っていた。

そのあと、売店でおやつになるものを買おう、と秦が言い出した。

「おやつ?」

「ああ。買ってすぐ食べてもいいけど、持って帰って温めなおせば十分に美味しいから。」

そういってとある売店の前にやってきた。

「姫路でおやつと言えば、これだろうな、やっぱり。」

看板に「御座候」と書いてあった。

「ゴザロウ?」

そう言うのは朝霜だった。

「ははは。違うよ。『ござさうろう』と読むんだよ。」

「『ゴザソウロウ?』」

「売ってるのは、これだよ。」

秦がガラスケースに並んでいる商品を指さした。

「あ、大判焼きだ!」

「え？ 回転焼きだよ。」

「違うよ。今川焼だよ。」

いろんな呼び名があるんだよな、これって。

「呼び名はいろいろだけど、同じ商品だからね。」

「紛らわしい・・・」

そう言うのは朝霜と皐月だった。

「でも、赤と白ってなに？」

「赤は、普通のおんこで、粒あん。ま、お店によつては漉し餡もあるけど。白は白あ

んだよ。」

秦は赤一箱、10ヶ入りを買ったのだった。

「帰ってから食べような。」

と。

◇

いくつかお店を廻つて、時間は・・・既に陽も暮れて、お腹の虫が鳴く頃合いになつていた。

「ねえねえ、しれーかん、あたいお腹空いたよお。」

「私も——」

朝霜の言葉に反応する睦たちだった。

「そうだな、そんな頃合いか。 だいたいの買い物は終わったのかな？」

「買い物の確認を、鳳翔に向いて聞く秦。」

「ええ。 粗方終わってますよ。」

「買い物袋を手持った状態で、秦に見せる。」

「じゃあ、今日はこつちで食事して帰ろう。 いい？」

【やったあ！】

「いいんですか？ 私は帰ってからでも、用意しますけど？」

とちよつと困惑な顔をする鳳翔だったが・・

「たまには、いいんじゃない？ そう言う鳳翔もゆつくりできると思うよ。」

「そう言つて秦たちは、ある駅から10分ほど歩いたお店にやってきた。」

「確か・・・ あ、あつたあつた。 ここだ。」

「父さん、ここは？」

と聞くのは睦だった。

「ここは、昔、来たことがあるお店だね。 骨付鶏のお店なんだけど。」

「「ホネツキドリ？」」

なんのこつちゃ的は声を上げるこども達。

「ああ。本店は四国・丸亀にあつてね。ここには何年か前に来て以来かな。」
ガラリと扉を開けてお店に入っていく。

店に入ると、香辛料の何とも言えない匂いが充満していた。

「わあ。すごい匂い。」

「なんか、よだれが出る匂いだね。」

「いい匂いだろ？」

ちようど、8人用の個室が空いているとの事だったので、そこを使わせてもらう事に
した。

「ここは、これ、鶏しかないからね。」

と秦がメニューを見ながら話をする。

「へえー。ねえ、〃ひなどり〃 おやどり〃 ってなに？」

「〃ひなどり〃 おやどり〃 は鶏の成長時期によつて分かれてるんだよ。若い鶏は〃

ひなどり〃、大人な鶏は〃おやどり〃 って言う感じかな。」

「ふーん。でも、ご飯系もあるよ？」

「鶏飯とお結びだね。みんな鶏が混ざってるから。でも、美味しいぞ。」

「ほーん。」

そんなみんなを横目に秦が注文をしていた。

「初めてだろうから、ひなどりとお結びを人数分で。」
と。

「え？ それだけ？」

「ん、来たらわかるよ。」

と含み笑いで答える秦だった。

「でも、その前に、なに、コレ？」

臯月が指を差して言ったのは、いわゆるお冷。ま、水だね。

「ん？ これは、言わずと知れたお冷だけど？」

「そうじゃないよ。なんなのさ、この大きさ。」

そう。

このお店で出されるお冷は、ジヨツキで来ていた。

「普通、こんなに要らないでしょ？」

「ははは。普通ならそうだな。でも、あとでわかるよ。」

と笑っている秦だった。

10分程待たされて、テーブルに料理がやってきた。

近づくとつれ、スパイシーな匂いが近づく。

「おお!! これが骨付鶏？」

「そうだよ。」

一人につきでっかい鶏ももが一本。

金属のお皿の上で、鶏肉がジューっと言ってる。

香辛料で鶏肉の表面が覆われている。

匂いは・・・スパイシーだ。それも、すっごいスパイシーな匂い!!

お皿の上は、鶏の油でいっぱいだ。

みんな、料理を見て固まっていた。

「こうやって食べるんだよ。」

と秦が見本を見せた。

もも肉を手で持って、直接、ガブリ!と喰らいついた。

肉を持った手は・・・アルミホイルで包まれているとはいえ、油と香辛料で、ギトギ

トになっていた。

「ん! 旨い。久しぶりに食うと旨いなあ。」

おしぼりは、ちよつと大きめのタオルだ。

このタオルで手の油を拭いていくのだが。

それを見て、みなもかぶりついていた。

「! スパイシー!!」

「結構、味が濃いね。でも、ウマー！」

「思ったより、香辛料が効いてますね。これは病み付きになる味ですねえ。」

とは鳳翔だが、鳳翔も口元は油と香辛料がべったりと付いていた。

おしぼりで拭いて、なおもかぶりついていた。

「このお肉、思ったより柔らかいね。」

「んー、これは喉が渴くよー。」

と言いながら水を飲む。

ジョッキで来ていたお冷。

みなガブ飲みだ。

「ん、なるほど。これならジョッキは必要だね！」

そう臯月が言っていたが、それを見ていた秦は、微笑んでいた。

(良かった、とりあえずは、口に合ったようだ。)

みな食べる事に夢中で、言葉を発しない。

そのうち、みな、鶏もも肉を骨だけの状態にしてしまった。

「あー、ウマかった！」

「うーん、唇がシビれる。」

そう言いながら、お結びに手を伸ばす。

「このお結びも、鶏、だね？」

「ああ、そうだよ。鶏肉が入ってるし、鶏の出汁でご飯を炊いてるからね。」

そう言つて、そうそう、と続きを話す。

「お結びは、この油を付けて食べると、また違つて美味しいぞ。」

「そうなの？」

と言つて、皐月が試すと・・・

「ホントだ！ 鶏を感じる！ これもウマ！」

そのうちに、

「ねえ、おやどり？ だっけ？ どうなの？」

「おやどりは、歯ごたえが違うよ。味付けは、まあ、同じだからね。」

「じゃあ、ちよつと食べてみたいなあ」

と睦。

「あの一本で来るのは、ちよつときついけど、何人かで一皿なら食べられるよね？」

とみんなに聞く。

すると、うん！ だつて。

じゃあ、と言うわけでは無いが、秦はおやどりを3皿追加注文した。

料理が届くと、身をほぐして、いくつかに切り分けた。

切り分けたお肉を頬張っていくこども達……。

「！ ホントだ。 歯ごたえが違う。」

「アタイは、やっぱり、ひなどりの方がいいかな？ ちよつと歯ごたえ？ よりちよつと硬いかな。」

「鶏の油は…… おやどりの方が多いでしょうか。」

と分析する鳳翔だ。

追加注文の3皿も平らげた七人だった。

「あー、食べた食べた。」

「スッパイシーだけど、旨かったね。」

「鳳翔はどうだった？」

「はい。 美味しかったですね。 でも、あれは家ではできないですね。 すっごい匂

いですから。 それに……。」

手のひらを見せて、

「こびりついたこの匂い。 これはかなりきついですし、なかなか落ちないと思います

よ。」

と。

「ははは。 そうだよな。 これは家ではやめとこうか。」

そう言つて皆で笑つた。

◇

その日はお店からまっすぐ警備部へと歸つて来た。

手についた匂いと油がなかなか取れなかつたので、そのままお風呂に入つて、落とすことにした。

歸り着いて、お風呂を沸かした。

沸くまでの間、居間で7人が寛いで・・・というより、ダラーンとしていた。

何しろ、歸り着いた時点で2200を過ぎていたから、眠くてたまらん！と、こども達は言つて居間の畳に寝つ転がってしまったのだ。

まずは、元気がある秦が先にお風呂に入った。

しばらくして、そこへ・・・

ガラリと扉が開くと、睦が立っていた。タオルで隠すこともなく、だ。

「いっしょにはいろ。」
と。

「おわっ！」

と驚いた秦だった。

そんな秦を気にせず、掛け湯をして湯船に入つてきた。

「お邪魔するね。 んー、 あったかあい。」

と言って、 秦の隣に入ってきたのだった。

並んで湯船に浸かっている・

「そういえば、 睦と一緒に入るのは・ ・ ・ 久しぶりだな。」

「そうだよ・ ・ ・」

いつもの元気な声ではなく、 なにか沈んだような声だった。

「睦・ ・ ・ どうした？ なんが悪いことしたかな？」

「ん？ うん・ ・ ・ そうじゃないよ。 まあ、 毎日楽しくて、 賑やかで、 さ。 でも・ ・ ・」

少し間が開いた。

そして、 睦が、 秦にもたれてきた。 頭を秦の胸に寄せて・ ・ ・

「楽しいのはいんだけど・ ・ ・ 父さんに甘えられない、 独り占めできないよ・ ・ ・」

「・ ・ ・ そうか。 それは、 悪かったな・ ・ ・ ごめんな・ ・ ・」

そう言って睦を抱き寄せた。

睦の身体は、 秦よりもかなり小さい。

ものすごく華奢な体つきだった。

「そうだよ・ ・ ・ もっと構ってよ・ ・ ・」

睦の目には、 うつすらと涙が・ ・ ・

「せっかく、父さんの娘になったのに、甘えさせてもらってないよ・・・」
そうか、と言って睦を抱きしめる秦だった。

「睦は、俺や鳳翔の言いたいことを、すぐ理解してくれるから、俺たちはお前に甘えてたんだな。」

まだまだこども、だと思っていた。

それでも、良く気が付く子とも思っていた。

「睦だけに構うのは難しいけど、その時は思いっきり甘えていいぞ。　なんせ、お前は俺の娘だからな。」

「うん。」

そう言つて秦の胸に顔を埋めていた。

身体を洗い、頭も洗つて、再び湯船に浸かっていた。　秦の隣に。

そして・・・

「父さん、大好きだよ。」

そう言つて、先にお風呂から上がつて行つた睦だった。

残された秦は、湯船の縁に座つて入口を見ていた。

ここのお風呂は・・・半露天風呂の形になっている。　湯船から空が見えるのだが、秦

は縁に座つて星空を眺めていた。

(みんなを平等に愛せれば、いいんだが・・・)

暫く湯船に浸かっていたが、秦もお風呂から上がることにした。

寝間着に着替え、居間に入ると、まだこども達が鳳翔を膝枕に転がっていた。

「あ、あなた。お帰りなさい。」

「ああ。睦は？」

「はい、もう部屋に行きましたよ。」

「そうか・・・」

そして・・・

「おきろ！ 風呂だぞ!!」

と転がっているこども達に声を掛けて、みなを風呂に入れていく。

「んー、眠いぴょん・・・」

「さあ、お風呂に入ったら、布団で寝ていいぞ。」

と、一種の餌で釣っていく。

「「ふわああああい・・・」」

と洗々なのか、だらだらなのか、なんとか朝霜、皐月、卯月、弥生をお風呂に放り込んだ。

「まったく。」

と呆れ顔の秦であった。

「フフフ、お疲れ様です。」

「鳳翔もお風呂、入ってよ?」

「はい。後で頂きます。ところで・・・」

「ん?」

「何か、お風呂で何かあったんですか?」

「なんで?」

「睦ちゃんが、暗い顔をして部屋へ行きましたから、何かあったのかなって・・・」

「何もな・い・い・い・いや、お前さんには言っておこうか・・・。」

秦がいったん、目を瞑って話した。

「もつと甘えたい、もつと構って、って言われたんだ・・睦に・・・」

「え・・・」

「もちろん、俺としては蔑ろにしているつもりはないけど・・睦はそうは思ってなかった、ってことかな。」

「そんなことは・・・」

「ああ。睦もそれは分かっているんだ。ただ・・・」

「もつと自分に構って欲しいと・・・」

「うん。」

「あなた・・・」

悲しそうな顔をして秦をみている鳳翔。

「そんな悲しい顔をしないでくれ。 やっぱり、睦は俺に、俺たちに、気を遣ってくれていたんだ。 あの子は、気が利いて頭もいいから、俺たちが思っていることを察していたんだろうな。」

「・・・」

「父親として、落第点なのかな・・・ ハハハハ・・・」

その笑いは、完全に乾いた笑いだった。

「そ、そんなこと、ありません！ あなたは、十分に父親出来ていますよ。 私が保証します。 ですから・・・」

「ありがとう、鳳翔。」

その時、朝霜らがお風呂から上がってきて、

「眠いから、もう寝るね・・・」

と言つて4人は部屋へと入っていった。

「さあ、鳳翔もお風呂。」

「ええ。 じゃあ、頂きますね。」

そう言つて、何か言いたそうな顔をしていたが、その思いを伏せたまま、お風呂へと入つていった。

居間で一人、残された秦だったが・・・

ふと、人の気配を感じて振り向くと、入り口に睦が立っていた。

「どうした？ 眠れないのか？」

「うん・・・」

その場で立つたままの睦に、秦が声を掛ける。

「立つてないで、こっちへおいで。ここに来て。」

扉を閉めて、睦が秦の傍まで来て・・・

秦の胡座の上に座つた。

「い・・・いいでしょ？」

「ああ。」

「あつたかい・・・」

胡座の上で、秦に身体を預けて猫のように丸くなる睦。

「そうか・・・ 睦・・・ 寂しくさせてごめん。こんな父親で。」

「うううん、そんなことない。父さんは十分、父さんしてるよ。我が儘なんだ、私。

だから・・・ たまには、もっと甘えたい・・・ こんなふう・・・」

「そうか。 なら、皆がうらやむくらいに、甘えていいんだぞ。 俺は、受け止めるか
ら……。 な？」

「うん。 そうさせて貰うよ。 お父さん……」

秦の胸に顔を埋めたまま、そう言った。

そんな睦を優しく抱きしめた。

暫く、秦の胡坐の上にはいた睦だったが、秦が気がつくくと、軽い寝息をしていた。

秦の腕の中で、安心したかのように。

(大好きだよ、睦……)

そう言つて、そうつと抱きしめる秦だった。

暫くして鳳翔が帰ってきた。

髪を下ろし、湯上がりでやってきた。

「あら、あなた。 睦ちゃんが……」

しーっと指を口の前に立てた。

「ん。 寝ちやったよ。」

と小声で。

鳳翔が秦の傍に来て、秦の前に膝をついた。

「やっぱり、甘えたいんですね。 こんなに丸くなつて。」

そう言つて睦の頭を優しく撫でていた。

何度か撫でた時、睦の上から鳳翔も秦に抱きついてきた。

「私も、睦ちゃんのお母さんなんだから、甘えていいのよ。」
と。

さくらに、

「睦ちゃんは、あなたと私の、娘、ですからね。」

そう言うのと秦の顔を、にこりとして見あげた。

秦は、その笑顔にたまらず、鳳翔の唇を塞いだ。

二人の口づけの音だけが小さく響く・・

唇が離れ、二人が見あう。

「お願いがあるんだけど・・・」

「はい。いいですよ。」

秦が最後まで言わなかったが、鳳翔は分かったようだった。

「今日は、三人で寝ましょ。」

「ああ。すまない。」

「何言ってるんですか。私たちは夫婦で、親子ですよ。」

そう微笑んだ。

秦が眠る睦を抱きあげ、寝室へと入っていった。
傍らには鳳翔が付き添って。

睦をベッドの真ん中に寝かせ、睦の右に秦、左に鳳翔が入った。
そして・・・

「おやすみ。」
と。

三人の心地よさそうな寝息が聞こえだした。
そして、次の日を迎えるのだった。

海水浴だ！

七月に入って最初の休日。

秦たち七人は海水浴に来ていた。

相生における、最初で最後の海水浴だ。

そしてここは、春に潮干狩りをした海岸。

浜の近くにある民宿に一拍する予定だ。

警備部をお昼前に出て、お昼頃に民宿に到着していた。

荷物を預け、早速、水着に着替えていた。

やはり、というべきか、最初に着替えが終わったのは秦だった。

宿からパラソルとレジャーシートを借りて、宿の前で皆を待っていた。

ボクサーパンツスタイルの海パンに薄い青色のパーカーを着て、海を見ていた。

(いい天気だ．．． 今日、は、焼けるぞ、こりゃ．．．)

そう思っていると、着替えが終わったらしく、賑やかな声がしてきた。

振り向くと、同時に飛び出してきたのは臯月だった。

「へへっ、ボクが一番だね！」

「私が2番!」

と2番手は睦だった。

臯月と睦の体格は、そう違わないが、やや睦の方が胸がある、ようだった。

二人はタンキニだった。

タンクトップの丈が、やや短いタイプだった。

ほぼ色違いの同じ様なデザインだった。

「お着替え、終わりびよん!」

と出てきたのは卯月だ。

卯月もセパレートタイプの水着なのだが、くびれが・・・目立たない・・・

(うーん、お子ちゃまにしか、見えん・・・)

「終わったよ。」

と続いて出てきたのは弥生だ。

弥生も臯月と似たような体形だが、色遣いはやや大人しい感じだ。

なぜか同じようなタンキニ・・・。

更には短パンを穿いている。

「着替えたぜ!」

と元氣よく出てきたのは朝霜だ。

ビキニ。

「どうでござー！」

と胸を張る。

まあ、体格も一番大きいし、こども達のなかでは、胸とくびれがある方だから、そこそこ似合っていた。

「おお。朝霜は良く似合ってるな。」

「へへん！ そうだろ！」

「睦も皐月も、みんな良く似合ってるぞ。」

「へへへ、いいでしょ？」

と褒めるとにこやかに笑ってくれる。

あとは、鳳翔だが・・

「お待たせしました・・・」

と言つて最後に着替えてきた。

ビキニなんだが、腰にはパレオをしていた。

おおお、と秦は内心、驚いていた。

秦は、鳳翔の事だから、もつとお淑やかなデザインを選ぶのかと思つていたのだった。

鳳翔も恥ずかしそうに、おずおずと出てきたのだが、睦らに捕まってしまった。

「ほら、お母さん、行くよ!」

「あ、そんなに引つ張らないで。」

「父さんも、早く!」

「お、おう。」

「父さんも行くよ!」

「あんだよ? 鼻の下伸ばしてんじゃん、しれーかん。」

凶星。

秦は、やっぱり、ビキニ姿の鳳翔に見とれていた。

その視線に気がついた鳳翔は、更に顔を赤めていた。

「ほ、ほら。いきなり焼くと、後で痛いぞ!」

パラソルを浜辺にたてて、シートを敷いて座りながら、注意喚起。

「え、早く入りたいよ。」

「あなたたち、日焼け止めを塗らないと、後で痛いわよ?」

と鳳翔にも言われて、渋々言うことを聞く睦達。

日焼け止めのおイルを塗る睦たち。

手、足、首、胴体の前は自分で塗れるが、どうしても背中側は自分では塗れない。

睦は臍月に、卯月は弥生に塗られていた。

終わると交代して塗られた。

朝霜は秦に、

「ねえねえ、塗ってよ？」

とおねだり。

「ああ、いいよ。」

と言って、オイルを塗っていた。

へへへと笑いながら塗られる朝霜。

「なんか、くすぐったーい。」

「お前さんのことだ。 散々、焼くんだろうから、念入りに塗ってやったぞ。」

と言って塗り終わった背中を叩いた。

「ほら、行つて来い！」

「イツテエなあ、もう。」

そう言いながらも、海へと走って行った。

五人が遠浅の海に入っていく。

わーわー、キヤーキヤー、言いながら。

その姿を確認した鳳翔が

「あなたも、塗りましょうか？」

と言つて、秦にもオイルを塗つてくれることに。

「うん、よろしく。」

背中を鳳翔に向けた。

オイルのヒンヤリした感触が背中を伝う。

すぐにその感覚が止んだ。

不思議に思うと、背中にこそばゆい感覚がしてきた。

首を傾げてみると、鳳翔が背中にもたれていた。というより、抱き着いている方が

いいかもしれない。

「鳳翔? どした?」

「・・・はい・・・もう少し、このままで・・・」

こそばゆい感覚は、鳳翔の息だった。

パラソルの下で、秦の背中に抱き着いている鳳翔・・・

その手を取つて、握りしめる秦・・・

海からの潮風が二人の周りを通り過ぎていく・・・

充分に秦の背中を堪能した鳳翔が、オイル塗りを再開する。

「フフフ、大きな背中ですね。頼りがいがあります。」

「そうかい? 俺自身は背中が見えないから、鳳翔に見てもらわないとね。」

「はい。いつでも、見ていますから。」

「ああ。頼むよ。」

二人の頬が赤い。

塗り終えると、交代だ。

今度は秦が鳳翔の背中にオイルを塗る。

鳳翔も、オイルのヒンヤリした感触を背中に感じていた。

そして・・・その感触がすぐに止んだ。

今度は秦が鳳翔を後ろから抱きしめていた。

「・・・色の白い、きれいな肌だ。それにしても小さな背中だ。」

「や・・・もう・・・」

頬を赤くする鳳翔だ。

「もう少し、このままで・・・ね？」

「・・・はい・・・」

しばし、後ろから鳳翔を抱きしめていた。

「鳳翔、鳳翔・・・ ああ、鳳翔の背中だ・・・」

そう言つて頬を背中に寄せた。

「はい。私はいつでもあなたの傍にいますよ。」

と鳳翔が答えていた。

そして、オイルを再び塗り出した。

「すまないが、髪を上げてくれる?」

「あ、はい。」

鳳翔が長い髪を上げた。

綺麗なうなじだった。

(う、この格好、そそるなあ・・・)

首の後ろも念入りにオイルを塗った。

「これでよし!」

「ありがとうございます、あなた。」

「いや、こつちこそ。」

そのうちに、皐月たちが肩で息をしながら帰って来た。

「あー、疲れたあ。」

そう言つてパラソルの下で寝つ転がった。

「はしやぎ過ぎだ。」

と秦が言つたが、

「じゃあ、今度は俺たちが海に入る番だな。」

行こう、鳳翔。」

と言つて鳳翔の手を取つて、二人して海へと向かつた。波打ち際からそろりと海へと入つて行つた。

「あ、ちよつと冷たいですね。」

「そうだな。でも、気持ちいいな。」

そう言いつつ、沖の方まで歩いていく。

ここの海岸は遠浅なので、浜辺から30m位までは水深が1m以下だ。さらに、そこから今度は50m位までが浅くなる。ひざ下くらいまで。

底に足がつくが、ゆつたりと泳ぐ二人。

つかず離れず、お互いを視界に入れたまま、ゆつたりと。

沖合20mくらいまで泳いできて、秦が立つた。

それに合わせて鳳翔も泳ぐのを止めて立とうとしたが、

「わっ」

足を着こうとした海底がそこだけ深かつたらしく、沈みかけて、秦にしがみついた。

「大丈夫か？」

「ええ。ちよつとここだけ深かつたみたいです。」

と言いながら、見つめ、笑いあう二人。

そして・・・鳳翔が目を閉じ、顔を上げる。

それに呼応するかのようには、秦が顔を下げ、二人の唇が重なる。

海の上で、二人の口付け。

海水でしょっぱい味がしていた。

遮るものがない海の上だったが、結構、人は見ていなかったりする。

見られていても、イチヤついている、バカツプルが居る、と思われるだけだったが：

その姿は、偶然にも睦たちに見られていた・

「あちゃああ。」

「どうしたのさ?」

「・・・あれ・・・」

と言って指をさした。その方向には・

「またやってるよ。あの二人。」

「ん、どれどれって、もう、アツアツぴよん。こっちまで恥ずかしくなるぴよん。」

「暑いのが、余計に熱くなるわ。」

「でも、父さんとお母さん、仲がいい証拠だよ。」

「ま、確かにね。」

「それは、否定しないなあ。」

そんな事を言っているうちに、

「あ！ 帰って来るよ。」

二人が海から上がって、パラソルのところまで帰って来た。

「ふう。水が気持ちいいね。」

「ええ。」

にこやかにそう言う二人だったが、睦たち五人の眼は・視線は冷たかった。

「ふううん、気持ちよかったのね、父さん、お母さん？」

「ん？」

「まったく、海の上でもイチャつくことは無いんじゃない？」

「え？ ひよつとして・見てた？」

五人が、大きく首を上下に、ウンウン、と言っていた。

途端に真っ赤になる、鳳翔と秦だ。

「やだ、恥ずかし！」

と秦の後ろに隠れてしまう鳳翔だが、今更そんな行動を取っても、見られていたのだから、意味はまったくなきない。

「ま、あたいらは見慣れたけどねえ。」

「以後気をつけるように！ いい？ 父さん、お母さん。分かった？」

五人に言われ、秦と鳳翔が小さくなる。

「・・・はい。以後気をつけます・・・。」

と小声だった。

「分かればよろしい。」

と上から目線は臯月だ。

言われたものの、二人はお互いの視線を合わせて微笑んでいた。

◇

その日は夕方まで海で、浜辺で、七人は大いに遊んだ。

遊び疲れて民宿へと帰ってきた。

「はあ、疲れたよ。」

「でも、楽しかったね。」

「あたいは、背中イタイよ。」

日焼け止めのオイルを塗ったにもかかわらず、皆、黒く焼けていた。

ただ、オイルのおかげで、痛みはなかった。一人を除いて。

「ひいひい、痛いよ。」 しれーかん、なんとかなんないかい?」

朝霜の、特に肩から背中に掛けて、良く焼けて、赤くなっていた。

「こりゃ、痛いだろ? 良く焼けたなあ。」

「感心してないで、なんとかかしてよ。」

「はいはい、火傷に効く塗り薬なら持ってきてるけど、塗る？」
「何でもいいから、やって！」

「分かったけど、その前に、お風呂で潮を落としてこないと。」

痛そうだが、潮が抜けないと、いつまで経ってもヒリヒリする。

こども達だけでお風呂に入った。

お風呂に入ると、余計にヒリヒリして痛む。

だから、水で洗うんだが・・・

それでも、水があたるだけでも痛かったらしい。

「ヒイヒイヒイ！」

朝霜の悲鳴が外にまで聞こえる。

「朝霜ちゃん、ちゃんと潮を落とさないよ、ずっと痛いよ？」

「マジで、痛いんだってば！」

「だから言っただじやん。あんまり陽の下ばかりにいるからだよ？」

「こんなになるって思わないって！」

「朝霜ちゃん、我慢ね。ここのボディソープは、滲みないみたいだから。」

弥生に背中を洗ってもらう朝霜だが、それでも痛いらしい・・・

「ううううう。」

と涙目で我慢する朝霜だった。

睦や皐月たちは、焼けてはいたが、朝霜の様に痛くはなかったようだった。

ようやくお風呂から上がってきた朝霜は、速攻で秦と鳳翔の前まで来て

「塗って!」

とやってきた。

「はいはい。ちよつと滲みるわよ。我慢してね。」

と優しく鳳翔が言うが、塗り薬を塗る指が触れるだけで、

「ヒイツ」

と声を上げていた。

「動かないでね?」

「ううううっう・・・」

今にも泣き出しそうな顔の朝霜だった。

「睦たちはいいのか?」

「あたし達は大丈夫だよ。あとで痒くなるんだろうけどさ。」

「うーちゃんも大丈夫ぴよん。」

「はい。これで塗れたわよ。ちよつとはましでしょ?」

「うん・・・ちよつとピンヤリして、気持ちいいかも。でも・・・イタイ・・・」

涙目の朝霜だが、それでもお腹は減る。

民宿の広間で夕食タイムとなった。

遊びまくったこともあり、皆よく食べた。

ただ一人、朝霜を除いて。

シャツを着ていたが、腕が動くたびにシャツが皮膚にあたって、

「ヒイツ」

と叫んでいた。それも涙目だった。

食べるどころではなかったようで、秦や鳳翔から“かわいそうだが、替わってやれな

い”と言われていた。

夕食を食べ終わると、部屋に布団を敷いて横になった。

朝霜はうつ伏せで布団に転がった。

掛け布団を掛けると、背中が痛いから、と言って掛け布団は下半身だけだ。

可哀そうに、と思う秦だが、こればかりはどうしようもない。

卯月と皐月は布団に入ると、疲れからかすぐに寝入ってしまった。

秦と鳳翔は隣り合って座っていた。

「あらま。お疲れの様だな。」

「かなり、はしゃいでましたから。」

胡坐を掻いてる秦の膝を枕に、睦が寝ていた。

最近、秦に甘えるようになった弥生もまた、秦にもたれて寝ていた。

「あらあら。あなた、大人気ですね。」

「皆に好かれるのは、いいことだ、と思うよ。」

と二人顔を見やつて微笑んでいた。

海からの風が部屋を抜けていく。

睦と弥生の頭を優しく撫でる秦だった。

良い風だ、と思つてしていると、隣の鳳翔が秦にもたれて寝ていた。

「お前さんも、だいぶはしゃいでいたもんな。」

スー、スーと三者三様ではあったが、小気味よい寝息だった。

睦と弥生をそれぞれの布団に寝かせた。

弥生は猫のように丸まっている。

睦と弥生の額にキスをして、（お休み。）と。

鳳翔も布団に寝かせて、同じ布団に秦も入った。

片腕で抱いて、（お休み。）と言つて口づけをして、眠りに就いた。

◇

翌朝。

波の音で目が覚めたのは秦だった。

上半身を起こして、窓の外を見た。

既に明るかったが、朝の空気は冷たかった。

こども達は、まだまだ夢の中の様だった。

隣の鳳翔も、まだまだ夢の中・・・と思つたら、寝たまま目を開けて、こつちを見ていた。

「おはよう。」

そう小声で。

「おはようございませす、あなた。よく眠れましたか？」

「ああ。ぐっすりだね。」

「鳳翔は？」

「はい。よく眠れたと。」

そう言つて上半身を起こして、二人並んで座つた。

こども達が寝ているのをいいことに、二人の顔が近づく。

そして唇が合わさる。

ちゅ、むちゅ・・・

と、音にならない音がしていた。

唇が離れると二人もたれ合っていた。

二人して朝の冷たい空気に身を置いていた。

「ちよつと冷えるか。」

「ええ。少し。」

そう言つて掛け布団をかぶる二人。

フフフと笑いあつて寄り添っていた。

それを見ている目があつた・・

「まったく、朝から、何やつてんだか。」

ビクツとする秦と鳳翔。

声を出したのは睦だった。

「お、起きてたのか?」

一気に顔が赤くなる二人。

「もう、わたし達のいないところでやってよね。」

あちやー、と思ふ二人だった。

その声で皆が起き出した。

「ん・・うん? あ、おはよう。」

ふわああああ! つと伸びをする皐月と弥生。

「あにがあつたの？ 父さんとお母さん、顔が赤いよ？」

「おはよう。 皐月ちゃん。 まただよ、この二人。 朝からさあ・・・」

「また？ どこでもイチヤつくんだから、まったく。」

「こら！ 話を広げるんじゃない！」

「ええ？ だって、事実でしょ？」

「事実でも、拡げないで。」

ハイハイ、と頷く睦と皐月。

まったく頭が上がらない“親”であつた。

皆起きだしてきたが、一人、朝霜はまだ寝ていた。

「ああ、まだ寝てるよ？」

「もう少し寝かせてやりな。 昨日は、時々痛がつて起きてたみたいだし。」

「え、そうなの？」

「ああ。 可哀そうなくらいだったよ。 涙目で“イタイよー”つてね。 だから無理

に起こさないでおこう。 寝れるだけでもマシだからさ。」

「「「そうだね。」」」

起きていたみんなで朝霜の寝顔を覗き込んでいた。

しばらくの間、静かに見ていたが、それに気づいたのか、朝霜が起きたようだった。

うっとうっとうん．．

と言ったかと思うと、俯せに寝たままで目を開けた。

「おはよう！」

「お、おう、おはよ．．」

と言つて体を起こそうとして．．

「ヒイツツ！」

と悲鳴を上げたのだった。

まだ痛いようだ．．

「だ、大丈夫？」

「だ、ダイジョーブじゃない．． イツタイよ．．」

ぐすんつと涙ぐむ朝霜だった。

「ありやあ、まだ痛かったのかい？」

「うん．． 昨日よりかはマシだけどき、なんか痛いし、熱い．．」

「じゃあ、朝ごはんの後にもう一度、薬を塗りましょうね。」

「うん、よろしく、お母さん．．」

なんか弱弱しい朝霜だったのだが、

「このか弱い朝霜もいいな。」

とは秦だったがみんなは、???、だった。

「普段の元氣いっぱいな朝霜と、か弱い朝霜のギャップが大きすぎて、可愛らしいなあと思つてさ。」

「うう、しれーかんのヘンタイ・・・そんなんいいから、何とかしてよー。」
はははつと笑う秦だった。

痛がる朝霜を何とか連れ出して朝食を済ませた七人。

再び部屋で、休んでいた。

「帰るまでまだ時間があるから、海へ行つてきてもいいぞ。」

そう秦が言うと、

「じゃあ、行つてくるね!」

と出かけていったのは、皐月と卯月だった。

「ん? 睦と弥生はいいのか?」

「うん。あたしはいいよ。だって、こーやって出来るんだもん。」

そう言つて睦と弥生は秦にもたれてきた。

「へへへへ。」

と笑っていた。

「あらあら。大人気ですね、あなた。」

「あーん、あたかもー。」

朝霜がそう言いながら、這つて秦の膝に取り付いてきた。「まったくお前たちは。」

秦が呆れていたが、

「フフフ。それじゃあ、私も。」

と鳳翔も秦にもたれてきた。

「「え?」」

睦と弥生、朝霜までもが驚いていた。

(お母さんも、甘えたいんだ・・)

そう思ったのだった。

「ははは。お前たち、しょうがないなあ。」

と言つてそれぞれの頭を優しく撫でる秦。

五人の顔は笑顔であつた。

こうして、楽しかった海水浴が終わつていくのだった。

次への内示

この日、こども達が学校へ行ったあと、秦と鳳翔は飛行艇に乗って東へと向かった。た。

「すまないね、急に横須賀に行くことになって。」

「いえ。秘書艦としては、提督に付き添うのが当然ですから、気になさらないでください。」

はは、と秦が苦笑いをする。

この飛行艇には、操縦室の搭乗員以外の客は、秦と鳳翔の二人だけだった。

「まあ、二人だけの、小旅行、とも言えなくもないか。」

「そういう見方もありますね。ウフフフ。」

そう言うと二人して頬を赤めていた。

今日の目的地は、横須賀鎮守府。

その目的は、辞令の内示を受けるため。

いよいよ、相生での艦隊整備が終わりを迎える。

その後の秦の、いや、秦たちの行き先が正式に伝えられるのだ。

「今日の予定はどうなりますか？」

「ああ。このまま横須賀にはあと2時間弱で着くな。その後、内示を受けて、そのままとんぼ返りだね。」

「では、帰り着くのは・・・」

「早くても1500くらいかな。睦達には、日帰り、と言つてあるから、夕方までには

帰らないといけないなあ。」

「そうですね。じゃあ・・・それまでは・・・」

そういうと、鳳翔が秦の肩にもたれてきた。

「ふふふ。あな た。」

最近よく甘えるようになった鳳翔だった。

「“ていとくく”、じゃないのか？それに、もう襷をハズしてもいいぞ。」

「え？ いいのですか？」

「ああ。久しぶりに、襷掛けをしていない鳳翔も見たいなあ、なんてね。」

もう、と頬を膨らませる鳳翔だった。

襷をハズして、また秦にもたれ掛かる鳳翔だった。

そんな二人の乗客を乗せた飛行艇は安定飛行に移っていった。

その飛行艇を追うように姫路の飛行場から護衛戦闘機が飛び上がってきた。

空母・鳳翔の艦上戦闘機の1小隊4機の烈風だった。

胴体下に増槽を抱えていた。

飛行艇が相生湾を離水して約90分。

秦と鳳翔に乗せた飛行艇は、三浦半島は横須賀鎮守府の港に着水した。

港外に着水して、棧橋まで滑走してきた。

棧橋に着くと、秦と鳳翔が降り立った。

約半年ぶりに、横須賀の地を踏む二人であった。

出撃や演習に出ているのだろう。

停泊している艦船は少なかった。

鎮守府に着くと、早速、執務室へと向かった。

◇

ドアをノックし、室内に入る二人。

「楠木准将、および秘書艦鳳翔、ただいま到着致しました。」

「おお。 やつと来たか！ 入ってくれ。 久しいの。」

「はい。 久方ぶりであります。 秋吉中将。」

提督席の脇に立つ女性、赤城が口を開く。

「お母様もお元気そうで、何よりです。」

「赤城ちゃんも、ね。」

挨拶もそこそこに、

「では、異動の内示を伝える。」

「ハッ。」

秦と鳳翔が直立不動の姿勢を取る。

咳払いを一つして、

「楠木准将、来る七月二十日付を以て、横須賀鎮守府直属を解き、呉鎮守府提督を命ず。」

「はい。謹んで拜命致します。」

「なお、貴殿の秘書艦、および所属艦艇も同様に、呉鎮守府所属とする。」

「はい。」

「以上だ。これで貴様も鎮守府持ちとなるわけだが、どうだ？」

「どう、と言われましても、やることは変わりませんからね。」

「ま、そうだがな。現在、呉には、臨時で春から大佐が提督代理をしている。名を大

石と言う。彼も貴様の配下となる。これが彼の辞令だ。一緒に持つて行つてく

れ。」

「は。了解しました。」

「それとは別に・・・」

と言つて、そこそ分厚い書類を引き出しから出して、机の上にドカツと置いた。「中将、それは？」

「これは、おおかた半年前までの呉の内部調査の結果の資料だ。もちろん、現状とは多少違ふとは思ふがな。調べたのは、憲兵の井藤本部長のチームだ。」

あ、と思つた。

「昨年、貴様がここに來てから、極秘裏に呉の調査を依頼していたんだ。その結果が、この資料だ。見てみるがいい。」

報告書を手に取り、大まかに、ざあつと見てみると、前提督は、かなり無茶をしていたようだった。

特に、逃亡し連れ戻された艦娘は、一人二人ではなく、相当数が書き込まれていた。もちろん、鳳翔もそのうちの一人だった。

「なんですか、この数字は。逃亡の件は知ってはいましたが・・ここまでとは。それに、非人道的行為も、ですか・・」

まともな運営ではない、と直ぐに理解した秦が声を上げる。

パワハラを通り越して暴力行為と誰もが判る内容だった。

「驚いただろ？ 最初に見たときは、目を疑つた。まったく、酷いものだね。皆、よく耐えていたものだと感じすらする。」

「では・・・私の役目は・・・」

「察しの通り、このおかしな状況を無くすため。これが第一となる。もつとも、敵との戦闘をしながら、になるのだがな。」

「となると・・・、いま派遣されている大石大佐は・・・」

「とりあえず、現状維持が目的だった。もつとも、先任だった提督とはやり方が違うから、それだけでも改善されていると思ってくれればいい。」

ハア・・・と溜息をつく秦だった。

「やることは分かりました。運営を正常に戻す、と。」

「そう言う事だ。大石大佐とともに。」

「了解しましたが・・・重そうな課題ですね。先が思いやられます。」

と溜息をつきながら報告書を鳳翔に見せた。

報告書を見た鳳翔も、

「・・・ある意味、当事者でしたが、私も知らない事が書かれていますね。」と。

井藤本部長が本気を出したら、白も黒になるんじゃないか、と思うほどに、報告書には事細かに書かれていた。

「これを元にするなら、大ごとですね。でも、どうするんですか、提督?」

鳳翔が秦に聞く。

「とにかく、その大石大佐とやらに、現状を聞いてからになるだろうな。どれだけ変わったか、によるだろうからね。」

一拍の間をあけて、

「艦娘たちのケアは、鳳翔、君に頼ることが多くなると思うよ。」

「え？ でも・・・」

口籠る鳳翔だった。

自身も前任提督から逃げ出してきた身であることを、まだ気にしていたのだった。

「君が、率直に向き合ってくれるだけでも、相手が受ける影響は違うと思うよ。何しろ、俺とケツコンまでしたんだから。」

はあ、と頷いたようにも見えた。

「ともかく、呉の運営は、貴様に任せませう。」

「はい。」

「で、だ。楠木よ・・・」

「なんででしょう。」

「・・・やはり、貴様は、後の事を考えているのか？」

「はい。そのつもりです。今回、大石大佐が居るのは、私にとって天佑かと思ってお

ります。」

「その考えは、変らんのじゃな？」

「はい。 変わりません。」

「そうか。 分かった。 だが、その時までには、ワシにはちやあんと教えてくれるんだらうな？」

ん？ と疑いの目を秦に向ける秋吉だった。

「ええーつと、そのつもり、ですが。」

「ホントか？」

「は、はい、 ほ、 ホントですよ。」

ちよつとばかり、シドロモドロする秦だ。

「もう、提督ったら。 そんなに楠木提督をいじめないでください。 ホラ、困ってらっ

しゃいますよ？」

そう助け船を出してくれるのは赤城だった。

その顔は・・・呆れている顔だった。

「提督は、相手が楠木提督だと、ホントに、いじめますよね？」

と赤城が聞いた。

「そうですね。 それは私も聞いてみたいと思っていました。 昔に、何か悪い事でも

したんですか？ それとも何か弱みでも握られているとか？」

追い打ちを掛ける鳳翔だった。

うっ、と言葉に詰まる秦だったが、

「うー、詳しくは、中将に聞いてくれないかなあ・・・」

「あ？ それをワシに振るか。」

「そりゃあ、振りますよ。何しろ、私には身に覚えのない事ですからね。」

と、手を腰に当てて、溜息をついていた。

「どういうことですか？ 余計に怪しいですけど。」

と鳳翔が聞く。

秦の目が、ジーツと秋吉を見ている・・・。

「まあ、言うのだな・・・ ワシが士官学校の教官をしていた頃に、楠木が新人として入ってきたんだ。周りからちよつと浮いた感じのする奴が居るなあ、何か可愛げのないヤツだなあ、とは思っていたんだ。」

確か、洋上実習だったか。実習中に機関の不調から事故が起こってしまったてな。

初期対応が不味くて火災を起こしてしまったんだ。

新入生らは、おろおろするばかりだったんじやが、こやつだけは、嬉々として先頭に立って、対処し始めたんだ。

普通は、事故に驚いて、足が竦むもんだと思うんだが、こ奴は事故発生と同時に、笑ってやがるんだ。

なんだ、こいつ！　とも思ったんだが、その対処が、ワシの予想を超えていてな。

早いわ、的確だわ、教官のワシの出る幕が無くてな。

それから楠木に目を掛けるようになったんだが、問題はその後でな。　どうも、緊急時の対応はいいものの、普通の座学はいまいちでな。

その辺を指導しようとしたら、＼別にいいじゃないですか。出来ないわけじゃ、ないんですから。＼と平然と言っておつてな。

ワシも呆れるしかなかった。それからかのう。こやつをいじる様になったのは、いじつても、いじつても、平然とこなすこやつが面白くてな。」

「それからは、ずつと、いじめられているのさ。」

フフフと笑っていた鳳翔と赤城だったが、そのうちお腹を抱えて笑い出した。

「くくつ。分かる気がします。あなたらしいです。アハハハツ」

「まあ、だから、上官の中には、嫌う奴もいたしな。」

「はい。損な性分だとも思っています。変えられませんが、仕方がないと割り切っています。　つてか、みな笑い過ぎ！」

「ご、ごめんさい。あまりにも、しよーがないなあつて。」

鳳翔と赤城が笑いあう。
腹を抱えて・・・。

「まったく。赤城も笑い過ぎでしょ？ 鳳翔、お前さんも。そんなに、腹を抱えるほどの事かい？」

呆れて笑う二人を見る秦。

「中将も、良く覚えてますね。昔の事ですよ？」

「ワシにとつて、貴様は特別記憶に残るヤツだったからな。まだまだ忘れられんわ。」

四人の中で唯一、秦だけが肩を落とし、暗い顔をしていた。

「で！ 今日のお話しは以上でしようか。」

いつまでもいじられる空気が終わら無さそうだったので、無理に話を戻した。

「あ、ああ。以上だ。では、楠木、よろしく頼むぞ。」

「では。失礼いたします。」

その足で帰路に着こうとしたが、時間的に、やはりお腹が減る。もう昼食時を過ぎていたのだ。

二人で、久しぶりに間宮食堂で昼食を摂った。

「やあ、ここも久しぶりだなあ。」

「はい。そうですね。フフフ。」

「ん？ どうした？」

「いえ、一瞬、おじさん臭いつて思っちゃいましたよ、あなた。 気を付けてくださいね？」

「え？ そうなの？ うう、気を付けるよ。」

「あら、提督と鳳翔さん。 お久しぶりですね。」

「ええ。 こんにちは。 間宮さん。」

「今日は何用ですか？」

「ええ。 内示を受けに。 それと久しぶりに間宮さんのご飯を、と二人して来ましたよ。」

「まあ、うれしいことを。 鳳翔さんがいらつしやるのに、ありがとうございます。 内

示ということとは、ようやく？」

「ええ。 その予定です。 ところで・・今日は・・ 誰もいないんですね？」

「ええ。 今日遠征とこの間の出撃でかなり被害を受けたみたいでみんなドックで修理やら、で、朝から居ないんですよ。」

「そうなんだ。 じゃあ、三人でお昼ご飯ときますか。」

「あら、夫婦仲睦まじくのところにお邪魔しても？」

「いいですよ。 お食事は多いほうが楽しいですし。 ね、あなた。」

「ええ。」

そういつて三人でおしゃべりをしながらお昼ご飯を食べたのだった。

食事後、すぐ帰路に着いた。

港を離水した飛行艇は西を目指す。

それを追うように護衛の烈風が追隨してきた。

帰りの機内でも鳳翔は“甘えたさん”モード全開だった。

秦に寄り添っているならまだいい方だ。

顔を秦の胸に埋め、腕をからめて、ニツコリとして、ふふふーん♪と、上機嫌であった。

最初は、しょうがない奴め、と思つた秦だったが、あまりに抱き着いてくるので、鳳翔を抱えて、自分の膝の上に横向きで座らせた。

「きや」

「この方がいいんじゃない?」

頬を赤める秦だが、鳳翔はそれ以上に赤かった。

「じゃあ、着くまでこのままで・・・」

両手を秦の首に回して、顔を見上げていた。

それに気づいた秦が顔を寄せる。

口付け・・・は無かったが、頬をあわせて、

「ああ。このまま・・・」
と。

それ以上の言葉は無かった。

いや、必要なかった。

二人は、ホントに着くまでの間、ずっとそのままだった。

会合の内容は、複雑さがのこるものの、今の二人の頭には入ってなかった。

七夕

秦と鳳翔が横須賀へ行つてからすぐ、七夕の日を翌日に迎える事になった。

秦がご近所さんの所有する竹藪から、高さ3メートルほどの竹を切り出してきた。もちろん、許可済だ。

こいつを警備部の建物の庭に建てるのだ。

七夕飾りをするために。

◇

七夕当日の朝。

「父さん、行つてくるね。」

「しれーかん、行つてくる！」

「気をつけてな。」

「あ、皆、お弁当持った？ 忘れ物は無い？」

「大丈夫びよん！ 忘れ物はないびよん！」

「ちやーんと、お弁当は持つてるよ。じゃあ、行つてきまあす！」

「卯月ちゃんは、宿題忘れてるけど、ね。」

「あああーん、弥生ちゃん、それ言わないで欲しいぴよん。」

「皆でやろうって言ってたのに、ソッコーで寝ちゃうんだもん。しかも、揺すつても、

叩いても、起きないし。ね、皆？」

そう言うのは臯月。

「そうそう。今回は卯月ちゃんが悪いんだよ？」

と追い打ちを掛ける睦。

「わああーん、みんながイジめるー！」

嘆く卯月。

そんなやりとりを玄関の前で見っていた秦と鳳翔だったが、大きなため息をついていた。
た。

「大丈夫なのかい？」

「まあ、卯月ちゃん以外は、しっかりしてますから、大丈夫かと・・・」

やれやれ、と言った表情をする秦。

こども達を学校へ送り出したあと、午前中に執務を終わらせた秦と鳳翔。

庭に竹を、立てていく。

杭を打ち、竹をくくりつけければ、笹竹のできあがり。

笹の張り具合の関係で50cmほど短く切ったが、それでも2メートルを超える笹竹が立った。

「ふう。こんなもんかな?」

流れる汗を拭いながら一息つこうとした。

そこへ、

「あら、出来たんですね。お疲れ様です、あなた。お茶をどうぞ。」

と言って冷えたお茶をお盆の載せて鳳翔がやってきた。

「ああ。ありがとう。」

汗をふきふき、食堂から持ちだした椅子に二人して座った。

「あー。冷たくておいしいなあ。」

ふふふ、と鳳翔に見られている秦の頬が赤くなっていく。

「そう見られると、恥ずかしいよ。」

「あら、ごめんなさい。でも、いい男だなあって、見てたんですよ。」

そういう鳳翔も顔を赤めていく。

七夕飾り用の短冊も用意し、みな浴衣も用意した。

「七人分の浴衣を作るのは、骨が折れたらう?」

「それでもありませんよ。結構、楽しんで作ったんですから。」

浴衣は居間に用意してある。

寝間着ではない、柄物の浴衣だった。

足踏みミシンで七人分を仕上げた鳳翔。

帯も浴衣の柄に併せて作っていた。

◇

夕方になって、授業を終えた睦たちが帰って来た。

「たっだいま！」

「あ！ 竹がある！」

「お帰り。」「お帰りなさい。」

と秦と鳳翔が出迎える。

「さあ。 着替えておいで。」

「みんな、こつちよ。」

と鳳翔に促され、居間に入っていく。

「さ、各自の浴衣に着替えるわよ。 コレは皐月ちゃん、これは卯月ちゃん、これは弥生ちゃん、こつちは朝霜ちゃん。 最期は睦ちゃん。」

「わあー。 小袖とは違うね。 やっぱり、夏らしいね。」

わいわい言いながら着替えていく。

着替えが終わると、秦と鳳翔が観客のファッションショーが始まった。

と言つても、五人が二人に見せびらかすだけなんだが。

最初に臯月だ。

「じゃーん！ どう？」

と両手を小さく広げてくる。

「ねえねえ、うーちゃんは？」

次は卯月だった。

「私も、見て。」

と弥生。

「もう。みんないつぺんに出ないでよ。」

と朝霜だ。

「はいはい、分かったから。」

と言つて最後に来たのは睦だった。

五人が秦と鳳翔の前に並ぶ。

「文句いわないの。へえ、みんな、良く似合ってるぞ。

さん〴〵みたいじゃなかったんだな。」

「はい、ちゃんと背丈を測りましたから。」

朝霜は小袖の時の〴〵お稚児

「みんな、可愛いぞ。良く似合ってるよ。」

やはり、可愛い、と思う秦だった。

「やっぱり、ウチの子は可愛いなあ。みんなを見てると親バカでもいいやって思うよ。」

へへへつと笑うこども達。

そして、秦も浴衣姿を披露した。

「男物だ。どうだ。」

と。

「やっぱり、あたい達とは違うネエ。」

ふふふ、と笑う鳳翔が、顔を赤めて、

「七人で唯一の男ですからね。やっぱり、かっこいいですよ。ああ、惚れ惚れします

ねえ。ウフフフ。」

と手を頬にあてて微笑んでいた。

「そういう鳳翔も、その白地に朝顔の浴衣、いい感じじゃないか。似合ってるよ。こども達とは違って、お淑やかさが、溢れてるようだよ。」

頬が赤い秦が、鳳翔を褒める。

「そう言ってもらえると、嬉しいですよ。」

秦と鳳翔が視線を合わせて、頬を赤めて微笑んでいる・
そんな二人を、目を細めて見ていることも達・

「またあ、二人の世界に入ってるよ・・」

「もう、毎回言ってるよね、父さん、お母さん。そういうイチャイチャは余所でやって、つて。」

「ああ、もう。こつちまで恥ずかしいわ。」

「す、すみません・・」

平謝りの二人であった。

◇

陽も暮れた頃、楠木家では、ちよつと早い夕食となつていた。

「さあ。夕ご飯にしますよ。」

浴衣の上から割烹着を着た鳳翔が声を掛けた。

わーい！ と群がることも達。

「今日は何かなあ。」

「ねえ。気になるね。」

「さあ。出来たわよ。今日は、五目ちらし寿司よ。」

わああーい。

テーブルの上に並べられたのは、五目ちらし寿司とにゅうめんだった。

ちらし寿司の具材は、イクラ、椎茸を煮た細切に、網で焼いたエビをサイコロ大に、高野豆腐を細かく刻み、錦糸卵に、サイコロ大のマグロの切り身、薄切りのきゅうり。

寿司の上に茹でたきぬさや、薄切りレンコンの酢漬けを載せていた。

ご飯は黒酢の酢飯。

五目ちらしは、大きな寿司桶に盛られていた。

ここから各人のお皿に取り分けていくのだ。

鳳翔が寿司桶からお皿にうつしていく。

なるべく、色とりどりになる様に、盛り付けに気をつけながら。

全員分の取り分けがおわると・・

手を合わせて、「頂きますー」と。

早速、朝霜ががつついて食べている。

「うん、うん。おいしいー！」

臯月も弥生も、勢いがいい。

「酢飯が甘酸っぱくていい感じじゃない！」

みな、お腹が空いていたのだろう。

お皿の上のちらし寿司が、あっという間に消えていく。

そして、

「おかわり！」

だと。

「あらあら。 そんなに急いで食べなくても、 いっぱいあるわよ。」

そんな忠告も、 耳に入っていない。

おかわりも、 すごい勢いでお腹の中に消えていく。

秦もおかわりをした。

鳳翔も、 自身の料理に納得の表情で食べていく。

そして、 夕食後。

七人は庭にやってきた。

その手には・・・ 願い事を書いた、 五色の短冊があつた。

緑、 紅、 黄、 白、 黒だが、 各自好きな色を選んで、 願い事を書いていた。

「へへっ、 卯月ちゃんは、 なんて書いたの？」

最初に聞いたのは皐月だった。

「うーちゃんはね、 “みんなが楽しく暮らせますように” って言うのと、 “勉強頑張ります” の2つだぴよん。」

次に秦が問う。

「睦はなんて書いたんだ？」

「およ？ 私？ えつとねえ．．． やっぱ、ひみつだよ。」

そう答えた睦だが、次の視線が皐月に向かった。

「ボクもひみつ。」

そして弥生も皐月に続いた。

「私も。 ヒミツにする。」

だが、朝霜は．．．

「あたいは、＼しれーかんのお嫁さんになる＼だぜ。」と。

ゴン！

「イツテエ」

頭を抱える朝霜。

「あんだよ！ あ、また、睦ちゃんかい？ 痛いじゃん！」

「願い事だからって、父さんのお嫁さん、じゃダメでしょ！」

「なんでだよ！ いいじゃん！ あたいの願い事なんだからさ。」

「だからって、大声で言わない！ まったく、お母さんが居るんだよ？」

「まあ、まあ。 睦も落ち着いて。 その気持ちは嬉しいけど、俺の奥さんは鳳翔だけだ

から。 朝霜の願いは、厳しいなあ。」

「ええ、ジユウコンカツコカリもあるじゃん？」
ウツ。

睦の目が、鋭く睨んでいた。

「あ・・冗談、冗談だよ。」

「ほんとかにやああああ??」

「こ、怖いよ、睦ちゃん・・」

「はいはい。そこまでよ。願い事は、静かに祈りましょうね?」

そう鳳翔がおさめ、はあーい、と。

「ちなみに、あなたはなんて書いたんですか?」

「俺? 俺はね、この平和な時間がいつまでも続きますように」と 七人家族がいつ

までも仲良く居れますように」と・・

「と?」

「あと一つは、ひみつだよ。」

ほーほー。

「じゃあ、鳳翔は?」

「わ、私は、”いつまでもこの幸せが続きますように”と・・」

「と?」

「私も、ひみつです。」

ふーん。

しかし、鳳翔だけはちよつと違っていた。

秦に寄りかかって小声で・・

「でも、あなたの書いた内容、知りたいです・・ だめ、ですか？」

聞いた秦も小声で答えていた。

「え？ 俺の？ それは、ちよつと・・・」

「じゃあ、こつそり教えてもらっても？」

「こつそり？」

「はい。 こども達には聞こえない範囲で。」

ちよつと悩んだ秦だったが、

「じゃあ、鳳翔の書いたのも教えてくれるなら。」

「え？ 私のもですか？」

「うん。」

ちよつと悩んだ鳳翔だが、

「分かりました。 じゃ、こつそり・・。」

秦と鳳翔はこども達に見えないように、こつそりと短冊を見せあうことにした。

「じゃあ、俺のから。最後の一つは．．．はい、これ。」
そう言つて見せる秦の顔は赤かった。

それを見た鳳翔の頬は赤くなつた。

「え？　これつて．．．そういう事、ですよね？」

「それ以外に何があるんだよ。じゃあ、鳳翔のも見せて。」

「は、はい。私のはこれです．．．。」

そう言つて見せた短冊を呼んだ秦は．．．さらに顔を赤くした。

「えつ、これつて．．．。」

「はい．．．は、恥ずかしいです。」

秦も鳳翔も茹でだこのように赤くなつていた。

それをこども達に見られていた。

「父さん、お母さん、なに赤くなつてるの？」

「あ、いや．．．大したことじゃないから．．．」

「なんか、ヤラシイ．．．」

「「そ、そんなことないから！　ね！」」

と強めに否定する二人だった。

寄り添い、こども達に見えないように恋人繋ぎの手をさらに強めに握り合つていた。

二人が秘密にした内容は、奇しくもほぼ同じ内容だった。
それは・・

秦の短冊には“二人の新しい家族が出来ますように”と書いてあった。

鳳翔の短冊には“私たちにコウノトリさんが幸せを運んでくれますように”だった。
書いた短冊を笹にくくりつけていく。

短冊以外に、笹飾りとして折り紙の鶴や紙風船みたいなのがたくさんぶら下がっていた。
た。

「やあ、綺麗に飾り付いたね。」

そう言つて、改めて笹竹を見る。

「たくさん笹飾りが付きましたね。」

「年に一度の七夕だからね。多少、派手でもいいかなとは思つたけど。でも、織姫と

彦星みたいにはなりたくないなあ。」

とは秦だった。

「え？　なんで？」

そう聞くのは臯月だった。

「年に一度、二人は出会うんでしょ？　そういうお話だよな？」

とは弥生だったが、

「まあ、お話しとしては、年に一度、この時期だけ二人が出会うお話だけど、年に一度だけだぞ？」 そんな短すぎるだろ。」

「そういわれりや、そうだけど・・・」

とは臯月。

「好き同士なのに年に一度だけしか会えないなんてなんて寂しすぎるよ。俺だったら・・・そんなお話しの内容よりも、ずっと傍に居てくれるほうがいいな。お互い愛し合ってるんだったら、なおの事、離ればなれになる方が、俺は嫌だね。」

秦はそう言つて自分の相手となる鳳翔を見つめていた。

「私も、お話しよりも、ずっと傍に居てもらいたいですね。」

と鳳翔も答えていた。

秦と鳳翔が隣り合つて座り、腕を絡めて、秦にもたれかかる鳳翔、だったが・・・

「またあ・・・」

ビクツとする二人を呆れた視線が刺していた。

「昼間も言つたよね？ ね？ 父さん、お母さん。」

「またかい？ 夫婦なのに、イチヤイチャしすぎだよ？」

「イチヤイチャした罰！」

と言いなながら、睦が二人の間に無理やり割り込んできた。

「私はここが良い。」

と言つて。

じゃあ、とあとの四人が引つ付いてきた。

あたいはここ！ と秦の反対の腕をとる朝霜、

ボクはこつち！ と鳳翔の反対の腕に抱き着く皐月、

うーちゃんはここぴょん！ と鳳翔の膝の上に座る卯月、

私はここがいい、と弥生が秦の膝の上に。

「おいおい・・・」「あらあら・・・」

結局、五人に絡め取られた二人であつた。

それでも二人見あつて、微笑んでいた。

そんな七人の笑顔がそこにはあつた。

さよなら！　と　こんにちは！

ついに、相生を後にする日が明日となった。

睦たちの転校の手続きは既に秦が行った。

警備部のご近所さんへの挨拶も鳳翔が行った。

各人の荷造りもほとんどが終わり、明日の学校の終業式で持って帰ってくる荷物と明日の朝まで使う道具類だけとなっていた。

夕刻、各艦の点検・整備が終わった、と報告をするために、執務室にやってきたことも達。

「しれーかん、みんなの艦体の整備、点検が終わったよ。」

「おお。お疲れさま。みんな、ご苦労だね。空母・鳳翔は既に昼間にやったから、

これで全艦の整備・点検が終わったね。」

「みんな、お疲れ様ね。」

「でも、父さん、この部屋の機械類はどうすんの？　荷造りしてないし・・・」

「これね？　置いていくんだよ。」

「へ？？」

どういう事、と言いたそうな顔する皐月だ。

「大丈夫なの?」

「じゃあ、誰か後にくるの?」

「ん? ここには誰も来ないよ。」

「は?」

更に怪訝そうな表情をする睦たち。

「ここに置いておけば、軍の工兵さんが来て片付けてくれるんだよ。全部、綺麗さっぱりとね。必要な物はリストアップしてて、当日中に呉に運んでもらう事になってるし。」

「そうなんだ。だから荷造りしたのは、少なかったんだ。」

ふーんっていう雰囲気漂う。

「明日は、終業式から帰ってきたら、そのまま出港するからね。朝には最後の荷物をまとめておいてくれよ。」

【ほーいー!】

何とも締まらない返事だ。

そして、夕食。

冷蔵庫の食材も残り少なくなっていたが、明日の朝食とお弁当の分を残して全て使っ

てしまおう!と頑張る鳳翔だったが・

食堂のテーブルに並んだのは・

具だくさんの豚汁、牛挽肉のミンチカツ（メンチカツだね。）、いろいろ野菜の温野菜サラダ、なぜかアジの南蛮漬け。

ご飯も、キノコいっぱい炊き込みご飯。

温野菜サラダのドレッシングは、明太マヨだった。

「さあ、召し上がれ。」

【いただきまああっすー!】

いい匂いの炊き込みご飯。

汁より具の方が多い豚汁。

それだけでも十分に美味しいご飯のだが、残り物の材料とは言え、鳳翔の料理だ。

旨いに決まっている。

はずれは無い。

みんなの顔は、凄く満足そうだった。

「いつも、美味しいご飯ありがとう、お母さん。」

「あら、ありがとう。珍しいわね。どうしたの?」

臯月がちよっと俯きながら答えた。

「だってえ、今日がここでの最期の夕食でしょ? お母さんに感謝しておかないと、と思っただ。 . . .でも、呉に行ったら大食堂でしょ? そしたらお母さんのご飯、食べられないなって思ってた . . .」

秦は、なんだ? と思ったが、秦より早く、

「まあ。 向こうに行つてからも、作つてあげるわよ?」

と鳳翔が答えていた。

「ほんと? 食堂じゃなくても?」

「ええ。」

にこやかに答える鳳翔だった。

やった! と笑顔になることも達。

元気を取り戻していた。

まったく、げんきんなことも達であった。

その後、秦も鳳翔の料理をおいしく頂くのだった。

◇

翌朝。

いつものように鳳翔が一番に起きてきた。

桜色の着物に、紺色の女袴を穿き、白いハイソックス。

袴の結びは、乙女結びだ。

今は、着物の上から割烹着を着ている。

ここでの調理もいよいよ最後となるのだ。

みんなの朝ご飯を用意し、昼食用のお弁当も作るのだ。

今日は、秦もこども達も、誰からも起こされることもなく、0615に起き出してきた。

既に身支度は終えている。

食堂のテーブルに七人が座って朝食となるのだが・

ご飯、味噌汁、焼き魚、卵焼きではなくハムエッグ、サラダにお新香だ。

今日もいつものように、賑やかな朝食風景だった。

「お母さん、おかわり！」

とは朝霜だった。

「今日も、元気ね。」

「あつたぼうじやん！ いっぱい食べて、遊んで、だよ。」

「今日は、終業式だけだから、午前中で帰って来るね。」

「うん、わかった。荷造りは、あとちよつとだし、みんなが帰ってくるまでには、運び終えてると思うよ。」

「うん。残ってても、みんなの手伝うよ、父さん。」

そんな会話がなされていても、みなしっかりと朝ご飯を食べた。

睦や皐月らは最後の荷造りをして、玄関にやってきた。

秦と鳳翔が見送るのだ。

【じゃ、行ってきます!】

「気を付けてね。行ってらっしゃい。」

と互いに手を振って。

こども達を見送った鳳翔と秦。

鳳翔は、お弁当作りにかかった。

秦は最後の荷造りと、こども達の荷物の搬出だ。

既に、冷蔵庫の食材はわずかで、お弁当を作ってしまったら、ほぼ全てを使い切ることになる。

いっぞやの重箱に詰めていく。

ご飯は、おにぎりにした。

ごま塩結びと、中身の具に、梅、おおか、しぐれ煮を入れたお結び。

ローストビーフに根菜の煮物、鶏もも肉の塩焼き、人参のグラッセ、野菜のフライ(素揚げね。)などなどを作った。

重箱は四段にもなった。具だくさんのお重だ。

秦も、最後の荷物を運び終え、執務室に帰ってきていた。

「ふう。これで全て運び終えたな。」

「はい。おつかれさまです。こつちもお弁当は出来ましたよ。食器類も必要分は

詰めちゃいましたし。」

「そうか。あとは、あの子らを待つだけだな。」

建物で、今、窓が開いているのはここ一階の執務室だけとなっていた。

夏の暑い空気のほか、海風が吹き込んで、いくらかは涼しく思えるが・

首に手拭いを掛け、じんわりと汗が染み出るのを拭いていく。

秦と鳳翔は、誰もいない執務室の窓際に立ち、外を見ていた。

庭には、二人で暇つぶしに作った家庭菜園があった。

ここで摂れた野菜は食卓に並んだものだった。

互いに、手を取り、指を絡めていた。

「短かったけど、楽しかったな。」

「はい。楽しかったですね。呉でも、楽しく過ごせればいいですね。」

「ああ。鳳翔、ここでの事、いろいろとありがとう。改めて言わせてもらおうよ。そ

れと、これからもよろしくね。」

鳳翔に向いてニコリとする秦。

「何を言うかと思えば。私も、これからもよろしくお願いしますね。」

秦に向いて、微笑む鳳翔。

お互いが向き合い、口づけをする。

数秒間、いや十数秒か。

いつになく、長い口づけを交わす二人だった。

「もう。大好きですよ、あなた・・・。」

「俺も、好きだよ。鳳翔・・・。」

そう言って抱きしめあつた。

◇

時計は1000になろうとしていた。

遠くから、わいわいと声が聞こえてきた。

どうやら終業式を終えて、帰って来たみたいだ。

「帰って来たみたいだな。ん? 人の声が、多いような・・・」

「確かに、うちの子の五人以上の声がしますね。」

最後の荷物とお弁当を持って、玄関に向かう二人。

【ただいま!】

帰ったよ！ と元気な声だ。

「お帰り。みんな、お疲れ様。」

「へへへっ。元気なのは確かだね。」

「で、後ろにいるみんなは？」

「うん、みんな、見送りに来てくれたんだ。」

「えっ、そうなの？」

「はい。最後まで見送ろうって話になりました。」

と説明するのは、学級委員長の圭子だった。

「そう。それは、ありがとう。」

そう言いつつ、警備部の戸締りをして、棧橋に向かう。

秦、鳳翔が続いても達五人と見送りの生徒達が続いていた。

睦、皐月、卯月、弥生、朝霜は、第一中学のセーラー服のままだ。

着替えるのがめんどくさい、という一言で、セーラー服のままで行くことにしたのだった。

睦月型のセーラーでもなく、だ。

秦は、その辺は、各人に任せただった。

睦、皐月、卯月、弥生、朝霜は、成績表の入った学生鞆を持っている。

秦は、最後の荷物を、鳳翔は、お弁当を抱えている。
艦の手前まで来て、

「じゃあ、ここで。みんな、今までありがとう。」

「圭子ちゃんも、みんなも元気だね。」

「睦ちゃんも皐月ちゃんも、卯月ちゃん、弥生ちゃんも元気だね。」

朝霜ちゃんは元気

いっぱいだろうけど。」

「なんだよ、それ。ま、あたいはいつでも元気だぜ。」

「じゃあね! ばいばい!」

と言つて皐月、卯月、弥生、朝霜が各自の艦に乗り込んでいく。

「それじゃあ、俺たちも行くか。」

「ええ。」

秦、睦、鳳翔が、空母・鳳翔へと乗り込んでいく。

暫くして、舳を解いて、各艦の機関が始動し始める。

「こちら、朝霜! 出港準備完了だよ!」

「こちら、皐月! 同じく、完了。」

「うーちゃんも、完了ぴよん!」

「弥生、出港準備完了。」

「よし。 鳳翔?」

「はい。 空母・鳳翔、出港準備完了しています。」
そして、

「では、朝霜を先頭に、各艦、出港!」

と秦が指示をだす。

「了解! 駆逐艦・朝霜、出るよ! 前進微速!」

朝霜に続いて、皐月、卯月、弥生が動き出した。

「次、ボクだね。 駆逐艦・皐月、出るよ!」

「弥生、出ます。」

「あーん、うーちゃんも! 置いてかないで!」

栈橋ではクラスみんなが手を振っている。

「元気でねー!!」

「ばいばい!」

各艦の窓から各自が手を振り返す。

「みんなも元気でねー! さよならー!」

四艦が栈橋を離れ、微速で進む。

最後に鳳翔だ。

「提督、行きます。」

「了解だ。」

「空母・鳳翔、前進微速!」

徐々に速度を上げる。

デツキで手を振る睦。

「さよーならー!」

睦の隣で帽子を振る秦が居た。

「いろいろと、ありがとうございましたー!」

各艦が汽笛を鳴らした。

別れを惜しむかのように、最大ボリウムだ。

全艦が微速ではあったが進み、徐々に栈橋が小さくなる。

そこにいるクラスメイトも小さくなっていく。

湾内を南に、左舷の筏を見つつ進んだ。

「各艦、湾の外で単縦陣を組む。」

と指示を出す秦。

相生湾を出ると、もう、栈橋は確認できなくなった。

「針路、呉鎮守府だ!」

【了解！】

湾の外で陣形を組んで速度を上げていく。

ついに、ここ相生湾での生活が終了した。

次は、呉だ。

期待と不安が入り混じった思いで、船が進んでいく。

◇

第一対潜駆逐艦隊、旗艦・鳳翔を始めとする計5隻の艦隊は、相生湾沖で単縦陣を組んだ。

先頭は、朝霜。

二番艦に、皐月。

三番艦に、卯月。

四番艦に、弥生。

殿に、鳳翔。

艦隊速度は14ノットとやや早めだ。

艦隊が相生を出港するのと同じころ、姫路の飛行場にいた、鳳翔の各飛行隊も移動を開始した。

移駐先は、岩国だ。

各小隊単位に、順次飛び上がって、西へ、岩国へと飛んで行くのだが、やや南に進路を取っていた。

「飛行隊が本艦の上空を通過します!」

見張妖精からの報告だった。

“上空”のはずが、空母・鳳翔の艦橋のすぐ上まで下りてきていた。艦隊の上を、最大速度で通過していく。

「うわっ!」

「びつくりするなあ、もう。」

驚く朝霜たち。

それをみた秦が、

「なんだ、トップガンごっここのつもりか?」

と少々怒り気味だ。

「まあ、そのようですね。」

と鳳翔が呆れたように答えていた。

さらに、

「後で叱っておきます。」

と続けたが、

「しようがない連中だなあ。ま、今回だけは、大目に見よう。」
と秦。

「すみません・・・」

と頂垂れる鳳翔だった。

結局、飛行隊全機が通り抜けていった。

艦隊は相生湾から南南西に針路をとり、家島の西を抜けて小豆島の東をすり抜けるような航路を選んだ。

小豆島の風ノ子島の東を抜け、大角鼻の岬を右に見て回る。

ここで艦隊は、坂手港に向かう。

以前は、接岸したが、今回は沖合で停船する。

各艦を寄せ、各人が空母・鳳翔に集まってくる。

「来たよー!」

「それじゃあ、お昼にしようか。」

そう。お昼ご飯だ。

今日のお昼も鳳翔お手製のお弁当だ。

ごま塩結びと、中身の具に、梅、おかか、しぐれ煮を入れたお結びだ。

ローストビーフに根菜の煮物、鶏もも肉の塩焼き、人参のグラッセ、野菜のフライ。

四段の重箱は、具だくさんのお重だ。

あまり時間をゆつくりと取れないから、30分だけだった。

慌ただしい昼食だったが、お弁当は、美味しく頂いた。

「あー、美味しかった。」

「やっぱり、お母さんのご飯は美味しいね!」

お重は、すつからかんになっていた。

しばしの休憩の後、再び単縦陣で進みだした。

「さあ、夜までには呉に着きたいから、ちよつと急ぐよ。いい?」

「了解!」

その後、小豆島の南を西に向かつて過ぎ、男木島の北を通過する。

この辺りは、高松—土庄を主とする連絡船が多数運行されている。

五隻分の艦隊は、前後が長くなっているので、横切る船に注意が必要だ。

「皐月の後ろを、北から連絡船がすり抜けるよ!」

「朝霜から、各艦へ。対向する大型船あり。注意されたし。」

対向する船から、手を振られることもあった。

播磨灘から広島までの間は、そんなに軍の艦艇が、しかも艦隊で航行することは、珍しかったから、近くの漁船からも、手を振られることもあった。

男木島を過ぎ、右手に直島が大きくなる。

直島を過ぎると、宇高間の船が増えてきた。

先頭を行く朝霜から連絡が入った。

「正面に、障害物の反応あり。　どうやら、前方に見える橋の様なんだけど・・・」

水上電探に映る、長い影が障害物を現すが、どうも反応が薄かったのだ。

「どれどれ。　おお。　瀬戸大橋だな。」

と秦が答えていた。

「せとおおはし?」

「ああ。　鉄道と道路の2層構造になってる橋だよ。」

本州側の下津井と四国側の坂出を結ぶ、大きな橋だ。

ただ、明石海峡大橋みたいに、単一の橋ではなく、いくつかの島を結ぶ橋が連なって、

“瀬戸大橋”を形成している。

艦隊の目標は、“瀬戸大橋”の南側、南備讃瀬戸大橋だ。

この下をくぐるのだ。

秦は、艦隊速度を上げるよう指示を出した。

「艦隊速度、黒5。」

と。

この海域は西から東へと流れる潮の流れが速い。

牛島の南を過ぎ、高見島の北を通って、備後灘に入った。

南西に針路をとったまま、瀬戸内を進む。

しばらく進んで、しまなみ海道を成す、大島に近づいた。

大島の、四国側の来島海峡を抜けるのだ。

ここは、潮の流れが速く、機関出力を上げて通過するのだった。

「艦隊速度、さらに黒5。潮流と付近の船に気をつけて。」

ここにも大きな橋が架かっている。

西瀬戸自動車道の、しまなみ海道だ。

ここは、自動車道路と、歩道がある。

本州側の尾道から四国側の今治まで、歩いて渡ることができる。

まあ、時間が掛かるんだけど。

四国の大角鼻を左にみて、更に西に向かう。

そこからは響灘になる。

再び艦隊速度を戻す。

やや南寄に進路を変え、艦隊が進む。

「ねえねえ、呉に入るには、何処を通るの?」

そう聞いてくるのは朝霜だった。

「何処って？」

「音戸の瀬戸を通るの？ それとも早瀬の瀬戸？ ひよつとして、江田島を廻るとか？」

「まあ、早瀬の瀬戸を抜けるつもりだよ。 いい？」

「いいよ。 分かった。」

「音戸の瀬戸を通った方が近いんだけど、みんなは通れるけど、鳳翔が通れないからね。」

「そうだね。 音戸大橋は、私たちなら問題無いけど、お母さんの船は、引つかかるかもね。」

と言うのは弥生だった。

音戸の瀬戸に掛かる橋が、水面から二十数メートルしかなく、駆逐艦サイズなら余裕でぐぐれるのだが、空母である鳳翔は、マストまで入れると30メートルを超える高さがある。

仕方なく、音戸大橋より高い、早瀬大橋の方を選ぶしかなかったのだ。

倉橋島を大きく廻りこんで早瀬の瀬戸を目指した。

大きな弧を描きながら、艦隊が進む。

右に倉橋島、左に能美島が近づく。

速度を落とし、ゆっくりと進む。

ただ、満潮ではないため、ソナーから探針音を発しながら進む。水深を測りながら。

西北西に針路をとって、水道の奥まで進んでいく。

途中、早瀬の瀬戸に向けて、真北に針路を変える。

ここは、結構な急旋回を必要とする。

「まわりの小船に注意して! 左回頭するよ。取り舵いっぱい。」

先頭を行く朝霜から順に左回頭をしていく。

「朝霜、回頭完了。早瀬の大橋をくぐるよ!」

回頭し終わった朝霜が目の前の橋を見上げる。

「続いて皐月、回頭完了。」

各艦が順次、回頭して、橋をくぐる。

「うーちゃん、完了。」

「弥生、回頭完了。」

「提督。全艦、回頭完了しました。」

殿の鳳翔の回頭が終わる頃には、先頭の朝霜が呉港を視認できるところまで近づいていた。

「朝霜、早速頼む。派手にやってくれ。」

「了解だよ!」

「ここで、秦が、朝霜に指示をだす。

呉港の監視所からの連絡が来る前に、

「こちら、第一対潜駆逐艦隊所属一番艦、夕雲型駆逐艦・朝霜。ただいま呉に到着だよ！」

と発信。

「続いて、同じく二番艦、睦月型駆逐艦・皐月、到着！」

「うーちゃんも到着う！」

「四番艦、睦月型駆逐艦・弥生、帰って来たよ。」

そして、最後に、

「第一対潜駆逐艦隊旗艦、空母・鳳翔、ただいま呉に到着致しました。以後、よろしくお願ひいたしますね。」

と発信する。

「ここ、こちら呉鎮守府本部。貴艦隊の到着を歓迎す。投錨は江田島小用沖に向かわれたし。」

「了解。」

「みんな、小用沖よ。」

「了解だよ！」

小用沖に各艦が寄り添い、錨を下した。
ようやくの、呉に到着である。

秦にしてみれば、半年以上遅れての呉着任であつた。

ようやくの呉

呉着任！

7月の下旬、夏の遅い夕方になって、早瀬の瀬戸を抜けて呉港に到着した秦の艦隊。水道を抜けるやいなや、

「こちらは・・・」と入ってきた本部の通信を遮り、

「こちら、第一対潜駆逐艦隊所属一番艦、夕雲型駆逐艦・朝霜！ 呉に着いたぜ！」

「続いて、同じく二番艦、睦月型駆逐艦・皐月！ 到着だよ！」

「うーちゃんも到着う！」

「四番艦、睦月型駆逐艦・弥生、帰って来たよ。」

そして、最後に、

「第一対潜駆逐艦隊旗艦、空母・鳳翔、ただいま呉に到着致しました！ 以後、よろしく
お願いいたしますね。」

と発信する。

「こ、こちら呉鎮守府本部。 貴艦隊の到着を歓迎す。」

「こちら第一対潜駆逐艦隊司令、楠木です。 大石大佐は居られますか？」

「あー、楠木提督ですか？　しばしお待ちください。」

そのまましばらく待たされた秦だったが、早く連絡をくれないと、何処に投錨すんだよ、と思っていると、連絡が来た。

「こちら、提督代理の大石大佐です。　投錨は江田島小用沖にお願いします。　なお、投

錨次第、そちらに伺いますので。」

「了解です。　では、後程。」

「みんな、小用沖よ。　いい？」

号令を掛けたのは鳳翔だった。

【了解だよー】

ようやくの、呉に到着である。

秦にしてみれば、半年以上遅れての呉着任であった。

その後、江田島の小用沖に5隻の艦が寄せ合い、錨を降ろした。

「鳳翔、みんなに空母・鳳翔に集合するよう連絡を頼むよ。」

「はい。　伝えます。」

秦がデッキに出て、息を吐き、深呼吸をする。

「う、あああーっと。　ここは久しぶりだな。」

っと。

「ええ。私も久しぶりです。この艦では初めてですけど。あれ？あなたは、呉は初めてでは？」

「ん？呉かい？提督としては、呉は初めてだけど、士官学校は江田島だったからね。どちらかと言えば、懐かしい感じかな。」

「そうだったんですね。ウフフ。」

笑う鳳翔。

その笑顔は、秦にとっては、眩しく思えた。

「父さん、これからどうするの？もうすぐ皆も来るよ？」

と睦が秦に問うた。

「ああ。大石大佐がこちらに来るらしいから、それまでは小休止だな。それと、皐月

たちには艦橋に来るようにね。」

「そうですね。あ、あ、あれではないでしょうか。大石大佐の船は。」

鳳翔が呉港の方から近づくと小型の連絡艇を指さした。

一隻の小さな連絡艇だ。どうやら内火艇の様だ。

「イスズ？」

舷側に艦名が書いてあった。

「あー、確か、大石大佐の秘書艦が五十鈴だったかな。」

巡洋艦だね、確か。」

暫くして内火艇が空母・鳳翔に接舷し、3人の人影を認めた秦。

(3人?)

一人は軍服姿だから、大石大佐だろう。

もう一人は、ツインテールの髪型をしている。たぶん、秘書艦の五十鈴だろう。

そうすると、あと一人は・・・誰?

3つの影がタラップを登って来た。

格納庫を経て艦橋へ案内されてきた。

「失礼します。呉鎮守府提督代理の大石であります。楠木提督でありますか? よ

ろしくお願いいたします。」

「楠木です。・・・よろしく。」

二人は向かい合って敬礼し、握手をする。

双方、唇を固く結んだ表情だったが、握手が思った以上にスムーズに手が出た二人であつた。

そのため、二人の表情は一気にほぐれた。

「遂行は、私の秘書艦、五十鈴と、呉の艦娘を代表して長門であります。」

「五十鈴よ。よろしく。」

「よろしく。こちらは、私の秘書艦兼妻の鳳翔と娘の睦だよ。」

「は？ “妻”ですか？ それに、“娘”って・・・」
怪訝そうな顔をする大石だった。

「鳳翔とは、結婚しているからね。 睦は： 元睦月型一番艦の睦月。 解体して改名したからね。」

「そ、そうなんですか。」

納得したような、していないような・・・

「ええ。 この鳳翔型航空母艦の艦娘であり、楠木 鳳翔でもあります。 よろしくお願ひしますね。」

ニコリと鳳翔が微笑む。

「楠木 睦だよ。 よろしくね、大佐さん。」

「こ、こちらこそ、よろしくお願ひします。」

「それと・・・ 長門、久しぶりだね。」

「はっ。 久しぶりだな、楠木提督。 やつと呉に来てくれた。 待っていたよ。」

「アハハハ・・・」

秦の乾いた笑い声が響いた。

「ま、いろいろあつたからな。 すまない。」

と頭を下げた。

!

「楠木提督も、そうやって、すぐに頭を下げるのか?」

「そう言うのは、長門だった。」

「も?」

「この大石大佐も、すぐ頭を下げるのだ。前任提督は・・・」

「待った!と秦がそれ以上言うな、と止める。」

「過去の事は、過去の事だよ。それに・・・後でみんなにも言う事だけど、艦娘とは言え、一緒に戦う仲間であるし、指揮命令系統はあるにせよ、それぞれの個人々人を敬うのは普通の事だと、俺は思うけどな。」

大石も秦の言葉を聞いて頷いていた。

「大石大佐もそうだと思うよ。な?」

「はい。同感です。」

「なら・・・ならば、我々は、一個人として扱ってくれるのだな。」

「もちろん。その証明、といえるかどうかだけど、俺は鳳翔と結婚してるし、睦は元艦娘だし。」

「良かった。大石大佐を信用していかないわけでは無かったのだが、あくまでも臨時だったので、確証が持てなくてな。大石大佐、すまなかつた。」

長門が、頭を下げた。

「あらあら。みんなで頭を下げあって。その辺にしませんか？」

鳳翔の一声で皆が笑う。

呉での最初の、会合の雰囲気は良かった。

「で！ 楠木提督。こやつらはなんだ？ この四人の“娘”は？ それに、この五人

とも同じセーラー服はなんだ？」

そう聞くのは長門だった。

「ああ。紹介が遅れたけど、相生では、俺たちの娘として一緒に生活してた、朝霜、皐月、卯月、弥生だ。この制服は前の中学校の制服だったんだよ。」

「あたいは朝霜だよ。」

「ボクは皐月。」

「うーちゃんだよ！」

「弥生。長門さん、お久しぶり。」

「朝霜……ってお前か！ 本部からの通信の前に、先に名乗りおつて。問合せ手順を踏

まんか！」

と少々お怒り気味の長門が朝霜に向かって言ったのだが、

「えー、だつてさあー、しれーかんが、派手にやっついていいって言うからさあ。あれでも、

大人しくしたんだよ?」

と、言い訳をする。

「提督!!」

長門が秦をジロリと見るが、秦は・・なんのことだ、と言わんばかりの、平然とした顔をしていた。

「それもそうですが、この子らも“娘”とは?」

「ああ。そのままの意味だけど?」

「もう。提督ったら。ちゃんとお話ししませんと、大石大佐も長門さんも、困った顔をしていますよ?」

「ああ。悪いね。この子らは、相生では、私たちの娘として楠木姓を名乗って学校にも行つてたし、対潜訓練も一緒にしてたんだ。」

「そうなのか。」

「ああ。対潜作戦では、強いぞ、この子らは。まあ、対潜能力の高い五十鈴ほどではないが、艦隊としてみれば、日本海軍一だと思ふよ。」

「それは、期待させてもらおう。」

「まっかせてよ!」

そう胸を張る、朝霜と皐月だった。

「では、挨拶はこの辺で。 これからの事ですが、今晚は食堂で歓迎会をご用意していますので、後程みなさんでお越しください。 それと、今日は既に陽も落ちていきますので、執務の方は、明日からでよろしいでしょうか。」

「ああ。 構わんよ。」

「で、宿舎ですが、提督用の官舎がありますので、そちらをお使いいただくことになりました。 場所は、鎮守府本館の山手になります。」

「ありがとうございます。 とすると、君は？」

「私は、別に士官用の寮がありますので、そこに居ります。」

「ん？ ．．すると、彼女、五十鈴とは、まだ？」

素直に思ったままを聞く秦。

「まだ、とは？」

首を傾げて聞き返す大石。

それに次の言葉で答える秦だった。

「ケツコンカツコカリ。」

秦のその言葉に顔を赤める大石と五十鈴。

一瞬、視線が重なったかと思うと、互いにパイと横を向いてしまった。

それを見た秦と鳳翔。

その二人に秦が声を掛けた。

「なんだ。二人は、互いに思い人か。なら、応援しないと。な、鳳翔。」

と微笑みながら鳳翔を見る秦。

「はい。二人とも、応援するわよ。」

鳳翔も微笑んでいた。

そこまで言われて、更に赤くなる大石と五十鈴。

「い、いや、その．．． まだまだ練度が不足しておりますんで．．． はい。」

そして、大石がわざとらしく咳払いをして、

「そ、それで、これだけの人数は官舎には入りきらないかと．．．」

「うーん、どうでしょうか？ 四人はどうしたい？ 今の状況なら、官舎には、俺と鳳翔と

睦の三人だけど．．．」

「ええ、今迄みたいにな、五人部屋はダメかな？」

「あたかもそれがいいなあ。」

皐月の意見に朝霜が追随する。

「官舎には、どれくらいの部屋があるのかな？」

「官舎には、書斎、居間、大広間、ダイニングルーム、キッチンなど水回りが1階に、寝室は2階ですが、全部で4部屋ほど有ります。一部屋は12畳はあるかと思いません。」

「それじゃあ、明日にでも見てから決めようか。それと、この時間から荷解きをするのはやめにして、今日はここ、艦に泊まるよ。」

「了解しました。」

「へへへっ。一緒だといいいねえ。」

そう言うのは臯月だった。

「お前たちは、いつでも一緒だったからな。」

「でも、お母さんのご飯は食べたいびよん！」

「私は、父さんの膝の上がいい。」

「おやおや。」「あらあら。」

「お母さん」？ 「父さん」？」

そう呟いたのは五十鈴だ。

「もしかして、提督が」お父さん」で、鳳翔さんが」お母さん」なの？」

「ええ。そう呼ばれてるわ。」

はあ、と答える五十鈴と大石だった。

「お父さんとお母さんか。私がそう呼ぶのは、相応しくないな。私らしくない。」

そう言うのは、長門。

「ははは。長門、お前さんまで」父さん」」お母さん」て呼ばなくてもいいだろう？」

「まあ、そうさせてもらおうか。　　そういえば、確か空母娘たちは、鳳翔を“母”と呼んでいたな。」

「ここには、誰がいるんだい？」

「ここ呉には、飛龍、蒼龍、雲竜、大鳳、信濃の大型空母がいる。　　あと、軽空母が何隻か。」

「という事は、呉所属空母の総艦載機は、およそ600機から700機前後つてところか。」

空母の隻数から艦載機の総数を予想する秦。

「まあ、そうなるな。　　前任は、空母機動艦隊を否定していたから、航空戦力の整備は、まだまだ、と言ったところだ。」

そう返答するのは長門だった。

今度は、秦が溜息をつくことになった。

「まさか、機体は、九六式とか？」

「まだまだ現役ですよ。　　九七も九九も現役です。」

そう返答したのは五十鈴だった。

「となると、鳳翔の搭載機が、一番の新型つてことか・・・　　こりやあ、大変だなあ。」

早々に更新かあ。」

と頭を大いに抱える秦だった。

◇

そうこうしているうちに時間は1800になろうか、としていた。

「そろそろ、いい時間ですので、みなさん、行きましようか。」

大石大佐がみんなに声を掛けて、歓迎会に出掛ける事になった。

五十鈴の内火艇に加え、鳳翔の内火艇に七人が載って行く。

小用沖の空母・鳳翔から呉鎮守府の眼前の棧橋まで、やや早めの速度で走った。

15分ほどで到着し、鎮守府本館へとまっすぐに向かう。

本館の建物は、横須賀よりも少々古めかしかつたが、大きさは、呉の方が大きかった。

玄関から入り、食堂へと向かう。

食堂では、在籍の艦娘が全員、揃っていた。

ガラッと入口を長門が開け、大石、五十鈴、秦、鳳翔、睦らの順で入った。

食堂は広く、50人はゆうに入れる大きさだ。

「みんな、提督らが到着したぞー！」

と長門の声で、全員の目が一齐に入口へと向く。

歓迎者席につく秦たち。

席につくと早速、歓迎会が始まった。

進行役は、五十鈴だ。

「え、本日、ここ、呉鎮守府に提督が着任されましたので、歓迎会を行います。では、まず、提督からご挨拶をお願いします!」

紹介され、壇上に秦が立つ。

全員の視線が秦に集中する。

「本日付けをもつて、ここ、呉鎮守府に着任する、楠木 秦です。え、こんなに大勢の仲間を率いるのは、嬉しくもあり、責任の重大さを感じている。みんな、よろしくね。で、私と一緒に着任する仲間を紹介するよ。まず、私の秘書艦であり、私の妻でもある鳳翔だ。第一対潜駆逐艦隊の旗艦をやつてもらっている。」

「鳳翔です。不束者ですが、よろしくお願いします。」

「次は、同じく第一対潜駆逐艦隊の、朝霜、皐月、卯月、弥生だ。」

【よろしくね。】

「最後に、私たちの娘の睦だ。」

「よろしくお願いしますにや。」

にや?

みんなの顔に?が浮かんでいるように見えた。

「じゃあ、みんな、グラスを持ったかな?」

五十鈴の合図でみんながグラスを持つ。

未成年と思しき艦娘は、ジュース。

それ以上の年齢の艦娘は・・・ビールだ。

「それでは、提督に乾杯の発声を。」

「じゃ、お言葉に甘えて。いいかい？ では、乾杯！」

【乾杯！】

歓迎会の始まりである。

秦は大石大佐から、3人の女性の紹介を受けた。

「この食堂の調理師さんです。今は3名ですが、当番制で、計五名おられます。みな

さん、地元呉のご婦人です。桜井さん、松本さん、二宮さん、猪原さん、岡田さんで

す。」

「楠木です。よろしくお願いします。」

「あら、いい男じゃない。ここでの食事は任せてちょうだいな。」

そう言うのは、桜井さんだった。

「朝0700から1900まで、朝食、昼食、夕食の3食対応します。ここでは、普段

アルコールは出ませんので。」

「それじゃあ、俺も、ここへ来れば、食べられるんかい？」

「はい。実は、私も三食、ここです。」

と頭を掻く大石だった。

「じゃあ、私がやらなくてもいいんですか?」

そう聞くのは鳳翔だった。

「ん? 鳳翔は、やりたい?」

「そうですね。できれば……ですが。」

「んー、鳳翔には、別にやってももらいたい事があるから、食堂はやらなくてもいいと思うけどな。」

「そうなんですか……」

ちよつとしよげる鳳翔だった。

三人が厨房に戻った頃合いで、鳳翔が捕まった。

「お母様!」

「あら。蒼龍ちゃん、飛龍ちゃん。元気だった?」

「はい!」

そう言つて、鳳翔の手を引いて、空母娘が集まるテーブルに連れて行つた。

睦は臯月らに手を引かれ、駆逐艦がたむろするテーブルに連れて行かれていた。

「提督。こつちで呑まないか?」

と言つてきたのは長門だった。

見ると、一テーブルに、長門、陸奥、大和、武蔵、金剛、榛名が居た。

「ああ。いいよ。」

と言つて、秦はグラスを持ってその輪に加わつた。

「長門たち四人は一年ぶり？　かな。」

「そうだな。もう、そんなに経つのか。」

「金剛と榛名は、初めてだね。よろしくね。」

ニコリと微笑む秦。

「Oh！　金剛デース！　よろしくお願ひしマース！」

元気いっぱいの金剛。

「榛名です。よろしくお願ひします。」

なぜか、頬が赤い榛名。

「早速だが、少しいいか？」

そう聞いてくるのは武蔵だった。

「提督は、空母を主に率いてきたそうだが、戦艦を率いてきたことはあるのか？」

「横須賀時代に、高速戦艦・霧島を率いたことはあるけど、どちらかと言うと、航空戦隊が主だったね。あとは水雷とか。」

「だが、以前の戦闘の、あの時の指示は、的確だったぞ。できないわけでは無いんだろ？」

「まあ、出来ない事はないと、思ってるよ。」

そう言つてグラスの酒を飲み干す。

「今の時代は、戦艦だけで勝ちきることは難しくなつた、と思つてる。敵も空母を揃えてきているし。だから、適正且つ効率的で強力な配置を考えないといけない。そう思つてるよ。ま、考えるのと、実行するのでは雲泥の差はあるだけだね。」

「提督がそう言う考えならば、我々も期待させてもらおう。」

「あらあら。武蔵ちゃんがそう言うのも珍しいはね。大本営も、もつと早く楠木提督を派遣すれば良かったんじゃないのかしら。」

「確かにな。」

「そう言えば……提督は、大本営と仲が悪かつたのでは？ そのような噂を聞いたことがありますけど……」

とは大和だった。

「あく、それね……仲が悪いつてもんじゃないよ。めっちゃ嫌われていたね。」

ふーん、という空気が流れる。

「榛名には、提督が、そんなに悪い人の様には見えませんが……」

「ハハハ。理由は、大本營のもと元帥に聞いてほしいね。俺も知らないからさ。」
それを聞いて呆れる面々だった。

◇

賑やかな歓迎会、もとい、宴会は終わりを迎える。

時間は2100。

秦、鳳翔とこども達が今日の寢床となる船に戻るのだ。

「では、大石大佐。明日0830には出仕するから、よろしく。」

「了解しました。では、おやすみなさい。」

「お休み。」

そう言つて内火艇は沖合の空母・鳳翔に向かつていく。

今晚は、全員で空母・鳳翔に泊まることにしたのだ。

今どきの艦船とはいえ、小さいながらもお風呂が備えられている。

こども達には一人ひとりに部屋が与えられていた。

秦も司令官室があり、鳳翔も秘書艦室があつたのだが、二人は、司令官室にいた。

「ふう。お疲れ様、鳳翔。そつちはだいぶ盛り上がつていたみたいけど?」

「はい。昔話に花が咲いちゃいまして。えへへ。」

とニコリと微笑んでいた。

既に入浴を終え、寝間着姿の二人。

机の上には宴会場から持って来た日本酒の小瓶が一本とグラスが二つ。

「あなたがお酒を召し上がるのは珍しいですね。いつもはお茶なのに。」

「今日ぐらいいはね。そういう鳳翔も、さつきはかなり飲んでいただけど？」

「少し、ですよ。そんなに飲めませんから。」

と頬に手を当てながら遠慮がちに答えていた。

「その割には、結構、杯が進んでいたように見えたけど？」

「あら、見られていました？」

ははは、フフフと笑う二人だった。

そして少しばかりの酒を飲み、二人してベッドに入った。

「良かったのかい？ このベッドは小さいだろうに。」

「いいえ。小さいからいいんです。こうして、密着できますから・・・」

そう言って、ふふふと秦にしがみつくと鳳翔。

その華奢な身体を抱きしめる秦。

「明日からは、大変だぞ。」

「あなたと一緒になら、どんなことだって、乗り越えて見せますから。」

そう言いながら、顔を寄せる二人。

満足のいくまで、唇を合わせたのだった。

呉でも七人

0600。

夏の朝の太陽は既に昇っていた。

窓から差し込む日差しで目が覚めた秦。

いつもは一緒に眠る鳳翔の方が起き出すのが早いのだが、今日は、秦の方が早かった。

ベッドには、秦に抱き着いたままの鳳翔がいた。

寝息が、こそばゆい。

暫くの間、空いている方ので髪を鋤いていた。

(よく眠ってる・・・)

見えるその寝顔は、満足そうな顔をしていた。

う、うとうーんんん・・・

と寝返りを打ったかと思うと、うつすらと目があいた。

二人の視線が重なる。

「あ、おはようございます。あなた。」

「おはよう。よく眠れた？」

「はい．．．あなたを、充分に感じることができて。」

そう言つて秦の胸に赤い頬の顔を摺り寄せていた。

司令官室の大きくは無いベッドで抱き合う二人だった。

二人はしばらく、そうやっていたが．．

「さて、そろそろ起きるか。」

「はい。」

と起き出した。

身支度をして、甲板にでた二人。

朝日を見ながら、伸びをする秦。

ふっ、うううーん．．

「いい天気だな。」

「ええ。気持ちのいい朝ですね。」

「今日から忙しくなるな。改めて、よろしくね。鳳翔。」

「はい。よろしくお願ひします。あなた。」

朝の空気を堪能した二人が食堂に降りていく。

食堂に入ると、既に五人が起きて座っていた。

「おっはよー。父さん、お母さん。」

「しれーかん、おつそーい!!」

「早く! あ き ご は ん!!」

「ごめんごめん。遅くなつたな・・て、どうしたんだ、その恰好・・」

「なに?」

「なにつて、そのセーラー服だよ。学校のだろ? それぞれの服は、どうしたんだ?」

「いやあ、なんか、こつちの方が着慣れちゃつて。」

「まあ、いいけどさ・・」

「それより、お腹すいた。ご飯にしようよ。」

「あら、ごめんなさい。朝ご飯ね。」

料理長の作った朝ご飯を頬張る。

スクランブルエッグ、焼きたてのパン、良く焼いたベーコン、そして、野菜のスープ。

飲み物は、珈琲か、紅茶だった。

秦は、珈琲も飲むが、どちらかと言えば紅茶派だ。

茶葉の香りが“好き”なのだそうだ。

こども達は、カフェオレの方が好きなんだと。

珍しく艦内で七人の朝食風景となった。

みな、へへへへ、ふふふふ、と笑う。

まさに“家族”の食事風景だった。

朝食後、しばらくの空き時間のあと、七人が内火艇の前に集まった。

時刻は0800。

「さあ、行こうか。」

そう号令を掛けて、内火艇に乗り込んでいく。

七人が乗り込むと呉港・鎮守府の棧橋を目指して内火艇が動き出した。波の静かな港に、艇が起こす白い波が後ろへと続く。

◇

「昨日はあんまり気にしなかったけど、結構な数の艦が居るんだね。」

そう言ったのは睦だった。

港内の広い範囲に渡って、艦船が停泊していた。

内火艇は、停泊している艦の間を進む。

駆逐艦は何隻かが寄り添って停泊しているようだった。

大型の艦は単独で錨を下している。

長門、陸奥、大和、武蔵などの戦艦、飛龍、蒼龍などの空母などなど。

目的の棧橋に近づくと、速度を落とし、ゆるゆると接岸する。

秦を先頭に七人が上陸すると、陸には大石大佐と五十鈴が待っていた。

「おはようございます。提督、お待ちしておりました。」

「おはよう、大石大佐。まさか、出迎え？」

「はい。」

「そこまで気を使ってくれる必要はないのに。でも、ありがとう。」

「ホラ。言ったとおりでしょ。」

そう言ったのは五十鈴だった。

秦の頭の上に“？”が付いた。

「あ、いえ、その・・岸壁で待とう、と言い出したのは五十鈴でして・・。」

「そうか。大佐、既に尻に敷かれてるな？」

そう言つて、はははと笑う秦だった。

時刻は0830になって、秦、鳳翔、大石、五十鈴が執務室に到着した。

こども達は、食堂や休憩室に向かつていった。

秦が席につき、持つて来た鞆から書類を出して・・

「では、大石大佐、君に辞令だ。」

「ハッ。」

「大石大佐、呉鎮守府副提督として、楠木の補佐を命じる。以上だ。以後、よろしく

頼むよ。」

「了解いたしました。こちらこそ、改めてよろしくお願いいたします。」

大石が敬礼で返す。

「で、大石大佐の秘書艦は、現状でいいね？」

「はい。このままで、お願いいたします。」

「了解した。」

「大佐、五十鈴さん、よろしくお願いしますね。」

と言ったのは鳳翔だった。ニコリと微笑みながら。

その表情に、大石の頬が赤くなる。

(ああ・・・ 大人な女性だ・・・ まさしく、母の微笑みだなあ・・・)

その瞬間、ガツと音がして・・・

「いってえ!!」

と足を抱えて痛がるのは大石大佐だった。

「フンツッ!」

五十鈴が、腕を組んで横を向いていた。

「な、なんだよ! 五十鈴、痛いだよ!」

「鼻の下伸ばしちやっつてからに! あたしと言うものが居ながら、なによ!」

「ちがうわ!」

「何が違うのよ！ 鳳翔さんを見て、鼻の下伸ばしてたくせに！」

「だから違うって！」

「どう違うのよ！」

「ただ、母みたいな柔らかな微笑みだなんて思っただけじゃないか！」

そう言われて、鳳翔も赤くなる。

「ホントにい？ 怪しいわねえ・・・」

「これこれ。痴話喧嘩はそれくらいにしないか。」

呆れる秦だった。

「五十鈴、大丈夫だよ。 鳳翔は誰にも譲らないから。」

「あら！ 提督も恥ずかしいこと言わないでください。」

そう言ってみな、頬を赤めていた。

秦が咳払いをした。

「んんっ。 では、仕事を始めようか。」

「はっ。」

「手始めにだな・・・ 執務室なんだが・・・ 大石大佐、君の執務デスクは、ここに置いて構わないかい？」

「は？」

「ここに、ですか？ いえ、私は隣室におりますが。」

「隣？ じゃあ、壁を破ろうか。」

はい？

「はい？」、じゃない。君には私の仕事をやってもらうんだから、同じ部屋でないからね。だから、この部屋を大きくして、お互いの秘書艦も含めて四人部屋つてことだ。」

「ええ〜。」

とは五十鈴。

「なんだい、五十鈴？ そんなに大石大佐との二人部屋がいいのかい？」

と五十鈴をちやかしてみた秦だったが、

「ち、違いますっ！」

頬を赤くして、大声で否定する五十鈴だ。

「そうかあ。違うんだったら、壁を破るね。鳳翔もいいだろ？」

「はい。提督の思うとおりにしてください結構ですよ。」

（さすが、大人の対応だ・・・それに引き換え、五十鈴はまだまだ、だな。）

と改めて思う大石大佐だった。

「では、妖精さんにお願いしておこう。」

執務室の改造はその日のうちに行われたのだった。

提督の秦、秘書艦の鳳翔と、副提督の大石大佐、その秘書艦の五十鈴の四人が一部屋で執務を行う事になった。

◇

午後、秦たち七人は、新たな“家”となる官舎を見に来ていた。

「へえー、ここが官舎？」

「そのようだな。」

呉鎮守府の本館からほんの少し離れたところに、その建物はあった。

敷地は、鎮守府の中にある。

港を見下ろすように、やや高台の場所だ。

官舎は、書斎、居間、大広間、ダイニングルーム、キッチンなど水回りが1階、寝室は2階だった。

書斎と言っても、簡単な執務が出来るほどに広い。

家政婦さんが何人かいたら嬉しいが。

「畳敷きの部屋は無いんだね。」

2階には、主寝室が一つ。クローゼット、続部屋付きだった。

あとは、家人用なのか客用なのかは不明な寝室が4つあった。

問題は、こども達五人の扱いだつた。

睦はいいとして、あとの朝霜、皐月、卯月、弥生の四人をどうするか……

本来は、というべきか、艦娘寮に入るのが一般的なのだが、五人は、

「今までと一緒がいい！」

と言つて、五人の眼が秦をじつと見つめている。

結局、

「ま、いつか。何とかなるだろ。」

と言つたものの、ちよつと心配な秦だつた。

ただ、一部屋に五人は狭いので、二部屋の壁をぶち抜いて一部屋にすることにした。

柱の関係もあつて、幅一間ほどの通路を壁に作る事になった。

一方を寢室にして、二段ベッドを三台置いた。

もう一方に机や鏡を用意した。

床にはコルク地のマット、カーペットを敷いて、寝そべれる様にした。

それでも相生の時より、広さはほぼ倍になった。

「やた！ これでいままで通りだね。」

「みんな、また一緒だよ。」

と笑い合つていた。

カーペットには、犬や猫の柄をしたクッションが置かれた。

元々クッションは無かったのだが、卯月が欲しがったので、買っておいしたものだ。全員の部屋割りが終わって、各自の荷物の整理に掛かった。

鳳翔はキッチン廻りや洗濯場などを。

秦が主寝室と書斎の整理だった。

相生時代に購入した、鳳翔の鏡台や桐箆筒もだ。

秦用の箆筒も。

こども達も各人の荷物を整理した。

各人の着替え、本などなど。

鳳翔手製の浴衣に小袖もちゃんと持つて来ていて、こども達用の桐箆筒も運び入れた。

残った荷物は空き部屋に押し込んだ。

整理が終わってダイニングルームにやってきた秦。

「ふうー。 やつと終わったかな。 桐箆筒も運んでおいたし、つと。」

「あ、ありがとうございます。 重かったでしょ?」

「そうでもないさ。」

とにこやかに答える秦だった。

「こつちも終わったよ。」

「整理整頓、ばっちり。」

とみんなダイニングルームにやってきた。

「お疲れ様。 さあ、お茶にしましょ。 冷たいお茶ですよ。」

【はぁーい】

椅子に座って、冷たいお茶の飲む。

ゴクつと。

「あー、おいしい。」

「お母さん、おかわり！」

「はいはい。 はい、どうぞ。」

「わーい。」

「鳳翔も休んでよ。」

はい、と言って秦の隣に座った。

「今日からここでの生活だな。」

「お台所も広いですし、良い食器ばかりですしね。

お料理のしがいがあります。

あ、

お風呂も大きかったですよ？」

「え？ そうなの？」

「じゃあ、みんなで入るかい？」

と言うのは朝霜だった。

「もう、朝霜ちゃんつてばあ・・」

「なにさ。あたいはしれーかんと一緒に入るならいいぜ。」

ゴン！

「イツテエ！」

「お前は、もつと慎みつちゆうのを身につけなさい！」

「そうだよ。ちよつとは恥ずかしがりなよ？」

「いいじゃん！ 減るもんじゃなし・・」

鳳翔の冷たい視線が・・朝霜を見つめていた。

「もう。そんなことばっかりじゃない、あなたは・・」

「あ、い、いや、そんなことは無いし。お母さんとはちゃんと一緒に入るし！」

「それは、それです！」

「やあーい、怒られたー。」

と茶化す臯月だった。

「ぶー！ みんな、酷いよ？ 冗談じゃん！」

頬を膨らませる朝霜をみて、みんなで笑った。

ここ呉でも、相生と同じく、七人での生活が始まったのだった。

艦隊整備

執務室には、相生と同様に、既に通信関係、情報端末関係の設備は整えられていた。

この日の朝、早速横須賀の秋吉へと連絡を入れた。

「あい、じゃなかった、呉の楠木です。秋吉中将はご在席ですか？」

画面には秘書艦の赤城が出た。

「あら。楠木提督。秋吉提督ですか？ 少しお待ちくださいね。」

赤城が秋吉に取り次いでくれるという。

しばらくして秋吉が変わった。

「お。もう仕事を始めているのか、呉の楠木提督さん。」

「おはようございます、秋吉提督。はい。遊んでは居られませんから。」

「で、何用か？」

「はい。楠木、大石ともに、現時刻を持って稼働状態になりましたので、ご報告を、と

思いました。」

「そうか。了解した。」

「それと、中將にお願いがあります。」

対潜駆逐艦隊も稼働状態に入りましたので、例の

特殊攻撃弾の使用許可をいただきたいのですが。」

「あれか？ そうだな・分かった。判断は貴様に任せる。そっちの工廠でも製造可能なはずだ。良きに使うてくれ。」

「はい。ありがとうございます。」

「それではな。」

そこで通信が終了した。

秦が鳳翔に向き直し、

「鳳翔、対潜駆逐艦隊の各艦に特殊対潜攻撃弾の積み込みを指示しておいてくれ。」

と指示を出した。

「はい。了解しました。」

「それと、広の工廠に連絡して、対潜及び対地攻撃弾の製造を始めるよう、手配をお願いできるかな。」

「はい。では、書類を用意しますね。」

「ありがとうございます。」

さすがに息の合った会話である。

そこへ・・・

「提督？ その特殊攻撃弾ってなんなんですか？」

と聞くのは大石大佐だった。

「ああ。特殊攻撃弾は2種類あつてね。一つは対潜攻撃弾だ。主砲から放つ砲弾で、海面下に居る潜水艦を直接攻撃するんだ。2つ目は対地攻撃弾で、戦艦の主砲から敵陸上基地の広範囲に子爆弾をばら撒くんだ。ま、見た方が理解は早いとは思うけど。」

「そうなんですか。軍はそんなのを開発してたんですか。」

「まあね。構想は昔からあつたんだ。ただ、艦娘用艦船に対応出来なかつたのさ。」
秦も人の案に乗つただけなんだが、と思つていた。

とは言え、秦が率いる第一対潜駆逐艦隊の各艦の主砲にこの対潜攻撃弾が搭載されることになった。

睦月型の、弥生、卯月、皐月は、艦の前後部に計4門の12センチ単装砲を装備していたが、相生での改造で、前後部に12・7センチ単装両用砲2基2門に取り換え、空いたスペースに25ミリ連装対空機銃を増備していた。

12・7センチ単装両用砲は、従来型の砲より発射間隔が短く、初速も向上していたし、なにより射程距離が伸びていた。

搭載されている魚雷発射管も酸素魚雷に対応させており、61センチ酸素魚雷を搭載している。

発射管は前後に4連装が1基づつで計8発。

朝霜は元々から12・7センチ連装砲を装備していたところに、対潜攻撃弾を搭載するのだった。

対潜攻撃弾・・・

艦砲から発射される砲弾で、弾頭が鋭く尖っているのが特徴だった。

砲身のライフレングによって回転しながら飛んでいく。

海面下20m程度までなら、船体に大きな損傷を与えられる。

もつとも、一撃で潜水艦を撃沈させることが目的ではなく、艦体に被害を与え、浮上させ、再び潜航できないようにすることが目的だ。

対地攻撃弾・・・

戦艦の艦砲から発射される砲弾で、目標地点の高度500から1000mでカバーが外れ、中にある子爆弾があたり一面にばら撒かれる。

弾頭は、通常炸薬のバージョンと、滑走路等の構築物を破壊できる成型炸薬弾とがある。

ただ、駆逐艦クラスの小口径砲には向かない装備だった。

また、第一対潜駆逐艦の各艦とも、搭載爆雷数は増加されていた。

もちろん、鳳翔の主砲にも対潜攻撃弾が搭載されることになった。

◇

「さてと。この艦隊編成も考えないとね。で、現状で在籍しているものは？」

秦は、大石大佐と共に、整理を始めたのだった。

在籍一覧を見ながら。

まずは、秦が溜息を付きながら一覧表を見た感想を言った。

「うーん、戦艦など大型艦は、高練度だけど、軽巡洋艦以下の小型艦は総じて練度が低いなあ。」

「それは、把握しています。が、なかなか上がらなくて・・・」

そう恐縮して応えるのは、大石大佐だ。

「この資材は、たんまりあるのに、改装や開発は行っていないのかい？」

「私が来る前までは、弾薬や主砲の開発は行っていたようですが、それ以外は、軽視されていたようで・・・」

前任提督は、戦艦派で、空母、航空機、駆逐艦らを軽く見ていて、弾除けくらいにしか考えていなかったらしい。

大艦巨砲主義・・・

一時代においては、それが主流だったが、今の時代は・・・今の時代では全くの時代遅れの考え方だ。

「ま、そうだろうねえ。」

溜息が大きくなる秦。

申し訳なさそうに説明する大石大佐だった。

「私への命令は、臨時という事でしたので、積極的に開発等は行ってきませんでした。」
「それで、提督さんはどうするの？」

と聞いてきたのは五十鈴だ。

「どう、と言われてもねえ。」

腕を組んで考える秦。

しばらく考え込んでいたが・・・

「大石大佐、君は・・・君なら、どうする？」

秦は、逆に大石に聞いてみた。

「は？ 私、ですか？ 私なら、でよろしければ・・・」

「ああ。構わない。君の意見を聞きたい。」

「では、申し上げます。私なら、やはり練度の向上の為に、訓練を増やします。それ
と艦載機の機種更新をやります。とりあえず、手を付けるのはそこからかと。」

と、恐縮しながら答えるのだった。

「まあ、無難だね。」

確かに無難な案だった。

外れでもない。

まあ、当たりとも言えた。

「は。ありがとうございます。では、提督は、いかにお考えですか？」

「うん、やることは変わりないけど・・やはり、ここからだな。」

そう言つて、鳳翔を見た。

「まずは、航空隊の機種転換だ。九六式、二一型や九九式、九七式を更新する。鳳翔、

工廠に連絡して、補充機を廻してもらつてくれ。足りないだろうから、生産も依頼す

ることになる。」

「はい。了解です。では、艦戦は、烈風、紫電改を中心に。あとは流星と彗星、偵

察機ですね。」

「ああ。それぞれ200機近く必要となるはずだ。確か、烈風は補充機があると思

う。俺の名前をフルに出しても構わないからね。」

「はい。」

「それで各航空隊の機種転換をしたとして、だな：航空隊の訓練は、鳳翔の航空隊に

訓練教官を頼みたい。いいかな？」

「大丈夫です。」

「なら、みっちりやっておくれ。」

「了解しました。 月月火水木金金でやります。」

真剣な顔で返す鳳翔だが、その顔は、どこか余裕があった。

「その次は、水中聴音、水上電探、対空電探だ。 こっちは、大石大佐と五十鈴に手伝わってもらおうか。」

「了解しました。」「了解。 いいわよ。」

「出来れば、新型で艦数分揃えたい。 生産を工廠に依頼してくれ。 次は、各艦の訓練だが・・・ 水雷戦隊を編成するので、軽巡を旗艦として訓練をやろう。 まずは、神通と名取の二人に指導教官をやってもらおう。」

これには大石が聞いてきた。

「では、随伴艦は、どうなりますか。」
と。

「随伴は、駆逐艦を中心に割り当てる。 艦隊編成は、軽巡が2から3、駆逐艦が3から4の編成で、対抗戦をやらせよう。 駆逐艦は順次入れ替えて演習を行おう。」
「分かりました。」

「とりあえず、これだけでも手を付けよう。 それと・・・」

「それと？」

「大鷹がいたろ？」

「はい、います。」

「彼女には、対潜駆逐艦隊として対潜哨戒機を搭載してらう。」

「対潜駆逐艦隊・・ 対潜哨戒機、ですか？」

「ああ。 第二対潜駆逐艦隊の整備だよ。 そうだなあ・ 睦月型駆逐艦2隻と択捉型

海防艦2隻の四隻と合わせて5隻だ。 それと、他の空母たちには装甲甲板化工事をして

てもらおう。 可能ならばカタパルトを装着してもらおう。 それと、各艦の装備について

も、改装できるところは改装しよう。」

「提督、それだと、相当の時間が掛かりますが？ いいんですか？」

秦の整備計画に疑問を投げかける大石大佐だ。

無理もない。

一度にすべてをやるとういう、感じだったから。

だが、それに秦が答える。

「むしろ、やらせる。 工廠やドックの要員達には苦勞を掛けるけど、やらざるを得ない。

それが・ 生き残るために必要な事だからね。」

「生き残る為に、ですか。」

そう答えたのは大石だった。

「そう。これは、どこまで行っても戦争だ。なら、どうやってでも生き残らなければならぬ。もちろん、こちらの被害は無いに越したことは無いけどね。なら、出来る事は、各艦の性能を強化する事しかないだろう。」

元々秦の考えは、出来るだけ艦の強化を行うことにあつたので、その通りにやろうとしただけだった。

「了解しました。それなら、私に異存はありません。私も助力させて頂きます。」

「ああ、よろしく頼むよ。」

秦と大石は、改めて握手を交わすのだった。

「ああ。これらをやるとなると大変じゃない。いきなり疲れるわよ?」

「すまないな、五十鈴。でも、やるんだ。勝つために。よろしく頼むよ。」

「そうだよ、五十鈴。やらなくちゃ。」

「もう。そう言われちゃあ、仕方がないじゃない。私も協力するわ。よろしくね、お二人さん。」

「あら、私も居ますよ? 忘れないでくださいな。」

「す、すみません! 忘れてたわけじゃないんですけど・・・」

「フフフ。いいのよ。みんなで頑張りましょう。」

「はい!」「ああ。」

鳳翔の一言で、四人の意見が纏まった瞬間だった。

檸檬

呉に来て数日。

官舎での食事は、最初から用意されていた食材で今までやってきたが、日数が経つと、それなりに不足してくるのもだった。

今日は買い出しと散策を兼ねて、鎮守府からほど近い、呉駅前のスーパーにやってきた鳳翔。

横須賀と違い、呉の鎮守府は駅に近かったから、徒歩だ。

夏の暑さ対応に、薄手の生地に着物に襷を掛けて、レースの付いた白い日傘を刺してきた。

片手には籐でできた買い物籠が一つ。

スーパーとは言いながら、一つの建物に個人商店が専門店として入り込んでいた。

生活雑貨は、まだまだ余裕があったものの、補充分の購入が出来るかどうか、も心配だったので、端からお店を見て回ることにした。

食材としては、食肉屋、魚屋、八百屋は持ちろんのこと、揚げ物の惣菜屋さん、味噌屋、漬物屋、酒屋、小物雑貨、食器、花、果物屋など、一通りの種類はあった。

(一通りのお店はあるのね。)

と思つていた時、食肉屋のオヤジに声を掛けられた。

「おや？ 見ない顔だねえ。ここは初めてかい？」

「ええ。つい先日、こつちに越してきたばかりなんですよ。」

「そうかい。ここは何でも揃うから。肉はウチで……」

とこのスーパールの紹介をしてくれた。

「で、見たところ若奥さん風だが、どこに住んでるんだい？」

「あ、鎮守府の官舎です。」

「え？ 鎮守府の官舎って……もしかして、新しく来た、提督さんとかかい？」

官舎と聞いて少々驚くオヤジだった。

「あ、はい。私、楠木 鳳翔と申します。以後、よろしくお願いします。」

と一礼をする鳳翔。

「なんだ、提督の奥さんかい。それじゃあ、みんなに紹介しないとな。お——い！

みんな！ ちよといいかあ！」

オヤジの号令に、ぞろぞろと集まってくる……

なんだよ？ とか なになに？ とかの顔をしてやってくる店主たち。

「こちらのご婦人が、今度来た、新しい提督の奥さんだ。楠木さんだと。」

「へえー、そうなの。」

「奥さん、うちにも寄ってよ。」

などなど、声を掛けていく。

「あ、みなさん、よろしくお願いしますね。」

ニツコリと微笑んで挨拶をした。

「で、ご家族は、何人なの？」

聞いてきたのは惣菜屋の女将さんだった。

「ウチですか？　ウチは七人です。」

「な、ななにん!？」

眼をひん剥いている。

「失礼だけど、あんた、歳は？　30にもなっていないでしょ？」

「年齢ですか？　20代前半ですけど。」

は？　へ？　とかと言う声が聞こえたような気がした。

「その歳で、七人家族って・・・あ、オヤジさんとお袋さんも入れて、かい？」

「いえ。　提督と私と、こどもが五人ですけど。」

ああ？　はい？　と再び声が聞こえてきた気が・・・。

と、そこへ、睦がやってきた。　ミニスカートに白の半そでブラウス、麦わら帽子を

被って。

「あ、お母さん！ 見つけた！」

そう言つて鳳翔に抱き着いてきた。

「あら、睦ちゃん。」

睦を受け止めた鳳翔。

「どうしたの？ 一人で来たの？」

「うん。父さんが、お母さんが買ひ物に行つてるから、手伝つて来いつて。

後で臯月

ちゃんも来るよ。」

「そうなの。ちよつと荷物が多くなりそうだから、助かるわ。」

「あ、あの、この子が、娘？」

「ええ。娘の睦です。中学一年生です。」

「あらま！ おつきな娘さんね。」

鳳翔は気付いた。

「あ！ この子は、提督の、主人の子ですの。」

そう。自分が産んだのではなかつたので、疑われたのだと。

そこまで聞いて、みな納得したようだった。

「なるほどねえ……」

「じゃあ、提督さんは40代後半かい？」

「いいえ。30代前半ですけど。」

「へえ・・ 若いころのお子さんなのねえ。」

「ま、とにかく七人家族じゃ、食糧はかなりいるだろ。安くしとくから、いつでもいいな？」

「はい。ありがとうございます。」

賑やかになった挨拶が終わった。

食材を買い揃え、睦と二人して荷物を抱えて帰ろうとしたとき、店先に黄色と緑の果物が目に入った。

「あら？」

「どうしたの、お母さん？」

「これ、レモンですよね？」

と店主に聞く。

「そうだよ。地元産の広島レモンさ。この時期は、貯蔵するための個包装したレモンと、ハウスのグリーンレモンがあるよ。」

グリーンレモンを手にとって匂ってみた。

「あ。いい匂いですねえ。」

「そりゃ、防腐剤なんか一切使用してない、国産レモンだからね。」

！

鳳翔は何かを思いついたような顔をして、

「じゃ、グリーンレモンを、二籠くださいな。」

「あいよ。」

グリーンレモンを二籠、10個と追加で隣にあった黄色のレモンも二籠、10個を購入した。

鳳翔は別の店で炭酸水とシロップを買ってきた。

スーパ―を出たところで、皐月がやってきた。

「もう、お買いもの終り？」

「皐月ちゃんも来てくれたの？」

「ボクも手伝うよ。これを持ってばいいよね。これってレモン？」

鳳翔が持っていたレモンと炭酸水の籠を持つ皐月。

「ええ。お昼の休憩時に、レモンスカッシュにでもしようかと思って。」

「レモンスカッシュ？」

「ええ。レモンの酸味と、炭酸のシユワシユワ感がいいわよ。美味しいから。」

「やった！期待してるよ。」

三人、賑やかに話ながら帰って行つた。

◇

このところの鳳翔の料理は、ややすっぱめだった。

今年の夏は、特にここ呉の夏は、暑い。

そのため、水分と塩分は身体にとつて必須な成分だ。

また、暑さの為、食事が進まない、ということも達の声もあつて、さっぱりとした料理が多かつたのも頷けた。

買い物から帰つて来た鳳翔は、グリーンレモンと炭酸水、シロップを持って調理場に戻ってきた。

冷凍庫の水をグラスに入れ、レモンを絞つてグラスに。

炭酸水とシロップを入れてかき混ぜた。

飾りにグリーンレモンの輪切りを一つ添えて。

即席のレモンスカッシュの出来上がりだ。

「さあ。休憩にしましょ。」

と言つて、お盆にレモンスカッシュ入りのグラスを載せて執務室に入ってきた。

「おお。冷たそうな飲み物だね。」

「はい。レモンスカッシュを作ってみました。」

「へえ。レモンなんてよくあったね?」

「今日、市場で見つけてきました。なんでも、地元広島産だそうで。」

そこに大石が話に入ってきた。

「そういえば、近年は、ここ広島島の沿岸部でレモンの栽培が盛んだとか、聞いたことがありますね。」

「へえ・・・ そうなのか。それは知らなかったなあ。」

そこへ、睦や臯月ら子ども達がやってきた。

「お母さん、来たよ。」

「なんだ、お前たち?」

「私が誘ったんですよ。飲みに来なさいって。」

「そうなのか。」

「はい・・・」

テーブルの上に人数分のグラスを置いた。

氷がグラスにあたって、カラン、と音を立てていた。

「ま、頂くとしよう。」

みなレモンスカッシュに手を付けた。

一口飲んで、

「ウマ！」

「シユワシユワがいいね。」

「このすっぱさがたまんないよ——！」

大石も五十鈴も一口飲んで、

「美味しいですねえ。」

「ホント。そんじゃそこらのお店より、美味しいんじゃない？」

「お母さんが作るのは、なんでもおいしんぴよん！」

「フフフ。ありがと。」

ニコリと微笑んでいた。

鳳翔自身も一口飲んで、

「んー、いい具合に仕上がってますう。ちよつと酸味が弱かったかしら。」

「そうかい？ 俺は充分に美味しいけど。」

「あ、ありがとうございます。そう言つて頂くと嬉しいです。」

そう言つて頬を赤めて、見つめ合う二人であつた。

「またあ・・・」

そう嘆くのは睦だ。

「見つめあつて、赤くなるのは、なんとかならない？ 父さん、お母さん。こつちが恥

ずかしい……」

……

何も言えない秦と鳳翔だった。

「大佐さんにも、悪影響だよ、きつと。」

「そ、それは無いよね、大佐?」

「はあ……」

返答に困る大石大佐であった。

「ほらあ、返事に困ってるじゃん。」

「ま、まあ、たまに目線が合つて、ニツコリと微笑みあっているのは見るけど、やっぱり、アツアツだなあつとは思つてたけど、回数は多いかしらねえ。」

そう言うのは五十鈴だった。

「ホラ。気を付けてつて散々言つてるのにい。」

「イチヤイチャは、治らないぴよん。仕方ないぴよん。割り切るしかないぴよん。

でも、こっちは恥ずかしいぴよん。」

みんなに言われ放題の二人であった。

ちよどそこへ、演習に出ていた艦隊の報告に榛名がやってきた。

「榛名です。失礼します……つて。」

大勢が執務室にいたの驚いていた。

「あら。大勢いらしてたんですね。」

「ちようど良かった。」

「ちようど?!」

榛名が首を傾げている。

「あ、いや、こっちの事、こっちの事。で、どうした?」

「はい。本日の演習訓練が終わりまりましたので、そのご報告に。」

巫女風衣装に、赤の袴風のミニスカートの榛名が秦の机までやってきて報告書を渡す。

報告書を秦が受取り、目を通していく。

「お疲れ様。うん、一応、練度の向上は図れているようだね。」

「はい。砲撃戦は順調だと思います。が、やはり、航空機を使った練度が不足している、と思います。」

「榛名でも、そう思うかい?」

「はい。榛名や金剛お姉さまは前任地でも航空戦隊と編成を組んでいましたから、なおの事と思います。」

「そうか．．．ありがとう。航空隊との訓練は、考えておくよ。」

「ありがとうございます。」

秦が鳳翔へ振り返って、

「鳳翔の航空隊は、他の航空隊の機種転換訓練や慣熟訓練に出てるんだっけ？」

「はい。今は、手一杯ですね。対空訓練にも回したいのはヤマヤマなんですけど。」

「そうだよなあ。」

そう言つて頭を抱えるのだった。

「榛名、航空隊との訓練は少し先になるが、やる事だけは、断言しておくよ。今はそれ

でいいかい？」

「はい、ありがとうございます。」

榛名が一礼して退室するが、その頬は赤かった。

退室する榛名を、秦の目が追っていた。

ただ、頬を赤めた榛名を、（どうしたんだ？）と思っただけなのだが、それを鳳翔に見られていた。

「提督……提督は、ああいう感じの娘がいいんですか？」

と鳳翔が呟いた。

「え？ 俺？ ああいう感じの娘？」

純粹に、なんだ？と思つた秦なのだが。

「何か、顔がほころんでいたような気がしたので・・・」

「え？ 榛名かい？ ま、確かに、いい娘であるとは思うけど、ちよつとシスコンが強いからねえ。」

「それだけですか？」

「な、なにがだい？」

「いえ、榛名ちゃんみたいに胸の大きな娘に、鼻の下を伸ばしていたように見えたので・・・」

「はいいい？ そ、そんなことは無いよ、ほんと。」

「やっぱり、胸の大きな方が・・・」

鳳翔の声がだんだん小さくなり、俯いて行くように見えていた。

秦は、何言つてんだか、と呆れた感じで、

「ハアア。 そんな事関係ないよ。 胸の大きい、小さい、なんて気にしないよ。 そんな気にしてたら、本人に失礼だろ？」

と、報告書にサインをしながら応えたのだった。

そして、さらにぶつきらぼうに・・・

「それに、俺は鳳翔の胸が一番いいんだ。 手に収まるちようどいい大きき、跳ね返す弾力、透明感、肌のすべすべ感なんかが最高だよ。」

「あ、あなたああー！！！！」

大声で叫んだのは鳳翔だった。

「な、何言ってるんですかー！！！！ は、恥ずかしいったらー！！！！」

顔を真っ赤にて更に叫ぶ。

「え？」

鳳翔を見ると、両手で胸を隠すようなしぐさをしている。

怒りに震えているのか、恥ずかしさに震えているのか、プルプル、いや、わなわなと震えて、秦を睨んでいた。

「と、父さん！！」

こども達も声を上げて秦を攻める。

「何言ってるの！ このスケベ！」

自分が言った言葉にようやく気が付く秦。

「え？ いや、ちが・・ あの、違わく無いけど、だああああ。 ご、ごめん！ ホントにごめん！」

平身低頭、平謝りの秦だった。

大石大佐は、キコエナイ、キコエナイヨ、と他人のフリ。

五十鈴も、顔を真っ赤にして両手で顔を押しさえていた。

鳳翔とこども達に責められること数十分・

ようやく許しを得た秦だが、皆にみっちり責められ、机に突つ伏していた。旨い具合に、本日の勤務時間の終了を告げるチャイムが鳴った。

大石大佐と五十鈴はそそくさと連れ立って執務室を出て行った。

睦、臯月からも呆れて官舎へと引き上げていった。

残された秦と鳳翔。

鳳翔が秦の隣まできて、

「あなたたったら、もう！ 恥ずかしいったらありやしないんですからー！」

と、手を腰にあてて、仁王立ちの鳳翔に、

「ゴメン。あまりに無防備に答えてしまったよ。申し訳ない。」

と手を合わせて許しを請う。

「まったくもう・・・」

「でも・・・俺には鳳翔しかいないから。ね、ね？」

「じゃあ・・・これで勘弁してあげます。」

そう言つて、目を閉じ、両手を広げてきた。

「ん・・・」

と。

秦が、へっと一瞬固まっていると、

「んー！」

と再び催促する鳳翔。

その様子で、催促されている事を理解した秦。

椅子から立ち上がって、顔を鳳翔に近づけていく。

そして・・

んっ、むっ つと、二人の唇が、しつかりと重なる。

互いの腕が、互いの身体を包み込む。

ちゅ、ちゅ、・・・

長い口づけが終わり、視線を重ね合い、微笑む二人。

「愛していますよ、あなた。」

「ああ。俺もだよ。 鳳翔。」

誰もいない執務室で、しばし抱き合う二人だった。

呉、その日々

木陰

呉に来てから数日が経った頃だった。

執務室のソファアールで寛いでいた楠木家五人の娘に秦が・

「そうだ。睦、朝霜、皐月、卯月、弥生。お前たち、学校はどうするんだ？」と聞いた。

「「え？ 学校？」」

「学校へ行くなら、そろそろ手続きをしておかないといけないんだけどさ？」

「え、勉強、やだなあ——」

やだ、と言ったのは朝霜だった。

「でも、この鎮守府でも学校へ行きたいって言う娘も何人かいたよ？」

そう言ったのは五十鈴だった。

「どうしようか？」

と考え込む秦だった。

そこへ大石大佐が口を挟んだ。

「提督。学校ならば、ここ鎮守府内に分校を作ってもらうのはどうでしょう。」

「え？　ここに分校？」

「はい。確かに、学校へ行きたいという声は聴いていますし、義務教育期間中の子らは、教育を受ける権利がありますしね。」

「そうだよね。小学校、中学校は、市役所で聞いてみるか。で、高等学校はどうしようか。」

「なんなら、市立の公立校っていうのはどうでしょう。」

「市立の？」

「はい。呉市には市立の高等学校がありますし、それに皆、呉市在住になりますので、拒否されることは無いかと思えます。」

「それもそうか。じゃあ、相談してみるか。」

学校の件は、市役所に相談する事にした。

その日のうちに市役所に連絡し、教育委員会とも協議をすることになった。

そして、数回の協議の結果は・

呉鎮守府内に、呉市立の小中学校と高等学校の分校が設立されることとなった。

◇

食堂の掲示板に、学校設立の報告を張り出すと歓声が上がったのだった。

「やった！ 学校に行ける！」

と言う声もあれば、

「ええ、やだなあ、あたしは・・・」

と言う声もあつた。

「勉強は必要だよ。みんな、いいかい？ それに、ここ鎮守府内に分校を作るから、そ

んなに嫌がらなくてもいいだろう。」

「それは、そうなんだけどさあ。でも、提督？ 授業が優先なの？ それとも出撃が優

先なの？」

「残念ながら、出撃が優先だ。だから、みんなには掛け持ちをしてもらうことになる。」

ええええーっていう声が上がつたが、秦は聞こえていないフリをした。

「じゃあ、学校って何処に出来るの？」

「ああ。この鎮守府本館につながっている倉庫として使つてる部屋がいくつかあるだ

ろ？ そこを整理して、掃除して、使おうかと思つてるんだ。」

「へ？ あの倉庫？」

「あの部屋だと、1部屋20人くらいかしらね。フッフ。いいんじゃない？」

「いいじゃないか。私は賛成するよ、提督。」

最後には陸奥と長門が賛成したことで、全体の意見が纏まつた。

「ところで提督ウ。一つ忘れていませんか？」

そう言ったのは金剛だった。

「何をだい？」

「何をつて！ 小学校にも入れない子がいるじゃないですかー！」

！

そうだった。

小学生より小さな子、ここでは、海防艦の艦娘たちが居たのだった。

択捉、松輪、隠岐、佐渡をはじめとする海防艦の艦娘たちだ。

秦はその子らのためにさらに一部屋をねん出して、小学生以下の年少組を纏めることにした。

そこには、大人な艦娘に保母さん役を担ってもらうことにした。

それから倉庫の整理をして、教室として必要な、黒板と机を運び込み、1週間ほどで教室らしくなっていたのだった。

後で聞いた話によると、年少組の部屋で、人気のある“保母さん”は、以外にも金剛が一番で、神通が二番だったらしい。

しかし、陰では、一番の人気は、“母”たる鳳翔だったという。

◇

初めて市役所との協議を行った日の夕刻、秦は執務を粗方終えて、本館の隣にある木の陰の長椅子に腰かけ、海を見ていた。

眼下に見える呉の港には、多数の艦船が浮いていた。

数隻の小型艦が、秦の左から右へと動いていた。

どうやら、訓練から帰って来た部隊の様だった。

そう言えば、今日の午後から訓練を行う部隊があつたな、と思い返していた。

(フーツ、まだ日差しが強いなあ。ここは、風が抜けて心地いいなあ。)

そう思っていた。

日が沈むまでには、まだ少し時間がある。

まだまだ暑さが残る中、秦は上着を脱ぎ、上半身肌着として着ているシャツ一枚になつていた。

その姿を確認していたかのように、一つの影が秦に近づいてきた。

榛名だった。

「今、お一人ですか？」

と声を掛けてきた。

「ああ。休憩中、かな。」

「では、隣、よろしいですか？」

「どうぞ。」

と置いていた上着をどけて、スペースを空けた。

そこに榛名がスカートを押さえつつ、静かに座った。

秦が榛名を見つめる。

鳳翔とは違う、別の意味での大和撫子の姿だ。

鳳翔の様に、全てを包み込むような微笑みと存在感とは違う。

お淑やかさが漂うものの、明るく元気な女の子、であった。

そんな榛名が、見つめられて顔を赤めて座っている。

「榛名? どうした?」

「いえ、……何をお考えなのかなつと。」

「俺かい? 俺は……大所帯になったなあつと思つてね。」

「大所帯、ですか?」

「前の警備部では五隻七人だったからね。今は50人近く居るし。

だから七倍? 八

倍? になつてしまったからね。名前を覚えるのが大変でね。」

クスツと榛名が笑う。

「ご苦労様です、提督。」

その笑顔は、美人の部類に入る榛名の顔が、更に美しく見える。

「じゃあ、榛名は、どうしたんだい？ 何か用なんじゃないのかな。」

「あ、いえ．．．特に、何かあるわけでは無いのですが．．．提督にお聞きしたいことが．．．ありまして．．．。」

「俺に？」

「はい．．．提督は、鳳翔さんのことを、その、愛していらつしやるのですか．．．」

「ああ。愛している。」

秦は、はつきりと言いつつ切った。

「出会いには、ちよつと特異だったけど、俺は、鳳翔を愛している。何処の誰よりもね。」

まあ、鳳翔も同じだと思ってるんだけどね。」

（大雨の中で、拾った、なんて言えないし．．．）

「そう、ですか．．．」

俯き、暗い顔をする榛名だった。

そんなことを聞きに来たのか、と思つた秦だが、榛名を見て、思い至つた。

「そう言えば、榛名は、そろそろ最高練度に到達すんだつたな？」

「はい．．．」

たぶん、このことだろう、と．．．

「俺は、ケツコンカッコカカリを、バンバンするほどの甲斐性は無いよ。お前さん、それ

を聞きに来たんだろ？」

榛名はただ黙って頷いた。

「そうか。お前さん……」

「私、榛名は、提督のことが……」

秦はそこまで言つた榛名に対して、口の前で指を立てて見せた。

「出会つて日が浅いのに、そう思つてくれるのは、嬉しい限りだよ。ありがとう。君

のような綺麗な女の子に好かれるのは光栄なことだね。」

榛名に向いて、微笑んで見せた。

その微笑みに、榛名が顔を赤く染める。

「日が浅いなんて思いません。出会いは、運命だと思つています。」

「そうだな…… 出会いは、運命、だな。」

秦はそう言つて、上を、強い日差しを遮る木陰を作つている木を見上げた。

「俺は、ジユウコンをするほどの甲斐性は無いと思つているし、したいとも思つてない。

変にすれば、それは、その娘に対して失礼だと思つてるよ。ホントに失礼極まりな

い事だと思ふ。ただ…… ただ、好かれるのは、この立場にいる限りは、致し方ない

事だ、とも思う。

まあ、睦たちには父親として好かれていることは事実だし。それに…… 朝霜なんか

は、もう少し年齢が上がれば、自分から「ケツコンしろ！」って言うてくるんだと思う。」

「朝霜ちゃんが、ですか？」

「ああ。朝霜だけじゃない。睦だって、もう10年遅かったら、そうだと思う。皐月、卯月、弥生はどうか、とは思うけど。」

「じゃあ、なんで、家族なんですか？」

「朝霜はそこまで練度が達してないし、ケツコンに意識が行ってないんだと思う。だから、アイツらたちから俺の事を父さんと呼んだんだ。鳳翔をお母さんとね。そう呼ばれたから、アイツらを娘にしたんだ。ま、それはそれで大変なんだけどね。」
と苦笑して見せた。

「三人家族が、いきなり七人家族になったけど、それはそれで楽しいし、問題もあつたけど、有意義なことだ、と思ってるよ。」

秦の目が海を見つめていた。

「今は……ここ呉のみんなが家族みたいなもんだ、と思ってる。ははは。余所余所しい提督なんて、嫌だろ？」

「提督は……こここのみんなを愛すると？」

「うん。そうしたいと思う。少なくとも、愛情は注ぎたい。どんな形にせよ、この

戦争が終わる事になったとき、各人が故郷へ帰る時が来るはずだ。家族、恋人の元にね。その時、誰も信じられないような女の子にはしておきたくないからね。」

しばらく話し込んだ後、

「それでも、私、榛名は、提督の事が好きです。今の話聞いて、確かにそう思います。ですから、いつでもお側に居たいと思います。」

そう言つて秦に向かつてお辞儀をして去つて行つた。

その言葉にしぐさに、驚き、頭を掻く秦だつた。

榛名が去つた後暫く海を見ていたが・・

「出ておいでよ。鳳翔、そこにいるんだろ?」

と声を掛けた。

すると、後ろの建物の陰から鳳翔が静かに現れた。

「気付いていたのですか?」

秦が鳳翔の方を振り向いた。

「ああ。お前さんの、その髪油の匂いでね。はは。惚れた女の匂いは間違えるこ

とはないよ。で、聞いていたんだろ?」

「そうですか。立ち聞きしてしまつて、すみません。最初は、お声を掛けようと思つ

てたんですけど。」

「いや、いいよ。　どのみち、鳳翔が傍に居ても、俺の答えは変わらないからね。」
微笑みながらそう言つて、椅子に座るよう促した。

それに応えるように、鳳翔が出てきて、長椅子に袴をpushさえながら、秦の隣に座つた。
「榛名の事、どう思う?」

と鳳翔の手に、秦自身の手を重ねて言う。

「はい。　素直な、いい娘だと思います。」

鳳翔も秦の手を取つて、握つていた。

「そうだね。　俺もそう思う。　ただ、榛名の思いを俺は受取れない、受け止める事ができない。　その点は、榛名に悪いと思う。」

「あの娘は．．．　分かつてくれますよ、あなた。」

目を細めた、優しい眼で秦を見ている。

「そうだと、いいが．．．」

「大丈夫ですよ。」

「鳳翔がそう言うなら．．．　分かつたよ。」

そう言つて、二人は、手を握り合つて、寄り添つて海を見ていた。

陽が徐々に陰りはじめ、海の色が暗くなつてきた。

「陽が．．．　陰つてきましたね．．．」

「ああ。少しは涼しくなったかな。」

いつまでも、こうしていたい、と二人は思っていた。

だが・・・

「さあ、戻りましょ。もうすぐお夕飯ですし。今日は卯月ちゃんリクエストのメンチカツですよ。」

ああ、と言って、二人手を繋いで官舎へと戻っていった。

花火大会の一日（前編）

呉に來てから数週間が過ぎた。

秦も鳳翔も、こども達もここ呉に馴染んで來ていた。

「ふう。今日も暑いねえ。」

「年々、熱くなっている様に感じますね、提督。」

「やはり、そう思うかい、大石大佐。」

「ええ。それはそうと、今年も花火大会の時期ですね。」

8月中旬、呉の街では花火大会が催される。

秦としては、2度目の花火大会になるのだが。

今年、呉鎮守府ではそれに併せて休日を設定したのだった。

艦娘たちにも、街へ出て屋台を巡ることもOKにした。

打ち上げ花火は、呉港内に台船を浮かべ、その上から打ち上げるのだった。

台船は、呉港の陸側に係留されていた。

艦が邪魔になつたりするので、陸側の艦は前もつて江田島沖や柱島停泊場に移動させ

ておいた。

もつとも、呉鎮守府所属の艦艇が、全てここ呉港に居るわけでは無く、いくつかの外洋の泊地に駐留させている部隊もあった。

だから、在籍の連中だけ、という特権になってしまった。

秦は、花火大会に向けた打ち合わせに、鎮守府側の人間として、大石大佐と共に出席していた。

当日の海上警備くらいで、ほとんどは地元協議会が担当するのだった。

打ち合わせの会場は、呉駅前のホテルだった。

呉市内でも洒落た内装をした結構、いい感じのホテルだった。

そのホテルの大広間を会場としていた。

打ち合わせが終わって、帰ろうとしたとき、ホテル内に、あるショップを秦が見つけた。

思いついたように、

「大佐、先に車に戻っていてくれるかい。ちょっと買い物してくるよ。」

そう言って、ホテル内に戻って行った。

30分ほどして秦が紙袋を下げてやってきた。

「すまない、時間が掛かってしまったね。」

ニツコリと笑ってみせた。

「何を買われたんです？」

「お茶請けだよ。すまなかつたね、待ってもらつて。」

運転は大石大佐だった。

「いえ、大丈夫です。逆に、いい休憩になりました。」

ホテルから鎮守府までは、車で、ゆっくり走つても10分で着く。

執務室に帰つて来た二人は、打ち合わせの結果を、二人の秘書艦に報告する。

その際、秦は紙袋から買つてきたお菓子を出して、冷えたお茶を用意した。

お菓子と言つても、広島銘菓のみみじ饅頭だ。

しかも、こしあんと抹茶あんの2種類。

四人はもみじ饅頭を食べたべ、冷えたお茶を飲みのみしながらの、報告会となつた。

「ま、やることは限られているから、大したことはないね。2隻くらい用意させようと思うんだけど。」

と秦が言う。

「そうね、海上警備だけだと、すつこい助かるわね。」

とは五十鈴だ。

「では、誰と誰にしますか？」

という鳳翔に対して秦が、

「うん、今回は、小回りが利いた方がいいだろうから、海防艦に任せようと思うんだけど、
どうかかな。」

と答えた。

「海防艦、ですか？ とすると、松輪ちゃん、択捉ちゃんあたりですか。」

「そうだね、その二人にやってみてもらおう。鳳翔、連絡しておいてくれる？」

「はい、了解です。では、二人に伝えますね。」

◇

今日の仕事を終え、自身の席で、椅子にもたれて伸びをする秦。

ふっとううつつと。

「今日のお仕事も、終わりだー！」

勤務時間は既に過ぎ、大石大佐と五十鈴は各自の部屋へと戻って行った。

秦以外に残っていたのは鳳翔だけだった。

「お疲れ様です、あなた。」

「ああ、疲れたよ。あ、そうだ。鳳翔にお土産があるんだ。」

二人だけの室内で、昼間、秦が買ってきた紙袋からもう一つの包みを取り出した。

「え？ 私に、ですか？」

それも、かなり可愛らしい包み紙に包まれたものだった。

「これを鳳翔につてね。そ、その、鳳翔に似合うかな、と思つてね。あ、ヤラシイ意味は無いからね。」

鳳翔は、頭の上で“？”が浮かぶような気がしていたが、

「ありがとうございます。なんでしよう。開けてもいいですか？」

「ああ、いいよ。」

包みを受取り、開けていく。

「可愛らしい包み紙ですね。あなたに似合いませんけど。」

と言つて意地悪く笑つて見せた。

「え・・・これつて・・・」

中身を見た瞬間、鳳翔の顔が赤くなつた。

それに併せて秦も赤くなる。

「ほ、鳳翔が着ると、可愛いだらうな、似合うだらうなつて思つただけど：嫌、だつた？」

「い、いやじゃ、ありませんけど・・・これ・・・は、恥ずかし・・・これを・・・」

◇

その日の夜。

花火大会を明日に控えての前日の夜だ。

既に入浴を終え、一人で寝室で本を読んでいる秦。

寝るまでの間の少しの時間つぶしのつもりだった。

また、連れ合いの鳳翔が入浴中で、戻ってくるまでの時間つぶしも兼ねていた。ガチャつと扉を開けて、湯上りの鳳翔が戻ってきた。

「ふう。いいお湯でした。」

「お帰り。 ゆっくりできたかい？」

「はい。今日は皐月ちゃんと卯月ちゃんと一緒でしたよ。」

「皐月と卯月か。 相変わらず、お子ちゃまな奴らだなあ。」

「まあまあ、いいんじゃないですか。 私も楽しいですし。」

とニコリと笑った。

そして、いつものように、秦は鳳翔の髪を鋤くのだった。

鏡台の前に座る鳳翔の長い髪を、ゆっくりとブラシで鋤く。

時折、鏡を通して映る視線を重ねる二人。

視線が合うたびに微笑む二人だった。

ブラッシングを終え、そろそろ寝ようとベッドに腰掛ける秦だったが、秦の前に赤い顔の鳳翔が立った。

「ん？ どうした？」

「・・・似合い、ますか？」

そういつて浴衣の帯を緩め、肩から脱いで行く。

床に浴衣が落ちると、秦からもらった下着を付けた鳳翔がいた。

下着と言つても、キャミソールだ。

それも、シルクで出来た、淡いピンク色をし、胸廻りはレースになっていて、乳房がそこそこ見える。

丈は腰までではなく、お尻が隠れる程度までに長い。

ショーツが隠れるくらいに。

その姿を見た秦も、顔を真っ赤にしていた。

「ああ。可愛い。すごく可愛い・・・」

「や・・・可愛い、だなんて・・・うううう・・・恥ずかしい・・・」

恥ずかしがつて、赤い顔を両手で覆う。

同じように顔が赤い秦が、ベッドから立ち上がつて、恥ずかしがる鳳翔を抱きしめた。

「ふえ・・・」

と変な声を上げた鳳翔を、両腕で、強く抱きしめた。

「鳳翔・・・ありがとう・・・ごめんね。無理させちまったね・・・でも、すごく綺麗。」

可愛らしい・・・」

「もう・・・ 殿方からこういうものを贈られたことなんてないですから・・・」
ちよつと脹れて見せる鳳翔だが、秦の胸に頬を摺り寄せていた。

「可愛い鳳翔・・・」

そう言つて、秦は鳳翔の唇を塞いだ。

んっ、んっ・・・

その口づけは、短いモノではなく、長いモノだった。

強く、長く。

唇が離れると、二人はベッドへと入つて行つた。

そして・・・

翌日の朝、ベッドの中で、しっかりと抱き合う二人がいた。

二人とも浴衣を着ていた。

いつもの時間になつて鳳翔が起き出す。

普段なら、秦はまだ眠っているのだが、今日に限つては、同じタイミングで目が覚めていた。

「おはようございます。あなた。」

「ああ。おはよう。」

挨拶もそこそこに、朝の口付けから一日が始まる二人。離れた顔は、お互い赤かった。

◇

今日は花火大会だ。

午前中までは通常体制として、午後からを休日にした。

艦娘達からは、

「えー、一日お休みじゃないの??」

という批判もあったが、休戦も停戦もしていない状況で、まるまる一日を休日にあてる事は出来なかった。

「悪いね。でもいつもより長めに休めるでしょ?」

という秦の言葉に、反論を塞がれてしまった。

ぶー垂れる奴もいたが、とりあえず、言う事は聞いてくれるみたいだった。

その態度をみて、

「やれやれ。ホントは休みなんてないのに、よくぶー垂れるな・・・」

と呆れていたが、ぶー垂れていても、こここの鎮守府の一員だったから、怒る気持ちは起こらなかつた。

昼食後、全員を食堂に集め、

「午後からは、前もって知らせてある通り、花火大会があるから休みにする。各自自由に過ごす事を許可する。ただし！問題は起こすなよ？ 門限は2200だ。いいね。では、解散。」

と宣言した。

「自由って、出かけてもいいの？」

「ああ。構わないよ。」

「買物も？」

「OKだ。」

そこまで聞いて、やっと、

「やったああああ!!」

と歓声が上がったのだった。

「あ、そうそう。忘れてた！ 出掛ける奴は浴衣でな。それと、酒保を開いてよし。」

「はーい!!」

「浴衣が着れるう！」

「酒だ、酒だ〜！」

出掛ける奴は着替えに部屋に戻っていった。

酒組は、そのまま酒を飲むのかと思いきや、厨房に入って行く。

「あら、どうしたの？」

と鳳翔が聞くと、

「やっぱ、酒肴が重要だよ！」

と言つて、自分たちで作るつもりの様だ。

戦艦組と重巡組ばかりだったが、料理が得意なヤツもいたが、鳳翔も手伝う事にした。

「じゃあ、私も何か作りましょうか？」

「え？ いいの？」

「ええ、いいわよ。簡単なものだけど。」

とニコリとする鳳翔だ。

「じゃあ・・・」

と言つて、割烹着を着て作り出したのは・

ごぼうを洗つて、笹がきを始めた。

50cmはあろうか、長いごぼうを丸まる一本、笹がきにした。

次に用意したのは、人参だった。

ちよつと厚めの桂剥きをして、千切りにしていく。

「それつて、きんぴら、ですか？」

「そうよ。ちよつと濃いめに味付けすると、お酒にいいかなつて。」

プライパンでごぼう、人参を炒め、醤油、みりんなど調味料を入れていく。酒も入れた。

最後に、ごま油を廻しかけ、胡麻を振って出来上がり。

だいたいは、小鉢で出てくるようなものだが、今日に限っては、大皿に、ドン！ときんぴらごぼうが載っている。

次は、ちくわの醤油炒めだ。

ちくわを5mm位で輪切りにしていく。

切り終えたら、プライパンで炒めるだけ。

調味料は、基本は醤油味で、甘辛くするためにみりんを入れた。

アクセントに、胡麻とパセリのみじん切を和えてみた。

こちらも大皿に盛られている。

「これでしばらくは持つわね？」

「ありがとうございますう！」

そう言うのと早速、箸を伸ばす。

（この食欲だと、すぐ無くなるわね・・・）と思う鳳翔だった。

◇

執務室に戻ると、四人掛けソファーに松輪、択捉、佐渡、隠岐の四人が座って、正面

のソファアに秦が座っていた。

「遅くなりました。」

「ご苦勞様。酒組は満足してたかい？」

「あら、ご存じだったんですね。」

「ああ。」

秦の隣に鳳翔が座る。

「さて、と。扨捉、松輪の二人には、悪いが、今晚の花火大会の海上警備をお願いするよ。」

「ぶー！ あたしも花火大会、行きたいのにく。」

「屋台や露店もみたかったなあー。」

「隠岐は？ 佐渡は？ お留守番？」

「隠岐も行く！」

「は？ いや、隠岐は・・・」

隠岐の目に涙が溢れそうだった・・・

「う、うううう・・・」

「わ、わかった、分かったよ。そんな目で俺を見るな。　　ったく。」

乗しろ。佐渡は扨捉だ。俺は、扨捉に乗るから。　　隠岐は、松輪に同

すると、隠岐と佐渡が笑った。

「へへへ。」

「あら、私はどうするんですか？」

「ん？ 鳳翔はま・つ・。」

鳳翔が秦を睨んでいた。

「・・・あ・・・ 鳳翔は、俺と一緒に、ね。」

すると、ニツコリとして、

「はい！」

と。

グタツと肩を落とす秦だった。

（まったく、提督を脅してどうすんだよ・・・）

と心の中でぼやくのだった。

その姿をみていた五十鈴が笑う。

「あはははははっ 提督も鳳翔さんに掛ければ、肩無しだねっ。」

大石大佐は、顔を下に向けて、笑いを堪えているようだった。

「お前たち、笑い過ぎだっ！」

一通り笑ったところで、扨捉ら四人が準備の為、出て行った。

代わりに、朝霜らがやってきた。

「邪魔するよ！」

と、いつものように。

「父さん、お母さん、じゃあ、行ってくるね。」

そう言うのは睦だ。

後ろに皐月、卯月、弥生がいた。

みな浴衣姿だった。

それも、鳳翔が縫った浴衣。

「おう。可愛いじゃないか。それじゃ、可愛い娘さんたち、気をつけて行ってきな。

あまりはしやぎすぎるなよ。」

【はーい。】

と言って出て行ったのだった。

花火大会の一日（後編）

1500になって、海防艦・択捉と同じく松輪が動き出した。

択捉には、佐渡、秦、鳳翔の三人が乗り込み、松輪には、隠岐が乗り込んでいた。

二艦とも、甲板上に白い天蓋を張り、日よけにしていた。

「今日は、特に暑いなあ。」

そう言いつつ、積み込んだラムネを飲む秦。

打ち上げ用の台船から離れる事500m。

この位置で二艦を止めた。

ここより台船寄り、接近禁止区域になっていた。

二艦は警備艦の役目だった。

警備艦と言っても、見物客の船が事故を起こさないように注意喚起するだけだし、見物用の遊覧船は、すぐ傍まで来ることになっていた。

いわゆる、海上の目印としての位置付けであった。

ただ、緊急時には、すぐに動かないといけない事を考え、機関の火は入れたままだ。

1600。

早くも観覧用の遊覧船が出てきた。

基本的に、やる事の無い秦は、天蓋の日陰で、持ちこんだロッキングチェアでくつろいでいた。

「司令く、暇なんだけど〜」

とダレた格好で秦に呟く拵拵だったが、

「ん、そうだな。暇だな。」

とつれない返事をする秦。

「もう！　そうだけどさ、何かやること無いの？」

「無い。」

と言い切る秦。

それを聞いてズッコケる拵拵。

「もう！　そうだけどさ！」

「フッフ。何も無い事が一番、平和でいいわ。暑いけど。」

チェアに腰かけていた鳳翔が言う。

「ああ、暑ければ空調を効かせた艦内に入っていればいいよ。　そういや、鳳翔？　最近

体調はどうなの？」

「あら、気付かれていますか？」

「ああ。調子がいい時と悪い時があるよね、最近。体調が悪ければ休んでいても良
いからね。」

「はい。その時は、そうさせてもらいます。でも今は大丈夫ですよ。」

そう言つて見つめ合う。

「なら、いいんだが、無理しないでね。それから、今日の夕飯は、この警備が終わつて
からになるから、2100くらいかな。」

「はい。承知しています。それじゃあ、択捉ちゃん達も呼びますか?」

「ああ、いいね。呼ぼうか。択捉、佐渡、今日の夕飯は遅いけど、ウチで食べるかい
?」

「え、いいの?」

少々驚いた択捉たち。

「ええ。いいわよ。」

と鳳翔がニコリとしていた。

「やったああ!」

「鳳翔さんの美味しいご飯が食べられるよ!!」

鳳翔の料理は、鎮守府内でも知られた話になっていた。

“ 鳳翔さんのご飯は、美味しい ” と。

食堂は食堂部のおばさん達による料理だったから、家族以外で鳳翔の料理を食べる機会など、滅多になかった。

「それじゃあ、松輪達にも伝えるね！」

艦橋へと駆け出す択捉。

5分ほどして戻ってきた。

「連絡完了。松輪達もオツケーだつて。」

「よし、上等、上等。今日の晩御飯は賑やかになりそうだな。」

「フッフ、そうですね。」

そう言つて秦も鳳翔も微笑んでいた。

花火の打ち上げは、陽も暮れた1900から。

およそ30分間で5,000発を打ち上げるのだそうだ。

1800を過ぎて、徐々に日が陰ってくる呉港。

島の陰になっている事で陽が無くなるのは早い。

ようやく、涼しく思えるような海風が吹き始めていた。

海上の遊覧船も増えてきたようだった。

見ると、択捉と佐渡はお揃いの浴衣を着ていた。

「お。お揃いか。可愛らしいじゃない。」

「へへへっ、いいでしょ。 鳳翔さんに着付けて貰ったの。」

「良かったな、二人とも。 ご苦勞様、鳳翔。」

「この子たち二人分なら、どうと言うことはありませんから。」

択捉と佐渡の頭を撫でる秦。

微笑む鳳翔だった。

暫くして、そろそろ始まるか、と相成る時間だった。

「択捉、探照灯を点けておくれ。 松輪にも連絡を。」

「了解！」

装備されている探照灯に灯が入る。

さすが、探照灯のことだけあって、遠くまで灯りが届く。

今日の目的は、警備艦の位置を知らせる事だ。

だから、海面を照らしていた。

侵入禁止エリアに船が入ると、探照灯を照射して、退去を促すのだった。

もうそろそろ打ち上げの時間になろうとしていた。

「街へ行つた連中も、楽しんでるのかな。 怪我とか無けりゃいいんだがな。」

「みんな、大丈夫でしょう。 もう十分に一人前ですから。」

「司令？ 探照灯は点けっぱなしでいいの？」

「ああ。ただ、照点は下げておいてくれ。」

「りよーかーい！」

「あー！ 始まったよー！」

台船から打ち上げ音がして、空に大輪の花が咲いた。

5000発の打ち上げの始まりだ。

打ち上げが始まると、立て続けて上がる花火。

空に大輪の花のような菊先やボタン。

やし、葉巻、銀蜂、青蜂が続く。

「おおお、すごいなあ。」

「わあ、大きいですねえ。」

上空で爆ぜて、落ちる間に色に変化する星達。

「綺麗だねえ。」

秦、鳳翔、択捉、佐渡も上空を見上げて、次々と打ちあがる花火に見とれていた。

いつの間にか、秦のチェアに鳳翔が割り込んだ。

一つのチェアに二人で座って空を見上げていた。

択捉と佐渡は舷側に越しかけて見上げていたから、その隙にやってきたようだった。

「まったく、お前さんは．．」

「ふふふ。 いいじゃないですか。」

そう言つて秦に抱きついてゐる鳳翔だった。

秦の腕が鳳翔を抱き寄せ、鳳翔の頭は秦の胸の上にあつた。

次々と上がる花火を見ていた。

「綺麗ですね。」

「ああ。 見事なもんだ。」

上がる花火の陰で鳳翔を抱きしめる秦。

「ずっとこうしていたいよ、鳳翔。」

「はい、私も。」

そして、花火大会の最後となる大玉が空に大輪の花を咲かせた。

花びらがちらちらと燃え尽きながら落ちて行つた。

「終わったようだな。」

「ええ。」

物足りない顔をしている鳳翔だが、花火が終わつたからには、仕方がなかつた。

「ああああ。 終わつちやつた．．．」

「終わつちやつたね．．．」

残念そうな択捉と佐渡。

1945を少し過ぎたころ、周りの遊覧船たちが帰り始めていた。

二隻の探照灯はあたりを照らしている。

まるで帰り道を指し示すかのよう。

「さあ。俺たちも片付けようか。」

「オツケー！」

そうやって甲板上のモノが片付けられていく。

30分ほどが過ぎたころ、二隻の警備艦のまわりには、一隻も残らずいなくなっていた。

「司令、誰も居なくなつたよ？ 帰らないの？」

と聞くのは択捉だ。

既に天蓋は片付けられていた。

秦たちは、択捉の艦橋にいた。

「よし。帰るとするか。」

そう言つて、択捉の頭にポンと手を置いて、撫でていた。

へへへつと択捉が笑う。

「松輪にも連絡してくれるかい？ 終了して帰るぞ、と。」

「了解！」

松輪に帰投命令が伝わると、その位置から離れて行った。

二艦は微速で最初の栈橋まで戻ってきた。

すでに2000を過ぎていたが、街には屋台の提灯が明々と灯つているのが見えていた。

◇

官舎に帰り着いた秦と鳳翔達。

睦達はまだ帰ってきていなかったから、灯りは灯つてなかった。

「なんだ、睦らはまだか。」

「そのようですね。」

「門限は2200って言うてあるから、そのうち帰ってくるだろ。」

そう言うて、食堂に入つて行った。

「じゃあ、晩ご飯の用意をしますね。」

と言いながら割烹着を着こむ鳳翔。

「みんなは、何がいいかな？」

「私は、チキンライスがいい！」

とは佐渡。

「私は、焼き魚がいいです。」

とは松輪。

秦は、どうする？ と鳳翔に聞くと、

「じゃあ、両方にしましよ。ちようど、サバもあるし、大丈夫でしよ。」

と微笑んで答えてくれた。

「「やったあ。」」

喜ぶのは択捉ら四人だ。

なんか、両極端なメニニューになったが、鳳翔は一人ニコニコして料理に取り掛かった。

択捉たちはカウンター越しに調理場を覗いていた。

その目はキラキラしていた。

割烹着姿の鳳翔は、見られている事に驚いたようだったが、微笑みを返してもなお、楽

しそうに料理を続けた。

鯖の切り身を6切れ用意して、焼き網に乗せて焼いていく。

しばらくして・・・

魚が焼けるいい匂いがしてきた。

また、フライパンを振る姿も見えた。

すると・・・

「さあ。出来たわよー！」

と。

テーブルに赤いチキンライスと焼きサバが並ぶ。

対照的な白いポテトサラダも並んでいた。

「いいにおーい！」

秦と鳳翔もテーブルについて、みんなで「いただきます。」と。

「あ、あなた。白ごはんもありますからね。」

「ああ。ありがとう。でも、俺もこっちのチキンライスをもらおうよ。」

チキンライスを頬張る択捉たち。

「ん、おいしー。」

焼きサバの身を食べる松輪。

「お魚、おいしー。」

「噂通り、鳳翔さんのご飯、美味しいね。」

択捉らと共に、美味しいという。

「うふふふ。ありがとう。そう言ってくれど、嬉しいわ。」

「良かったな、鳳翔。」

「ええ。」

択捉達四人と秦、鳳翔の六人で囲む夕食は、睦や朝霜らとは違う雰囲気の夕食だった。

四人を見ながら微笑む秦。

それを鳳翔が見て、

「どうしたんですか、あなた？」

「いや、なに。睦らとは違う雰囲気だなあつて。睦や朝霜らは、この子たちからすると十分に大人に見えるよ。睦らとは違う、可愛らしさがあるよ。」

「そうですねえ。この子たちは、まだまだ幼子ですからね。」

食事を終えて、四人には見えないように、テーブルの下で手を握り合っていた。

「ごちそうさまでした！」

「おいしかったねえ。」

「うん。おいしかった。」

「そうか、美味しかったか。良かったな。」

食後のお茶で一服をしていると、玄関から声が聞こえてきた。

「たっただいま！」

朝霜と臯月の声だ。

どうやら五人がまとまって帰って来たようだった。

ぞろぞろと食堂へやってくる、秦と鳳翔を見つけて、

「父さん、お母さん、今帰ったよ。」

「お帰り。」「お帰りなさい。」

「あれ？ 択捉ちゃんたち、どうしたの？」

と聞くのは皐月だ。

「警備艦のお役目が終わって、今、やっと晩ご飯が終わったところよ。あなたたちは？」

「屋台で散々、食べてきたから、お腹いっぱいでき。」

とニコニコと笑いながら答えるのは朝霜だった。

「朝霜ちゃんつてば、甘いモノばかりだったじゃない。聞いてよ……」

と秦と鳳翔に密告しようとするのは皐月だ。

「ス、ストップ！ そこからは、ダメって言ったじゃん！」

慌てて皐月の口を塞ぐ。

フガフガ……と悶える皐月。

「でも、いろいろ食べて、楽しかったびよん。」

「花火も綺麗だったねえ。」

その言葉に皆が、うんうん、という。

夜も遅いので、皐月と睦に、択捉達を寮まで送らせる事になった。

「気をつけて帰りなさい。皐月、睦、頼むね。」

「うん、了解だよ。」

手を振りながら帰って行く四人。

その姿を見ながら、

「あたいも、あんな可愛い妹が欲しいかも。」

「なんだ、ウチの家族たちでは不満か？」

「そうじゃないよ。もつと人数が居てもいいかもってさ。」

けけけつと笑う朝霜だ。

「そう簡単に、大人数を家族に出来るか。ていうか、鎮守府みんなが家族みたいなもんだらうに。」

「ま、そうなんだけどさ。」

まったく、と呆れながら見送る秦たちだった。

救急搬送

9月に入ったこの日、午前中に書類仕事を終わらせ、午後から大石大佐と共に工廠とドックに視察にやってきた秦。

鳳翔と五十鈴の二人の秘書艦は、執務室で留守番だった。

「各艦の改造は順調そうだね。」

「ええ。工廠の作業員には、だいぶ無理をさせていますが。」

「それは、申し訳ないなあ。だが、厳しいようだが、やらなければならぬ。皆には、

安全に気をつけてやってもらうよう、通知をしておいてくれるかい？」

「はい。」

そんな会話をしながら、ドックを一つ一つ廻っていた。

鎮守府本館から離れたドックに居た頃だった。

鎮守府の入口付近で、赤色灯が回っているのが見えた。

確かに、救急車の警告音が、遠くで鳴っているのは聞こえてはいたが……

「ん？ 何かあったのでしょうか？ あの赤色灯は、救急車ですね。」

「ああ。 そのようだな。」

秦と大石大佐は、誰だろう?、と思っていた。

すると、大石大佐の携帯電話が鳴った。

「はい、大石。なんだ、五十鈴か。どうしたんだ?」

（どうしたじや、ないわよ!　そこに楠木提督はいるの?）

「ああ、いるよ。　ちよつと待って。」

携帯電話から顔を外して、電話を秦に渡す。

訝しながら、

「ん、俺かい?」

「ええ。　そのようです。」

電話を受取り、

「楠木だが。」

（提督、大変です。　鳳翔さんが、鳳翔さんが、倒れました!!）

「は?　何を言ってる。　さつきまで元気だった・・」

（今しがた、倒れたんです!!　医務室へ連絡して、救急車を呼んでいます!　至急、医務

室まで来てください!）

「わ、わかったよ。　すぐ、行くよ。」

そこで電話が切れた。

「どうなさったんですか？」

「いや、要領を得ないんだが、鳳翔が倒れたらしい。医務室まで来てくれって。」

何があったんだろう、と思つた秦だったが、とりあえず、医務室まで行くことにした。

「大佐、視察は一旦、ここまでだ。俺は、医務室へ行つてくるよ。」

「では、車で行きましょう。」

「ああ、頼む。」

大石大佐の運転で、秦は鎮守府本館まで戻ることにした。

秦が到着するまでに、救急車は既に走り去つた後だった。

到着後、急ぎ医務室までやってきた秦だったが、

「入るよ？」

そこに居たのは、医療部の女医だった。

「あ、提督。遅いですよ。」

「ああ、すまない。で、鳳翔は？」

「はい。既に救急車で搬送されました。」

一足違いだった。

「遅かったか。では、病院へ行こう。大佐、頼めるかい？」

「了解です。」

「それで、五十鈴が一緒だと思っただが？」

「五十鈴秘書艦が病院に付き添っていきましたよ。」

「鳳翔の状態は、分かる？」

「いえ。倒れて運ばれてきたのですが、冷や汗をかいて、呼吸が浅かったので、救急搬送を依頼しました。意識は不明です。」

そこまで聞いて、急ぎ、病院へと向かった。

搬送先の病院は、予想出来ていた。

艦娘が運ばれる先は・・・海軍の協力で、病院内に艦娘用の婦人科がある、呉赤十字病院だ。

元々は人であるものの、定期健診などで、艦娘の研究がされていたのだ。

もつとも、検査で得られた結果は、ほぼ人と変わらない、という事だけだった。

艦娘としての能力は、生まれ持ってきたものか、後天的に現れるものなのか、それすら分からないのだ。

救急車に遅れる事20分程。

秦が病院に到着し、救急処置室の前までやってきた。

どうやら、ちょうど応急措置が終わったらしく、救急処置室から集中処置室へと移されるどころだった。

ストレッツチャーに乗せられた鳳翔を確認した秦が声を掛ける。

「鳳翔、鳳翔！」

平静を装っていた秦だったが、白く血色のない鳳翔の顔を見ると、落ち着いていられなくなっていた。

「提督。」

声を掛けてきたのは五十鈴だった。

「ああ、五十鈴か。鳳翔の具合はどうなんだ？」

「まだ私も聞いていません。しかし、執務室で急に倒れたので。」

集中処置室でベッドに移される鳳翔。

意識が無く、ぐったりしているように見えていた。

よく見ると、点滴だろうか、点滴袋が2つほど鳳翔の細い腕に繋がっているようだった。

左手には、心拍計だろうか。血圧と共に数字が表示されていた。

慌ただしく医師と看護師が作業をしている。

その作業がひと段落したらしく、秦の前に医師がやってきた。

担当する女医だった。

「提督さんですか？」

「はい。 呉鎮守府提督、楠木です。それで、妻は、鳳翔は、大丈夫なんですか？」
「ま、焦らないで、落ち着いてください。現状を説明しますので。」

そう言つて、カウンセリングルームに連れて行かれた。

医師、看護師と秦、大石、五十鈴が座る。

「奥様、鳳翔さんは、今、鎮静剤を打つて、眠っています。外傷は見られません。簡

易検査の結果では、身体に異常は認められませんでした。」

「異常がない？ では？」

「まだ、血液検査等の結果が出ていませんので、詳しくはその結果を見て、という事になろうかと思えます。あと2, 3時間は目を覚まさないでしょう。」

「そうですか。あと、2, 3時間・・・では、私は待ちます。」

「判りました。待機は、部屋がありますので、そちらで。では、後ほど。」

そう言つて医師と看護師が出て行った。

残された三人は、一応の異常がない事に安堵していた。

「異常はみられらず、か。なんだろう。で、五十鈴、詳しく教えてくれるかい。」

「ええ。二人が視察に出て行つて、しばらくして、鳳翔さんが、気分が悪いっていつて、ソファに倒れ込むように座ったんだけど、顔色が悪いのがすぐわかつて、声を掛けたんだけど、そのうち返事が無くなって、呼吸が弱くなってきちゃつて、医務室に連絡し

たのよ。医務室に運んで、診てもらったんだけど、鳳翔さんの意識が無くなってしまったので、念のため、救急搬送をお願いしたの。」

だそうだ。

「そうだったのか。ありがとう、五十鈴。そう言えば、少し前から体調が思わしくな
いって言うときがあったから、何らかの前触れだったのかもしれないね。」

腕を組んでちよつと考え込む秦だった。

「そうだ。大佐、五十鈴、ありがとう。あとは、俺が居るから、二人は鎮守府へ戻つ
てくれ。大佐、後を頼めるかい？」

「え、あ、はい。大丈夫です。」

「すまないね。それでは、後をよろしく。それと、睦らに連絡を頼むよ。」

「了解しました。では、提督、戻ります。」

そう言って、大石大佐は、五十鈴と共に戻って行った。

秦は、ベッドサイドまで行っていい、との許可をもらって、白衣を借りて、集中処置
室に入って行った。

ベッドサイドの丸椅子に腰かけ、鎮静剤で眠っている鳳翔を見ている秦。

シートから出ている手を、握った。

白く、か細い手だった。

まだ顔色が良くなく、いつもより顔色がくすんで見えていた。

「鳳翔・・ 鳳翔・・ 俺はここに居るから。 傍に居るからな。」

と小声で、それでも鳳翔の耳に届く声で話す。

心拍数、血圧計の数字は、ほぼ変化なく、一定に近い数字を表示していた。

それを見て、今は落ち着いているようだ、と認識する秦だった。

「鳳翔、体調が優れないって言つたのに、気付いてやれず、ゴメンね。 やはり、苦勞させ過ぎたようだね。 仕事は、大石大佐と五十鈴がいるから、彼らに割り振つて、お前さんの仕事を減らそう。」

鳳翔の前髪を鋤く。

「鳳翔には、ゆっくりしてもらうよ。」

秦は鳳翔の耳元でそう言つた。

握つた手に力を込めて。

すると、意識が無いままなのに、握り返してきた。

！

「鳳翔・・ 俺はここに居るぞ。 お前さんの傍に、いつまでも、ずっとな。」

その言葉が聞こえたのか、少し頬が緩んだような。 ちよつと朱くなつたような感じ

がした秦だった。

◇

執務室に戻った大石大佐と五十鈴。

「五十鈴、早速だが、睦ちゃんたちに連絡をお願いできる？」

「いいわよ。」

そう言つて、睦に連絡をする五十鈴。

「あ、睦ちゃん？ 五十鈴よ。今どこに居るの？」

（執務室の前だよ。）

「え？ 前？ ちようどいいわ。入つてきて。」

（はーい。）

「おじやましませす。」

と言つて睦が入つてきた。

「およ？ 父さんとお母さんは？」

いつもは居る、秦と鳳翔がいないのに気付いた。

「そのことで話があるのよ。」

「え？ 話？」

五十鈴と大石大佐が目配せして、大石大佐が話すことになった。

「睦ちゃん、鳳翔さんがさつき、倒れてね。今、病院に搬送してきたんだ。」

「え？ 倒れた？ ど、どうして？」

動揺を隠せない睦だ。

「細かな症状は分からないんだ。で、提督から連絡しておいてくれて言われててね。」

「そ、そうなんだ．． ありがとう、大佐さん。」

「これからどうするの？」

と五十鈴が聞く。

「うん、みんなに連絡して、病院に行ってみるよ。」

そう言つて、朝霜、皐月、卯月、弥生に連絡をして、病院へと向かつていった。

「睦ちゃん。お母さんが倒れたつて、どういう事だよ？」

「詳しくは分かんないよ。だから、急いで行くよ！」

「睦ちゃん、待つてびよーん！ うーちゃんも行くびよーん！」

早く、早く、と皆に急かされる卯月がそこにいた。

鎮守府からは、そう遠くないとはいえ、それはあくまでも敷地からの話で、鎮守府本館からすれば、門を出て、市場の前を通り越して、呉駅前へ。さらに駅から山手に向かつていかなければならない。

車で10分あれば着くが、走つていくとなると、それなりに時間が掛かる。

五人が病院に辿りつく頃には、息も切れ切れの状態になるのは目に見えていた。だから・・門の前からタクシーを使った。

五人で一台に乗り込んで。もう、ギユウギユウだ。

「朝霜ちゃん、もつと詰めて！」

「あーん！ 潰れそうだよー。」

「じゃあ、ボクは前ね。」

「「ええっ!!」」

皐月は一人で助手席に座って、残り四人が後部座席だった。

乗車時間数分。

着いたよ、と言われて、タクシーから降りる五人。

料金は、ワンメーター分で十分だった。

小走りに病院に入って行く。

受付で病室を聞いて五人は早足で病室に向かった。

◇

集中処置室のベッドに寝かされていた鳳翔が、目覚めたのは病院に着いてから3時間ほどしてからだった。

う、うううーん、と薄らと目を開けると、そこには、秦と五人のこども達がいた。

しかも、鳳翔の顔を覗き込んでいた。

「あ、あなた・・・それに、あなたたち・・・」

「鳳翔！ 気が付いたか！ 良かったあ。」

そう言った秦の目から涙がこぼれていた。

「お母さん、大丈夫？」

鳳翔のベッドに六人が寄ってきて、良かった、と胸を撫で下ろしていた。

鳳翔の意識が戻ったところで、集中処置室から個室に移された。

そこで改めて、

「あ、あの・・・私は、どうしたんですか？ 確か、執務室にいて、気分が悪くなつて：

そこからあまり記憶が無いんですけど・・・」

と聞いてみた。

「その時、意識を失った鳳翔を、五十鈴が医務室に運んでくれてね。医務室でも対応で

きなくて、救急搬送されたんだよ。それで、この病院に。」

俺は、五十鈴から連絡をもらって駆けつけたんだ。病院には五十鈴が付き添ってく

れて、助かったよ。」

「そ、そうだったんですね。」

「簡易の検査はやったらしいんだが、外傷性の痕跡はないらしい。で、検査結果を後で

教えてくれることになってはいるんだが、まだなんだ。」

「え？　父さん、まだ聞いてないの？」

「ああ。　まだだよ。　でも、意識が戻って、良かった。　戻らなかつたら、どうしようかと思つたんだ。」

そして見つめ合う秦と鳳翔・

「あー、またやつてる。」

と気付いたのは卯月だった。

慌てて視線を逸らす二人だが、二人とも頬が赤かつたから、

「もう・・　父さんとお母さんつてば、飽きもせず・・」

「い、いいじゃないか。　夫婦なんだし。」

そう秦が反論するが、

「それはそれ、これはこれ。」

だと。

そんな言い合いになりかけたころ、病室に医師と看護師がやつてきた。

「失礼しますよ。　あ、目が覚めたんですね。」

「あ、先生。　ありがとうございます。」

「では、症状について説明をしますね。　あ、ちょっと込み入った話になるから、お子さ

んたちは外で待つててくれるかしら。」

睦らがわかった、と言つて退室した。

それを確認したのち、話始めた。

「まず、先にも言いましたが、外傷性の傷はありませんでした。どちらかという与健康体そのものですね。それから、血液等の検査結果ですが・・・」

その結果に、秦と鳳翔が驚いたのだった。

「え？」